



遺跡遠景（西・立小野堀遺跡側から）



十三塚遺跡弥生時代出土遺物

序 文

この報告書は、東九州自動車道建設（鹿屋申良 I C～曾於弥五郎 I C間）に伴って、平成19年度から平成21年度にかけて実施した鹿屋市申良町に所在する石縊遺跡と十三塚遺跡の発掘調査の記録です。

十三塚遺跡では、弥生時代の竪穴住居跡 8 軒をはじめ、土坑や掘立柱建物跡の遺構や山ノ口式土器・土製勾玉・磨製石鏃等、多くの遺物が発見されました。これらは、当時の南九州集落形成の在り方を解明する貴重な資料となるものと期待されます。

隣接した石縊遺跡からは、十三塚遺跡とは全く異なった遺跡の様相が明らかにされ、生活痕跡の実態を知る上で有効な情報を得ることができました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 山下 吉美

報 告 書 抄 録

ふりがな	いしくびいせき・じゅうさんづかいせき							
書名	石縊遺跡・十三塚遺跡							
副書名	東九州自動車道建設(鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	II							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第164集							
編著者名	新保 朋久 岩元 康成							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いしくびいせき 石縊遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 くしらちょう 串良町	46203	71-89	31° 27′ 01″	130° 54′ 00″	確認調査 2007.08.01～ 2007.10.16 本調査 2008.05.22～ 2009.03.19 2009.05.09～ 2010.03.19	420 12,533	東九州自動車 道建設(鹿屋串 良IC～曾於 弥五郎IC間) に伴う記録保 存調査
じゅうさんづかいせき 十三塚遺跡	ほそやまだ 細山田		71-88	31° 26′ 46″	130° 54′ 14″	確認調査 2007.08.01～ 2007.10.16 本調査 2008.05.22～ 2009.03.19 2009.05.09～ 2010.03.19	480 27,446	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特記事項	
石縊遺跡	散布地	縄文時代早期 弥生時代中期	集石遺構 土坑	岩本式土器, 前平式土器, 志風頭式土器, 石坂式土器, 平橋式土器 貝殻条痕文土器, 打製石鏃 磨石, 敲石 山ノ口式土器, 須玖式土器				
十三塚遺跡	散布地	縄文時代早期 縄文時代後期 縄文時代晩期 弥生時代中期 古墳時代 中世～近世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 道路状遺構	石坂式土器 凹線文土器, 市来式土器 黒川式土器, 三万田式土器 山ノ口式土器 土製勾玉, 磨製石鏃, 打製石鏃 磨石, 敲石, 砥石, 棒状敲具, 鉄鏃 成川式土器 加治木銭				
要 約	<p>十三塚遺跡は、弥生時代から縄文時代までの遺跡である。特に、弥生時代中期の竪穴住居跡8軒をはじめ、掘立柱建物跡・土坑等の遺構が検出され、また、遺構内遺物も多数出土しており、王子遺跡、前畑遺跡等と同時期の集落として貴重な遺跡である。</p> <p>石縊遺跡は、縄文時代早期を中心とした遺跡である。特に、集石遺構や土坑は、当該期の生活の様子を知る上で貴重な資料となる。</p>							



石縊遺跡・十三塚遺跡位置図 (S=1:25,000)

例 言 凡 例

- 1 本報告書は、東九州自動車道建設（鹿屋申良 I C～曾於弥五郎 I C間）に伴う石縊遺跡・十三塚遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 石縊遺跡・十三塚遺跡は、鹿児島県鹿屋市申良町細山田に所在し、両遺跡は隣接している。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査事業は、平成19年度から平成21年度に実施し、整理・報告書作成事業は平成22年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は各遺跡ごとの通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 8 本書で使用した方位は全て磁北である。
- 9 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また、空中写真の撮影は(有)スカイサーベイ九州、九州航空株式会社に委託した。
- 10 遺構図、遺物分布図の作成及びトレースは、新保朋久が整理作業員の協力を得て行ったが、一部、デジタルデータの処理については、埋蔵文化財センター職員の高崎慎太郎が行った。
- 11 出土遺物の実測・トレースは、新保、岩永勇亮、岩下直樹、岩元康成が担当し、整理作業員の協力を得て行った。また、遺物実測〈石器〉の一部を(株)九州文化財研究所に委託し岩元が監修した。
- 12 出土遺物の写真撮影は、埋蔵文化財センター職員の吉岡康弘と辻明啓が行った。
- 13 本報告書に係る自然化学分析は、放射性炭素年代測定、種実同定を(株)加速器分析研究所に委託した。
- 14 本書の編集は、新保・岩元が担当し、執筆は次のとおり分担して行った。
 - 第1章～3章・・・・・・・・・・・・・・・・新保
 - 第4章・・・・・・・・・・・・・・・・新保・岩永・岩下・岩元
 - 第5章・・・・・・・・・・・・・・・・新保・岩永・岩下・岩元
 - 第6章第1節・・・・・・・・前迫亮一
 - 第7章・・・・・・・・・・・・・・・・新保・岩永・岩下・岩元※第6章の科学分析については、委託報告書の原文のまま体裁を整えて掲載してある。
- 15 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。なお、遺物注記等で用いた遺跡記号は、石縊遺跡が「石」、十三塚遺跡が「十」である。

- 1 遺構について
 - (1) 遺構図の縮尺は、竪穴住居跡及び掘立柱建物跡が1/60、集石遺構が1/20、道跡及び土坑が1/60とした。ただし、大型の遺構等レイアウトの都合上縮尺を変えたものについては、図中に示した縮尺を参考にされたい。
 - (2) 遺構番号は、以下に示すとおり、遺跡ごとかつ遺構ごとの通し番号で付した。
 - ア 石縊遺跡
 - (ア) 土坑 本文中、配置図とも1号土坑から始まる通し番号
 - (イ) 集石遺構 本文中、配置図とも1号集石遺構から始まる通し番号
 - イ 十三塚遺跡
 - (ア) 竪穴住居跡 本文中、配置図とも1号竪穴住居跡から始まる通し番号
 - (イ) 掘立柱建物跡 本文中、配置図とも1号掘立柱建物跡から始まる通し番号
 - (ウ) 土坑 本文中、配置図とも1号土坑から始まる通し番号
- 2 遺物について
 - (1) 掲載遺物の縮尺は、以下に示すとおりである。
 - ア 土器 1/3を基本としているが、完形土器は1/4である。
 - イ 石器 石器の器種や大きさに縮尺が1/1, 1/3, 1/4と異なるので図中に示した縮尺を参考にされたい。
 - (2) 遺物番号は、遺跡ごとの通し番号であり、本文、挿図、図版の番号と一致する。
- 3 グリッド配置図、遺構配置図、遺物出土状況図等デジタルで作成した図の縮尺については、各図ごと縮尺を示してあるが、1グリッド（1マス）が20m×20mの大きさである。

目 次

巻頭カラー
序 文
報告書抄録
遺跡位置図
例言・凡例
本文目次
挿図目次
表 目 次
図 版 目 次

本 文 目 次

第1章 発掘調査の経過	1	第1節 縄文時代の調査と成果	42
第1節 調査に至るまでの経緯	1	1 調査の概要	42
第2節 調査の経過	1	2 調査の成果	42
1 分布調査・詳細分布調査	1	(1) 遺物の分類	42
2 試掘調査	3	(2) 遺物	43
3 確認調査	3	第2節 弥生時代の調査と成果	49
4 本調査	4	1 調査の概要	49
5 整理・報告書作成作業	6	2 調査の成果	49
第2章 遺跡の位置と環境	7	(1) 遺構	50
第1節 地理的環境	7	ア 竪穴住居跡	50
第2節 歴史的環境	7	イ 掘立柱建物跡	77
第3節 鹿屋申良 I C～曾於・弥五郎 I C間の遺跡	11	ウ 土坑	80
第3章 発掘調査の方法と層序	13	エ 集石遺構	84
第1節 調査の方法	13	オ 土器集中区	84
1 発掘調査の方法	13	(2) 遺物	88
2 遺構の認定と検出方法	13	ア 土器	88
3 整理・報告書作成作業の方法	13	イ 石器	114
第2節 層序	16	第3節 古墳時代の調査と成果	128
第4章 石縊遺跡の調査と成果	21	1 調査の概要	128
第1節 縄文時代の調査と成果	21	2 調査の成果	128
1 調査の概要	21	(1) 遺物	128
2 調査の成果	22	第4節 中世以降の調査と成果	130
(1) 遺構	22	1 調査の概要	130
(2) 遺物	26	2 調査の成果	130
第2節 弥生時代の調査と成果	41	(1) 遺構	130
1 調査の概要	41	(2) 遺物	130
2 調査の成果〈遺物〉	41	第6章 自然科学分析	133
第5章 十三塚遺跡の調査と成果	42	第1節 十三塚遺跡における自然化学分析	133
第1節 縄文時代の調査と成果	42	第2節 十三塚遺跡における放射性炭素年代	
1 調査の概要	42	(AMS測定) 1	134
2 調査の成果	42	第3節 十三塚遺跡における放射性炭素年代	
(1) 遺構	42	(AMS測定) 2	136
(2) 遺物	43	第4節 十三塚遺跡出土種実同定報告	139
第2節 弥生時代の調査と成果	49	第7章 総括	141
1 調査の概要	49	第1節 石縊遺跡について	141
2 調査の成果	49	第2節 十三塚遺跡について	141
(1) 遺構	50	第3節 遺跡の残存状況	144
ア 竪穴住居跡	50	写真図版	145
イ 掘立柱建物跡	77		
ウ 土坑	80		
エ 集石遺構	84		
オ 土器集中区	84		
(2) 遺物	88		
ア 土器	88		
イ 石器	114		

挿 図 目 次

第1図	石縊遺跡・十三塚遺跡事前調査範囲図	2	第46図	十三塚遺跡1号竪穴住居跡出土遺物2	56
第2図	遺跡周辺の地質図	8	第47図	十三塚遺跡2号竪穴住居跡位置図	57
第3図	周辺遺跡位置図	10	第48図	十三塚遺跡2号竪穴住居跡	58
第4図	東九州自動車道建設に伴う遺跡	12	第49図	十三塚遺跡2号竪穴住居跡遺物出土状況図	59
第5図	石縊遺跡・十三塚遺跡グリッド配置図	14	第50図	十三塚遺跡2号竪穴住居跡出土遺物	59
第6図	石縊遺跡・十三塚遺跡発掘調査範囲	15	第51図	十三塚遺跡3号竪穴住居跡位置図	60
第7図	石縊遺跡土層断面図1	17	第52図	十三塚遺跡3号竪穴住居跡	61
第8図	石縊遺跡土層断面図2	18	第53図	十三塚遺跡3号竪穴住居跡遺物出土状況図	62
第9図	十三塚遺跡土層断面図1	19	第54図	十三塚遺跡3号竪穴住居跡出土遺物	62
第10図	十三塚遺跡土層断面図2	20	第55図	十三塚遺跡4号竪穴住居跡位置図	63
第11図	石縊遺跡調査範囲図	21	第56図	十三塚遺跡4号竪穴住居跡	64
第12図	石縊遺跡縄文時代遺構配置図	21	第57図	十三塚遺跡4号竪穴住居跡遺物出土状況図	65
第13図	石縊遺跡1号土坑	22	第58図	十三塚遺跡4号竪穴住居跡出土遺物	65
第14図	石縊遺跡1号集石遺構	22	第59図	十三塚遺跡5号竪穴住居跡位置図	66
第15図	石縊遺跡2～4号集石遺構	23	第60図	十三塚遺跡5号竪穴住居跡	67
第16図	石縊遺跡5・6号集石遺構	24	第61図	十三塚遺跡5号竪穴住居跡遺物出土状況図	67
第17図	石縊遺跡7号集石遺構	25	第62図	十三塚遺跡6号竪穴住居跡位置図	68
第18図	石縊遺跡縄文時代早期前半土器出土状況図	27	第63図	十三塚遺跡6号竪穴住居跡	69
第19図	石縊遺跡縄文時代早期後半土器出土状況図	27	第64図	十三塚遺跡6号竪穴住居跡遺物出土状況図	70
第20図	石縊遺跡縄文時代早期土器1	29	第65図	十三塚遺跡6号竪穴住居跡出土遺物	70
第21図	石縊遺跡縄文時代早期土器2	30	第66図	十三塚遺跡7号竪穴住居跡位置図	71
第22図	石縊遺跡縄文時代早期土器3	31	第67図	十三塚遺跡7号竪穴住居跡	72
第23図	石縊遺跡縄文時代早期土器4	32	第68図	十三塚遺跡7号竪穴住居跡遺物出土状況図	72
第24図	石縊遺跡縄文時代早期土器5	33	第69図	十三塚遺跡7号竪穴住居跡出土遺物状況図	73
第25図	石縊遺跡縄文時代早期土器6	34	第70図	十三塚遺跡7号竪穴住居跡出土遺物1	73
第26図	石縊遺跡石器出土分布図	36	第71図	十三塚遺跡7号竪穴住居跡出土遺物2	74
第27図	石縊遺跡縄文時代石器1	38	第72図	十三塚遺跡8号竪穴住居跡位置図	75
第28図	石縊遺跡縄文時代石器2	39	第73図	十三塚遺跡8号竪穴住居跡	76
第29図	石縊遺跡縄文時代石器3	40	第74図	十三塚遺跡8号竪穴住居跡遺物出土状況図	76
第30図	石縊遺跡弥生時代土器	41	第75図	十三塚遺跡8号竪穴住居跡出土遺物	76
第31図	十三塚遺跡縄文時代土器出土状況図	42	第76図	十三塚遺跡1号堀立柱建物跡	77
第32図	十三塚遺跡縄文時代土器1	43	第77図	十三塚遺跡2号堀立柱建物跡	78
第33図	十三塚遺跡縄文時代土器2	44	第78図	十三塚遺跡3号堀立柱建物跡	79
第34図	十三塚遺跡縄文時代土器3	45	第79図	十三塚遺跡土坑位置図	80
第35図	十三塚遺跡縄文時代土器4	46	第80図	十三塚遺跡1号土坑出土遺物	81
第36図	十三塚遺跡縄文時代土器5	47	第81図	十三塚遺跡1・2号土坑	81
第37図	十三塚遺跡縄文時代石器	47	第82図	十三塚遺跡3号土坑	82
第38図	十三塚遺跡弥生時代中期遺構配置図	49	第83図	十三塚遺跡4・5号土坑	82
第39図	十三塚遺跡弥生時代中期竪穴住居跡配置図	50	第84図	十三塚遺跡6号土坑	82
第40図	十三塚遺跡1号竪穴住居跡位置図	51	第85図	十三塚遺跡6号土坑出土遺物	82
第41図	十三塚遺跡1号竪穴住居跡1	52	第86図	十三塚遺跡7号土坑	83
第42図	十三塚遺跡1号竪穴住居跡2	53	第87図	十三塚遺跡集積遺構・土器集中区位置図	84
第43図	十三塚遺跡1号竪穴住居跡遺物出土状況図	54	第88図	十三塚遺跡集積遺構	84
第44図	十三塚遺跡1号竪穴住居跡住居内集積遺構	55	第89図	十三塚遺跡土器集中区(G-16区)遺物出土状況図	85
第45図	十三塚遺跡1号竪穴住居跡出土遺物1	55	第90図	十三塚遺跡土器集中区(G-16区)土器	85
			第91図	十三塚遺跡土器集中区(M-18区)遺物出土状況図	86
			第92図	十三塚遺跡土器集中区(M-18区)土器	86
			第93図	十三塚遺跡弥生時代土器分類別出土状況図	87

第94図	十三塚遺跡弥生時代前期末～中期初頭の土器1	88
第95図	十三塚遺跡弥生時代前期末～中期初頭の土器2	89
第96図	十三塚遺跡弥生時代中期土器1	92
第97図	十三塚遺跡弥生時代中期土器2	93
第98図	十三塚遺跡弥生時代中期土器3	94
第99図	十三塚遺跡弥生時代中期土器4	95
第100図	十三塚遺跡弥生時代中期土器5	96
第101図	十三塚遺跡弥生時代中期土器6	97
第102図	十三塚遺跡弥生時代中期土器7	98
第103図	十三塚遺跡弥生時代中期土器8	99
第104図	十三塚遺跡弥生時代中期土器9	100
第105図	十三塚遺跡弥生時代中期土器10	101
第106図	十三塚遺跡弥生時代中期土器11	102
第107図	十三塚遺跡弥生時代中期土器12	103
第108図	十三塚遺跡弥生時代中期土器13	104
第109図	十三塚遺跡弥生時代中期土器14	105
第110図	十三塚遺跡弥生時代中期土器15	106
第111図	十三塚遺跡弥生土器(その他)1	111
第112図	十三塚遺跡弥生土器(その他)2	112
第113図	十三塚遺跡土製勾玉	113
第114図	十三塚遺跡円盤状土製品	113
第115図	十三塚遺跡石器出土状況図	114
第116図	十三塚遺跡石器1	117
第117図	十三塚遺跡石器2	118
第118図	十三塚遺跡石器3	119
第119図	十三塚遺跡石器4	120
第120図	十三塚遺跡石材別出土状況図	120
第121図	十三塚遺跡石器5	121
第122図	十三塚遺跡石器6	122
第123図	十三塚遺跡石器7	123
第124図	十三塚遺跡石器8	124
第125図	十三塚遺跡石器9	125
第126図	十三塚遺跡古墳時代遺物出土状況図	128
第127図	十三塚遺跡古墳時代出土土器	129
第128図	十三塚遺跡中世以降遺構配置図	130
第129図	十三塚遺跡中世以降道路状遺構1	131
第130図	十三塚遺跡中世以降道路状遺構2	132
第131図	十三塚遺跡中世以降出土遺物	132
第132図	自然科学分析対象遺構配置図	133
第133図	大隅半島中央部弥生時代の主な遺跡	143
第134図	石縊遺跡・十三塚遺跡の残存状況	144

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	9
第2表	鹿屋申良 I C～曾於弥五郎 I C間の遺跡	11
第3表	石縊遺跡・十三塚遺跡基本土層	16
第4表	石縊遺跡集石遺構を構成する礫の重量分布	26
第5表	石縊遺跡縄文時代早期土器観察表	35
第6表	石縊遺跡石器観察表	41
第7表	石縊遺跡弥生時代土器観察表	41
第8表	十三塚遺跡縄文時代土器観察表	48
第9表	十三塚遺跡縄文時代石器観察表	48
第10表	十三塚遺跡1号竪穴住居跡柱穴計測表	53
第11表	十三塚遺跡1号竪穴住居跡出土土器観察表	56
第12表	十三塚遺跡1号竪穴住居跡出土石器観察表	56
第13表	十三塚遺跡2号竪穴住居跡出土土器観察表	59
第14表	十三塚遺跡2号竪穴住居跡出土石器観察表	59
第15表	十三塚遺跡3号竪穴住居跡出土土器観察表	62
第16表	十三塚遺跡3号竪穴住居跡出土石器観察表	62
第17表	十三塚遺跡4号竪穴住居跡出土土器観察表	65
第18表	十三塚遺跡4号竪穴住居跡石器観察表	65
第19表	十三塚遺跡6号竪穴住居跡石器観察表	70
第20表	十三塚遺跡7号竪穴住居跡土器観察表	74
第21表	十三塚遺跡7号竪穴住居跡石器観察表	74
第22表	十三塚遺跡7号竪穴住居跡鉄製品観察表	74
第23表	十三塚遺跡8号竪穴住居跡土器観察表	76
第24表	十三塚遺跡1・2号堀立柱建物跡計測表	78
第25表	十三塚遺跡3号堀立柱建物跡計測表	79
第26表	十三塚遺跡土坑内出土遺物観察表	83
第27表	十三塚遺跡土坑一覧表	83
第28表	十三塚遺跡集積遺構石観察表	84
第29表	十三塚遺跡土器集中区土器観察表	86
第30表	十三塚遺跡弥生時代前期～中期初頭土器観察表	90
第31表	十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表1	107
第32表	十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表2	108
第33表	十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表3	109
第34表	十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表4	110
第35表	十三塚遺跡弥生時代土器(その他)観察表	112
第36表	十三塚遺跡土製勾玉計測表	113
第37表	十三塚遺跡円盤状土製品観察表	113
第38表	十三塚遺跡石器観察表1	126
第39表	十三塚遺跡石器観察表2	127
第40表	十三塚遺跡出土水晶観察表	127
第41表	十三塚遺跡古墳時代土器観察表	129
第42表	十三塚遺跡中世以降出土古銭計測表	132
第43表	大隅半島中央部弥生時代の主な遺跡	144

図 版 目 次

巻頭図版 1 遺跡遠景（西・立小野堀遺跡側から）

巻頭図版 2 十三塚遺跡弥生時代出土遺物

図版 1 石縊遺跡・十三塚遺跡周辺地形 …………… 145
（国土交通省空中写真・昭和49年）

図版 2 石縊遺跡・十三塚遺跡の基本土層（Ⅱ～Ⅴ層） 146

図版 3 石縊遺跡集石遺構検出状況 1 …………… 147

図版 4 石縊遺跡集石遺構検出状況 2 …………… 148

図版 5 石縊遺跡集石遺構検出状況 3 …………… 149

図版 6 石縊遺跡集石遺構検出状況 4 ・
土坑検出状況 …………… 150

図版 7 石縊遺跡調査状況 …………… 151

図版 8 十三塚遺跡竪穴住居跡と堀立柱建物跡の
年度別検出状況 …………… 152

図版 9 十三塚遺跡 1 号竪穴住居跡 …………… 153

図版10 十三塚遺跡 2 号竪穴住居跡 …………… 154

図版11 十三塚遺跡 3 号竪穴住居跡 …………… 155

図版12 十三塚遺跡 4 号竪穴住居跡 …………… 156

図版13 十三塚遺跡 5 号竪穴住居跡 …………… 157

図版14 十三塚遺跡 6 号竪穴住居跡 …………… 158

図版15 十三塚遺跡 7 ・ 8 号竪穴住居跡 …………… 159

図版16 十三塚遺跡調査状況 …………… 160

図版17 十三塚遺跡掘立柱建物跡 …………… 161

図版18 十三塚遺跡土坑・道路状遺構 …………… 162

図版19 十三塚遺跡遺物出土状況 1 …………… 163

図版20 十三塚遺跡遺物出土状況 2 …………… 164

図版21 石縊遺跡縄文時代早期土器 …………… 165

図版22 石縊遺跡縄文時代早期土器 …………… 166

図版23 石縊遺跡縄文時代早期土器 …………… 167

図版24 石縊遺跡縄文時代早期土器，弥生土器 …… 168

図版25 石縊遺跡縄文時代早期石器
（打製石鏃，磨製石鏃，打製石斧） …………… 169

図版26 石縊遺跡縄文時代早期石器 …………… 170

図版27 十三塚遺跡縄文時代早・中・後期土器 …… 171

図版28 十三塚遺跡縄文時代後期土器 …………… 172

図版29 十三塚遺跡縄文時代後・晩期土器，石器 …… 173

図版30 十三塚遺跡弥生時代前期～中期土器 …… 174

図版31 十三塚遺跡弥生時代土器 …………… 175

図版32 十三塚遺跡竪穴住居跡内出土土器 …………… 176

図版33 十三塚遺跡竪穴住居跡内出土土器 …………… 177

図版34 十三塚遺跡竪穴住居跡内出土石器，鉄製品 178

図版35 十三塚遺跡弥生時代土器 …………… 179

図版36 十三塚遺跡弥生時代土器 …………… 180

図版37 十三塚遺跡弥生時代土器 …………… 181

図版38 十三塚遺跡弥生時代土器 …………… 182

図版39 十三塚遺跡弥生時代土器 …………… 183

図版40 十三塚遺跡弥生時代土器 …………… 184

図版41 十三塚遺跡弥生時代土器，土製勾玉 …… 185

図版42 十三塚遺跡弥生時代土器，種実痕付着
土器（最下段 3 点：写真図版のみ） …… 186

図版43 十三塚遺跡弥生時代出土遺物 …………… 187
（石皿，軽石製品，砥石，鉄製品，磨製石鏃）

図版44 十三塚遺跡弥生時代石器 …………… 188

図版45 十三塚遺跡弥生時代石器 …………… 189

図版46 十三塚遺跡弥生時代石器 …………… 190

図版47 十三塚遺跡弥生時代石器 …………… 191
（水晶，2号住居内出土チップ）写真図版のみ

図版48 十三塚遺跡古墳時代遺物 …………… 192

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志IC～末吉財部IC区間の事業に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は、平成11年1月に鹿屋申良IC～末吉財部IC間を、平成12年2月には志布志IC～鹿屋申良IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50箇所

の遺跡（854,100㎡）が存在することが明らかとなった。この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道路対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センターの4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の緻密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査、試掘調査、確認調査が実施されることとなった。

そこで、鹿児島県教育委員会は、まず、平成13年1月29日から平成13年2月6日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡、加治木堀遺跡、石縷遺跡、十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに、平成13年7月10日から7月26日に鹿屋申良IC～末吉財部IC間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と、平成13年9月17日から10月26日まで、平成13年12月3日から12月25日までの2期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて、既に合意されていた本線工用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり、関山西遺跡、関山遺跡、狩俣遺跡の3遺跡を対象に平成13年10月1日から平成14年3月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年4月には、志布志IC～鹿屋申良IC間の遺跡について再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象面積が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隅IC（平成21年4月28日、「曾於弥五郎IC」へ名称変更）から末吉財部IC間の発掘調査協定書締結、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、

日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きるということになった。

また、日本道路公団からの再委託は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

石縷遺跡・十三塚遺跡の調査は、分布調査・詳細分布調査を平成10年度と平成13年度に、試掘調査を平成12年度と平成13年度に、確認調査を平成19年度、本調査を平成20年度から平成21年度まで実施した。

第2節 調査の経過

1 分布調査・詳細分布調査

石縷遺跡・十三塚遺跡に関する分布調査は、詳細分布調査を含め2回実施した。

1回目は分布調査で、日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道第13次区間のうち、鹿屋申良IC～末吉財部IC間の分布調査依頼を受け、平成11年1月に実施した。分布調査の結果、遺跡範囲面積が95,400㎡（石縷遺跡13,400㎡、十三塚遺跡82,000㎡）であることが判明した。調査体制は次のとおりである。

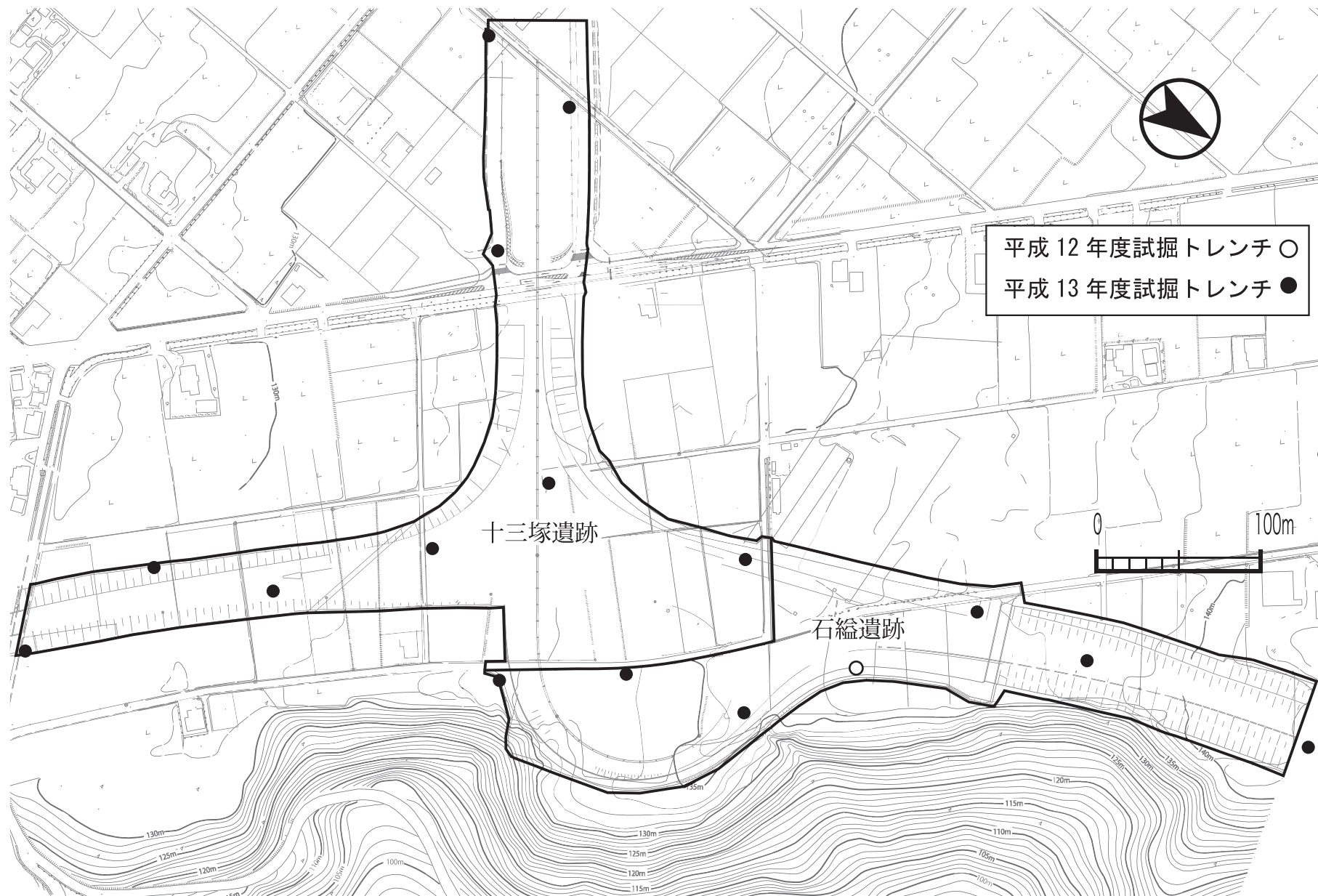
調査体制（分布調査：平成10年度）

事業主体	日本道路公団九州支社鹿児島事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課 課長 内村正弘
	〃 課長補佐 庭月野慎一
調査企画	〃 埋蔵文化財係長 戸崎勝洋
調査担当	〃 文化財主事 倉元良文
	〃 堂込秀人
	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	主任文化財主事 長野真一

2回目は詳細分布調査で、後述のとおり1回目の試掘調査で遺構・遺物が確認されなかった為、より詳細な情報を得ることと再度試掘調査を行う箇所を選定するため、東九州自動車道鹿屋申良IC～末吉財部IC間の他の遺跡も含め平成13年7月に実施した。その結果、調査対象面積が89,500㎡と1回目の分布調査時よりも面積が縮小された。また、15の試掘トレンチ設定箇所も選定した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（詳細分布調査：平成13年度）

事業主体	日本道路公団九州支社鹿児島事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 井上明文



第1図 石縊遺跡・十三塚遺跡事前調査範囲図

調査企画	〳	次長兼総務課長	黒木友幸
	〳	主任文化財主事兼	
		調査課長	新東晃一
		調査課長補佐	立神次郎
	〳	主任文化財主事兼	
		第二調査係長	彌榮久志
調査担当	〳	主任文化財主事	長野眞一
	〳	文化財研究員	桑波田武志

2 試掘調査

石縊遺跡・十三塚遺跡の試掘調査は、平成12・13年度に2回、16箇所を試掘トレンチを設定し実施した。

1回目は、平成13年2月5日・6日の2日間実施した。3m×10mのトレンチを1箇所設定し、小型バックホーによる掘り下げを中心に行い、地層の確認と遺構・遺物の有無についてチェックしながら、約4.2mまで掘り下げた。調査の結果、先述のとおり、遺構・遺物は確認されていない。調査体制は次のとおりである。

調査体制（試掘調査：平成12年度）

事業主体 日本道路公団九州支社鹿児島事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井上明文

調査企画 〳 次長兼総務課長 黒木友幸

〳 主任文化財主事兼

調査課長 新東晃一

調査課長補佐 立神次郎

〳 主任文化財主事兼

第二調査係長 彌榮久志

調査担当 〳 主任文化財主事 長野眞一

〳 文化財主事 井ノ上秀文

〳 〳 大保秀樹

〳 〳 立部 剛

〳 〳 高見憲次

〳 文化財研究員 藤野義久

〳 〳 山崎克之

〳 〳 有馬孝一

2回目の試掘調査は、平成13年7月に実施された詳細分布調査時に設定した15箇所を試掘トレンチの調査を平成13年9月17日・18日の2日間実施した。調査の結果、地層の残存が確認され、弥生土器が出土した。しかしながら、ほとんどの試掘トレンチで遺構・遺物は確認されなかったことから、調査対象面積を75,805㎡と縮小した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（試掘調査：平成13年度）

事業主体 日本道路公団九州支社鹿児島事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 井上明文
調査企画	〳 次長兼総務課長 黒木友幸
	〳 主任文化財主事兼
	調査課長 新東晃一
	調査課長補佐 立神次郎
	〳 主任文化財主事兼
	第二調査係長 彌榮久志
	〳 主任文化財主事 長野眞一
調査担当	〳 文化財主事 岩澤和徳
	〳 〳 山崎省一
	〳 文化財研究員 桑波田武志
事務担当	〳 総務係長 前田昭信
	〳 主 査 栗山和己

3 確認調査

石縊遺跡・十三塚遺跡の確認調査は、これまでの分布調査、詳細分布調査、試掘調査の結果を受け、より詳細な情報を得るため、平成19年8月1日から10月16日に実施した。調査は、2m×10mの確認トレンチを28箇所設定し、掘り下げは人力で行った。調査の結果、石縊遺跡では、縄文時代早期の前平式土器等が出土した。十三塚遺跡では、縄文時代後期の市来式土器や弥生時代中期の山ノ口式土器等が出土した。また、本調査の対象面積を399,79㎡と確定した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（確認調査：平成19年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 宮原景信

調査企画 〳 次長兼総務課長 平山 章

〳 次長兼南の縄文室長 新東晃一

〳 調査第二課長 立神次郎

〳 主任文化財主事兼

調査第二課

第一調査係長 彌榮久志

調査担当 〳 文化財主事 寺原 徹

〳 〳 川元禎久

事務担当 〳 総務係長 寄井田正秀

〳 主 事 五百路真

調査の詳細（日誌抄より）※Tはトレンチ

※写真撮影は適宜行っているので記述を省略している。

平成19年8月

〔石縊遺跡〕 環境整備。1～10Tの設定。2T：薩摩火山灰層より土層の落ち込み検出。5T：Ⅱ層で遺物出土。6T：Ⅱ層で弥生土器出土。8T：縄文早期土器出土。

9 T：石鏃1点出土。10 T：Ⅱ層掘り下げ。1～5 T・7 Tの土層断面図作成。1～4 T：埋め戻し。

平成19年9月

石絵遺跡 11～13 T設定。6・8 T：Ⅳ層出土遺物平板実測、取り上げ。5～13 T：地形測量図作成。6・8・10 T：土層断面図作成。11 T：Ⅲ層上面遺構検出。12 T：Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。弥生土器出土。13 T：Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。11～13 T土層断面図作成。

十三塚遺跡 14～20 T設定、Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。14・15 T：土層断面図・地形図作成。16 T：Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。土層断面図作成。17 T：Ⅴ層上面掘り下げ。Ⅱ層出土遺物平板実測。18 T：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。Ⅱ層遺物出土状況写真撮影。19 T：Ⅱ層で弥生土器出土。国土交通省田中技術補助員来跡（6日）鹿児島大学理学部小林教授現場指導（25日）

平成19年10月

十三塚遺跡 16 T：土層断面図作成。17 T：Ⅴ層上面掘り下げ。土層断面図作成。18 T：Ⅴ層検出。Ⅳ層掘り下げ。土層断面図・地形図作成。19 T：Ⅲ層掘り下げ。土層断面図作成。20 T：Ⅱ，Ⅲ層掘り下げ。遺物出土状況平板実測。Ⅳ層完掘。21 T：Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。22 T：Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。Ⅱ層遺物出土状況平板実測。Ⅳ層完掘。土層断面図作成。23 T：Ⅰ層掘り下げ。24 T：Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。Ⅳ層遺物出土状況平板実測。25 T：Ⅱ層掘り下げ。26 T：Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。Ⅲ層上面土坑検出、写真撮影後半裁。27 T：Ⅱ層掘り下げ。28 T：Ⅱ層掘り下げ。鹿屋市文化課稲村氏ほか来跡（9日）

4 本調査

確認調査の結果をもとに、本調査を平成20年度と平成21年度に実施した。平成20年度は平成20年5月21日から平成21年3月19日まで、平成21年度は平成21年5月7日から平成22年3月19日まで実施した。各年度の調査体制及び調査の詳細（日誌抄より）については次のとおりである。

調査体制（確認調査：平成20年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 宮原景信

調査企画 次長兼総務課長 平山 章

次長兼南の縄文室長 池畑耕一

調査第二課長 彌榮久志

主任文化財主事兼

調査第二課

第一調査係長 中村耕治
調査担当 文化財主事 新保朋久

寺原 徹

國師洋之

（平成21年1月～3月）

木内敏生

（平成21年1月～3月）

文化財調査員 岩下直樹

（平成21年5月～10月）

岩元康成

（平成21年11月～平成22年3月）

事務担当 総務係長 紙屋伸一

主 査 五百路真

調査指導 鹿児島国際大学国際文学部教授 中園 聡
調査の詳細（日誌抄より）

平成20年5月

十三塚遺跡 環境整備。レベル移動。あ～え-2～5区：表土剥ぎ。Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。溝状遺構1条、土坑2基検出。

平成20年6月

十三塚遺跡 あ～え-1～10区：Ⅱ層掘り下げ。硬化面を伴う道路状遺構検出、実測。遺物取り上げ。下層確認のため1・2 T設定、掘り下げ。配置図作成、土層断面写真撮影。（※トレンチ番号は20年度の新規番号）

平成20年7月

十三塚遺跡 あ～え-4～15区：表土掘り下げ。杭打ち、表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。土層断面図作成。遺物取り上げ。住居跡1号（花卉型）検出、平面図作成。下層確認3・4 T設定。掘り下げ、平板実測及び遺物取り上げ。地形コンター図作成。鹿屋市文化課山口氏・山下氏、鹿屋市文化財保護審議員福元氏、伊崎田中学校校長寺師先生来跡（2日）申良商業高校3名職場見学（3日）

平成20年8月

十三塚遺跡 あ～け-10～18区：表土剥ぎ。下層確認3・4 T：Ⅳ層掘り下げ、土層断面図作成。Ⅱ層遺物取り上げ。住居跡1号打製石斧出土、集積検出、実測。住居跡2号ミニT設定、埋土内遺物取り上げ。琉球大学池田教授・鹿児島大学本田准教授現場指導（5日）文化財課有川課長来跡（7日）

平成20年9月

十三塚遺跡 あ～け-10～26区：表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。竪穴状遺構（住居跡2・3号）遺物取り上げ、ミニT設定。硬化面実測。Ⅱ層出土遺物平板実測。住居跡4号検出、平面図実測。5・6 T設定、Ⅴ層掘り下げ。国土交通省来跡（17日）

平成20年10月

石絵遺跡 C～E-24～26区：表土剥ぎ（アカホヤ除去、壁面清掃）、Ⅳ層掘り下げ。志風頭式土器出土。

十三塚遺跡 あ～け-10～18区：Ⅱ層出土遺物平板実測及び取り上げ。土層断面実測。住居跡1号：ミニT掘り下げ。住居跡3号：ベルトの掘り下げ，ベルト外し。住居跡4号：土層断面の線引き。文化財課堂込係長来跡（22日）鹿屋市史談会9名来跡（24日）
平成20年11月

石縊遺跡 C～E-24～26区：Ⅳ層掘り下げ。石鏃1点出土。Ⅴ層で検出遺構。現地説明会準備。南日本新聞鹿屋総局長倉元氏現地説明会取材（14日）現地説明会約500名来跡（22日）空中写真撮影<(有)スカイサーベイ>（26日）鹿児島国際大学中国教授現地指導（27日）
平成20年12月

石縊遺跡 C～F-24～26区：Ⅳ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ。Ⅴ層上面コンター図作成，半裁。下層確認1・2T：Ⅳ層掘り下げ。

十三塚遺跡 住居跡3・4号ベルト外し，土坑実測，出土遺物平板実測及び取り上げ。コンター図作成。鹿屋市文化課山下氏来跡（1日）肝付町新福氏来跡（12・22日）(株)ジパングサーベイグリッド杭打ち（19日）
平成21年1月

石縊遺跡 D～F-25～29区：Ⅳ層掘り下げ。土器集中検出。集石1号検出，実測。Ⅳ・Ⅳb層出土遺物平板実測及び取り上げ。Ⅳb層ピット検出。

十三塚遺跡 表土剥ぎ，グリッド杭打ち。
平成21年2月

石縊遺跡 E・F-28～31区：Ⅳ層掘り下げ，遺物取り上げ。Ⅴ層上面コンター図作成。下層確認T，Ⅳ層掘り下げ。3～6T配置図作成，土層断面図作成。

十三塚遺跡 J～M-15～17区：表土剥ぎ。表土・Ⅱ層掘り下げ。4号住居跡調査終了。遺物取り上げ。
平成21年3月

石縊遺跡 J～M-15～17区：Ⅱ層掘り下げ。4T周辺拡張，Ⅳ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ。4号住居跡ピット確認。1号住居跡貼床検出，ピット多数検出，出土遺物平板実測及び取り上げ。Ⅴ層コンター図作成。下層確認4T：出土遺物平板実測及び取り上げ。

調査体制（平成21年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 山下吉美

調査企画

〃 次長兼総務課長 齋藤守重

〃 次長兼南の縄文室長 青崎和憲

〃 調査第二課長 彌榮久志

〃 主任文化財主事兼
調査第二課
第一調査係長 長野眞一

調査担当 〃 文化財主事 池畑耕一
〃 〃 新保朋久
(5月～9月)

〃 文化財研究員 平屋大介
〃 文化財調査員 岩下直樹
(9月)

〃 〃 岩元康成
(5月～8月)

事務担当 〃 総務係長 紙屋伸一
〃 主 事 高崎智博

調査指導 奈良大学教授 酒井龍一
鹿児島大学法文学部准教授 本田道輝

調査の詳細（日誌抄より）
平成21年5月
十三塚遺跡 E～H-13～19区：環境整備。Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ及び表土剥ぎ。出土遺物，平板実測及び取り上げ。土器集中検出。16区西側拡張。方形土坑検出。5号住居跡，柱穴数箇所検出。掘立柱跡検出，実測。遺物取り上げ。鹿屋市文化課長・山口主査・小竹氏来跡（20日）鹿屋市文化課稲村氏・小村氏来跡（22日）

平成21年6月
十三塚遺跡 E～H-13～19区：表土剥ぎ。掘立柱建物跡完掘，実測，ポイント釘位置平板実測。出土遺物平板実測及び取り上げ。土層断面図作成，実測。Ⅱ層掘り下げ。高橋式・入来式・山ノ口式（集中）出土。コンター図作成。5号住居跡完掘，実測，調査終了。6号住居跡検出。土坑1・2号実測，遺物取り上げ。文化財課有川課長，堂込係長視察（8日）黎明館東氏ほか1名来跡（15日）

平成21年7月
十三塚遺跡 E～H-14～18区：Ⅱ・Ⅳ層掘り下げ。住居跡1～5号精査。土器集中・石集積・土坑・ピット実測。1号住居跡：柱穴等掘り下げ。6号住居跡：実測。7号住居跡：鉄鏃・磨製石鏃実測，遺物取り上げ，土層断面実測。下層確認T：Ⅳ層掘り下げ終了。

石縊遺跡 確認T掘り下げ（縄文早期まで）。
空中写真撮影（16日）鹿屋市文化課稲村氏・河野氏来跡（7日）鹿児島大学本田准教授現場指導（9日）奈良大学酒井教授現場指導（13・14日）鹿屋市文化課稲村氏来跡（23日）

平成21年8月
石縊遺跡 E～H-24～26区：表土剥ぎ。Ⅳ層掘り下げ。土層断面実測。集石検出。土層断面実測。石坂式土器出土。集石3号実測。Ⅳa・Ⅳb層出土遺物平板実測

及び取り上げ。集石7・8号の実測、取り上げ。

十三塚遺跡 E～O-2～18区：表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。磨製石鏃出土。深掘り壁、実測。出土遺物平板実測及び取り上げ。コンター実測。7号住居跡調査完了。国土交通省上村監督官・黒木専門職打ち合わせ（25日）平成21年9月

石縊遺跡 集石8号断面実測及び取り上げ。G-25・26区：コンター図作成。

十三塚遺跡 F～Y-1～18区：表土剥ぎ、杭打ち。Ⅱ層掘り下げ。勾玉出土。遺物取り上げ。硬化面及び土坑、平板実測、断面実測、半裁。掘立柱建物跡検出、実測。竪穴住居跡実測及び遺物取り上げ。北壁土層断面実測。T出土遺物平板実測及び取り上げ。T西壁実測。チップ集中地点掘り下げ。琉球大学池田教授・後藤准教授・鹿児島大学及び琉球大学の学生6名来跡（16・17日）平成21年10月

十三塚遺跡 F～P-9～18区：Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ。壺集中出土。土層断面実測。掘立柱建物跡3号の実測。地形図測量。勾玉出土。平成21年11月

十三塚遺跡 F～I-6～13区：表土剥ぎ。Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。北壁・東壁断面実測、遺物取り上げ。礫集中検出、実測。地形図測量。

石縊遺跡 F・G-24～26区：アカホヤまで掘り下げ。杭打ち、レベル測量、Ⅳa層掘り下げ。平成21年12月

十三塚遺跡 F～I-5～13区：表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。出土遺物平板実測、取り上げ、地形測量。東壁断面実測。コンター図実測。

石縊遺跡 F～H-24～29区：表土剥ぎ。遺物実測、取り上げ。Ⅳ層掘り下げ。池ノ原小学校教頭岡先生来跡（14日）平成22年1月

十三塚遺跡 E～H-1～6区：南壁土層断面実測。表土剥ぎ、Ⅱ層掘り下げ。遺物平板実測及び取り上げ。

石縊遺跡 G・H-26～29区：Ⅳ層掘り下げ。コンター図作成、平板実測及び遺物取り上げ。調査終了。平成22年2月

十三塚遺跡 E～T-1～18区：表土剥ぎ、Ⅱ・Ⅳ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ。コンター図作成、杭打ち。西壁土層断面実測。鹿屋市教育委員会来跡（5日）平成22年3月

十三塚遺跡 Q～S-15～18区：Ⅱ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ、地形図作成。北壁道跡断面・溝状遺構実測。調査終了。岡山理科大学小林教授来跡（3・4日）

5 整理・報告書作成作業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成22年4月～平成23年3月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で行った。

出土遺物の水洗い、注記、十三塚遺跡の遺構内遺物と包含層遺物の仕分け、石器や一般礫の仕分け等をはじめ、両遺跡の石器実測の委託、遺構、遺物の実測、拓本、トレース、レイアウトや原稿執筆等の編集作業を行った。また、鹿児島大学法文学部本田道輝准教授と鹿児島大学埋蔵文化財調査室中村直子准教授に集落等の遺構や、遺物に関する指導をいただいた。

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

作成体制（平成22年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
	鹿児島県土木部高速道路対策室
作成主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長 山下吉美
作成企画	〳 次長兼総務課長 田中明成
	〳 次長兼南の縄文室長 中村耕治
	〳 調査第二課長 井ノ上秀文
	〳 文化財主事兼調査第二課第一調査係長 前迫亮一
作成担当	〳 文化財主事 新保朋久
	〳 文化財調査員 岩元康成
事務担当	〳 総務係長 大園祥子
	〳 主査 高崎智博
企画委員	〳 文化財主事 池畑耕一
調査指導	鹿児島大学法文学部准教授 本田道輝
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室 准教授 中村直子
報告書作成指導委員会	平成22年11月26日 中村次長ほか3名
報告書作成検討委員会	平成22年12月1日 山下所長ほか9名

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

鹿屋市串良町は、大隅半島東南部のほぼ中央に位置し、東には東串良町、南には肝属川を隔てて肝付町、西には鹿屋市東原町、旭原町、笠之原町、東北は立小野台地を隔てて曾於郡大崎町と接している。平成18年1月1日に旧鹿屋市と合併するまでは広大な笠野原台地を二分していた。

串良町が位置する大隅半島は、九州山地の延長をなす東西の山地、その間の丘陵、台地及び低地などの低地帯から構成され、地質は大部分がシラス、ボラなどの火山灰土壌となっている。

東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ伸びている鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山(1,119m)で中世層の地質からなっている。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と、南部の大籠柄岳(1,236.8m)を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は、ともに九州山地の延長をなし、それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は南西部の鹿見島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や湾奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。

本遺跡周辺の地質を第2図に示してあるが、前述の火砕流をはじめとする噴出物の堆積がベースとなっていることが分かる。噴出物は、堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開折され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。

一方、低地は、高隈山地や鰐塚山地などを水源とする大小の河川が走り、志布志湾、鹿見島湾などに注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また、何段かの河岸段丘も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は、東西に6.5km、南北に13kmの狭長で北部の山地中央部の台地、南部の低地に大別されるが、大部分において山地は少なく、笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており、広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ、それによる沖積地が広がり、約695haの水田地帯を形成している。また、北部には低い丘陵性の山地が存在するが、町域に占める割

合は少ない。

石縊遺跡・十三塚遺跡は、この串良町の北東部に位置し、笠野原台地の縁辺部に位置する。両遺跡の東側を串良川が蛇行しながら南流する。

第2節 歴史的環境(周辺の遺跡を中心に)

串良町の歴史を知る上で1つの手がかりとなる遺跡は、昭和36年度、50～52年度に分布調査が行われ数多くの遺跡が周知のものとなった。その後、詳細分布調査及び確認調査により周知の遺跡のエリアも確定しつつある。分布調査や確認調査の結果、串良町における遺跡の大半は、笠野原台地の縁辺部に集中して立地していることが明らかになった。

なお、串良町内では旧石器時代該当の遺跡は未だ確認されていないが、串良町の所在する鹿屋市では少数だけでも確認されている。以下、本遺跡周辺の主要な遺跡について時代別に紹介する。

1 旧石器時代

肝属川を挟んで向かい側や鹿見島湾に近い所で確認されているのみである。鹿屋バイパス建設に伴って調査が行われた西丸尾遺跡では、ナイフ形石器文化期該当のブロック、礫群等の遺構やナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器等の遺物が、細石刃文化期該当のブロック、礫群等の遺構や細石刃核・局部磨製石斧等の遺物が確認されている。

2 縄文時代

甫木川の東側台地縁辺部にある古園遺跡では、早期の石坂式土器に比定される山形波状口縁をもった貝殻条痕文の円筒土器が確認されている。また、益畑遺跡の南西約900mの孤立丘に位置するホンドンガマ遺跡では、昭和52年に県文化財課が調査を行った結果、後期の市来式土器に比定できる土器、石匙、打製石斧等の遺物が確認されている。

3 弥生時代

弥生時代の遺跡は、串良町内遺跡の約7割近くを占めている。中でも串良町上小原に位置する吉ヶ崎遺跡では、中期の竪穴住居跡が3軒確認されている。特に、1号住居跡はベッド状遺構をもち、床面の焼土や炭化物などの状態から焼失家屋であると推定される。また、壺形土器・甕形土器の完形品や、磨製石鎌・磨製石斧等が住居跡の床面から発見されている。これらは1軒あたりの土器や石器の器種構成を知るうえで貴重な資料といえる。

4 古墳時代

串良町内では現在19箇所の古墳群(85基)が周知のものとなっている。

上小原古墳群は肝属川に南面する、標高約20mの台地上に位置し、前方後円墳1基・円墳20基及び地下式横穴墓が確認されている。

前述の古園遺跡の南西部に近接する岡崎古墳群は、18

基の高塚墳と数基の地下式横穴墓が確認されている。中でも鹿児島大学総合研究博物館准教授の橋本達也氏等が確認調査を行った岡崎18号墳で確認された3個体の初期須恵器、鉄釘、U字型鉄針は、朝鮮半島との交流をうかがわせる貴重な資料である。

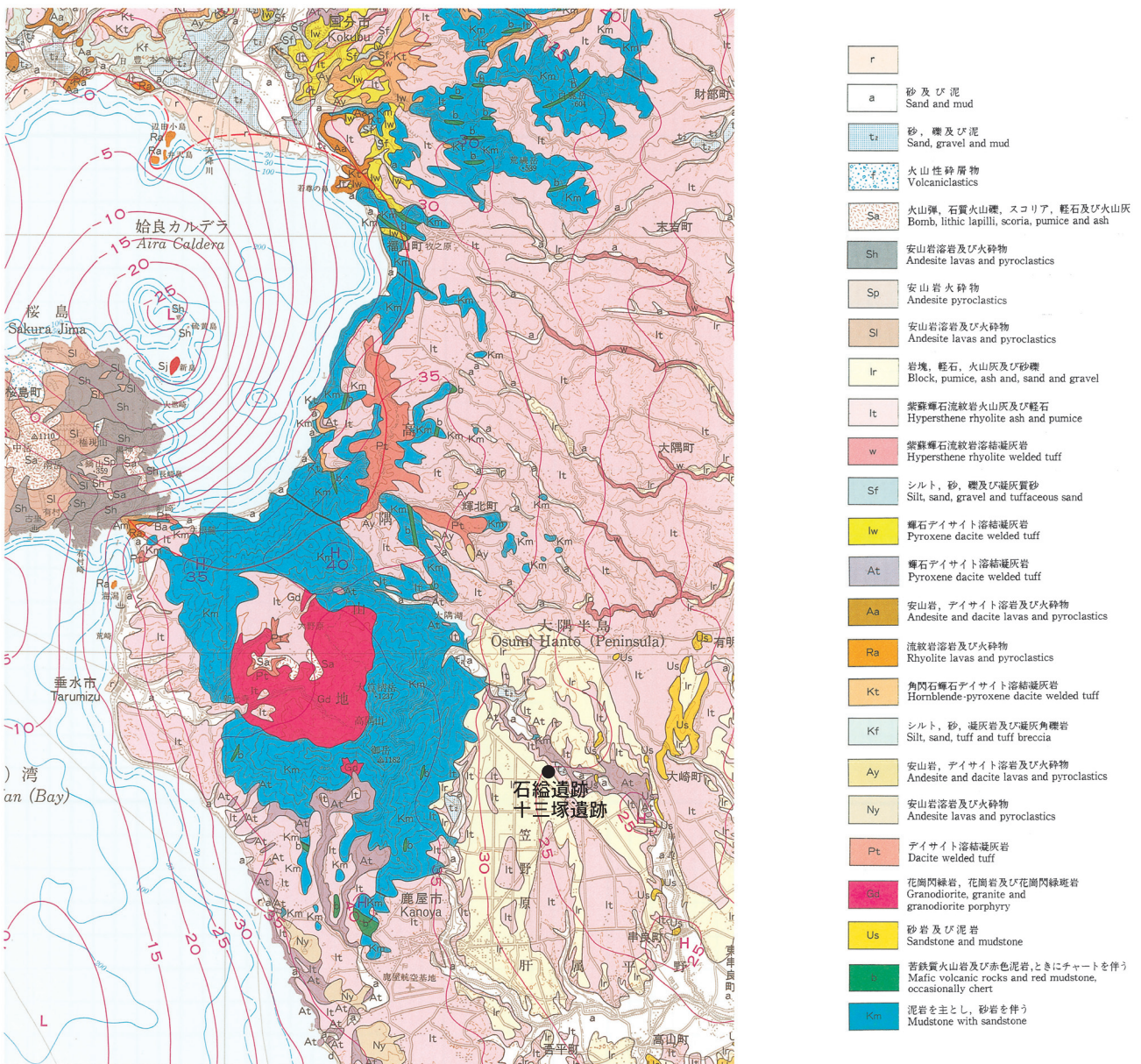
5 古代・中世以降

申良町内における中世以降の遺跡は、県教育委員会発行の「鹿児島県中世城跡」では14箇所が報告されている。しかしながら、詳細な調査はほとんどなされていない。

岡崎古墳群と甫木川を挟んだ西側の丘陵上に位置する稲村城跡は、平成4年～5年に申良町教育委員会が主体となって調査を実施し、16基の近世墓のほか、土師器・青白磁・染付・備前焼・東播焼等が確認されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会 1997「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書(6)
 申良町教育委員会 1990「岡崎古墳群」 申良町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
 申良町教育委員会 1994「稲村城跡」 申良町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
 申良町教育委員会 1999「上小牧遺跡・岡崎15号古墳」 申良町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
 申良町教育委員会 2005「益畑遺跡」 申良町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
 橋本達也 2002「肝属郡申良町 岡崎18号墳－第1次調査の成果－」 14年度 鹿児島県考古学会資料



第2図 遺跡周辺の地質図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺物台帳番号		遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	71	92	牧原	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	台地	弥生, 古墳, 古代		
2	71	89	石鑑	鹿児島県鹿屋市串良町細山田石鑑	台地	縄文		平成6年度農政分布調査
3	71	88	十三塚	鹿児島県鹿屋市串良町細山田十三塚	台地	弥生, 古墳		平成6年度農政分布調査
4	71	93	立小野堀	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	台地	弥生, 古墳, 古代		
5	71	94	田原迫ノ上	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	台地	弥生		
6	71	44	細山田城跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世		
7	71	5	高松	鹿児島県鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	弥生土器・石斧・靴形石斧	
8	71	55	入部堀	鹿児島県鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生, 古墳		
9	71	38	北原城跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世(南北朝)		
10	71	9	アタゴ山	鹿児島県鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	弥生, 古墳	弥生土器・有肩石斧・打製石斧・成川式	旧名「町田堀」を含む
11	71	61	北原古墳群	鹿児島県鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳		枝番No.1～4
12	71	58	川久保	鹿児島県鹿屋市串良町細山田川久保	台地	弥生	打製石斧	
13	71	59	小牧	鹿児島県鹿屋市串良町細山田小牧	台地	弥生		
14	71	56	新堀	鹿児島県鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文		
15	71	1	ホンドンガマ	鹿児島県鹿屋市串良町細山田下中	洞窟	縄文		
16	71	43	霧島城跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世		
17	71	57	是ヶ迫	鹿児島県鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文, 弥生		
18	71	63	瓜々良蒔	鹿児島県鹿屋市串良町有里瓜々良蒔	台地	弥生	土器数点(弥生)・落とし穴・柱穴	平成12年本調査
19	71	64	永田堀	鹿児島県鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生, 古墳		
20	71	65	柵場	鹿児島県鹿屋市串良町有里柵場	台地	弥生		
21	71	66	熊ヶ鼻	鹿児島県鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文, 弥生	石鏃	



第3図 周辺遺跡位置図 (1:25,000)

第3節 鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間の遺跡

東九州自動車道の鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間には、第2表に示すとおり13の遺跡が存在する。報告書が刊行されている遺跡もあるが、ここでは各遺跡の概要だけを記載するので、詳細については報告書を参照していただきたい。

第2表 鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間の遺跡

	遺跡名	発掘調査	報告書刊行
1	十三塚遺跡	終了	本報告書
2	石縊遺跡	(鹿屋串良IC)	
3	樋ノ口遺跡	終了	未刊行
4	大牧遺跡	未調査	未刊行
5	柿木段遺跡	終了	H21年度一部刊行
6	椿山遺跡	終了	H21年度刊行
7	加治木堀遺跡		
8	宮ノ本遺跡		
9	野方前段遺跡	終了	A地点のみH21年度刊行。B地点は整理作業中
10	天神段遺跡	調査中	整理作業中
11	宮ヶ原遺跡	一部未調査	整理作業中
12	チシャノ木遺跡	終了	H19年度刊行
13	鳥居川遺跡	(曾於弥五郎IC)	

※柿木段遺跡、椿山遺跡、加治木堀遺跡、宮ノ本遺跡、野方前段遺跡A地点は合本で報告書を刊行した。

1 **十三塚遺跡** 鹿屋市串良町細山田字十三塚に所在し、標高約140mの台地上に立地している。調査の結果、遺構は弥生時代中期の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・古道跡、近世以降の溝状遺構等が検出された。遺物は縄文時代早期・後期・晩期の土器、弥生時代中期の土器・勾玉・石器・鉄器・鉄製品、近世の古銭等が出土した。

弥生時代中期の堅穴住居跡は遺跡に比較的近い王子遺跡(鹿屋市王子町)や益畑遺跡(鹿屋市串良町)でも確認されており、当時の南九州の集落形成の在り方を解明する上で貴重な資料となると考える。

2 **石縊遺跡** 鹿屋市串良町細山田字石縊に所在し、標高約140mの台地の縁辺部に立地している。また、十三塚遺跡とは隣接しており、十三塚遺跡とともに鹿屋串良IC建設予定地内に立地している。調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑が検出された。遺物は縄文時代早期と弥生時代の土器や石器が出土した。

3 **樋ノ口遺跡** 鹿屋市下高隈町樋ノ口に所在し、標高約110mの台地上に立地している。確認調査の結果、遺物包含層の残存が少なく、遺構・遺物は確認されなかったため本調査は行わず調査を終了した。

4 **大牧遺跡** 鹿屋市下高隈町大牧に所在し、標高約130mの台地上に立地している。まだ調査に着手してい

ないので遺跡の詳細な様相は不明である。

5 **柿木段遺跡** 曾於郡大崎町立小野字柿木段に所在し、標高約150mの小さな谷の窪地とその下部にある標高145mの広い谷の平坦部に立地している。

平成19・20年度と今年度発掘調査が行われ、平成19・20年度の調査終了箇所については平成21年度に報告書が刊行された。平成19・20年度の調査の結果、遺構は縄文時代晩期の落とし穴・石斧埋納遺構・土坑、古代のカマド跡・溝状遺構・古道が検出された。遺物は縄文時代晩期の土器や石器、弥生時代の土器、古墳時代の土器や鉄鏃、古代の土師器や須恵器、中世～近世の青磁・白磁・染付・薩摩焼等が出土した。今年度の調査の結果、遺構は古代及び中世～近世の溝状遺構・道跡・土坑が検出された。遺物は縄文時代晩期の土器や石器、古代の土師器、近世の陶器・染付・石鏃・鉄製品等が出土した。

6 **椿山遺跡** 曾於郡大崎町野方字椿山に所在し、標高約200mの台地縁辺部に立地している。調査の結果、遺構は縄文時代の落とし穴、古代～中世の溝状遺構や古道跡等が検出された。遺物は縄文時代中期・後期の土器や石器、弥生時代中期の土器が出土した。

7 **加治木堀遺跡** 曾於郡大崎町野方字加治木堀に所在し、標高約200mの台地中央部に立地している。調査の結果、遺構は縄文時代中期の落とし穴、古代～中世の溝状遺構・古道跡・畝状遺構・土坑等が検出された。遺物は縄文時代中期の土器や石器、弥生時代中期の土器、古墳時代の土器や鉄器、古代～中世の青磁・白磁・軽石製品等が出土した。

8 **宮ノ本遺跡** 曾於郡大崎町野方字宮ノ本に所在し、標高約200mの台地縁辺部に立地している。加治木堀遺跡とは県道72号線を挟んで隣接している。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

9 **野方前段遺跡** 曾於郡大崎町野方字野方前段に所在し、標高約200mの台地縁辺部に立地している。調査区をA・Bの2地点に分けて調査し、A地点は平成21年度に報告書が刊行された。A地点の調査の結果、遺構は縄文時代の集石遺構・落とし穴・土坑、弥生時代の土坑、古代～中世の溝状遺構・古道跡・土坑、近世の土坑が検出された。遺物は縄文時代早期・後期・晩期の土器や石器、弥生時代中期の土器、古代～中世の須恵器、近世の染付や薩摩焼等が出土した。B地点の調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑や縄文時代中・後期の落とし穴・土坑が検出された。遺物は、縄文時代早期の土器や石器、弥生時代の土器が出土した。

10 **天神段遺跡** 曾於郡大崎町野方及び志布志市有明町に所在し、標高200mの台地縁辺部に立地している。平成19年度から発掘調査が始まり、現在は発掘調査と整理作業を併行して行っているところである。これまでの発掘調査の結果、遺構は旧石器時代の礫群、縄文時代早期

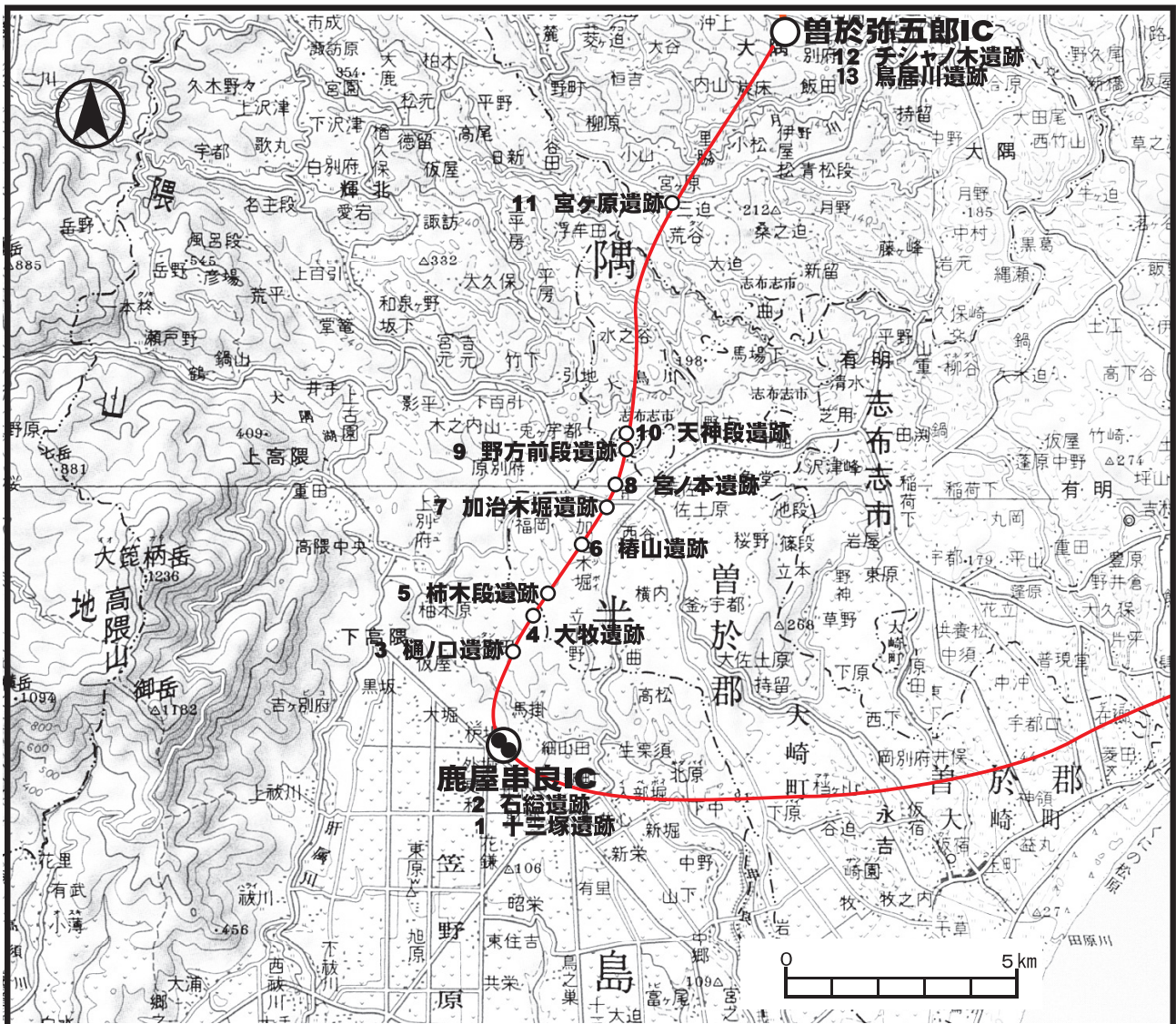
の集石遺構・落とし穴・連穴土坑・古代・中世の掘立柱建物跡・土坑墓・溝状遺構等が検出された。遺物は旧石器時代の石器，縄文時代早期～晩期の土器や石器，土坑墓内から青磁や白磁の椀や皿などの陶磁器・銅鏡・和ばさみ，完形品で入れ子状態で出土した滑石製石鍋などが出土した。各時代とも遺構・遺物の数が多く，遺跡内外における人々の生活の変遷を知る上で貴重な資料となると考える。

11 宮ヶ原遺跡 曾於市大隅町荒谷及び大谷に所在し，標高約230mの台地上に立地している。調査の結果，遺構は旧石器時代の礫群，縄文時代早期の集石遺構・石皿集積遺構・落とし穴，縄文時代前期の落とし穴，縄文時代中期～後期の集石遺構，落とし穴，縄文時代後期～晩期の集石遺構，近世以降の硬化面を伴う道跡及び溝状遺構等が検出された。遺物は旧石器時代の遺物，縄文時代早期の土器や石器，縄文時代前期の土器，縄文時代中期～後期の土器，弥生時代中期の土器，硬化面を伴う道跡

から近世の煙管や薩摩焼等が出土した。工事の影響がない箇所を除き調査は全て終了した。

12 チシャノ木遺跡 曾於市大隅町岩川字チシャノ木に所在し，標高約220mの台地上に立地している。また，鳥居川遺跡とは谷を挟んで隣接おり，鳥居川遺跡とともに曾於弥五郎IC内に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑，古代～中世の落とし穴，近世の溝状遺構が検出された。遺物は旧石器時代の遺物，縄文時代早期・後期・晩期の土器（組織痕土器を含む）や石器が出土した。その他，火打ち石，寛永通宝，軽石製品等も出土した。

13 鳥居川遺跡 曾於市大隅町岩川字鳥居川に所在し，標高約220mの台地上に立地している。調査の結果，縄文時代早期，縄文時代後・晩期の遺跡であることが判明した。遺構は確認されず，遺物は土器では縄文時代早期の押型文土器・塞ノ神式土器，縄文時代晩期の黒川式土器の時期の組織痕土器が，石器では石鏃が出土した。



第4図 東九州自動車道建設に伴う遺跡

第3章 発掘調査の方法と層序

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

発掘調査は、石縊遺跡と十三塚遺跡が隣接することから、東九州自動車道建設予定地のセンター杭STA2+80とSTA3点を基準にして、両遺跡を含むように1マスが20m×20mのグリッドを用い調査区を設定した。

調査は、基本的には人力で掘り下げを行い、表土剥ぎ、無遺物層、火山灰のブロック等で固い地層は重機を使用した。遺構実測や遺物取上は調査担当者と発掘作業員で実施した。

2 遺構の認定と検出方法

(1) 遺構の認定について

【石縊遺跡】

石縊遺跡の発掘調査では、縄文時代早期の集石遺構、土坑等の遺構が検出された。

①集石遺構

集石遺構は計7基検出された。これらはIV b層で検出されたもので、概ね拳大の礫が6個から56個集まった状態で検出された遺構である。1基あたりの平均礫数は約24個であった。

②土坑

土坑は1基検出され、ほぼ全形が推定できた。これはIV b層で検出されている。

【十三塚遺跡】

十三塚遺跡では弥生時代中期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡、土坑等が検出された。主にII b層を埋土とする。

①竪穴住居跡

竪穴住居を想定する上で、十三塚遺跡と同様に弥生時代中期の所産と考えられるこれまでの事例との関係も検討する必要がある。

幸い、大隅半島、特に笠野原台地周辺は事例の多いことでも知られている地域である。特に検出数の多い鹿屋市王子遺跡・中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡・中原山野遺跡・前畑遺跡が比較対象として有効と考える。花卉型タイプ、張り出しを持つタイプ、竪穴内部床面のピットや、ベッド状になるタイプなど、酷似するものが多く、ここでは、竪穴住居跡とした。

②掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟検出された。これらも竪穴住居跡と同じII b層を埋土としており、ほぼ同時期の遺構であると考えられる。

(2) 遺構の検出方法

【石縊遺跡】

石縊遺跡検出遺構の中心は、縄文時代早期のものであ

る。鹿児島県内における当該期の遺跡の多くがそうであるように、遺物包含層の上にアカホヤ火山灰(Ⅲ層)、下に薩摩火山灰層(Ⅴ層)があり、遺構検出は薩摩火山灰層上面まで掘り下げないと検出できなかった。集石遺構についてはIV b層で確認された。

【十三塚遺跡】

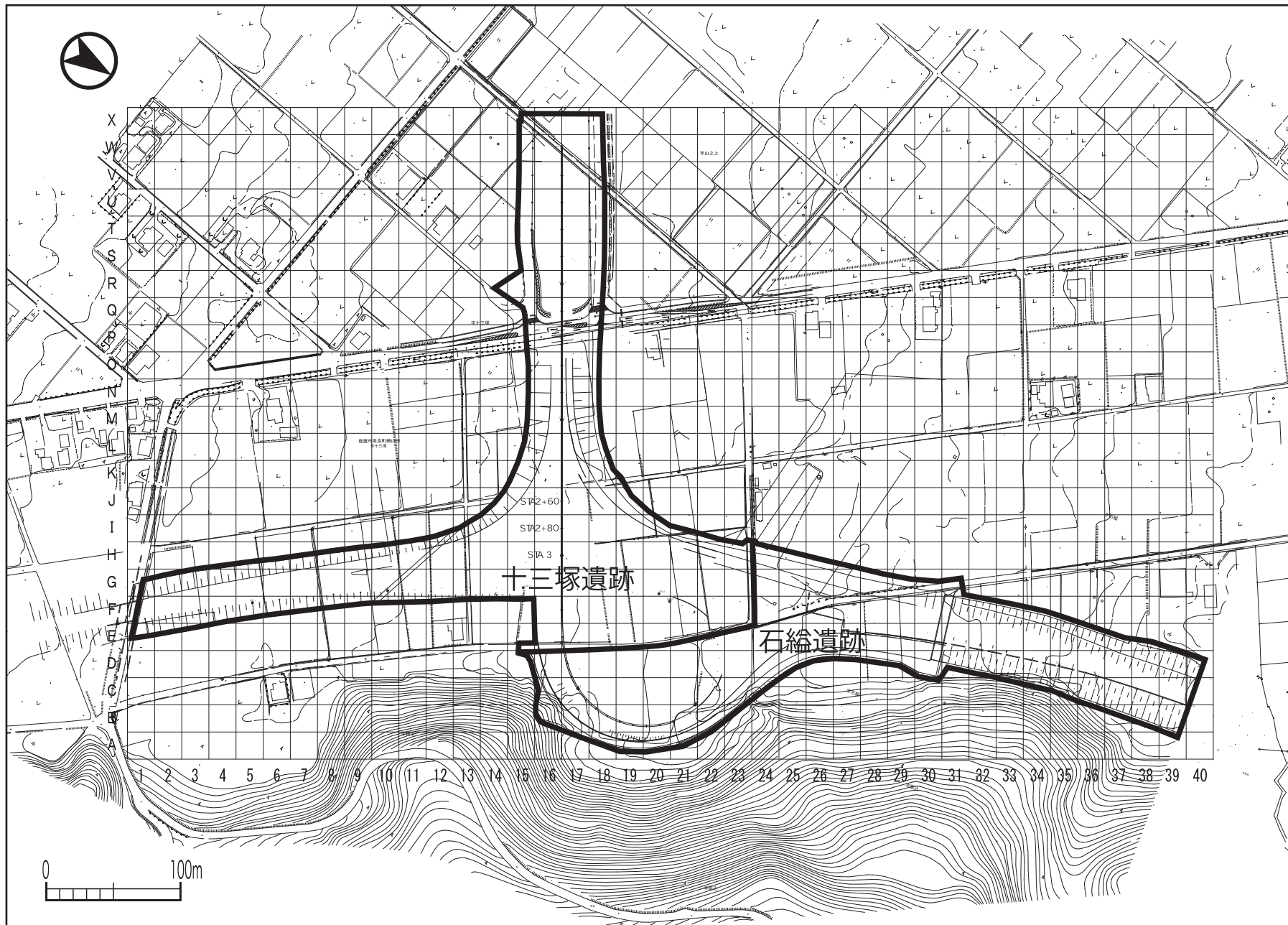
十三塚遺跡検出遺構の中心は、弥生時代中期のものである。遺物包含層(Ⅱ層)は基本的に黒褐色土を呈する土層である。若干の色調の違いから6層に分類した。しかし、遺構の立ち上がり部分はII f層(池田降下軽石層)に掘り込まれた部分で検出したものが多かった。上位については、黒色系の中の黒色系という関係もあり、なかなか検出は困難であった。しかし、天候状況、時間帯によっては臍気ながらにプランが見えた場合もあった。

なかでも注目すべきは、竪穴住居跡3号・6号・7号で、青紫色の硬質砂質層が直径約5mの範囲でリング状に検出されたことから確認された。遺構検出のきっかけとなった青紫色の硬質砂質層は本遺跡の埋土層にはなかったものであるが、これは開聞岳起源の暗紫ゴラである可能性が高いと考えられる。

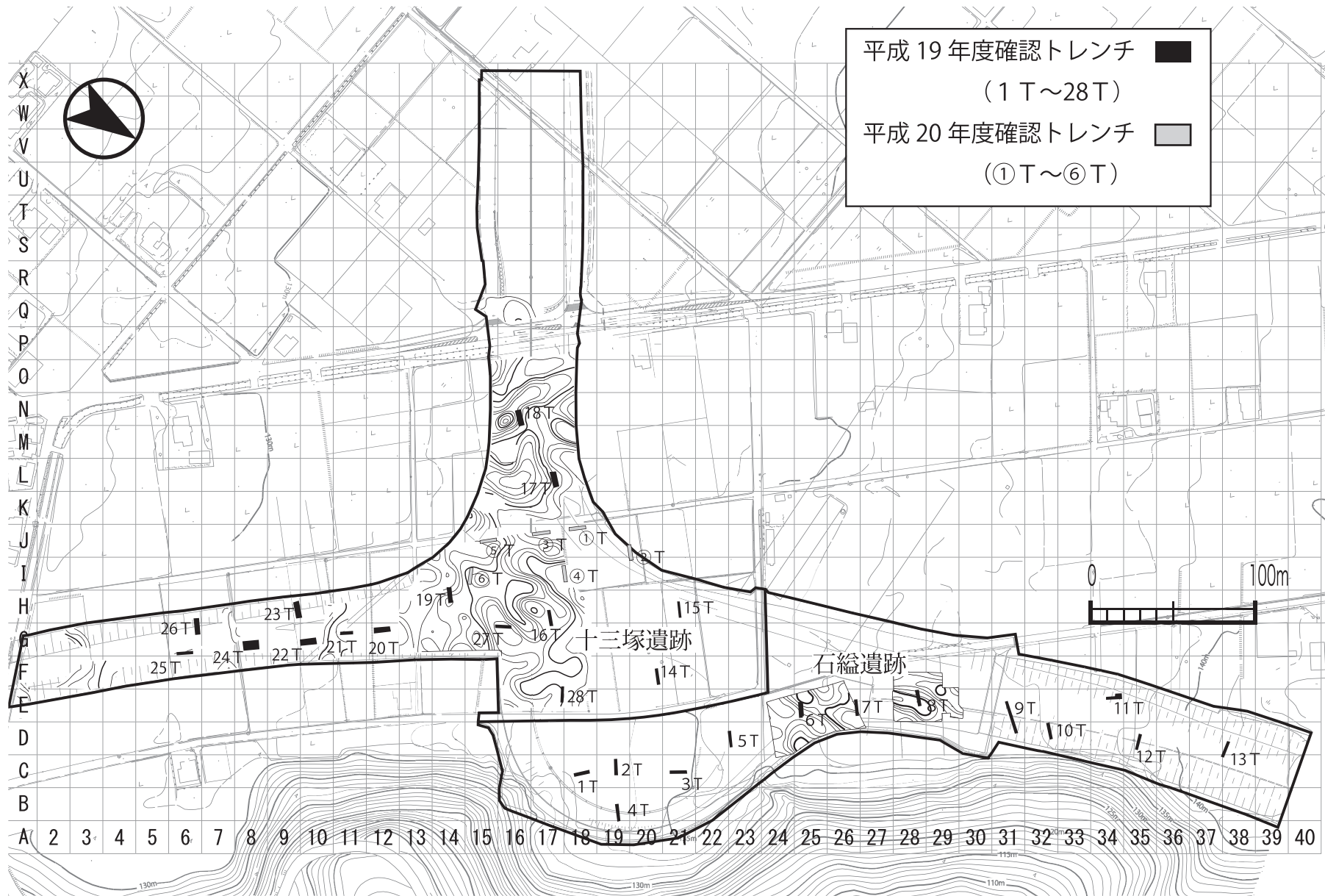
この暗紫ゴラは同じ大隅半島南部の錦江町山ノ口遺跡で、弥生時代中期後半の山ノ口式土器に覆い被さっていたとされること、南大隅町の谷添遺跡の竪穴住居跡でも同様であったことから、本遺跡の時期推定に興味深い結果を導いてくれることとなった。つまり、竪穴住居跡は暗紫ゴラの噴出以前に構築されたものであり、住居跡廃棄のあとに暗紫ゴラの噴出があったものではないかと考える。その他の住居跡には本遺跡の基本土層と同様に、暗紫ゴラの層は検出できていない。若干の時代差があったのかどうかは今後の検討課題である。

3 整理・報告書作成作業の方法

本報告書刊行に伴う整理、報告書作成作業は、平成22年4月～平成23年3月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で行った。出土遺物の水洗い、注記、十三塚遺跡の遺構内遺物と包含層遺物の仕分け、石器や一般礫の石材分類、図面整理を行ったあと、石縊遺跡の土坑や集石遺構のトレース、遺構図作成、十三塚遺跡で出土した土器の実測・拓本・トレース、両遺跡の石器の実測委託を行った。また、鹿児島大学法文学部准教授の本田道輝氏と同大学埋蔵文化財調査室准教授の中村直子氏に遺構・遺物に関する指導を頂いた。



第5図 石絵遺跡・十三塚遺跡グリッド配置図



第6図 石縊遺跡・十三塚遺跡発掘調査範囲

第2節 層序

石縊遺跡と十三塚遺跡は同じ台地上に位置しているため、基本的な層序は同じで、I層(表土)～IX層(AT=シラスの二次堆積層)に分層した。(土層柱状図参照)ただし、両遺跡とも場所によっては起伏や傾斜があったり、耕作による攪乱を受けていたりしたため基本層序と一致しない箇所もあった。

I層は表土(旧耕作土)で耕作時にトレンチャーを使用した跡が多く見られ下部の層まで攪乱しているところもある。

II層は縄文時代後期、弥生時代前期・中期の遺物包含層である。色調が池田降下軽石を含む層まで全体的に黒褐色を呈する土層である。また、オレンジパミスや池田降下軽石を含む層はやや茶褐色化しており、黒褐色土と茶褐色土が交互に堆積していることが判明したため、II a層～II f層の6つに分層した。

II a層 暗黒褐色土

II b層 茶褐色土で直径2～5mmのオレンジパミスを含む。

II c層 黒褐色土

II d層 茶褐色土で直径2～5mmのオレンジパミスを含むが、II b層よりもパミスの量が多い。

II e層 暗黒褐色土

II f層 茶褐色土で上部に池田降下軽石(約6,400年前)を含む。

第3表 石縊遺跡・十三塚遺跡基本土層

I 層	表土
II a 層	暗黒褐色土
II b 層	茶褐色土(黄橙色パミス混)
II c 層	黒褐色土
II d 層	茶褐色土(黄橙色パミス混)
II e 層	黒褐色土
II f 層	茶褐色土(黄色パミス混)
III 層	暗橙褐色土
IV a 層	黒褐色弱粘土質土(黄橙色パミス混)
IV b 層	黒褐色土(黄橙色パミス混)
IV c 層	暗茶褐色土
V 層	暗黄褐色砂質土
VI a 層	暗茶褐色粘質土
VI b 層	茶褐色粘質土
VI c 層	茶褐色弱粘質土
VII 層	褐色土(赤橙色パミス混)
VIII a 層	暗茶褐色土(赤橙色パミス混)
VIII b 層	茶褐色土(赤橙色パミス混)
VIII c 層	明茶褐色土(赤橙色パミス混)
IX 層	黄褐色土

III層は暗橙褐色土で下部にアカホヤ火山灰(約7,300年前、鬼界カルデラ起源の噴出物)を含むアカホヤの腐植土層である。

IV層はP13(約10,600年前、桜島起源の噴出物)を含む黒褐色土及び茶褐色土である。P13が含まれる量によりIV a層～IV c層3つに分層した。縄文時代早期の遺物包含層である。

IV a層 粘質の弱い黒褐色土でP13が点在している。縄文時代早期後半の遺物包含層である。

IV b層 黒褐色土でP13が集中している。縄文時代早期前半と後半の遺物が混在した包含層である。

IV c層 暗茶褐色土でP13の量がIV a層・IV b層と比べて極端に少ない。縄文時代早期前半の遺物包含層である。

V層は暗黄褐色砂質土でP14(約12,800年前、桜島起源の噴出物で「薩摩火山灰」とも呼ばれる)。

VI層は粘質土で「チョコ層」と言われる層である。粘質や色調の違いから3つに分層した。一般的にはこの層が縄文時代草創期と旧石器時代の細石器文化期が混在する層であるが、石縊遺跡・十三塚遺跡では旧石器時代の遺構・遺物は確認されなかった。

VI a層 暗茶褐色粘質土で粘質が強い。

VI b層 茶褐色粘質土で粘質がやや強い。

VI c層 茶褐色弱粘質土で粘質が弱い。

VII層は褐色土でP15(詳細な年代は不詳。桜島起源の噴出物)と思われるオレンジパミスが含まれる。

VIII層はP17(約26,000年前、桜島起源の噴出物)と思われるオレンジパミスが含まれる層でP17が含まれる量や色調の違いから3つに分層した。

VIII a層 暗茶褐色土でP17が点在する。

VIII b層 茶褐色土でP17が多く含まれる。

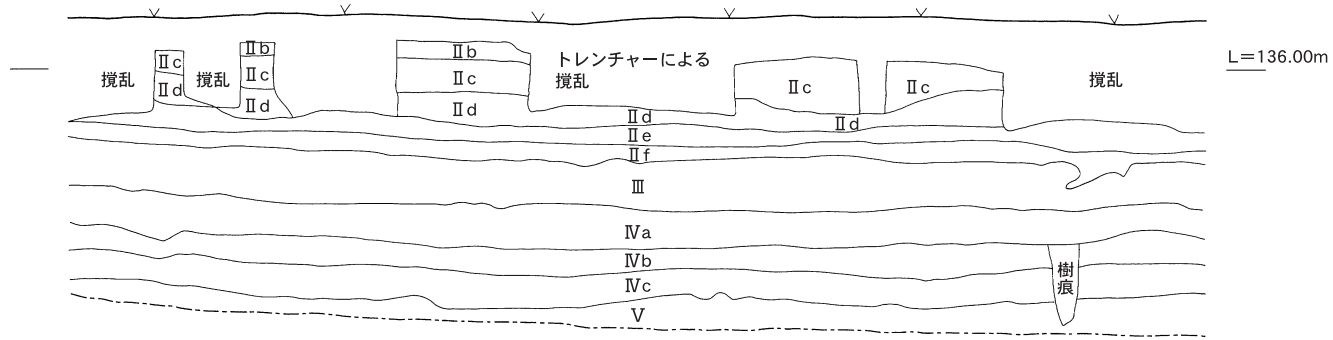
VIII c層 明茶褐色土で極少量のP17と直径5～20mm程度の礫が混在する。

IX層はシラス(約26,000～29,000年前の始良カルデラ起源の噴出物)の二次堆積層である。

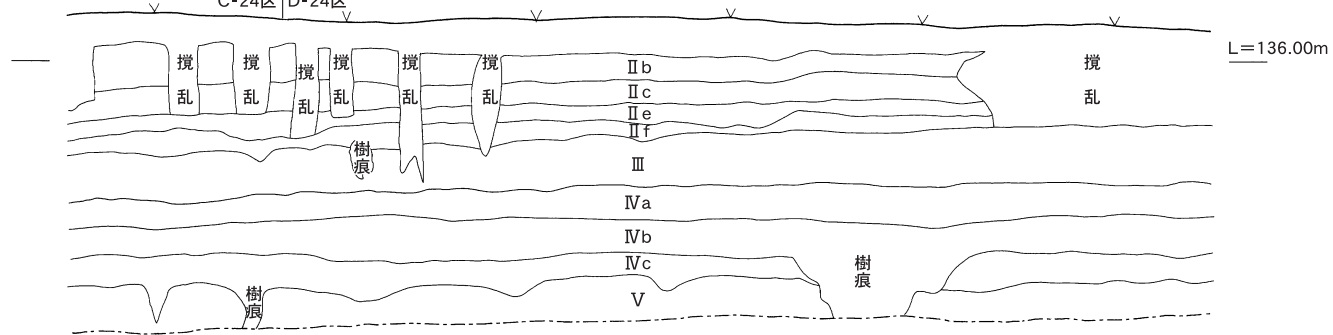
石縊遺跡・十三塚遺跡での調査過程で鍵となった層は池田降下軽石を含むII f層、アカホヤ火山灰を含むIII層、P13を多く含むIV b層、薩摩火山灰(P14)層のV層であった。

※火山灰等の年代については『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』町田洋 新井房夫著 東京大学出版会 2003を参考にした。

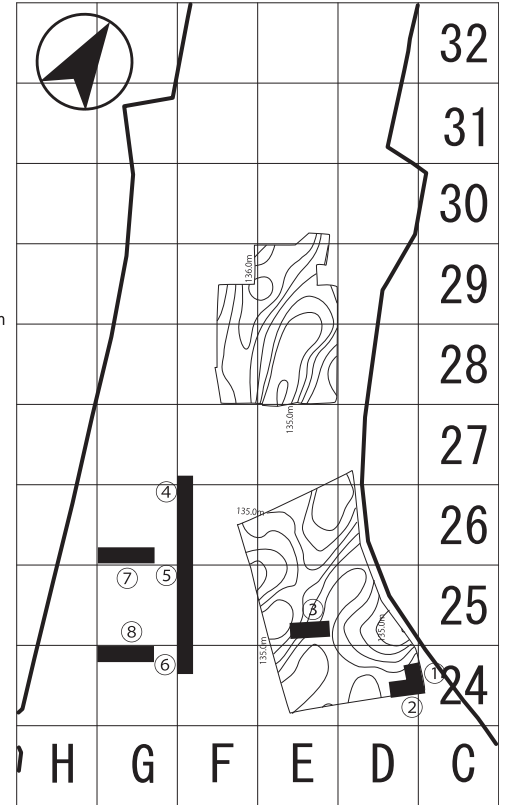
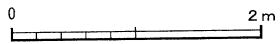
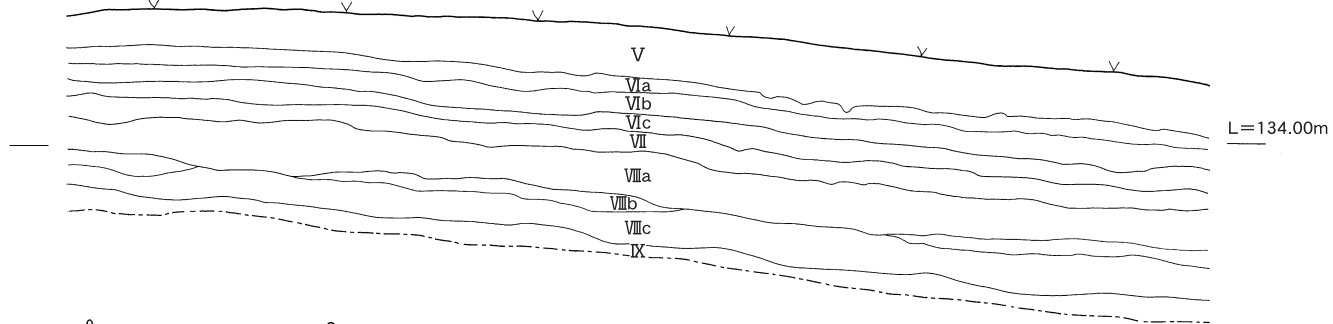
①D-24区東壁



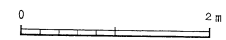
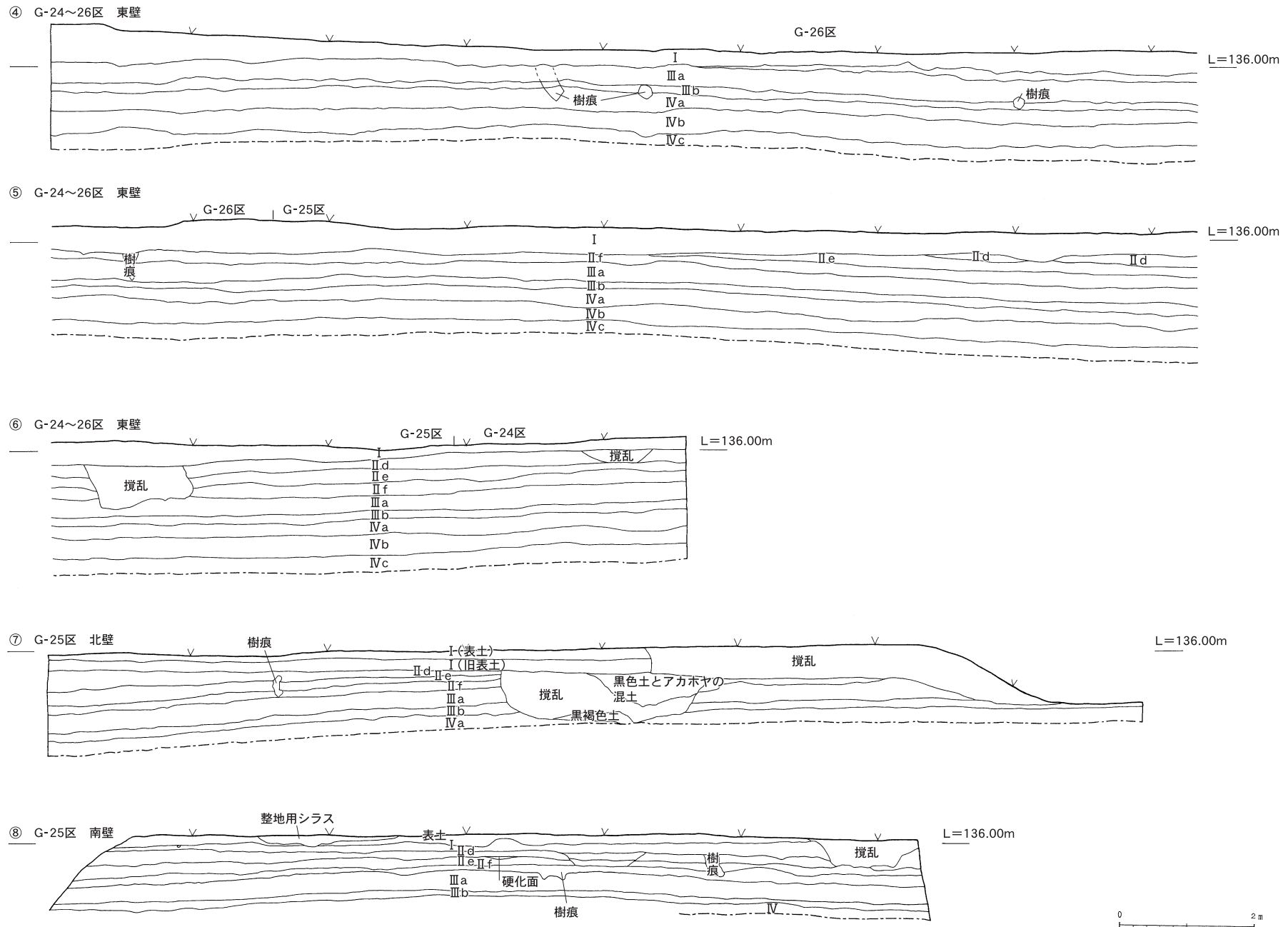
②D-24区南壁



③E-25区 下層確認トレンチ北壁

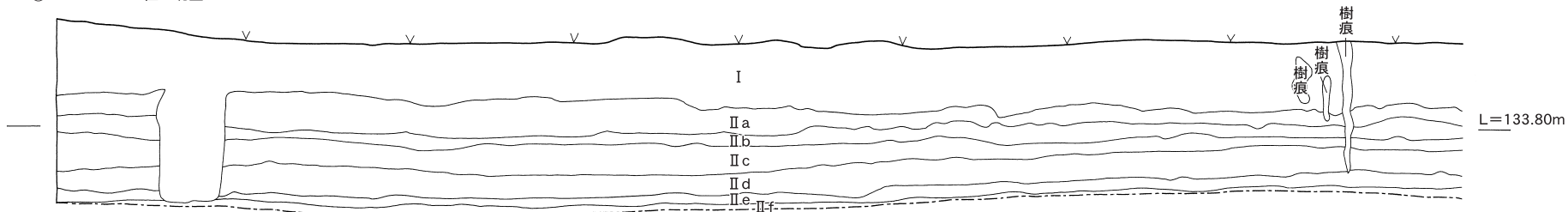


第7図 石絵遺跡土層断面図1

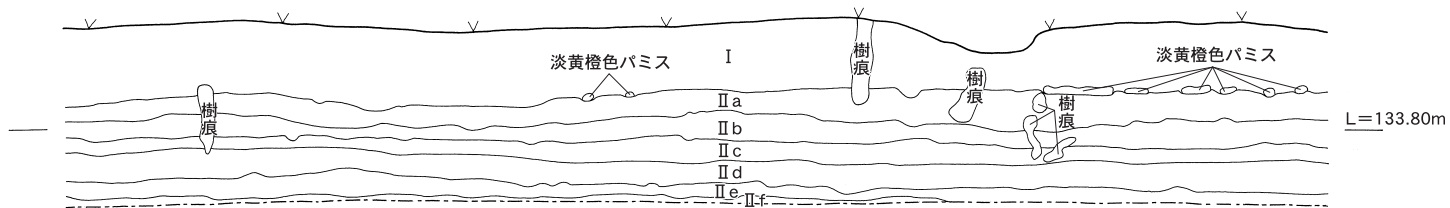


第8図 石絵遺跡土層断面図2

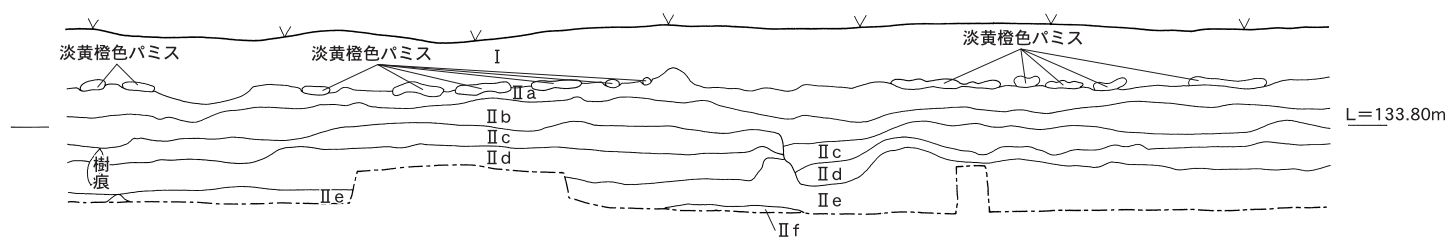
⑨ I・J-15・16区 北壁



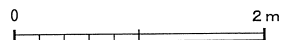
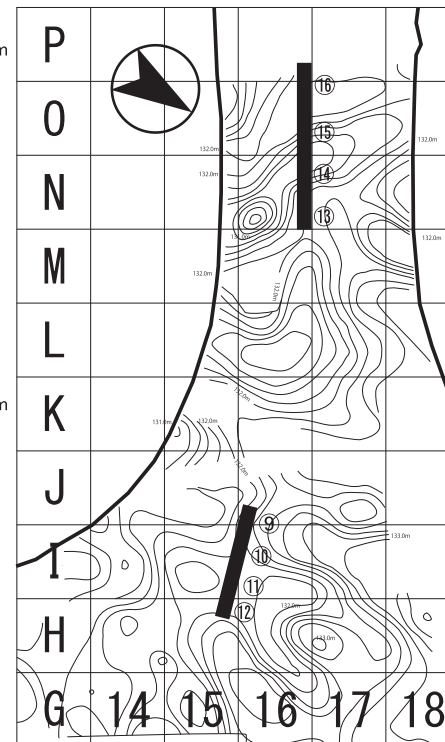
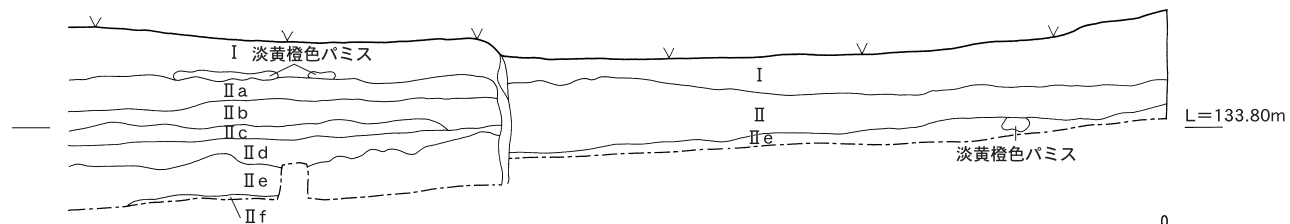
⑩ I-15・16区 北壁



⑪ I-15・16区 北壁



⑫ H・I-15区 北壁



第9図 十三塚遺跡土層断面図1

第4章 石縊遺跡の調査と成果

第1節 縄文時代の調査と成果

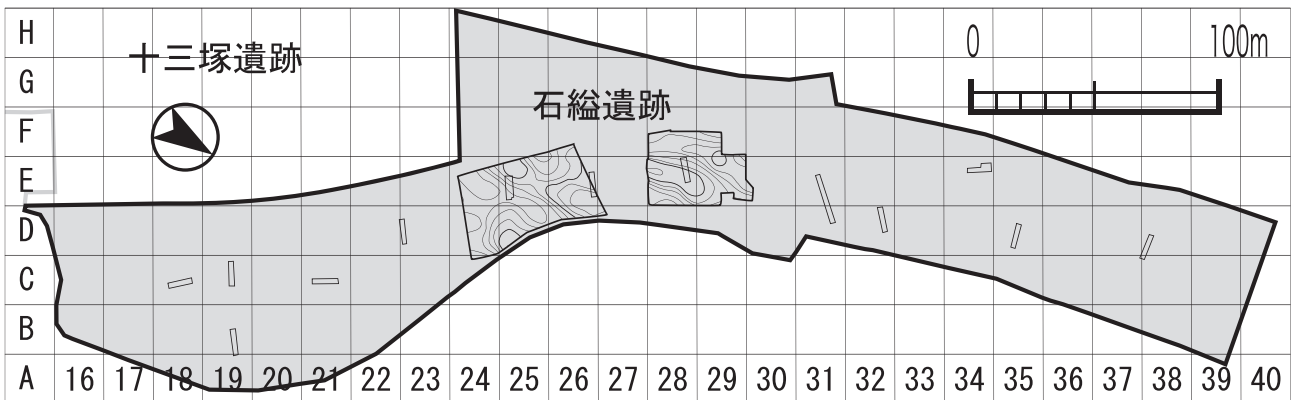
1 調査の概要 (第11・12図)

平成19年度は13の確認トレンチを設定し、確認調査を行った。重機で表土を剥いだ後、薩摩火山灰層(V層)上面まで人力で掘り下げ、薩摩火山灰層(V層)を重機で剥いだ後、旧石器時代該当層を人力で掘り下げるといった方法で調査を行った。

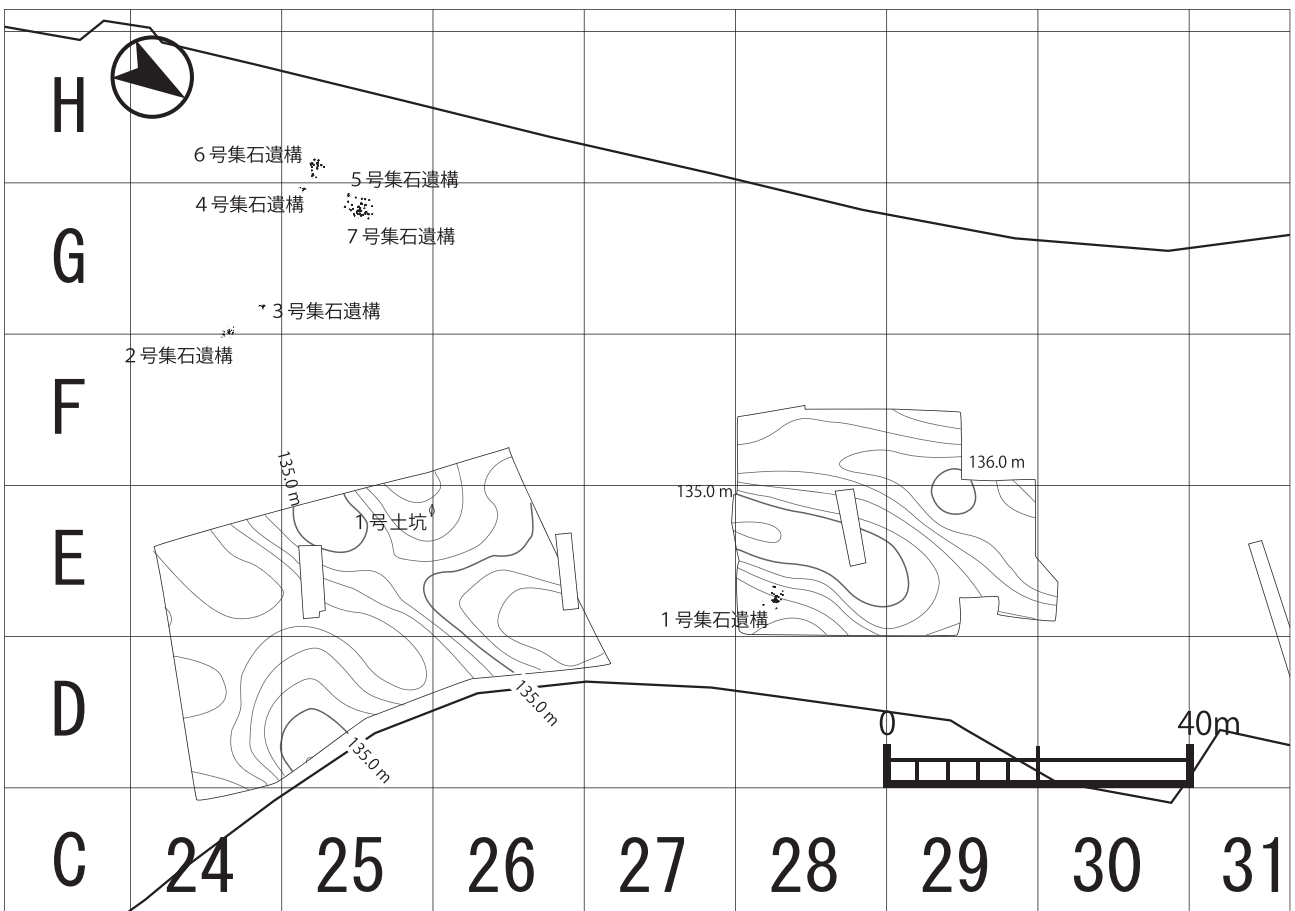
確認調査の結果に基づき、石縊遺跡の本調査は、下図

の部分で調査した。遺跡内の位置を決定するために、20m×20mのグリッドを設定して行った。グリッドは、本遺跡が十三塚遺跡と隣接することから、東九州自動車道建設予定地のセンター杭STA2+80とSTA3を基準に両遺跡を含むよう設定した。その結果、十三塚遺跡から石縊遺跡に向かって1から40まで、東から西へA～Xまでのグリッドが設定され、石縊遺跡は、農道を挟み、B～H、24～40区を調査区域とした。

調査の結果、縄文時代早期の土坑、土器や石器、弥生時代中期の土器が出土した。



第11図 石縊遺跡調査範囲図



第12図 石縊遺跡縄文時代遺構配置図

2 調査の成果

(1) 遺構 (第13～17図)

ア 土坑 (第13図)

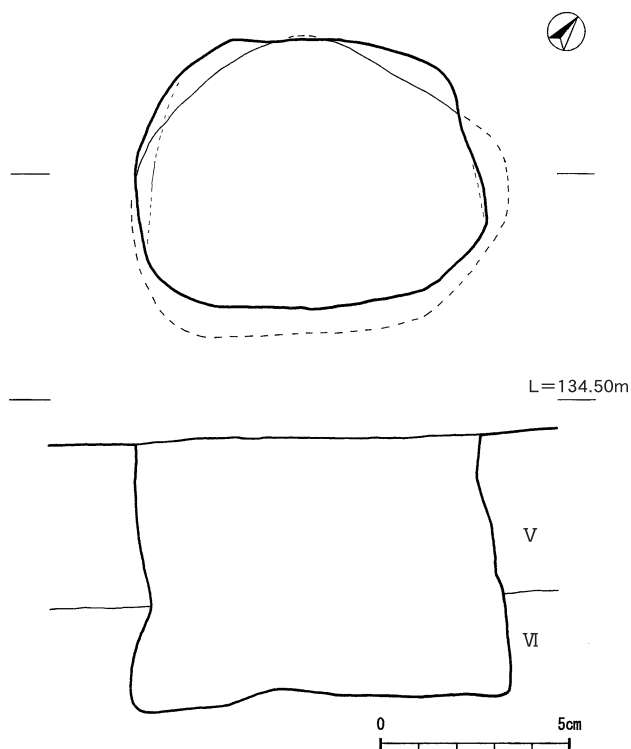
E-25・26区, V層上面で検出された。長軸は93cm, 短軸71cmで検出面からの深さは72cmであった。平面は楕円形で断面は箱形を呈し, 床面はVI層まで掘りこまれている。埋土は黒褐色でIV b層に近く, 全体的に黄褐色のP13のパミスが入っている。また, 一部にVI層に近い茶褐色土が混ざっている。周囲に遺物が少なく, 他に遺構もないことから落とし穴の可能性が考えられるが, 底面に小ピットなどは検出されなかった。

イ 集石遺構 (第14～17図)

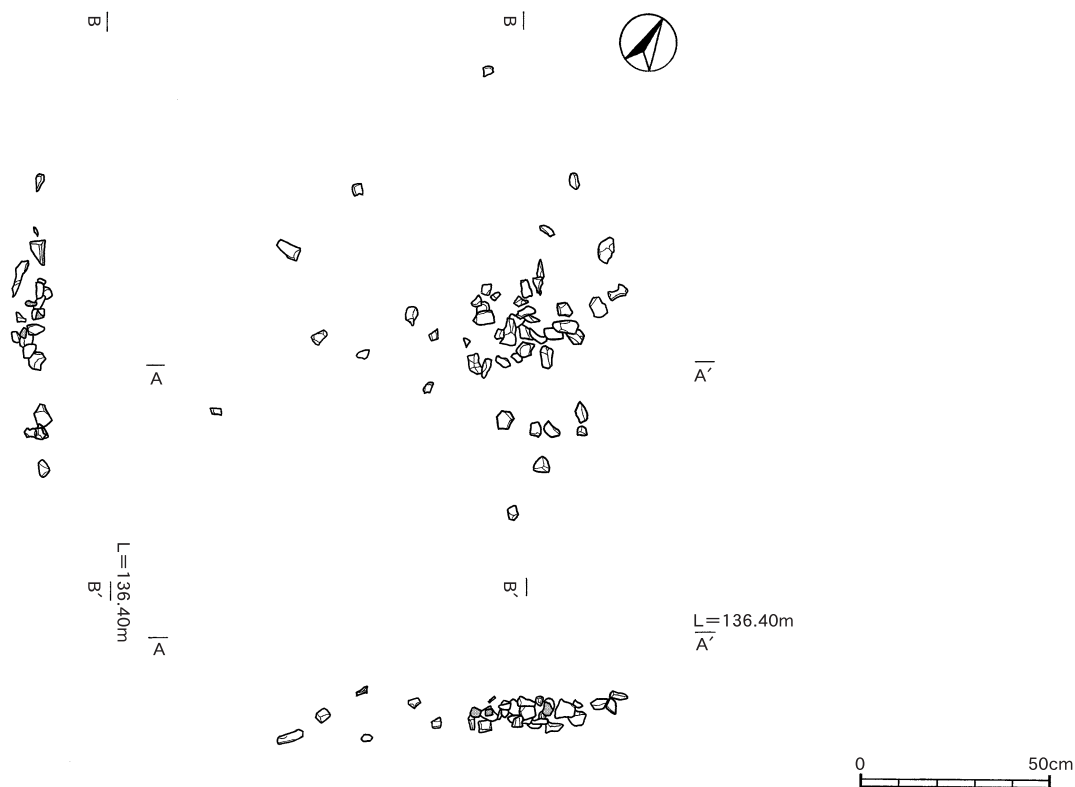
7基の集石遺構は, 1基がE-28区に単独で, 6基が南東側 (F～H-24～25区) で検出された。南東側では礫がまばらに散在しており, その中でまとまっているものを集石遺構とした。周辺からはほとんどレベル差のない状況で石坂式の土器片が出土しており, ほぼ同一時期の集石遺構と考えられる。

1号集石遺構 (第14図)

E-28区, IV層で検出された。119×108cmの範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。礫は全部で48点であった。石材は砂岩10点, 安山岩38点である。礫の重さは10gから140gまでである。礫は全て火熱を受けた小さな礫が多く, 煤が付着しているものもあった。



第13図 石絵遺跡 1号土坑



第14図 石絵遺跡 1号集石遺構

2号集石遺構 (第15図)

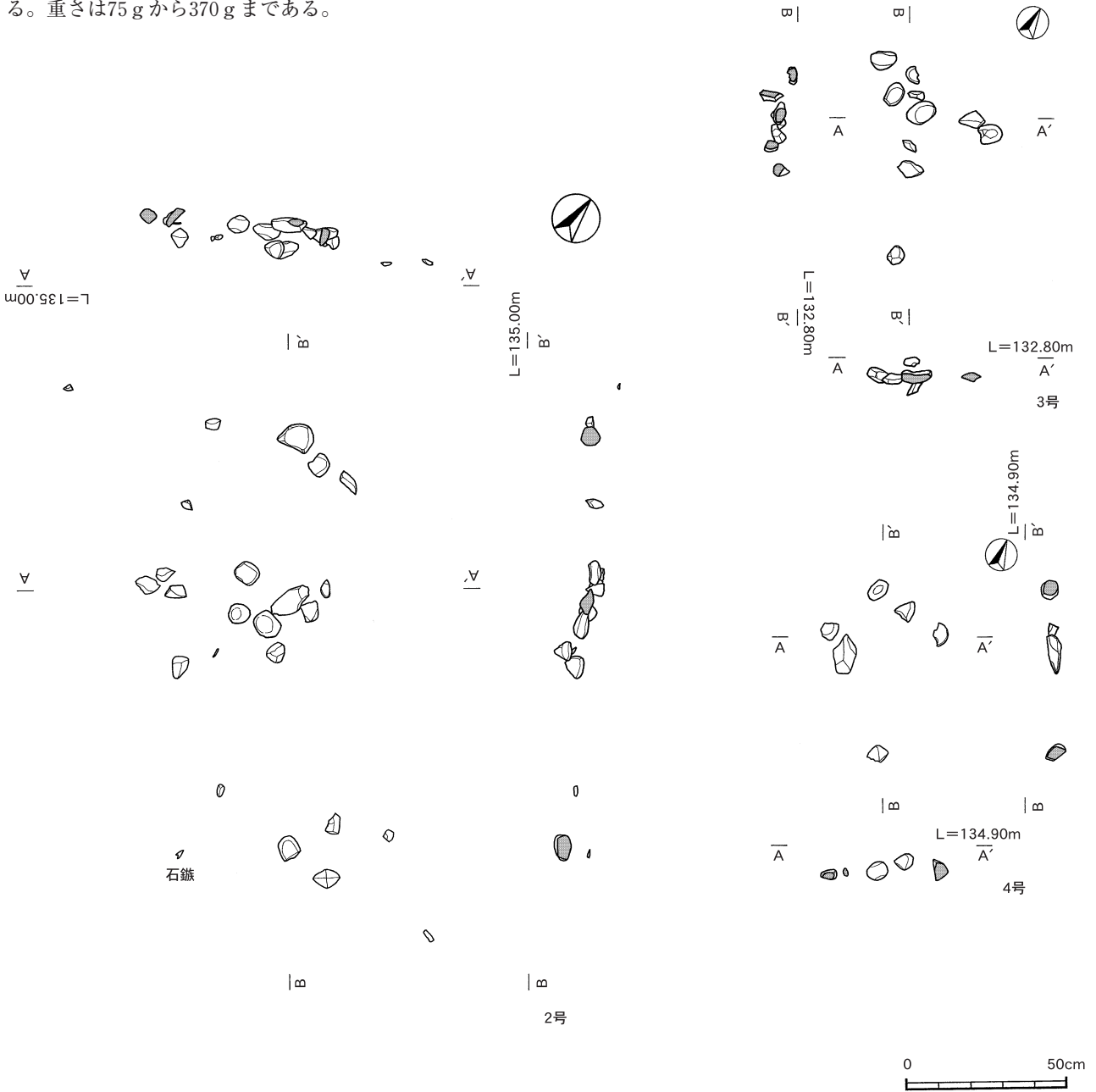
F・G-24区, IV b層で検出された。175×115cmの範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。24点の礫で構成されていたが, 2点は同一個体であった。石材は砂岩1点, 安山岩22点の円礫である。重さは5gの小破片から880gのものまでである。

3号集石遺構 (第15図)

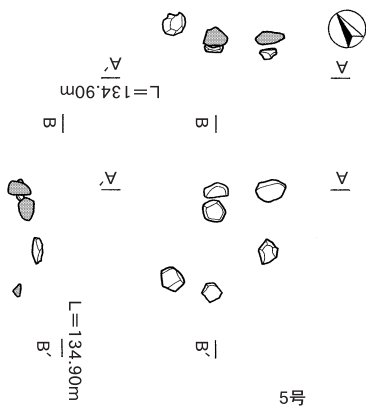
E-24区, IV b層で検出された。58×41cmの範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。10点の礫で構成されていた。石材は砂岩が1点, 安山岩9点である。重さは75gから370gまでである。

4号集石遺構 (第15図)

G-25区, IV b層で検出された。57×40cmの範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。6点の礫で構成され, 石材は全て安山岩である。重さは95gから430gまでである。



第15図 石鏃遺跡 2～4号集石遺構

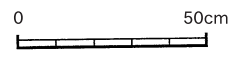
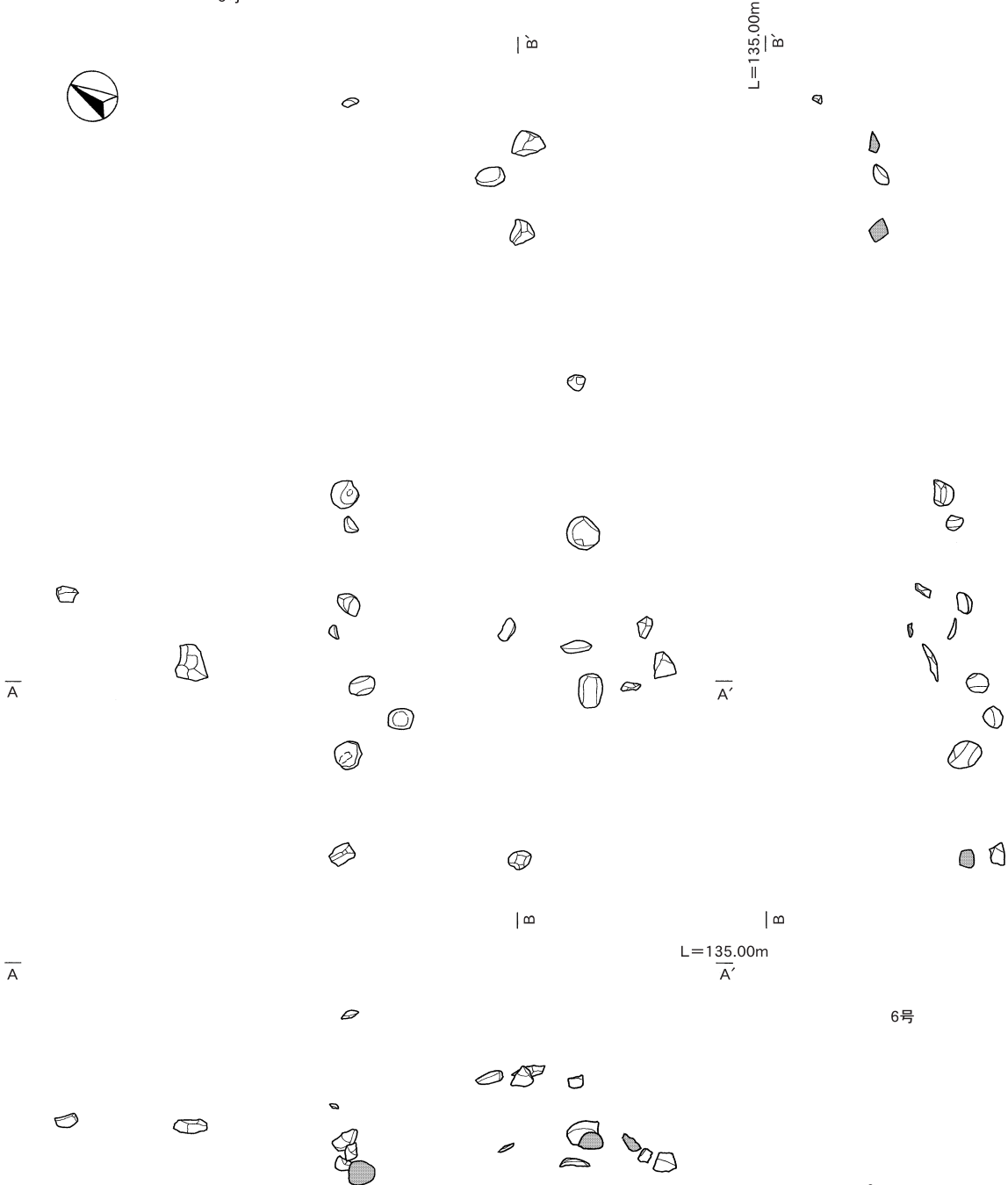


5号集石遺構 (第16図)

G-25区, IV b層で検出された。33×33cmの範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。石材は6点全て安山岩で、重さは60~355gである。欠損しているものが多い。

6号集石遺構 (第16図)

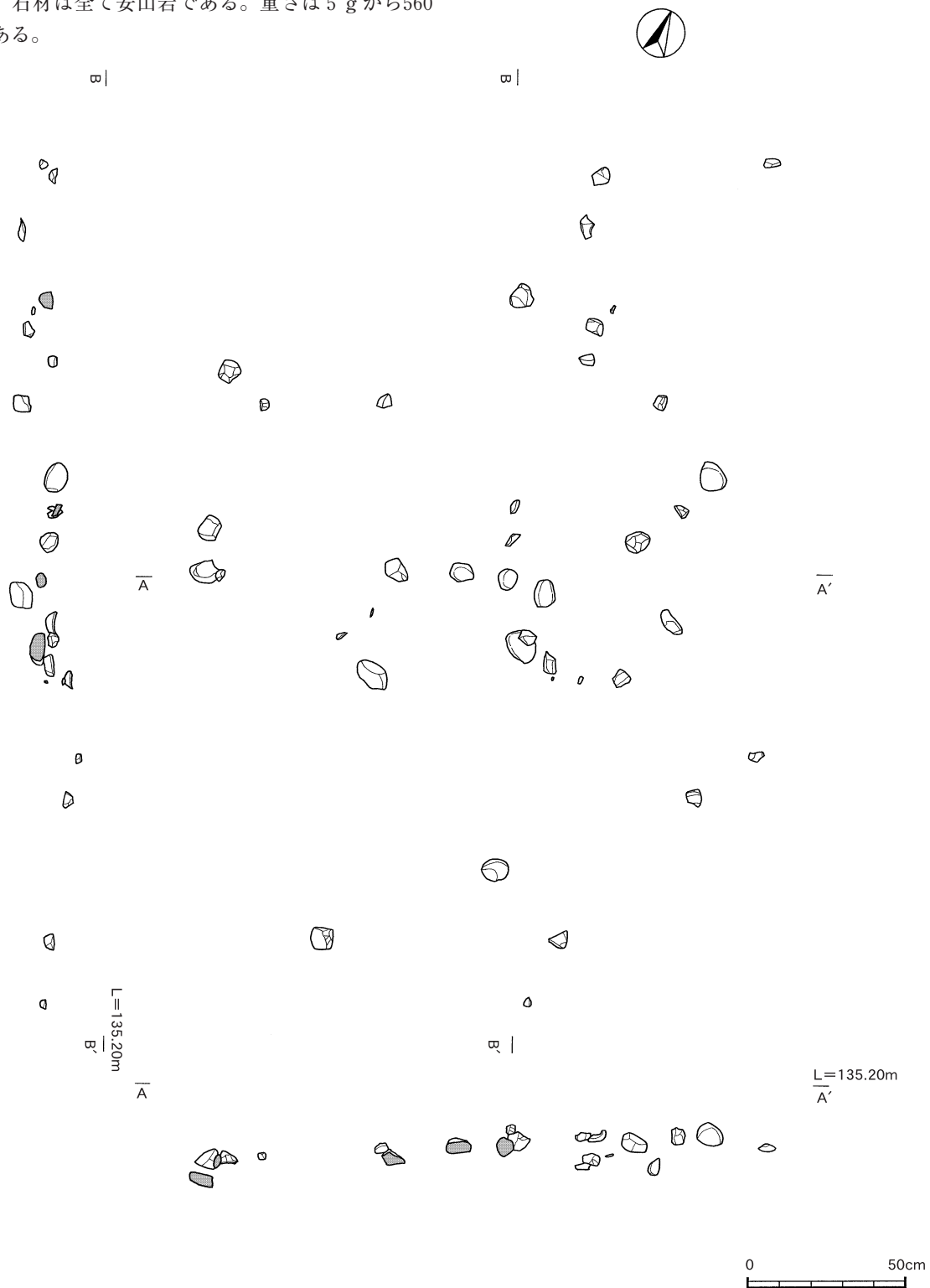
H-25区, IV b層で検出された。234×188cmの範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。石材は1点のみが砂岩で他の22点は安山岩である。重さは15gから900gまでである。



第16図 石絵遺跡5・6号集石遺構

7号集石遺構（第17図）

G-25区，IV b層で検出された。187×269cmの範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。39点の礫で構成されていたが，そのうち7点は同一個体であった。石材は全て安山岩である。重さは5 gから560 gまでである。



第17図 石絵遺跡 7号集石遺構

第4表 石縊遺跡集石遺構を構成する礫の重量分布

	～50 (g)	51～100 (g)	101～200 (g)	201～300 (g)	301～400 (g)	401～500 (g)	501～600 (g)	601～700 (g)	701～800 (g)	801～900 (g)	901～1000 (g)	総数
1号集石遺構	27	12	9									48
2号集石遺構	6		7	3	4		2			1		23
3号集石遺構		2	1	5	2							10
4号集石遺構		1		2	2	1						6
5号集石遺構		1	1	2	2							6
6号集石遺構	3	4	5	3	5	2					1	23
7号集石遺構	8	5	5	2	7	3	3					33

(2) 遺物 (第18・19図)

石縊遺跡では縄文時代早期前半から早期末までの土器が出土している。しかしながら、どの土器型式も1, 2個体ほどしか出土しておらずごく少量の出土となっている。以下は石縊遺跡で出土した縄文土器の分類である。

土器の分類

I 類土器

器形 破片資料ではあるが、底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる円筒形を呈すると考えられる。

文様 口唇端部と口縁部上端に貝殻刺突文が巡る。

器面調整 外面胴部には貝殻条痕調整が行われるが薄い。内面は貝殻条痕調整後ナデが行われている。

土器型式 岩本式土器・前平式土器

II a 類土器

器形 底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる円筒形に近い形状を呈す平底の土器である。口唇部は平坦に整形され、やや内傾する。

文様 口縁部上端に貝殻刺突文が巡らされる。

器面調整 外面胴部には横位や斜位の貝殻条痕調整が行われている。外面底部は工具ナデが行われている。内面は工具ナデが行われている。

土器型式 前平式土器

II b 類土器

器形 底部から口縁部まで直線的に立ち上がる平底の円筒形土器である。口唇部は平坦に整形される。

文様 口唇部にはヘラ状工具による押圧文が施される。口縁部上端にはヘラ状工具や貝殻腹縁による刺突文が巡らされる。

器面調整 胴部には横位もしくは略横位の貝殻条痕調整が行われている。外面底部は工具ナデが行われている。内面は工具ナデもしくはケズリ後ナデ調整が行われている。

土器型式 前平式土器 定塚1 B類土器

III 類土器

器形 波状口縁を呈し、口縁部ではレモン形の器形を呈するが、底部は円形平底である。内傾する口唇部は平坦に整形されている。

文様 口縁部上端に貝殻押引文、胴部には縦位の流水文が施されている。

器面調整 外面は斜位の貝殻条痕調整、内面は貝殻を用いた粗いケズリが行われている。

土器型式 志風頭式土器

IV 類土器

器形 口縁部が緩やかに外反し平底を呈する。外傾する口唇部は平坦に整形される。

文様 口唇部にはキザミが施される。口縁部には羽状の貝殻刺突文が施される。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されるが、底部付近のみ横位方向に施される。器面調整外面はナデ調整が行われている。底部は丁寧なナデが行われている。内面はナデ調整が行われている。

土器型式 石坂式土器

V 類土器

器形 破片資料のため全体の器形は不明であるが、胴部が緩やかに膨らむ器形であると考えられる。

文様 残存部は無文である。

器面調整 内外共にナデ調整が行われている。

土器型式 平椀式土器と考えられる

VI a 類土器

器形 破片資料ではあるが、胴部下半から底部にかけてすぼまる砲弾型の器形を呈すると考えられるが、底部形は不明である。口唇部断面はかまぼこ状を呈する。

文様 縦位の貝殻条痕文の上から斜位の交差する貝殻条痕文を重ねて施している。

器面調整 外面全体に施される縦位の貝殻条痕は器面調整と見ることできる。内面は貝殻条痕調整もしくは貝殻によるケズリが行われているが、口縁部付近は丁寧な工具ナデが行われている。

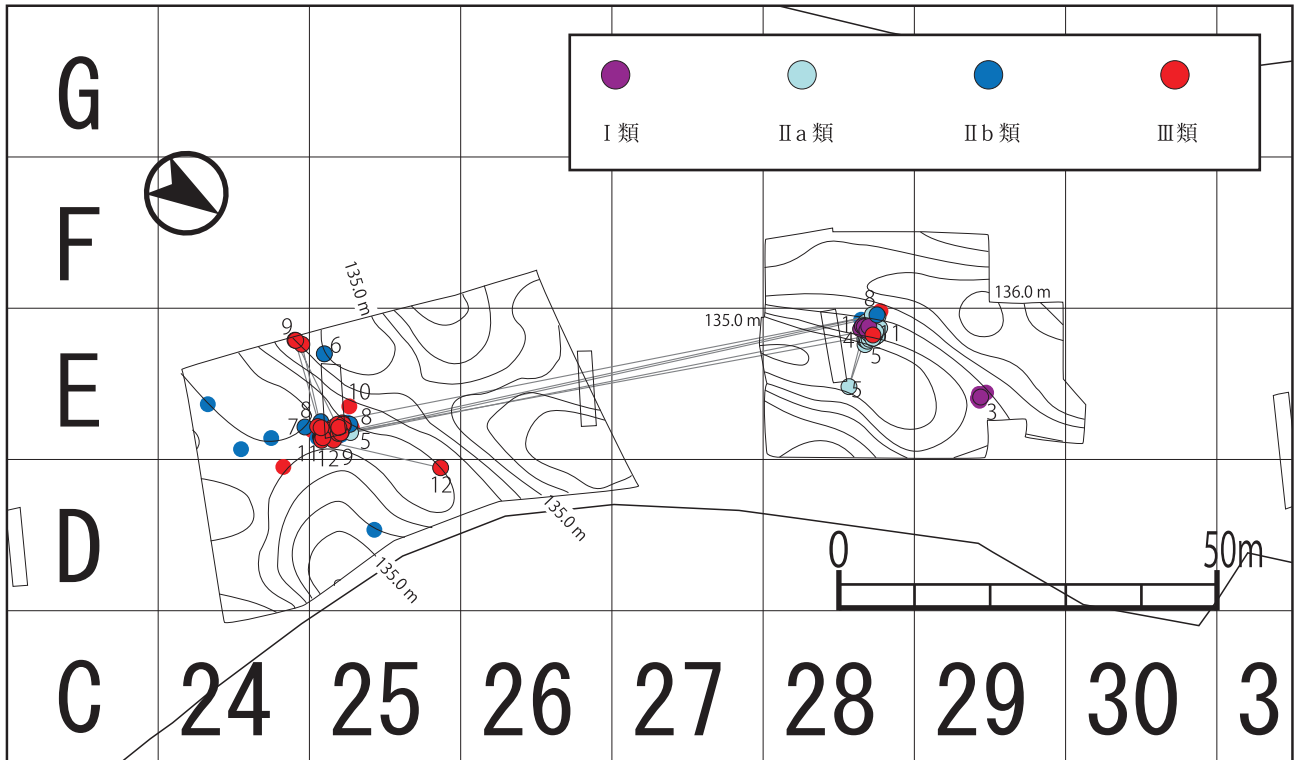
土器型式 早期末貝殻条痕文土器・鎌石橋式
VI b類土器

器形 破片資料のため全体の器形は不明であるが、口縁部が外側に開く深鉢形土器であると考えられる。底部の形状は不明。口唇部はやや平坦気味に整形されている。

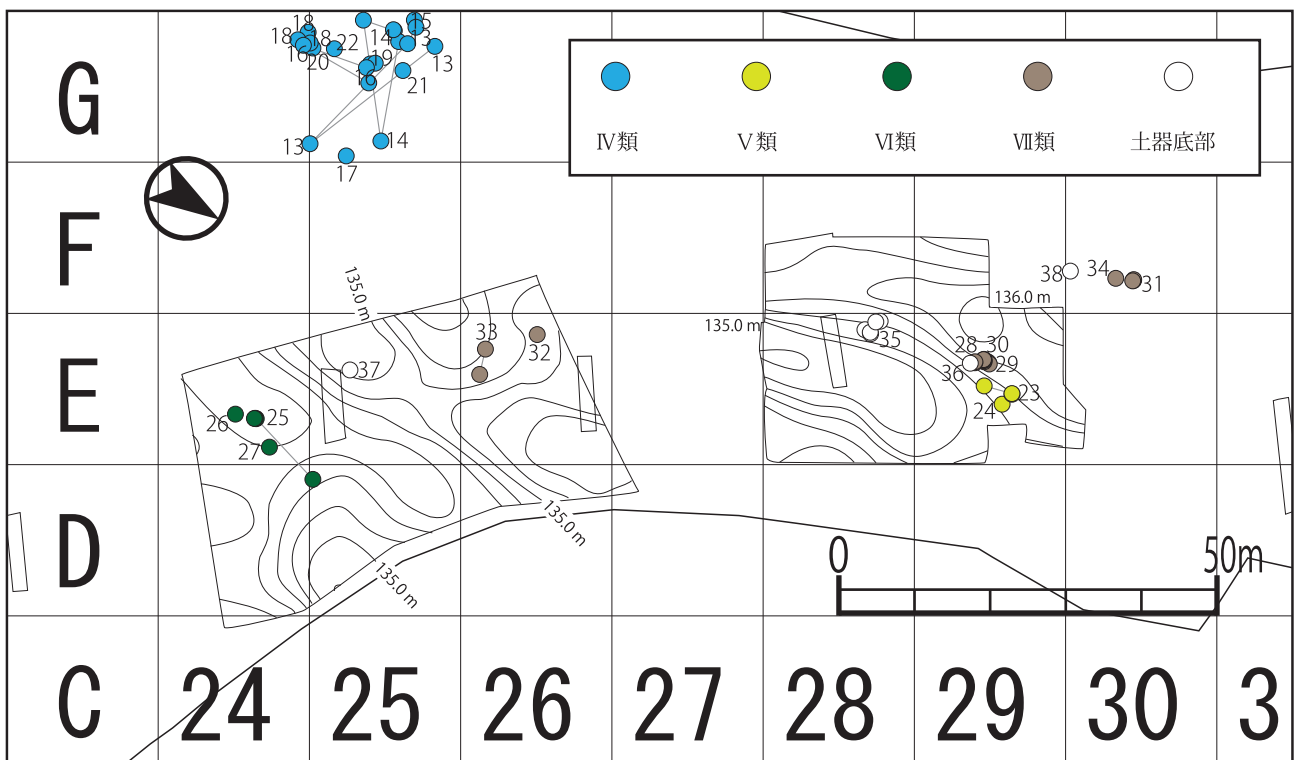
文様 貝殻条痕文が綾杉状に施されている。口縁部上端の貝殻条痕文を横位方向に施すものも見られる。口唇端部にはキザミが施されている。

器面調整 内面は貝殻条痕調整後にナデ調整が行われている。

土器型式 早期末貝殻条痕文土器・轟A式（古段階）



第18図 石絵遺跡縄文時代早期前半土器出土状況図



第19図 石絵遺跡縄文時代早期後半土器出土状況図

縄文土器（第20～25図：1～38）

1～4はⅠ類土器であり、同一個体と考えられる。1～3は口縁部片であり、3点共に内面が激しく剥落しており、1は外面にも剥落が見られる。口唇部は一旦は平坦に整形されているが、外面側の口唇端部に幅の短い縦位の貝殻刺突文が巡らされるため、平坦部が残るのは口唇部の内面側のみである。口唇端部の縦位の短い貝殻刺突文の下位（口縁部上端）には斜位の貝殻刺突文が1条施されている。器面調整は胴部外面に横位から略横位の貝殻条痕調整が行われており、この貝殻条痕は全体的に薄く施されている。なお、外面の貝殻条痕調整は口縁部上端の貝殻刺突文を施したあとから行われている。内面は丁寧な工具ナデが行われている。4は胴部片である。外面は剥落が非常に激しいが、残存部から判断できる内外面の器面調整は口縁部片と同様である。

5はⅡa類土器の完形品である。口唇部は平坦に整形され、工具によると考えられるナデ調整が行われている。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が1条施されている。部分的にはこの刺突を施す際の圧力により、口唇部の断面形が変形している部分も見られる。胴部には斜位の貝殻条痕調整が行われているが、口縁部の刺突文直下のみ横位方向に調整が行われ、胴部は斜位、底部付近は略横位方向に調整が行われている。口縁部刺突文直下の横位の貝殻条痕調整は刺突文を施した後に調整が行われており、また他の部位の調整よりも調整が強めに行われており、条痕が深くなっている。Ⅱ類土器の胴部に行われる貝殻条痕調整は、通常「左上から右下方向へ」の様に一方向に施される。5も大部分が左上から右下方向へ貝殻条痕調整が行われているが、一部分に右上から左下方向に調整が行われており、部分的にはあるが綾杉状になっている。底部外面は工具ナデ調整、内面は口縁部付近は丁寧なナデ調整、胴部中程から底部にかけては貝殻を用いたケズリが行われており、底部は貝殻条痕調整である。

6～8はⅡb類土器であり、同一個体と考えられる。6・7は口縁部片で、平坦に整形した口唇部にはヘラ状工具による押圧文が巡らされている。口縁部上端には異なった施文原体を用いた2条の刺突文が巡らされ、上段にはヘラ状工具による縦位の刺突文が、下段には縦位の貝殻刺突文が施されている。胴部には横位の貝殻条痕調整が行われているが、摩滅が激しい。また、Ⅱa類の5と同様に胴部に施される貝殻条痕調整が刺突文直下のみ深く、それ以下の調整よりもはっきりと施されている。6の外面は一部剥落している。内面は口縁部付近は横位、胴部は縦位のケズリ後ナデ調整が行われている。8は胴部下半から底部の資料である。底部付近のみわずかに丸みをもつが、ほぼ直線的に立ち上がる器形を呈している。胴部外面には横位の貝殻条痕調整が行われている。底部

は丁寧なナデ調整が行われており、一部に網代痕が残っている。内面は胴部から底部にかけて工具によるケズリが行われている。底部と胴部の接合は非常に丁寧におこなわれており、接合痕は確認できなかった。

9～12はⅢ類土器であり、同一個体と考えられ、レモン形の器形を呈する。9・10は口縁部片である。口唇部は平坦に整形され、やや内傾する。波状口縁を呈し、2か所の波頂部が確認できる。波頂部は胴部からほぼ垂直に立ち上がるが、その他の部分ではやや内傾する部分も見られる。口縁部上端には貝殻を用いた押引きの長さが1cm程の短い押引きが2列連続して施されている。胴部には略横位の貝殻条痕調整が行われており、その上から貝殻を用いた2条の流水文が縦位方向に底部付近まで施されている。内面は貝殻を用いた粗いケズリが行われており、口縁部付近のみ横位、胴部は斜位方向に行われている。胎土には3～5mm程の小礫が混ざっている。11は胴部片である。9・10と同様に縦位の流水文が確認できる。器面調整も9・10と同様である。12は底部片である。円形を呈し、このことから、この個体は口縁部はレモン形、底部は円形の器形を呈するものと推測される。外面は摩滅が激しいが、横位の貝殻条痕調整が行われており、その上から外面の底部末端まで流水文が施されている。内面はケズリが行われているが、底部と胴部のパーツを接合した痕跡と考えられるナデの痕跡も見られる。

13～22はⅣ類土器である。13・14・16～19は口縁部片である。13・14は同一個体と考えられる。器壁が1cm程の厚手の土器で、口縁部の外反する器形を呈する。全体的に摩滅しているが、口唇部は丸みをもち刻みが巡らされ、口縁部上端には羽状の貝殻刺突文が施されているのが確認できる。胴部には貝殻条痕文が綾杉状に施されている。内面の器面調整は口縁部付近ではナデ調整が行われている。胴部は摩滅が激しいため分りにくいが口縁部と同様なナデ調整が行われていると考えられる。胎土に2, 3mmの白色の小礫を多量に含むのが特徴である。15は底部片であり、器面調整・胎土や色調から13・14と同一個体の可能性がある。外面には綾杉状の貝殻条痕文が施されているが、底部付近には横位の貝殻条痕文が施されている。底部は丁寧な工具ナデが行われている。胴部内面は丁寧な工具ナデが行われている。断面には底部と胴部の接合面の痕跡が確認できる。16は口縁部から胴部片、17は口縁部片であり、同一個体である。13・14と比較すると器壁が薄く、口唇部も平坦に整形された後に刻み目が施されるが、口唇部のみがやや肥厚するため、断面がカマボコ状にも見えるなど異なった特徴を持つが、器形・文様構成や施文原体などは13・14と同様である。16の内面は剥落が目立つが、器面調整はナデが行われている。18・19は口縁部片であり、同一個体である。口縁部上端には斜位の貝殻刺突文が1列施されており、胴部

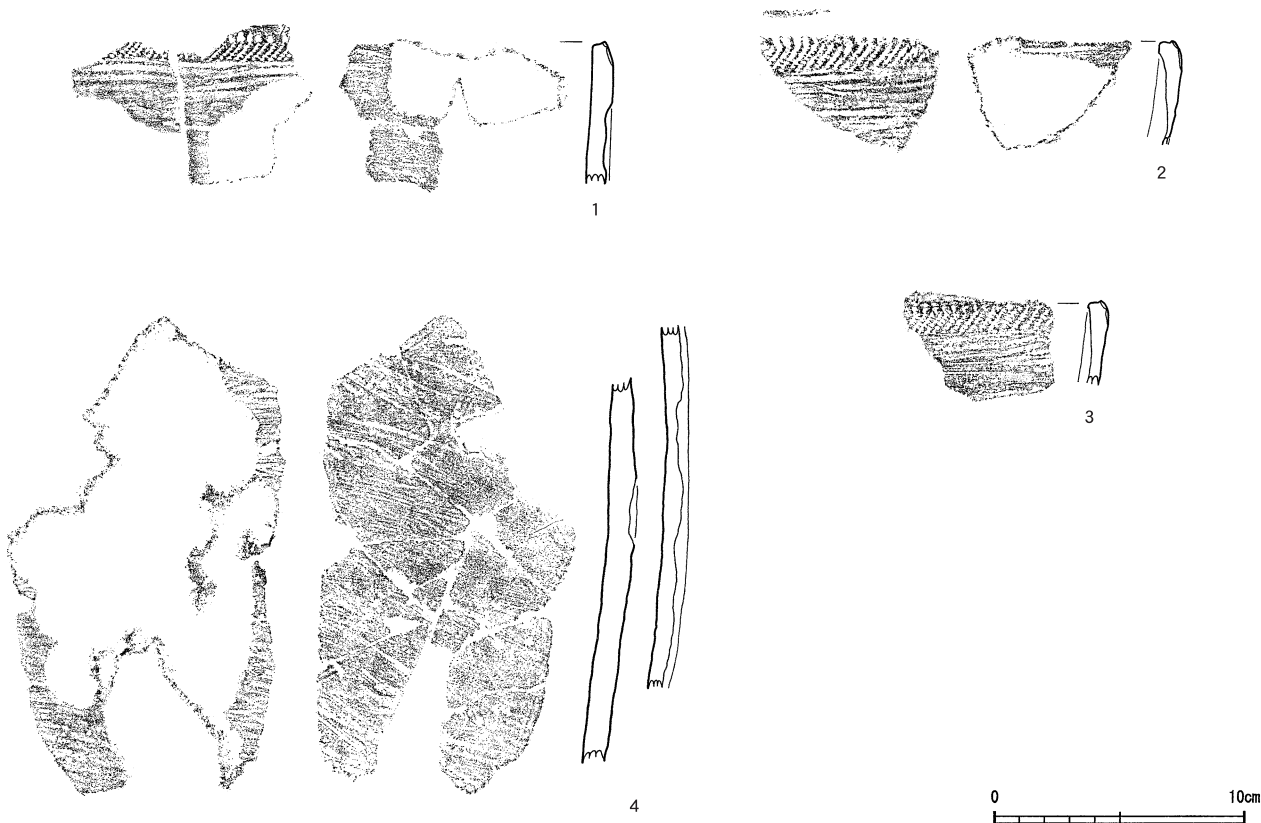
には貝殻条痕文が綾杉状に施されている。器形は16・17に類似している。20は胴部片であり、貝殻条痕文が綾杉状に施されている。21・22は底部片である。横位の貝殻条痕文が施されており、底部に接する外面最下部にキザミが施されている。22は内面に底部片との接合面が確認でき、外面には剥落が見られる。

23・24はV類土器であり、同一個体と考えられる。底部に近い部分の胴部片と考えられ、この部分には文様が確認できない。器面調整は外面はナデ調整、内面はケズリ後ナデ、もしくはナデ調整が行われている。

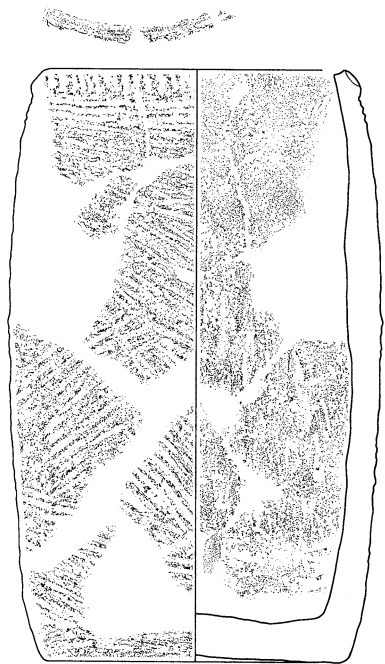
25～27はVI a類土器であり、同一個体と考えられる。やや外傾して立ち上がる断面カマボコ状の口縁部を呈する。外面には縦位の貝殻条痕調整が行われており、その上から斜位の貝殻条痕文が斜位方向に交差するように施されている。また、口唇端部には貝殻を用いたキザミの様に見える押圧文が施されている。内面は貝殻を用いた粗いケズリが行われており、口縁部付近や部分的にはケズリ後ナデが行われている。部分的には貝殻条痕の痕跡がきれいに残っている。外面にはほぼ全体に炭化物が付着している。

28～34はVI b類に分類される。28～30は同一個体である。28・29は口縁部片で、内傾する口唇部は完全ではないが平坦な面を持ち、外面側の端部にキザミの様に見える貝殻を用いた押圧文もしくは刺突文が施されている。口縁部上端から胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。内面は横位の貝殻条痕調整を行った後にナデ、も

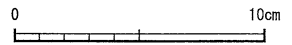
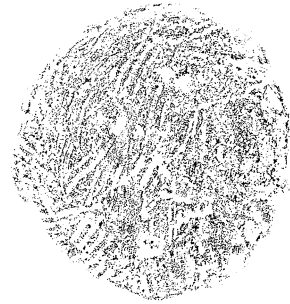
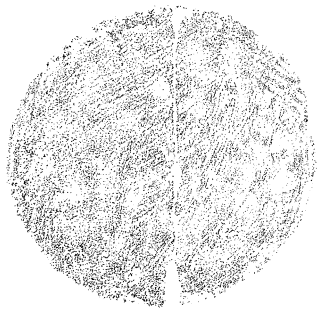
しくは工具ナデが行われている。30は胴部片である。28～30の外面には炭化物の付着が見られる。31は胴部片である。外面は粗いナデ調整の上から綾杉状の貝殻条痕文が施されている。内面はナデ調整が行われている。胎土には2、3mmの白色の小礫を多量に含むのが特徴である。32・33は同一個体と考えられる。32は口縁部片である。口唇部は平坦に整形され内傾し、外面端部にはキザミが施されている。内面端部には明確な稜は作られていない。胴部には縦位の貝殻条痕調整が行われており、口縁部上端のみ横位の貝殻条痕調整が施されている。口唇部及び内面はナデ調整が行われている。33は胴部片である。縦位の貝殻条痕調整の上からやや曲線的な斜位方向の貝殻条痕調整が行われており、内面はナデ調整が行われている。35～38は底部片である。35は平底で、底部から胴部までは、ほぼ垂直に立ち上がる器形をしていると考えられる。器面調整は外面はナデ調整、内面は剥落しており不明である。器形・胎土や色調から、II類土器の底部である可能性が高い。36・37は底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる平底の土器の底部であり、文様は確認できない。36は外面は底部を含めてナデ調整が行われている。内面は凹凸が激しく一見すると剥落の様にも見えるが、粗いナデ調整が行われているようである。37は内外面ともに丁寧なナデ調整が行われている。36・37はV類土器の底部と考えられる。38は器壁が厚手の底部である。外面は底部を含めてナデ調整が行われている。



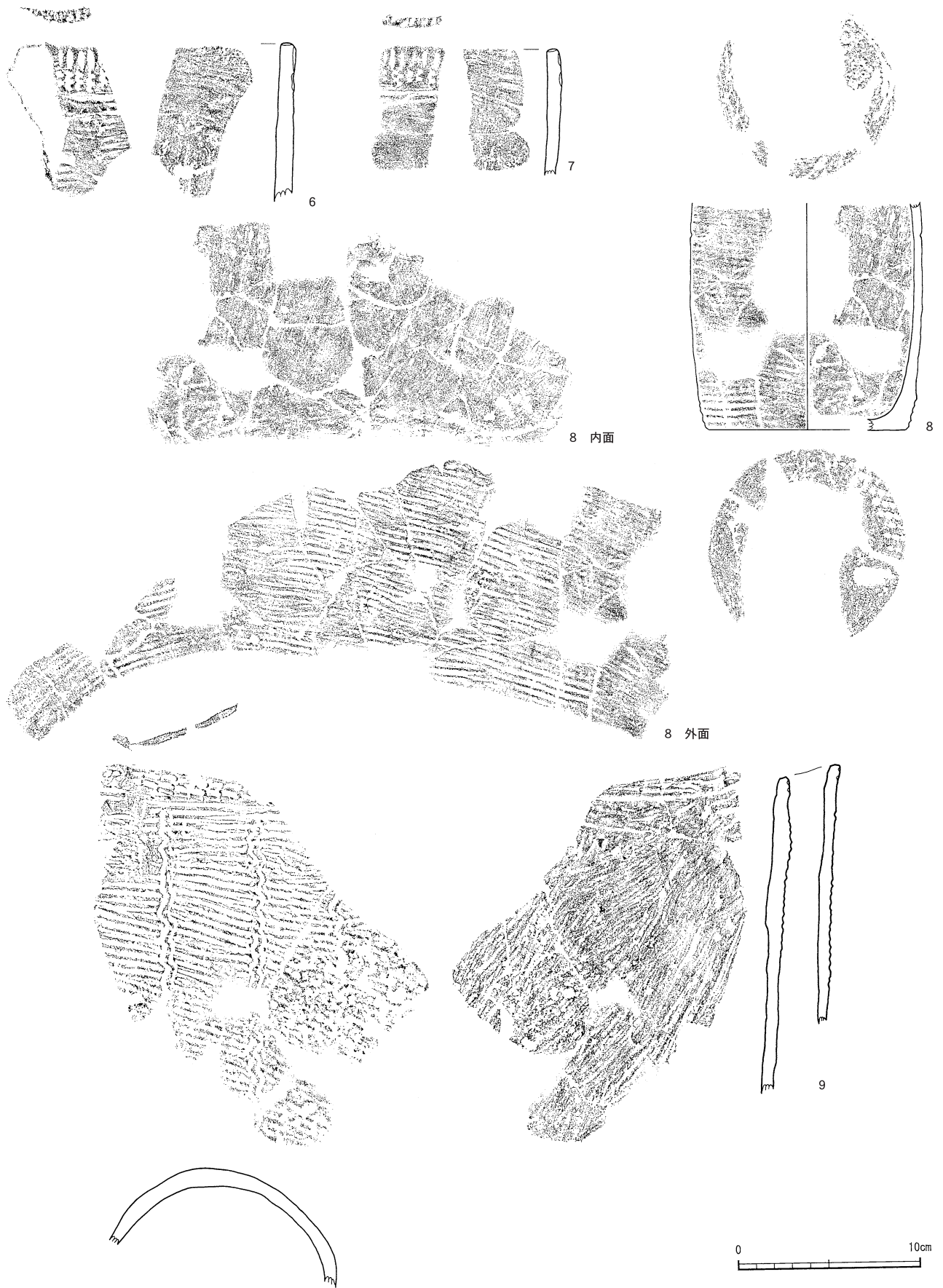
第20図 石縊遺跡縄文時代早期土器 1



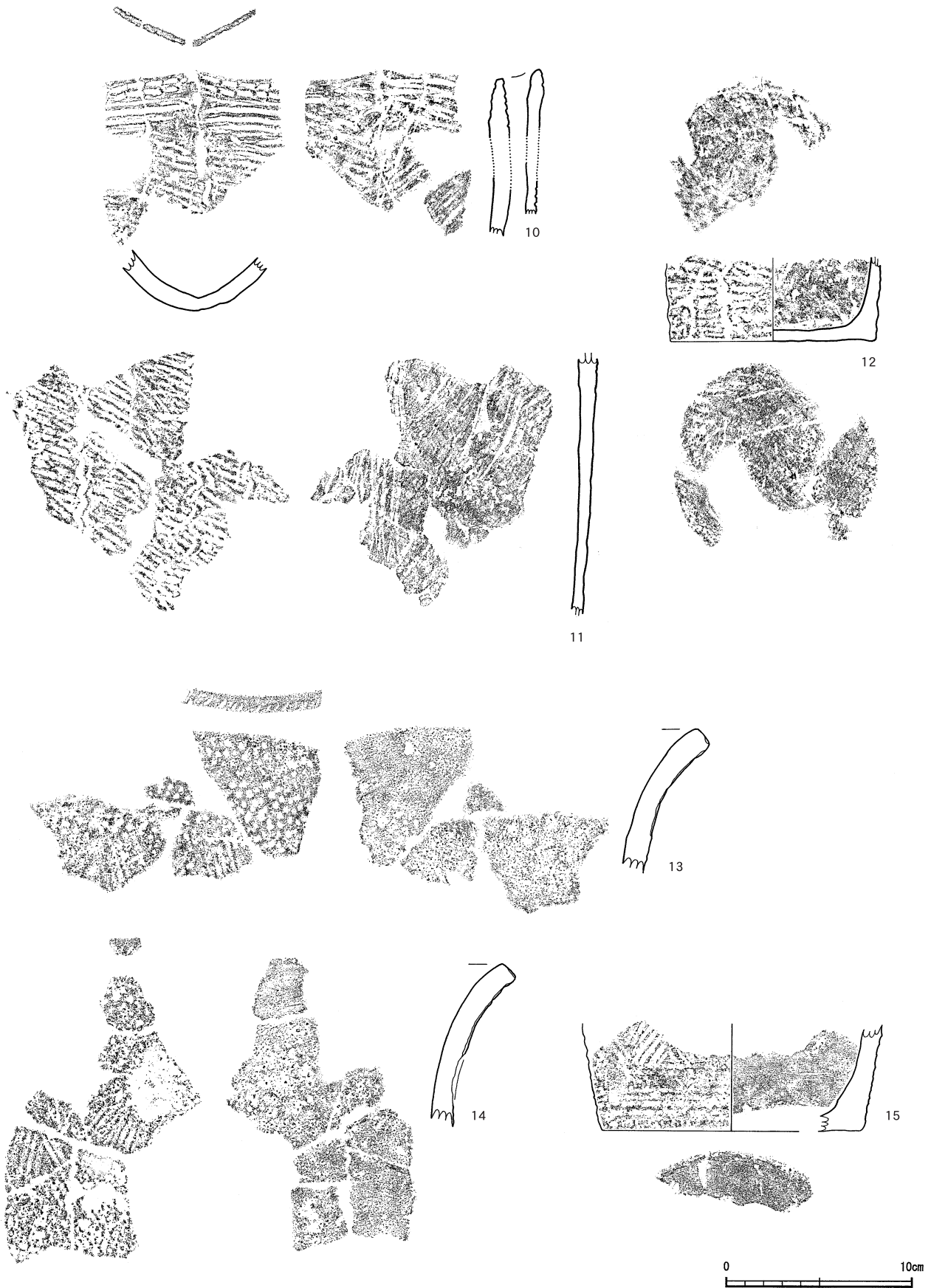
5



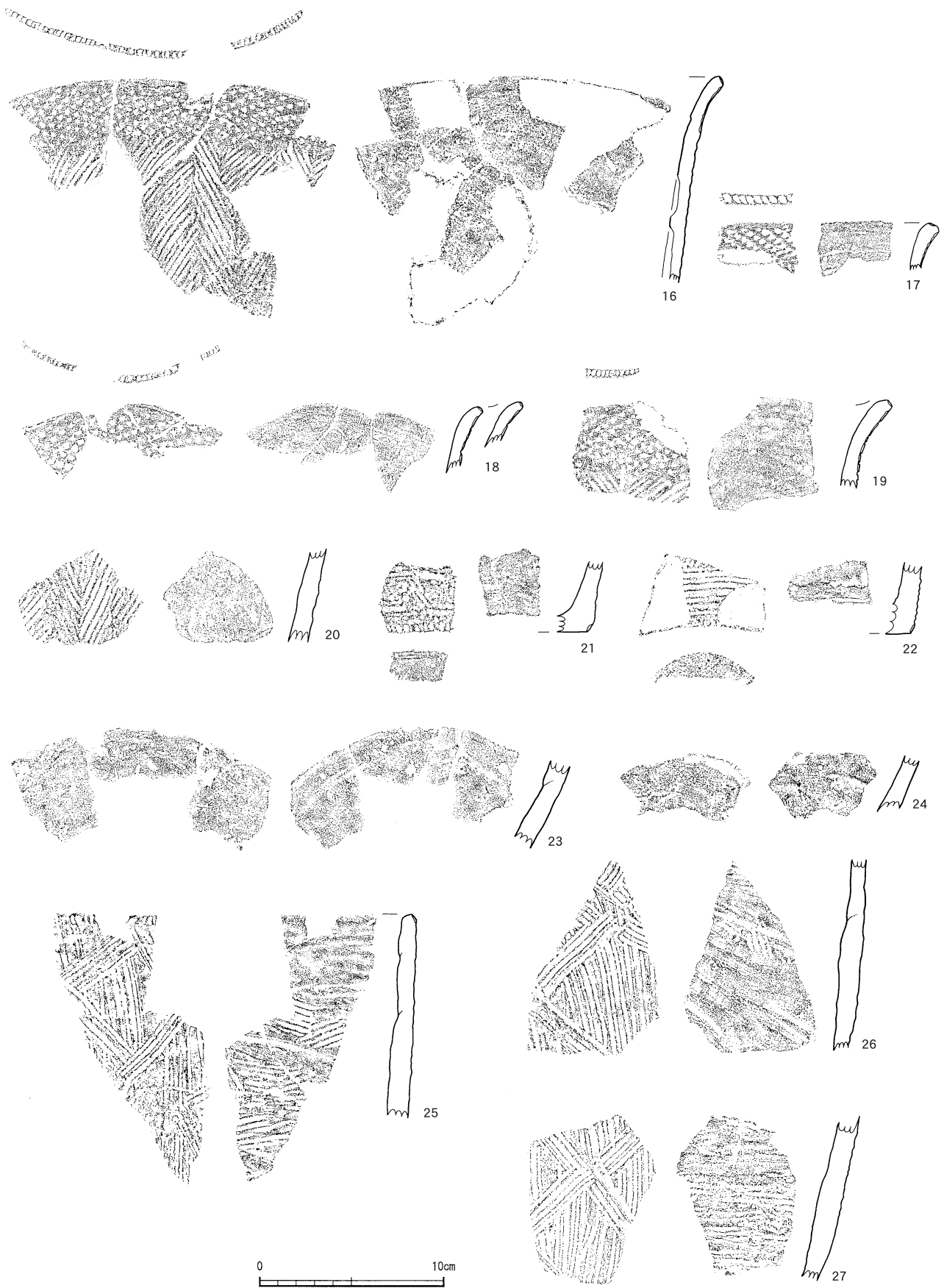
第21図 石絵遺跡縄文時代早期土器 2



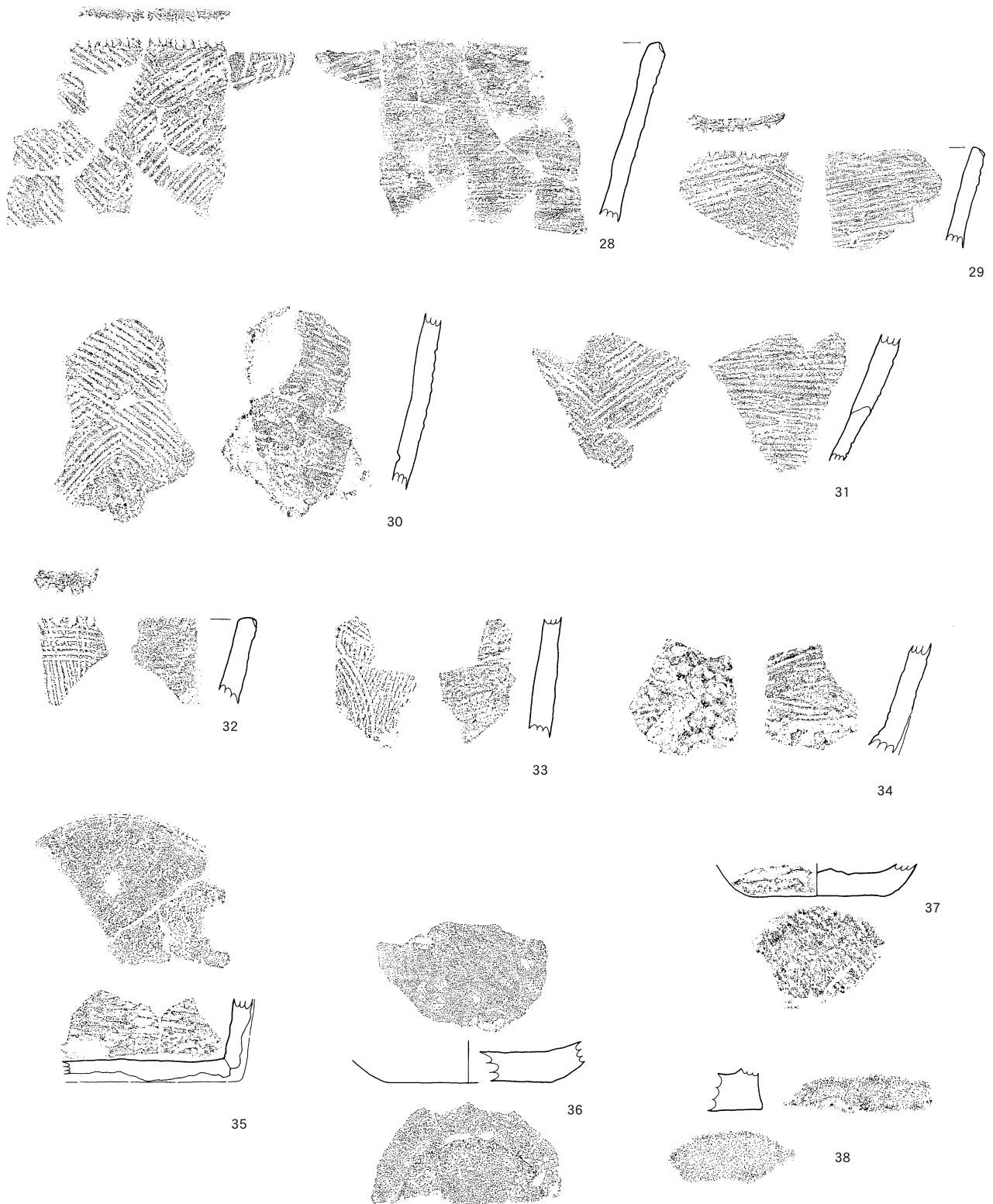
第22図 石縷遺跡縄文時代早期土器 3



第23図 石縊遺跡縄文時代早期土器 4



第24図 石絵遺跡縄文時代早期土器 5



第25図 石縵遺跡縄文時代早期土器 6

第5表 石絵遺跡縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土区	出土 層位	分類	部位	文様	器面調整				胎土				色調		焼成	標高	取上番号	備考
							外面		内面		石英	長石	黒色鉱物	その他	外面	内面				
20	1	E-28 8 T	IVb	I類	口縁部	貝殻刺突文 貝殻条痕	貝殻条痕	貝条→ナデ	○	○	○	赤色鉱物	にぶい黄褐	にぶい黄橙	良	135.63	222・297 1483	内外面剥落あり 2・3・4と同一固体		
	2	E-29	IVb		口縁部	貝殻刺突文 貝殻条痕	貝殻条痕	不明		○	○		橙	にぶい橙	良	不明	不明	内面剥落あり 1・3・4と同一固体		
	3	E-29	IVb		口縁部	貝殻刺突文・貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ		○	○		橙	にぶい橙	良	136.115	1738	内面剥落あり 1・2・4と同一固体		
	4	E-28	IVb		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○	○	赤色鉱物	にぶい橙	橙	良	135.56	1465など	外面が大きく剥落している 1・2・3と同一固体		
21	5	E-28・8 T	IVb	IIa類	完形品	貝殻刺突・貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ	○	○	○		にぶい橙	橙	良	135.97	72など			
22	6	E-25	IVb	IIb類	口縁部	へら状工具刺突 貝殻刺突文	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		にぶい黄橙	浅黄橙	普	134.549	1068	7・8と同一固体		
	7	E-24	IVb		口縁部	へら状工具刺突 貝殻刺突文	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	普	134.502	1058・1062	6・8と同一固体		
	8	E-24	IVc		底部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	普	134.68	134など	6・7と同一固体		
23	9	E-24	IVb	III類	口縁部	貝殻押引文・流水文	貝殻条痕	ケズリ	○	○			橙	橙	良	135.545	132など	10・11・12と同一固体		
	10	6 T	IVb		口縁部	貝殻押引文・流水文	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ		○	○		橙	橙	良	134.58	112・117 128など	9・11・12と同一固体		
	11	6 T	IVb	III類	胴部	貝殻条痕・流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○			橙	黒褐色	普	134.69	104など	9・10・12と同一個体		
	12	E-24・6 T	IVb		底部	貝殻条痕・流水文	貝殻条痕	ナデ		○	○	赤色鉱物	橙	橙	普	134.68	144など	9・10・11と同一個体		
	13	G-25	IVa		IV類	口縁部	貝殻刺突文	ナデ	ナデ		○		赤色鉱物	にぶい褐色	にぶい橙	良	134.725	5071・5073	胎土：白色小礫 14と同一個体	
	14	G-25	IVa			口縁部	貝殻刺突・貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ		○			橙	橙	良	135.045	5080・5081	胎土：白色小礫 13と同一個体	
15	G-25	IVa	底部	貝殻条痕		貝殻条痕	工具ナデ		○		赤色鉱物	橙	にぶい黄褐	良	134.59	5122	胎土：白色小礫 13・14と同一固体			
24	16	G-24・25	IVa	IV類	口縁部	貝殻刺突・貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ	○	○			橙	橙	良	135.14	5088・5103	内面に剥落あり 胎土：白色小礫 17と同一固体		
	17	G-25	IVb		口縁部	貝殻押圧文・貝殻刺突	ナデ	工具ナデ		○	○	赤色鉱物	橙	橙	良	134.325	5059	胎土：雲母が極少含まれている 16と同一固体		
	18	G-24・25	IVa		口縁部	貝殻押圧文・貝殻刺突	ナデ	ナデ		○	○	赤色鉱物	橙	にぶい赤褐	良	134.89	5099など	スス附着 19と同一固体		
	19	G-25	IVa		口縁部	貝殻押圧文・貝殻刺突	ナデ・貝殻条痕	ナデ		○	○		にぶい橙	橙	良	134.98	5087	スス附着 18と同一固体		
	20	G-25	IVa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		明赤褐	暗赤灰	良	134.92	5096			
	21	G-25	IVa		底部	貝殻条痕 ・キザミ	貝殻条痕	工具ナデ		○		赤色鉱物	にぶい黄橙	橙	良	135.09	5066			
	22	G-25	IVa	底部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		橙	明赤褐色	良	134.95	5092	外面に剥落あり			
	23	E-29	IVb	V類	胴部	なし	ナデ	ナデ		○	○		橙	にぶい黄橙	良	136.445	1701	24と同一個体		
	24	E-29	IVb		胴部	なし	ナデ	ナデ		○	○		橙	にぶい黄橙	良	136.23	1687	23と同一個体		
	25	D-25	IVa		口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕		○	○		黄褐	にぶい黄褐	良	134.783	1014など	スス附着 26・27と同一固体		
	26	E-24	IVa	VIa類	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕		○	○		橙	にぶい黄褐	良	134.856	1008	スス附着 25・27と同一固体		
27	E-24	IVa	胴部		貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕		○	○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	134.925	1011	25・26と同一固体			
25	28	E-29	IVa	VIb類	口縁部	キザミ・ 貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○		雲母	黒褐色	褐色	良	136.508	1293など	胎土：白色小礫 スス附着 29・30と同一固体		
	29	E-29	IVa		口縁部	キザミ・ 貝殻条痕	貝殻条痕	貝条→ナデ				雲母	黒褐色	灰褐色	良	136.448	1327	胎土：白色小礫 スス附着 28・30と同一固体		
	30	E-29	IVa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○			にぶい黄褐 色	にぶい黄褐色	良	136.507	1324・1328	胎土：白色小礫 28・29と同一固体		
	31	F-30	IVa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	貝条→ナデ		○	○	雲母	灰褐色	にぶい黄褐色	良	136.895	1721など	胎土：白色小礫 スス附着		
	32	E-25	IVa	VIb類	口縁部	キザミ・貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○			褐色	褐色	良	135.685	1165	胎土：白色小礫 33と同一固体		
	33	E-26	IVa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○		雲母	にぶい褐色	にぶい褐色	良	135.49	1155・1158	胎土：白色小礫 32と同一固体		
	34	F-30	IVa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕工具ナデ	貝殻条痕		○		雲母	にぶい褐色	黄褐色	良	136.645	1719	胴部最下部底部付近 胎土：白色小礫		
	35	E-28 8 T	IVb	II類 V類	底部	不明	不明	貝条→ナデ 工具ナデ	○	○	○	赤色鉱物	にぶい黄橙	橙	良	135.8	206・234 312など	外面の剥落が激しい II類の可能性が高い		
	36	F-30	攪乱		底部	不明	ナデ	ナデ		○			雲母	黒褐	褐	良	136.368	攪乱一括		
	37	E-29	IVa		底部	不明	ナデ	不明			○			褐色	にぶい黄褐	良	134.58	1264	胎土：白色小礫 V類の可能性が高い	
	38	E-25	IVa		底部	不明	ナデ	不明		○	○	○		橙	明褐	良	136.425	1235	胎土：白色小礫 V類の可能性が高い	

石器（第27～29図：39～77）

石縊遺跡の包含層は縄文時代早期（IVa～c層）と弥生時代（II層）の二つに分けられており、本遺跡で出土した石器は全て縄文時代早期の包含層から出土している。石器の器種は磨製石鏃・打製石鏃・打製石斧等があり、39点を図化した。石材は黒曜石・水晶・玉髓・チャート・安山岩・頁岩・粘板岩・ホルンフェルス等が使用されている。石縊遺跡の石材は特徴から以下のように分類した。

黒曜石（OB）

- 1類 黒色を呈し、やや透明感があり不純物を多く含むもの。三船の原産地資料に類似する。
- 2類 黒色を呈し、透明感が無くやや不純物を含むもの。表面に風化が見られる。
- 3類 鉛色から黒色を基調とする。不純物をあまり含まない良質なものでえびの市の桑ノ木津留、大口市の上青木の原産地資料に類似する。
- 4類 灰色を呈し、透明感があるもの。姫島の原産地資料に類似する。
- 5類 青灰色を呈し、不純物の少ないもので、淀姫等の西北九州の原産地資料に類似する。

安山岩（AN）

- 1類 白色から青灰色を基調とする。ハリ質が強く斜長石が殆ど含まれない。
- 2類 黒色を呈し、1類と比較するとハリ質が弱く斜長石が殆ど含まれない。

頁岩（SH）

- 1類 灰色や黒色を呈し線上の節理が発達している。珩質の頁岩である。
- 2類 薄茶色を呈し、粒状感がある。

玉髓（CC）

- 1類 白色を呈し、比較的珩質分に富んだもの。
- 2類 赤色を呈し、比較的珩質分に富んだもの。

チャート（CH）

- 1類 灰白色を呈し、やや透明感があるもの。
- 2類 深緑色を呈し、透明感がないもの。
- 3類 薄灰色を呈し、やや透明感のあるもの。
- 4類 黒色を呈し、やや透明感があり節理が発達するもの。

ホルンフェルス（HF）

- 1類 赤色を呈し、白の純模様が入る。頁岩質のホルンフェルスである。
- 2類 灰色を呈し、やや節理が発達するもの。粒子が粗い頁岩質のホルンフェルスである。

水晶（CR）

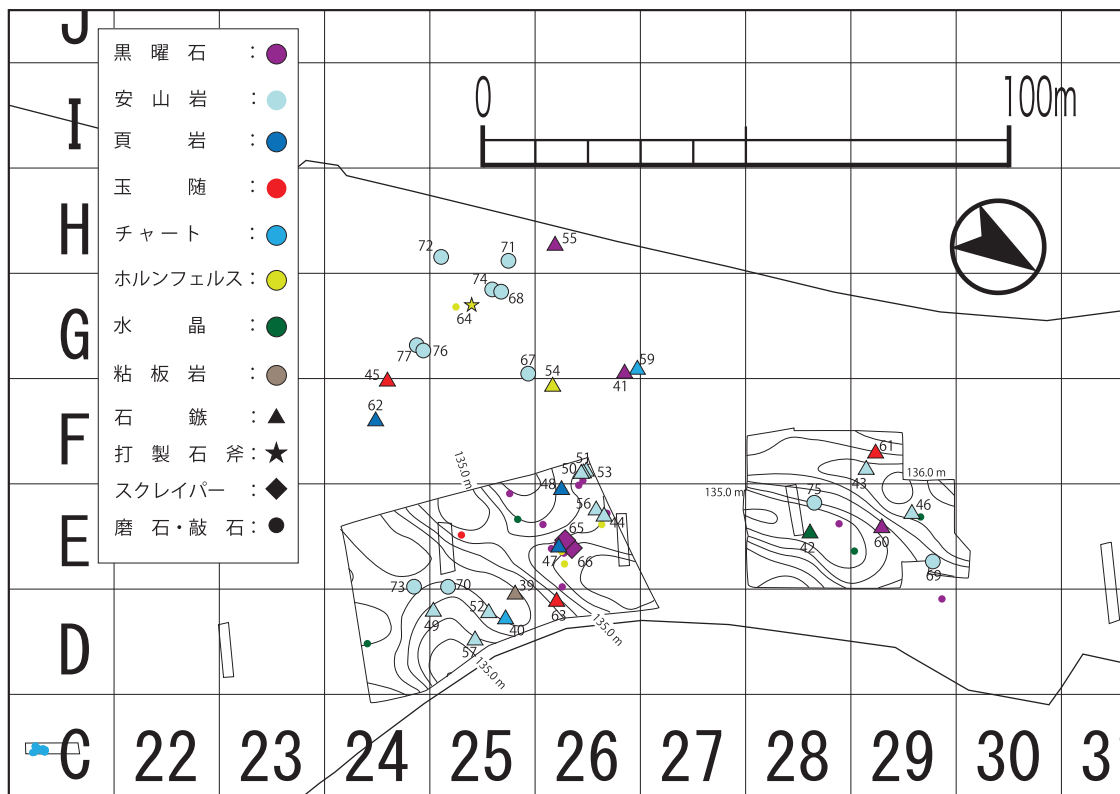
- 1類 無色透明なもの。
- 2類 透明感が無く節理の発達するもの。
- 3類 やや透明感があり、節理の発達するもの。

粘板岩（CL）

薄緑色を呈し、やや粒状感があるもの。

磨石・敲石等の分類（十三塚遺跡と共通）

- 1類 表・裏面に磨面があり、顕著な敲打痕のないもの。（磨石）



第26図 石縊遺跡石器出土分布図

- 2類 表・裏面に磨面があり、敲打痕が見られるもので、周縁部及び表・裏面上に敲打痕があるものを2A類、主に丸みのある突出した端部に敲打痕が見られるものを2B類とした。(磨・敲石)
- 3類 明瞭な磨面をもたず、側縁・表裏面上に敲打痕があるもの。(敲石)
- 4類 表面・裏面上にくぼみを持つもの。面中央部の敲打による浅い窪みをもつものを含む。(凹石)
- 5類 1～4類に該当しない不定形な礫を素材とした。(敲石・磨石)

磨製石鏃 (第27図 : 39)

39は全体形が正三角形に近い形状を呈する磨製石鏃で、やや鋭く作出した基部に抉りが施されないものである。最大長は1.7cm程度で粘板岩を素材としており、研磨面は全体に及んでいる。

打製石鏃 (第27・28図 : 40～63)

40～63は打製石鏃で総数は24点出土している。40～42は全体形が正三角形に近い形状を呈するもので、基部に浅い三角形の抉りが施され、脚部がやや鋭く作出されるものである。40はチャート1類を素材とし、最大長1.6cmで比較的小型の製品である。41は黒曜石2類を素材とするもので、右脚部の先端が欠損している。42は水晶製で3点中では最も大きく最大長2.1cmである。

43～50は深い抉りを施す大型の石鏃で、いわゆる鍬形鏃に類するものである。43・44は一部に欠損が見られるが、やや幅広の製品であり、いずれも安山岩2類を素材としている。比較的大きめの調整剥離の後、側縁に微細な調整剥離を連続して施している。47・48は全体形がやや二等辺三角形を呈すもので、頁岩1類を素材としている。2点とも極めてよく似た形状を呈するが、47は側縁が先端部から中央部にかけて内湾している。48は側縁がほぼ直線的な形状を呈し、左脚部が欠損している。2点とも最終段階で側縁に微細な調整剥離が施されており、製作技法としては43・44とに共通点が見られる。

45は玉髓2類を素材とし、右脚部を丸く作出しており、左脚部は欠損している。2号集石の近くで出土した。

46・49・50はやや二等辺三角形を呈するものである。側縁に細かな調整剥離が見られないのが特徴で、石材はいずれも安山岩1類を素材としている。46は脚部がやや鋭く作出されている。49は脚部が丸く作出され、大きめの調整剥離が見られ、一部自然面を残している。50は先端部と脚部に欠損が見られる。

51～54は浅い抉りを施す大型の石鏃である。51～53は安山岩1類を素材とするもので、脚部はやや鋭く作出され、52は先端部が欠損し、53は脚部が欠損している。

54はホルンフェルス1類を素材とするものである。側縁が鋸歯状を呈し、基部に浅い三角状の抉りが施され、脚部がやや鋭く作出されている。先端部に細かな調整剥

離が施されており、一部に研磨面が見られる。

55は側縁に鋸歯状の加工を施す大型の石鏃である。黒曜石2類を素材とするもので、基部に深い抉りを施し、脚部がやや鋭く作出されたものである。

56・57は小型の石鏃で安山岩1類を素材としている。56は基部に抉りが見られない石鏃である。57は全体形が正三角形に近い形状を呈するもので、基部に浅い抉りが施されている。

58は浅い抉りを施す小型の石鏃で、外湾する側縁は鋸歯状を呈する。チャート1類を素材としており、側縁に細かい調整剥離を施している。

59はほとんど抉りを施されず、脚部が鋭く作出されるものである。チャート2類を素材とし、側縁に細かい調整剥離が施されている。

60は比較的扁平な石鏃で基部に浅い抉りが施され、脚部がやや鋭く作出されている。黒曜石1類を素材とし、先端部と脚部に欠損が見られる。

61・62は側縁が外湾する石鏃である。61は玉髓1類を素材とし基部に浅い抉りが見られる。側縁はやや外湾し形状は帖地形石鏃に類似する。62は頁岩2類素材とし、表面と裏面に研磨面が見られる。基部に浅い抉りが見られ、先端部が欠損している。

63は二等辺三角形の石鏃の先端部である。玉髓2類を素材とし全体的に細かい調整が見られる。

打製石斧 (第28図 : 64)

64はホルンフェルス2類を素材とする打製石斧で、縦9.5cm、横6.8cm、厚み2.7cmを計る。表面が若干風化しており右側縁に軽い抉りが作られている。

スクレイパー (第28図 : 65・66)

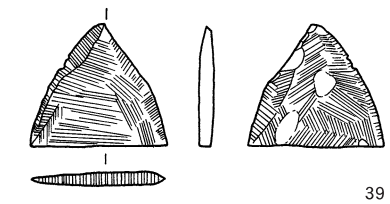
65・66は削器類のスクレイパーで、黒曜石1類を素材とするものである。65は円形を呈し、下部に刃部を有するもので、66は右側縁から下部にかけて刃部を有するものである。

磨石・敲石 (第29図 : 67～77)

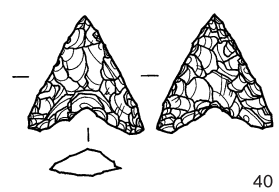
67・68は1類である。67は小型の石で裏面に磨面がある。下面図左よりの擦痕は発掘調査時についた痕跡と考えられる。68は裏面に磨面があり、上下の側面が火熱によって剥離している。

69～76は2類である。69～71は表裏に磨面があり、上下の側面に敲打痕がみられる。71は右側面にも敲打痕がみられる。72は裏面に磨面があり、下・右の側面に敲打痕がみられる。73は表・裏に磨面があり、上下左右の側面に敲打痕がみられる。74は上面に磨面あり、下面に敲打痕がみられる。75は表裏に磨面が形成され、上下の側面と表面に敲打痕がみられる。76は表面に磨面があり、下面と表面に敲打痕がみられる。

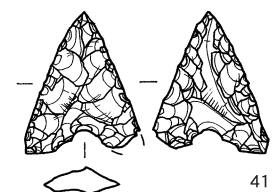
77は3類である。表裏に磨面がなく、上下の側面と裏面に敲打痕がみられる。



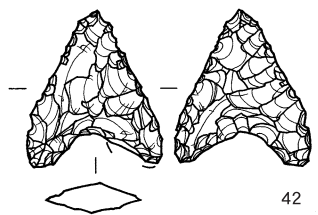
39



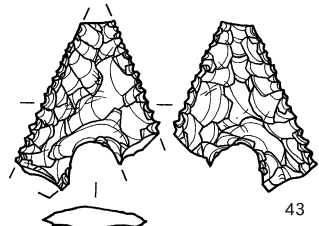
40



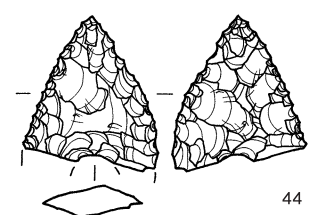
41



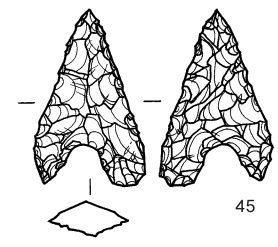
42



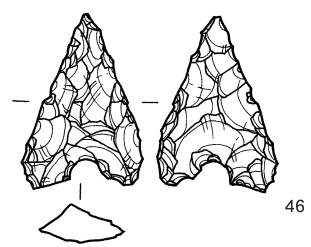
43



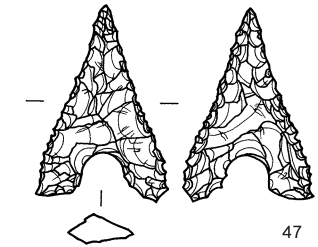
44



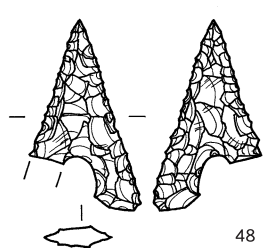
45



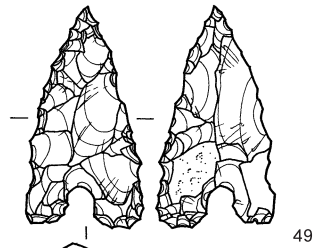
46



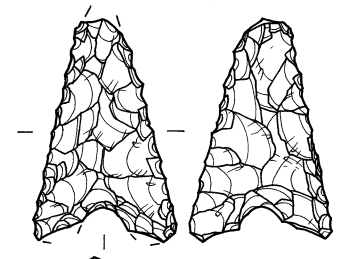
47



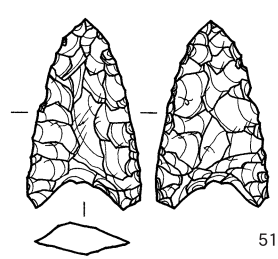
48



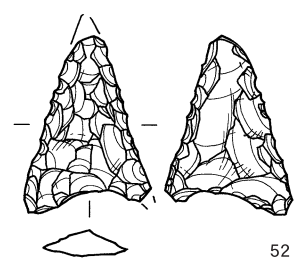
49



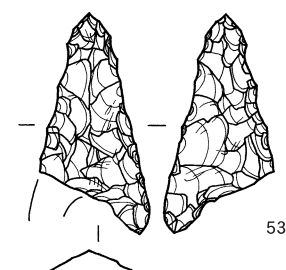
50



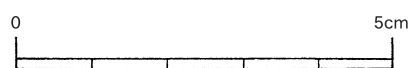
51



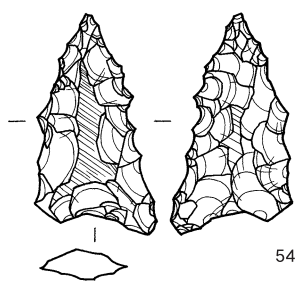
52



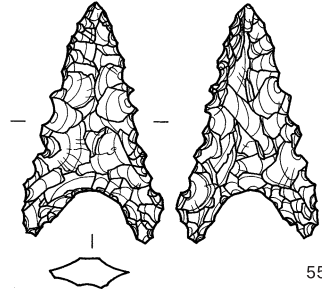
53



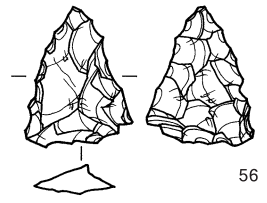
第27圖 石繪遺跡縄文時代石器 1



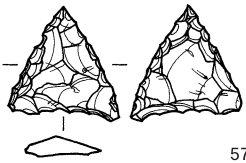
54



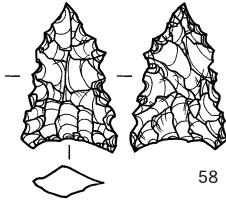
55



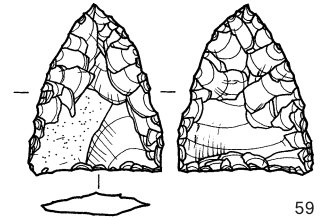
56



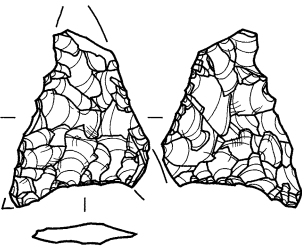
57



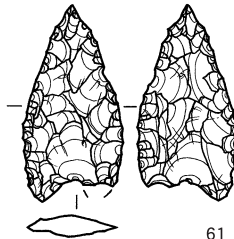
58



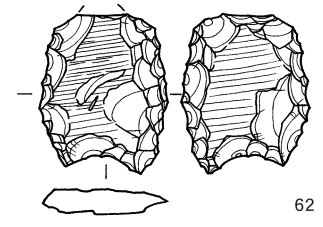
59



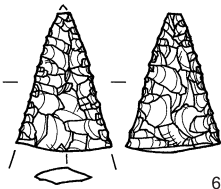
60



61



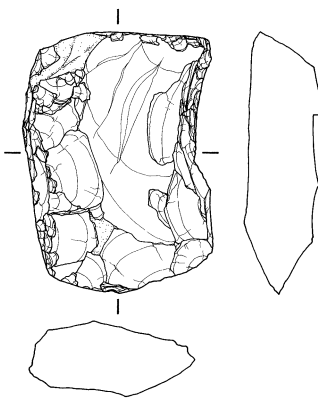
62



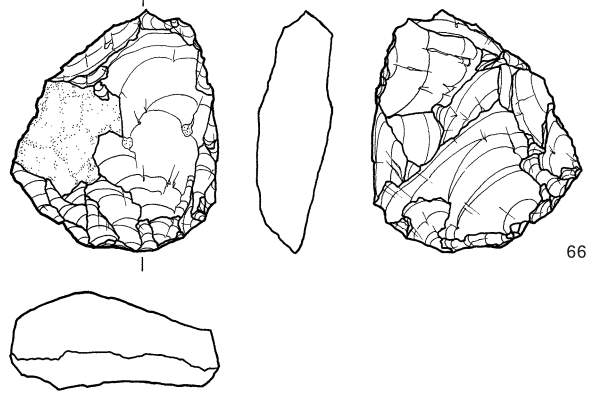
63



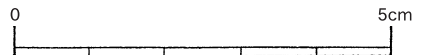
65



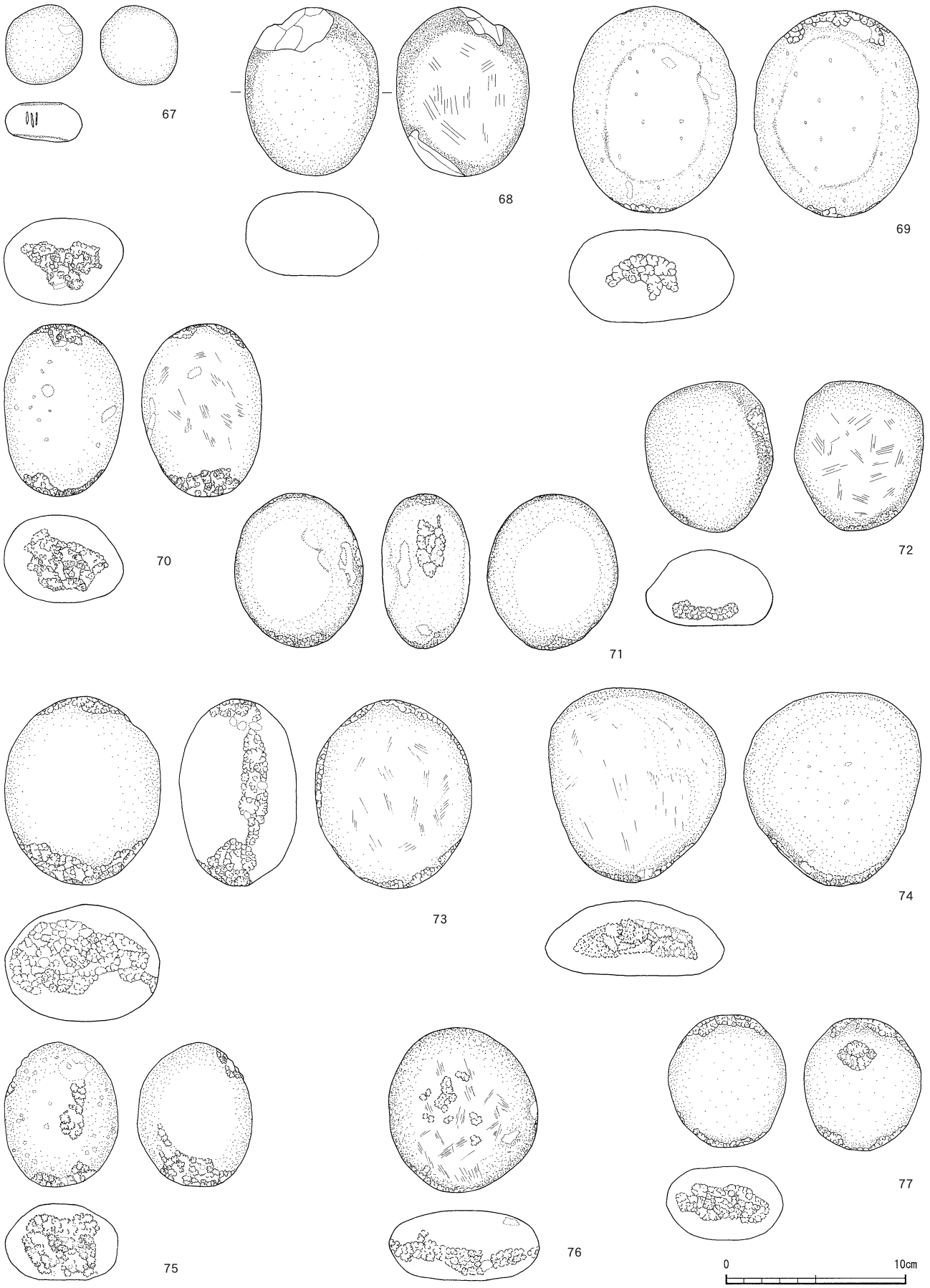
64



66



第28図 石縊遺跡縄文時代石器2



第29図 石縊遺跡縄文時代石器 3

第6表 石縊遺跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	分類	区	層	遺構	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考
27	39	磨製石鏃		D-25	IVb		粘板岩	1.7	1.9	0.2	0.62	1250	
	40	打製石鏃		D-25	IVa		チャート1類	1.6	1.5	0.4	0.56	1203	
	41	打製石鏃		G-26	IVb		黒曜石2類	1.9	1.5	0.3	0.65	5052	
	42	打製石鏃		E-28	IVb		水晶	2.1	1.8	0.4	1.07	1615	
	43	打製石鏃		F-29	IVb		安山岩2類	2.3	1.9	0.3	1.11	1559	
	44	打製石鏃		E-26	IVb		安山岩2類	2.1	1.7	0.4	1.3	1217	
	45	打製石鏃		G-24	IVb	集石2	玉髓2類	2.3	1.4	0.5	1.02	-	
	46	打製石鏃		E-29	IVa		安山岩1類	2.3	1.6	0.5	1.1	1366	
	47	打製石鏃		E-25	IVa		頁岩1類	2.6	1.7	0.4	1.04	1183	
	48	打製石鏃		E-26	IVa		頁岩1類	2.5	1.4	0.3	0.62	1159	
	49	打製石鏃		D-25	IVa		安山岩1類	2.9	1.5	0.5	1.68	1075	
	50	打製石鏃		F-26	IVa		安山岩1類	2.9	1.9	0.5	2.06	1162	
	51	打製石鏃		F-26	IVa		安山岩1類	2.5	1.5	0.4	1.4	1163	
	52	打製石鏃		D-25	IVa		安山岩1類	2.3	1.7	0.3	1.06	1206	
28	53	打製石鏃		F-26	IVa		安山岩1類	2.9	1.4	0.5	1.42	1164	
	54	打製石鏃		F-26	IVb		ホルンフェルス1類	2.9	1.6	0.4	1.63	5415	
	55	打製石鏃		H-26	IVa		黒曜石2類	3.2	1.9	0.4	1.54	5417	
	56	打製石鏃		E-26	IVa		安山岩1類	1.9	1.4	0.4	0.74	1175	
	57	打製石鏃		D-25	IVa		安山岩1類	1.5	1.4	0.2	0.43	1069	
	58	打製石鏃		10T	IV		チャート1類	1.9	1.2	0.4	0.77	-	
	59	打製石鏃		G-26	IVb		チャート2類	2.2	1.7	0.3	1.19	5051	
	60	打製石鏃		E-29	IVc		黒曜石1類	2.1	1.7	0.3	1.67	1634	一部研磨
	61	打製石鏃		F-29	IVb		玉髓1類	2.6	1.4	0.3	0.94	1560	
	62	打製石鏃		F-24	IVb		頁岩1類	2.3	1.8	0.3	0.89	5398	未製品
	63	打製石鏃		D-26	IVa		玉髓2類	1.8	1.2	0.2	0.46	1247	
	64	打製石斧		C-25	IVb		ホルンフェルス2類	9.5	6.8	2.7	240.23	5281	
	65	スクレイパー		E-26	IVa		黒曜石1類	3.5	2.7	1.1	8.6	1142	
	66	スクレイパー		E-26	IVa		黒曜石1類	3.2	2.8	1.3	9.02	1094	
29	67	磨石・蔽石	1	G-25	IVb		安山岩	4.4	4.3	2.2	55	5054	
	68	磨石・蔽石	1	-	-	集石7	安山岩	9.4	7.3	4.7	490	集石7-24	
	69	磨石・蔽石	2	E-29	IVa		安山岩	11.4	9.1	5.2	730	1770	
	70	磨石・蔽石	2	D-25	IVa		安山岩	9.6	6.6	4.8	460	1072	
	71	磨石・蔽石	2	H-25	IVb		安山岩	8.5	7.2	4.9	430	5311	
	72	磨石・蔽石	2	-	-	集石6	安山岩	8.3	7.1	4.2	330	集石6-6	
	73	磨石・蔽石	2	E-24	IVa		安山岩	10.4	8.6	6.5	795	1026	
	74	磨石・蔽石	2	-	-	集石7	安山岩	10.8	9.8	4.1	550	集石7-13	
	75	磨石・蔽石	2	E-28	IVb		安山岩	8.0	6.3	4.2	260	1500	
	76	磨石・蔽石	2	G-24	IVb		安山岩	9.1	8.2	3.9	410	5177	
	77	磨石・蔽石	3	G-24	IVb		安山岩	7.3	6.5	4.1	280	5146	

第2節 弥生時代の調査と成果

1 調査の概要

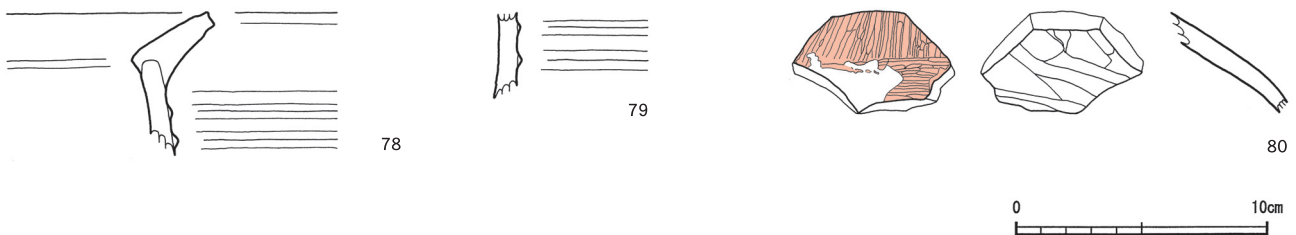
弥生時代の包含層はII b～d層である。石縊遺跡は現代の削平によりその多くは削られていた。本調査はIV層、縄文時代早期のみの調査であり、遺構は検出されていない。確認調査などで少量ではあるが弥生時代の遺物が出土している。

2 調査の成果〈遺物〉(第30図：78～80)

弥生時代の遺物は多くが山ノ口式土器の破片であるが、須玖式土器と思われる土器片も1点出土している。

それらの中から3点を図化した。78, 79は甕形土器である。78は「く」の字状に外反する口縁部片で、内面の屈曲部分は少し突き出る。胴部外面には貼り付け突帯が2条残っている。貼り付けられている位置がやや高く、山ノ口式の中では新しい段階の特徴を持つ。79は胴部片で外面に2条の貼り付け突帯が残っている。

80は壺形土器である。一部の破片であるが肩部の破片と考えられる。外面は赤色顔料が塗られており、縦位と横位のミガキが施されている。



第30図 石縊遺跡弥生時代土器

第7表 石縊遺跡弥生時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	色調		器面調整		胎土					焼成	取上番号	備考	
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石				その他
30	78	12T		甕	口縁部	橙	橙	ナデ	ナデ	○		○			岩片	良	一括	
	79	12T		甕	胴部	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○		○			岩片	良	一括	
	80	D-26	II e	壺	胴部	浅黄	黄灰	ミガキ	ナデ	○	○				岩片	良	1215	外面丹塗り

第5章 十三塚遺跡の調査と成果

第1節 縄文時代の調査と成果

1 調査の概要

本遺跡は、平成19年度に15箇所に確認トレンチを設定し、確認調査を行った。調査は重機で表土を除去し、その後人力による掘削を行った。その結果、4つのトレンチより、Ⅱ層から弥生時代中期の土器が、Ⅳ層からは縄文時代早期の土器が出土した。

十三塚遺跡の本調査は、石縊遺跡と同じく、東九州自動車道建設予定地のセンター杭STA2+80とSTA3を基準に両遺跡をはさむように設定した。十三塚遺跡は、E～W、1～20区を調査区域とした。

調査の結果、Ⅲ層～Ⅳ層より縄文時代早期、後～晩期の土器、Ⅱ層より弥生時代中期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑等の遺構を検出し、土器、石器、鉄製品等が出土した。また、Ⅱ層上面より中世以降と考えられる道跡を検出した。また、Ⅲ層（アカホヤ火山灰層）より下位の層については確認トレンチによる調査をふまえ、遺物包含層が広がる部分の全面調査を行った。

2 調査の成果

(1) 遺物の分類

十三塚遺跡では縄文時代の遺構は検出されていない。縄文時代の土器は早期中葉、中期末～後期さらに晩期の土器が出土している。出土量は石縊遺跡と同様に少ないが、特に中期末から後期にかけて良好な資料が出土している。以下は十三塚遺跡で出土した縄文土器の分類である。

縄文土器の分類

I類土器

器形 口縁部が緩やかに外反し平底を呈する。

文様 口唇部に貝殻による刺突文が施されている。口縁部には羽状の貝殻刺突文が施されていると考えられる。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されるが、底部付近は無文に近い状態である。

器面調整 外面はナデ調整が行われている。底部は丁寧なナデが行われている。内面はナデ調整が行われている。

土器型式 石坂式土器

II類土器

器形 波状口縁の口縁部が若干外反し平底を呈する。

文様 胴部上半に棒状の施文具により凹線文が施されている。

器面調整 内外面共に貝殻条痕調整後に粗いナデ調整

土器型式 岩崎上層式土器・宮之迫式土器

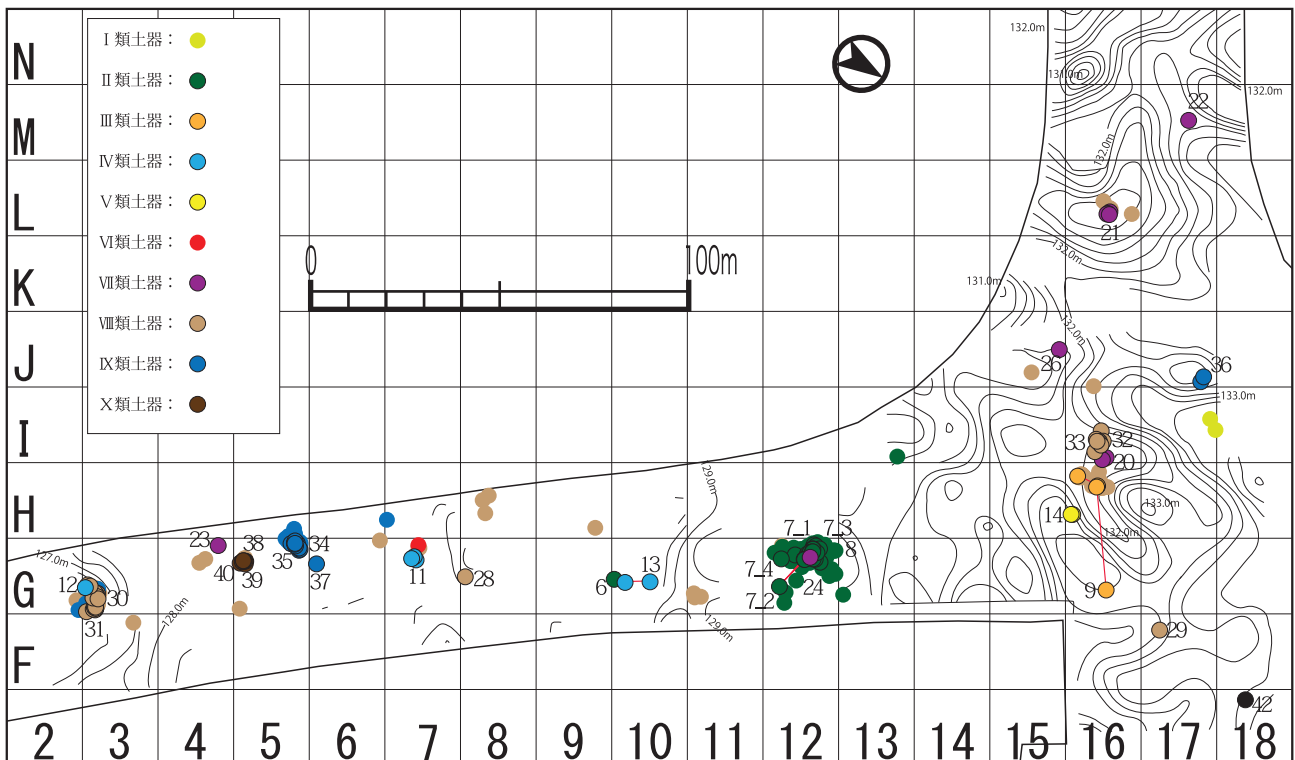
III類土器

器形 波状口縁を呈する口縁部が大きく「く」の字に外反する。

文様 大きく外反した口縁部の内面に刺突文や凹線文が施されている。

器面調整 外面は貝殻条痕調整がナデ調整、内面は丁寧なナデ調整が行われている。

土器型式 松山式土器（市来式土器よりは古い様相）



第31図 十三塚遺跡縄文時代土器出土状況図

IV類土器

器形 深鉢形土器と台付皿形土器が出土している。
 文様 貝殻や棒状工具による刺突文が施されている。
 器面調整 丁寧なナデが行われているが、内面に貝殻条痕の残るものも見られる。
 土器型式 草野式土器（市来式土器の範疇）

V類土器

器形 波状口縁の口縁部が若干外反する。
 文様 口縁部上端に2列の貝殻刺突文が施される。
 器面調整 外面は貝殻条痕後粗いナデ、内面はケズリ
 土器型式 丸尾式土器

VI類土器

器形 小破片のため不明
 文様 棒状施文具や貝殻による刺突文や、横位の沈線文、磨消縄文が施されている。
 器面調整 内外面共にナデ調整が行われている。
 土器型式 西平式土器

VII類土器

器形 口縁部が「く」の字状に若干内湾する。
 文様 口縁部に沈線文が施されている。
 器面調整 内外面共に丁寧なナデが行われている。
 土器型式 三万田式土器

VIII類土器

器形 胴部が屈曲する深鉢形土器が出土している。
 文様 胴部に刺突文や沈線文が施されている。
 器面調整 内外面共にヘラ状工具によるナデ調整。
 土器型式 中岳式土器

IX類土器

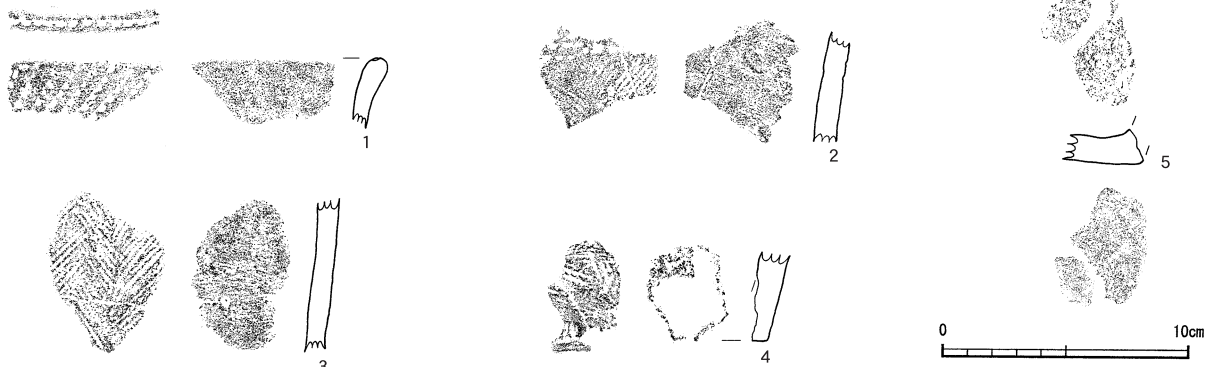
器形 胴部に「く」の字状の屈曲をもつ浅鉢形土器
 文様 無文である。
 器面調整 外面の口縁部のみ貝殻条痕が残る。
 土器型式 入佐式土器

X類土器

器形 底部資料のため不明
 文様 なし。ただし、底部に組織痕が残っている。
 土器型式 晩期該当底部
 (2) 遺物

縄文土器・石器（第32～37図：1～42）

1～5はI類土器であり、同一個体と考えられる。口



第32図 十三塚遺跡縄文時代土器 1

縁部上端に斜位の貝殻刺突文が1列施され、2を見るとその下位には横位の貝殻刺突文が1～2条施されているようである。胴部には貝殻条痕が綾杉状に施されている。

6～8はII類土器であり、6は口縁部上端に上から貝殻刺突文、2条の凹線文、貝殻刺突文の順に文様が施されている。7・8は同一個体と考えられ、まず細かな条痕の残る工具で器面調整が行われた後でナデ調整が行われており、その上から先端の丸い直径5mm程の棒状工具で凹線文が施されている。胴部下半は無文である。底部は円盤状の底部パーツを胴部パーツに接合する方法がとられており、内面には2つのパーツを接合した時の指押さえの後が明確に残っている。また底部外面には網代痕が残っている。

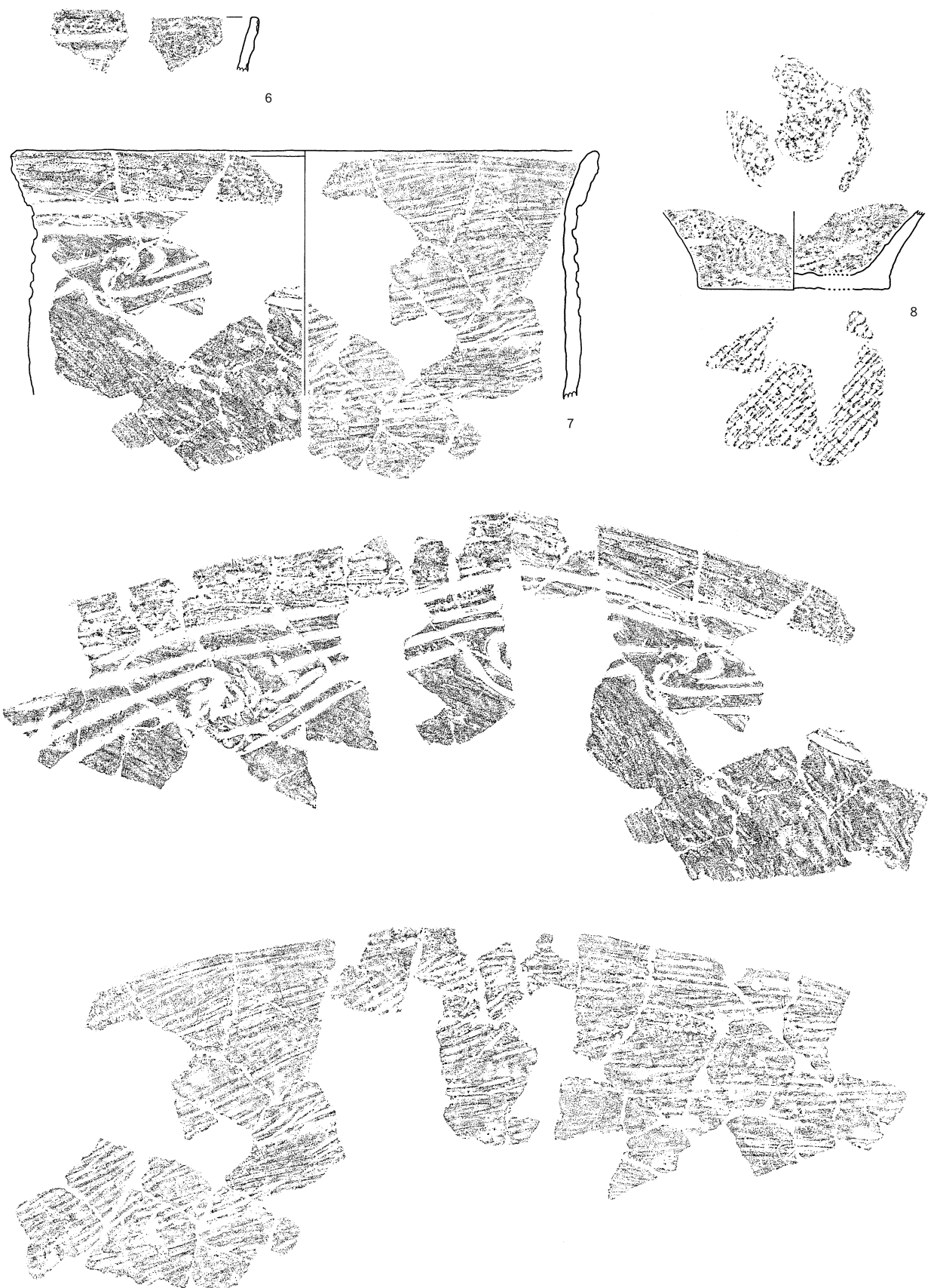
9・10はIII類土器である。9は口縁部の内面波頂部に抽象化した太陽の様な文様が刺突により施され、その両側に2条の凹線文が施されており、さらにそれらの周りに貝殻刺突文が施されている。10は口縁部に2条の沈線文が施されており、その上から縦位の貝殻刺突文が施されている。

11～13はIV類土器である。11は口唇部に二股に分かれた突起状のパーツが施されており、先端の尖った工具で刺突文が施されている。これと同じような突起は外面口縁部上端にも施されている。13は台付皿形土器であり、口唇部に先端が三角形に尖った施文具で刺突文が施されている。

14はV類土器である。口縁部上端に2列の縦位貝殻刺突文が粗く施されており、胴部は貝殻条痕後粗いナデ調整が行われている。内面は粗いケズリが行われている。

15～18はVI類土器である。磨消縄文の上から棒状工具による沈線文や刺突文が施されている。18は胴部に斜位方向の文様が施されており、これは貝殻ではなく先端の細い棒状工具で刻むように施された文様である。

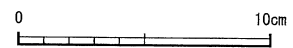
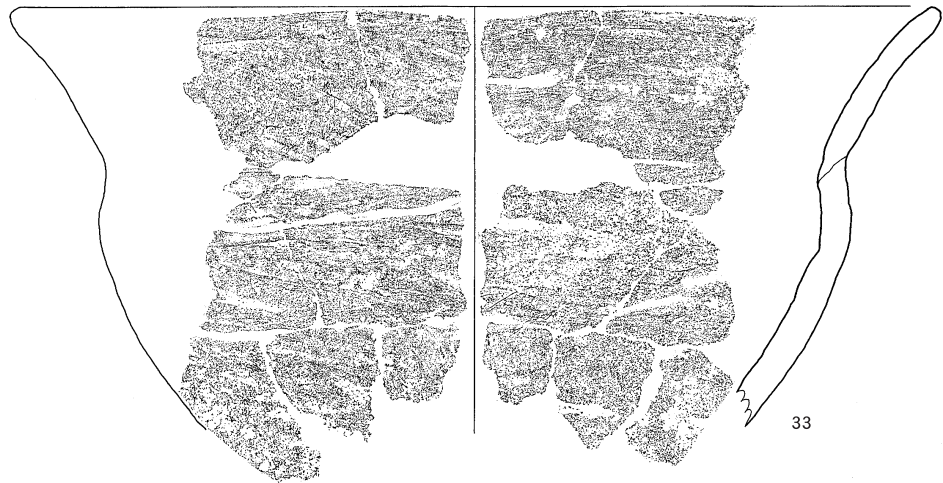
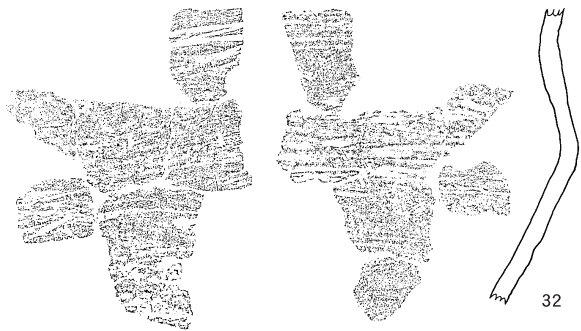
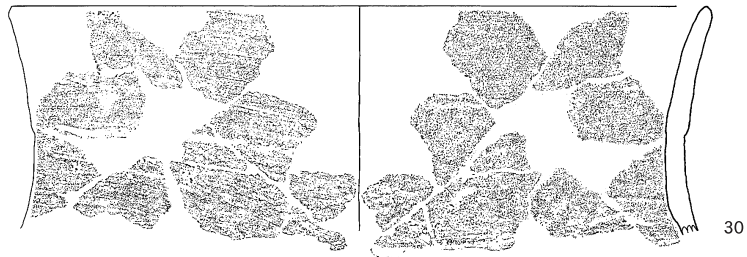
19～27はVII類土器である。全て口縁部及び胴部上半までの資料となっている。28～33はVIII類土器である。34～37はIX類土器である。38～41は圧痕の残る底部資料でありX類土器とした。縄文晩期に該当すると考えられる。42はIV層出土の縄文時代早期の安山岩製のスクレイパーである。剥片の右側面から下辺にかけて調整が加えられている。



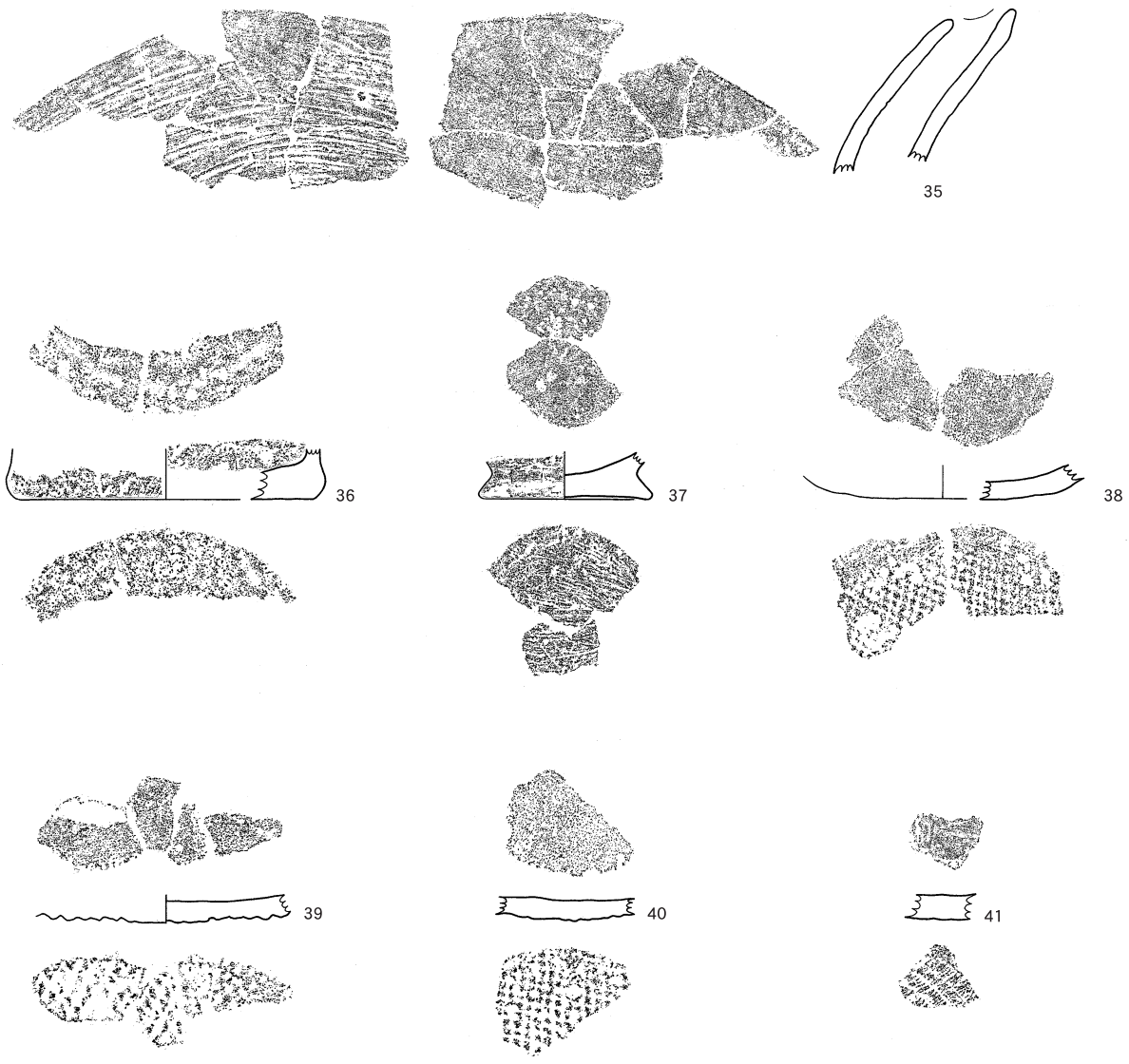
第33圖 十三塚遺跡縄文時代土器 2



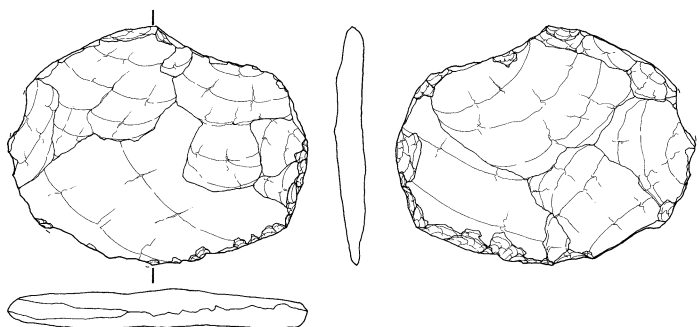
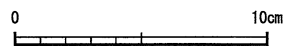
第34図 十三塚遺跡縄文時代土器 3



第35図 十三塚遺跡縄文時代土器 4



第36図 十三塚遺跡縄文時代土器 5



第37図 十三塚遺跡縄文時代石器



第8表 十三塚遺跡縄文時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	出土層位	分類	部位	文様	器面調整		胎土				色調		焼成	標高	取上番号	備考	
							外面	内面	石英	長石	黒色鉱物	その他	外面	内面					
32	1	I-17	IVb	I類	口縁部	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	橙	にぶい黄橙	良	不明	一括		
	2	I-17	IVb		胴部	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	橙	にぶい褐色	良	不明	一括	文様：貝殻条痕	
	3	I-17	IVb		胴部	貝殻条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	赤色鉱物	橙	暗褐色	良	不明	一括	胎土：白色小礫	
	4	I-17	IVb		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい黄橙	橙	良	不明	一括	胎土：割と大きめの礫が混ざる	
	5	I-17	IVb		底部	貝殻条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	橙	褐色	良	不明	一括	胎土：割と大きめの礫が混ざる	
33	6	22T	II	II類	口縁部	貝殻刺突文・凹線文	ナデ	工具ナデ	○	○	○	金雲母	灰黄褐色	灰黄褐色	良	128.815	7615	胎土：白色小礫	
	7	20T	II		口縁~胴部	凹線文	貝条→ナデ	貝条→ナデ	○	○	○	赤色鉱物	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	129.905	524など	出土区：G-12 胎土：白色小礫	
	8	20T	II		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	赤色鉱物	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	130.025	530など	出土区：G-12 網代底	
34	9	G-16	IIe	III類	口縁部	貝殻刺突文 棒状工具刺突文	貝条→ナデ	貝条→ナデ	△	○	○	金雲母	にぶい褐色	にぶい褐色	良	132.86	5889など	内面文様：凹線文 胎土：白色小礫	
	10	-	I		口縁部	貝殻刺突文・沈線文	ナデ	ナデ	○	○	◎		暗赤褐色	黒褐色	良	不明	一括	胎土：黒色鉱物が多量に混ざる	
	11	G-7	II d	IV類	口縁部	貝殻刺突文	ナデ	工具ナデ	○	○	○	金雲母	明赤褐色	明赤褐色	良	130.275	11773など	文様：棒状工具刺突文	
	12	G-3	II d		口縁部	貝殻刺突文	ナデ	貝条→ナデ	○	○	○	金雲母	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	128.84	12822	胎土：白色小礫	
	13	22T	II		口縁部	棒状工具刺突文	ナデ	工具ナデ	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい褐色	良	128.825	720など	出土区：G-10 ※種子痕あり？	
	14	H-16	IIe	V類	口縁部	貝殻刺突文	貝条→ナデ	ケズリ		○		金雲母	赤褐色	暗褐色	良	132.53	5855など		
	15	-	表土	VI類	胴部	棒状工具刺突文	ナデ	工具ナデ	○	○	○		暗褐色	にぶい黄褐	良	不明	一括	文様：沈線文	
	16	-	表土		胴部	棒状工具刺突文	ナデ	ナデ	○	○	△		黒褐色	黒褐色	良	不明	一括	文様：沈線文 胎土：黒色鉱物少	
	17	-	表土		胴部	棒状工具刺突文	ナデ	ナデ		○	○	白色小礫	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良	不明	一括	文様：沈線文	
	18	-	表土		胴部	貝殻刺突文	ナデ	工具ナデ	○	○	○	白色小礫	明黄褐色	明褐色	良	不明	一括	胎土：紫色の特徴的な鉱物あり	
	19	J-15	表土	VII類	口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	橙	橙	良	不明	一括	19~26までは同じような胎土	
	20	I-16	II		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	褐色	明褐色	良	132.106	1665など		
	21	L-16	II		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい褐色	にぶい黄橙	良	131.585	3463など		
	22	M-17	II b		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良	132.66	8326		
	23	G-4	II d		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい褐色	良	129.77	12825		
	24	20T	II		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	130.06	545		
	25	-	表土		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		灰黄褐色	にぶい褐色	良	不明	一括		
	26	J-15	II c		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		灰黄褐色	にぶい黄褐	良	132.021	2067		
	27	I-14	表土		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		明赤褐色	褐色	良	不明	一括	※胎土・色調など特徴的である	
	28	G-8	II d		胴部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	130.565	11813		
	29	F-17	II	胴部	棒状工具刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	赤色鉱物	灰黄褐色	黒褐色	良	132.905	5471	胎土：金雲母		
	35	30	G-3	II c	VIII類	口縁部	なし	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		明黄褐色	にぶい黄橙	良	129.105	12001など	
		31	G-3	II c		肩部	なし	工具ナデ	工具ナデ	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	129.125	12122など	
		32	I-16	II		口縁部	沈線文	ナデ	ナデ		○	○	赤色鉱物	にぶい褐色	褐色	良	132.418	1374など	胎土：金雲母・白色小礫
		33	I-16	II		口縁部	沈線文	ナデ	ナデ	○	◎	○	赤色鉱物	灰褐色	にぶい褐色	良	132.758	1343など	胎土：金雲母・白色小礫・長石多
	36	34	G-5	II d	IX類	口縁部	なし	粗い工具ナデ	ナデ	○	○	○	金雲母	黒褐色	褐色	良	129.655	12983など	
		35	G-5	II d		口縁部	なし	粗い工具ナデ	ナデ	○	○	○	金雲母	黒褐色	暗褐色	良	129.735	12969など	
		36	J-17	II		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	金雲母	にぶい黄褐	明赤褐色	良	133.126	1420など	胎土：様々な小礫が多量に混ざる
		37	G-6	II d		底部	なし	工具ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい黄褐	良	130.206	11893	
36	38	G-5	II d	X類	底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい褐色	灰褐色	良	129.75	12906など	組織痕土器	
	39	G-5	II d		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい黄褐	灰黄褐色	良	129.795	12850など	組織痕土器	
	40	G-5	II d		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい黄褐	灰黄褐色	良	129.71	12950	組織痕土器	
	41	I-13	表土		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	不明	一括	組織痕土器	

第9表 十三塚遺跡縄文時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考
37	42	スクレイパー	F-18	IVb	安山岩	9.6	12.1	1.7	154.91	6210	縄文時代早期

第2節 弥生時代の調査と成果

1 調査の概要

十三塚遺跡発掘調査のメインとなるのが弥生時代中期の調査であった。第3章の第2節で記述したが、Ⅱ層は全体的に黒褐色を呈する土層であり、弥生時代から縄文時代中期・後期までの遺物包含層としている。それを6つに分層した。そのうちⅡb層とⅡd層の、いわゆる遺物包含層から多くの遺物が出土している。この2つの層は時間差の表れとして把握できるものと考えた。しかし、実際は、混在して出土しているものもあることから、本報告書での記載は、Ⅱb層を弥生時代中期該当層、Ⅱd層を縄文時代中期・後期の遺物包含層とするが、出土土

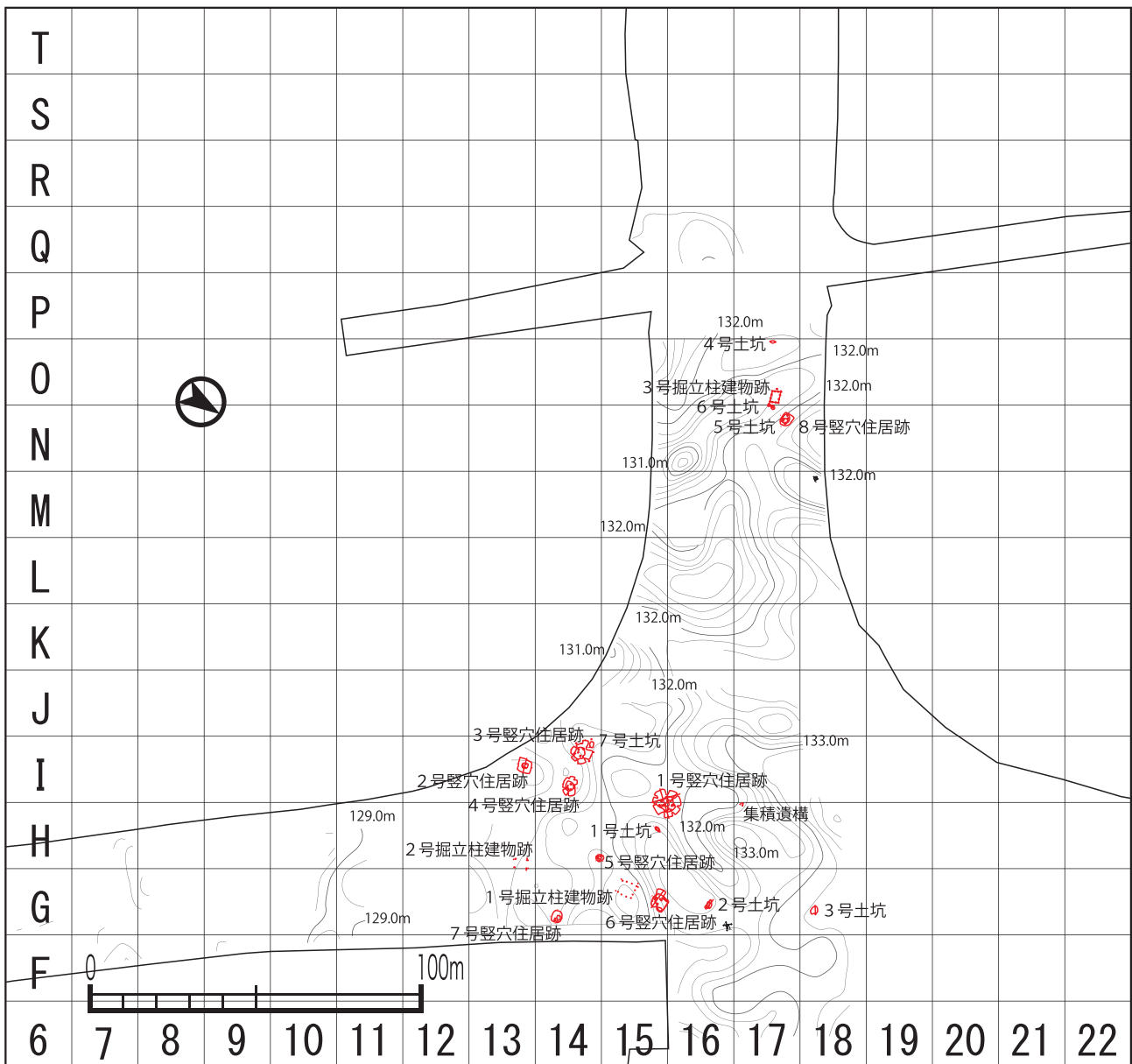
器については層位ごとではなく、従来の土器編年を基準としながら、土器型式ごととすることにした。

石器については、どの土器型式に伴うものかが不確定であることから、層位ごとの記載とした。土器は型式ごと、石器は層位ごとと、遺物によって記載が異なることになるが、遺物観察表を参照していただきたい。

2 調査の成果

(1) 遺構 (第38～92図)

弥生時代中期の遺構としては、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡3棟、土坑7基であった。これらは山ノ口式土器など、中期とされる土器段階のものとする。



第38図 十三塚遺跡弥生時代中期遺構配置図

ア 竪穴住居跡（第39～75図）

竪穴住居跡は8軒検出された。これらは全てが単独に検出されている。

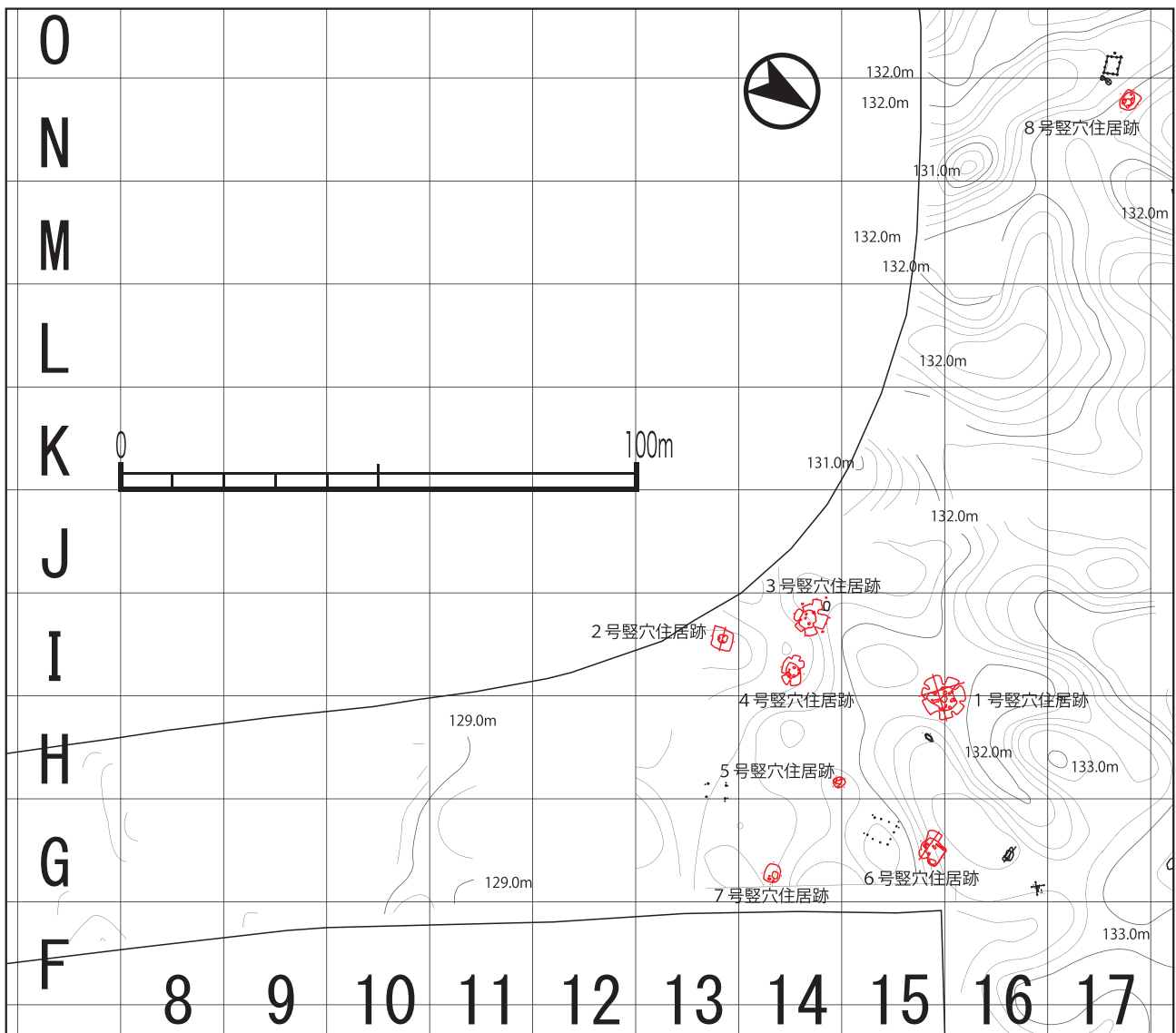
形状 検出面の形状は隅丸方形と思われるものが半数の4軒と最も多く、次に花卉形、隅丸方形に張り出しをもつものとなっている。建物内部の構造は、ベッド状になっているものが4軒あった。これは花卉形および張り出しを持つ住居跡に見られている。ピットについては1号住居跡が19基と最も多く、2～8号住居跡については明確な深いピットが2基、浅いピットが2基ずつ、計4基ずつ検出されている。

規模 検出面積が最大のものが63.85㎡、最小のものが3.99㎡、平均値が23.53㎡であった。30㎡以下の遺構が6基と、全体の75%を占める。最大値を示すのは1号住居跡であり、2位の3号住居跡の39.35㎡を大きく離している。これは他の住居跡よりかなり広いことから、大型の部類として捉えておきたい。

検出状況 前述の通り、8基全てが単独に検出されている。検出面は、Ⅱd層、またはⅡf層上面であった。

調査区内は、ゴボウのトレンチャーでかなり掘削を受けており、検出は困難を極めた。その中で、Ⅱd層あたりからはトレンチャーの影響も少なくなり、埋土の違いから検出できたものもある。また、池田降下軽石が広がるⅡf層上面で池田降下軽石がない部分からプランを検出できた場合もあった。

分布 竪穴住居跡の分布を見ると、N-17区に1軒、G～I-13～16区に7軒と、G～I区に集中していることが分かる。H・I-15・16区の1号大形住居跡を取り囲んでいるようにも見える。N-17区の8号住居においては、1号～7号住居とは100mほど離れており、隣接して掘立柱建物跡や大量の土器、土製勾玉等も出土していることから、別の集落が存在していたのではという考え方も考慮しておきたい。



第39図 十三塚遺跡弥生時代中期竪穴住居跡配置図

1号竪穴住居跡(第40~46図)

検出状況 H・I-15・16区にかけて検出された。検出面はⅡd層の茶褐色土であった。その茶褐色土の中にⅡ層上面にあると思われる黒褐色土が土坑のようなプランとして微かに見えたことから遺構と判断し、中央部と思われる部分にミニトレンチを入れ床面を検出し、その後床面から壁を検出していく方法を用いて調査を行った。

形状と規模 基本となる平面プランは円形に張り出しを7箇所持つ花弁形である。長軸は7.2m、短軸は6.1mを測る。検出面からの深さは、浅い部分で、約4~6cm、中央部の掘り込み面と思われる部分で約78~80cmであった。浅い部分に関しては、検出面がかなり低かったことによるものと考えられる。検出面から埋土を掘り下げていくと、硬く締まった貼り床と思われる部分を確認できた。これは当時使用していた床面であろうと判断した。

この住居跡からは、19基のピットが検出された。これらのピットのほとんどは、住居内の円形部分に沿うように位置していることから、これらのピットはこの住居に伴う柱穴ではないかと考える。

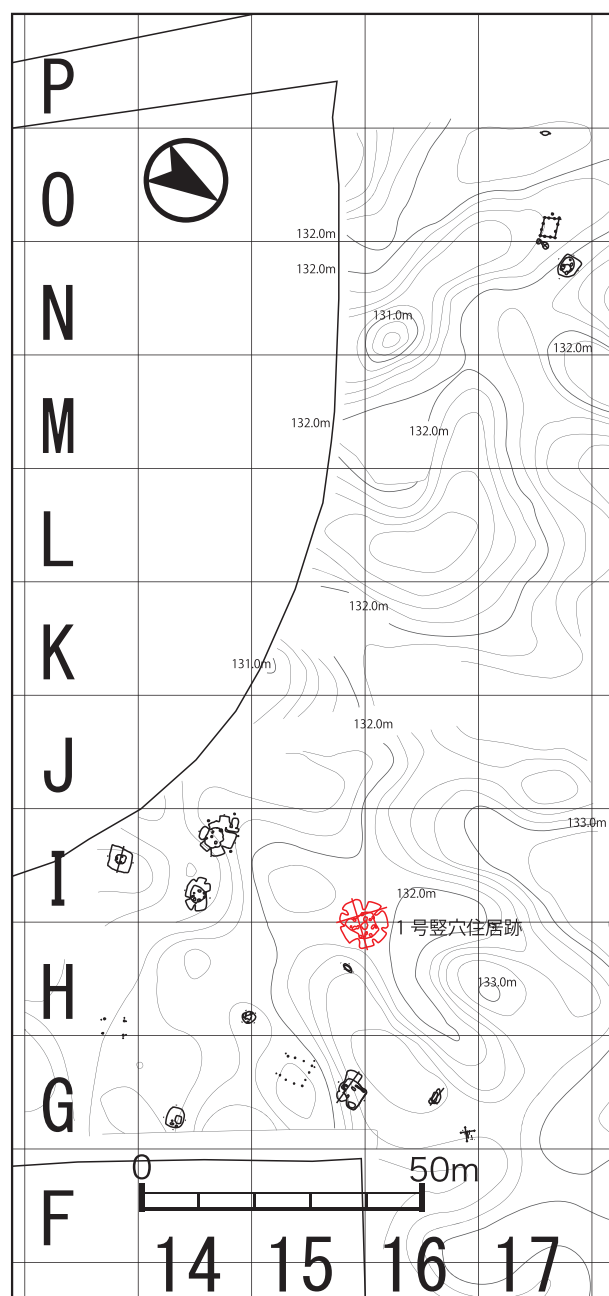
埋土 埋土は茶褐色土層を基本とし、オレンジ色のパミスをごく少量含む。床面と思われる中央部は、4~6cmのアカホヤパミスがブロック状に混ざり、かなり硬質であり、貼床を形成していると思われる。また、下位には黒橙褐色の土も見られた。ピット内の埋土はⅡ層の黒色土であると思われる。かなり柔らかい。

出土遺構・遺物 竪穴住居跡から出土した遺物は103点で、うち12点を図化した。

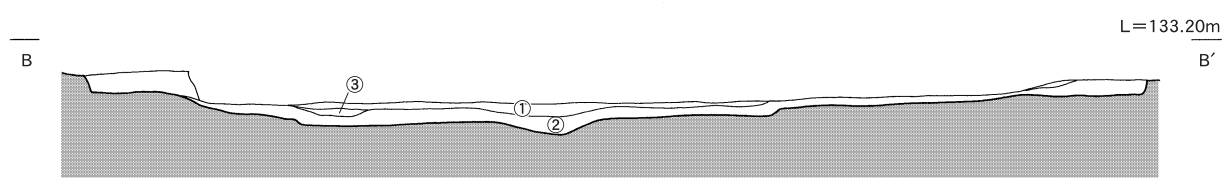
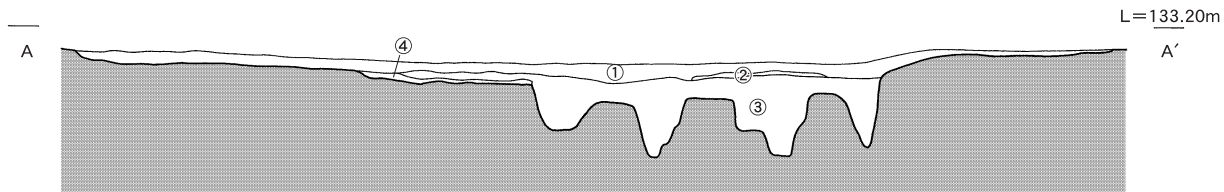
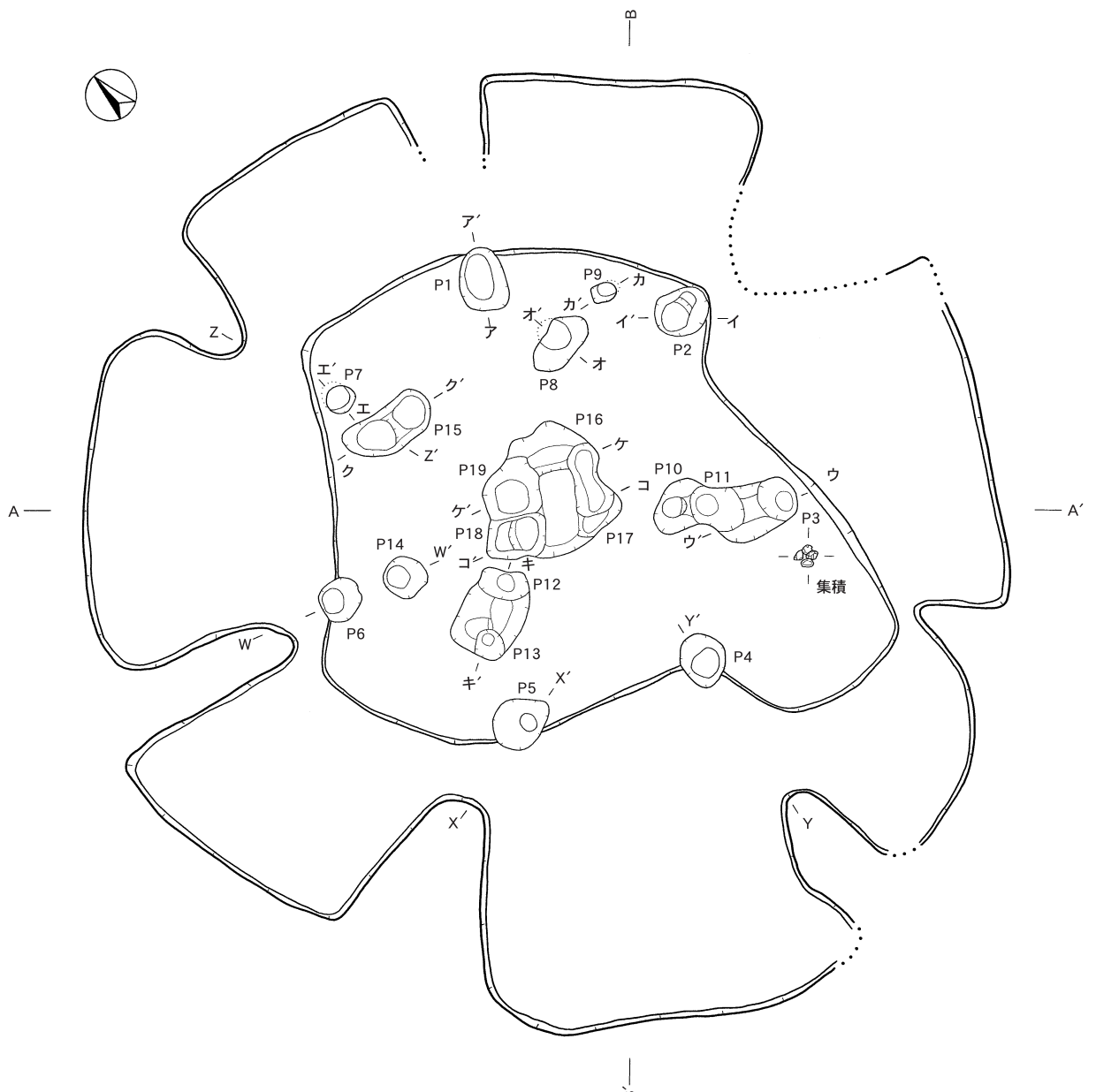
住居内遺構：集積遺構(第44図) 住居内の南東側で検出した。床面より数cm上部で検出された。礫が3個、軽石が1個並べられたような状態で出土した。敲打痕等は確認されず、自然石と思われる。このような出土状況から人為的に置かれたものではないかと考えられる。

遺物(第45・46図：43~54) 住居内の遺物は土器や石器等、多彩である。出土土器は壺、甕、鉢などである。石器は軽石製品、棒状叩具等、そのほか機種は不明であるが、鉄製品も出土している。43は甕形土器の口縁~胴部である。内湾気味の口縁部でくの字状に外反する。一条の断面三角形貼付突帯を巡らす。44は甕形土器の口縁~胴部である。直口気味の口縁部でくの字に外反し、口縁部端面は凹む。肩部には三条の断面三角形貼付突帯を巡らす45は壺形土器の胴部~底部であると思われる。充実した脚台で外方へ直線的に立ち上がる器形になると思われる。46は高杯の口縁部と思われる。口縁は大きく内湾し、口唇部から屈接部にかけて三条の断面三角形貼付突帯を巡らしている。47~49は安山岩を石器の素材とした磨石であるが、側縁に敲打痕も見られ敲石としても利用している。50は打製石鏃である。黒曜石を石器の素材として用いた石鏃である。二等辺三角形を呈しており、

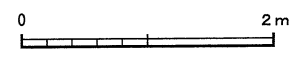
先端部は欠損している。両面ともに交互剥離により調整されている。51は砂粒の砂岩を用いた棒状を呈した叩具である。ほぼ中央部で半分に分れており、先端部分及び片側付近は敲打によるためか、凹凸を認める。基部付近は握手部分を認める。握手部分には研磨を認める。52は安山岩を石器の素材として用いた磨製石斧である。幅広く厚みを有しており、円刃をなす部分に入念な研磨がなされている。一部に敲打痕も残している。53と54は軽石製品である。ともに中央部が凹み、使用痕を認める。また、水晶の原石が2点出土している。3cm程の小さなもので、1点は破碎されている。2点とも表面に煤が付着している。



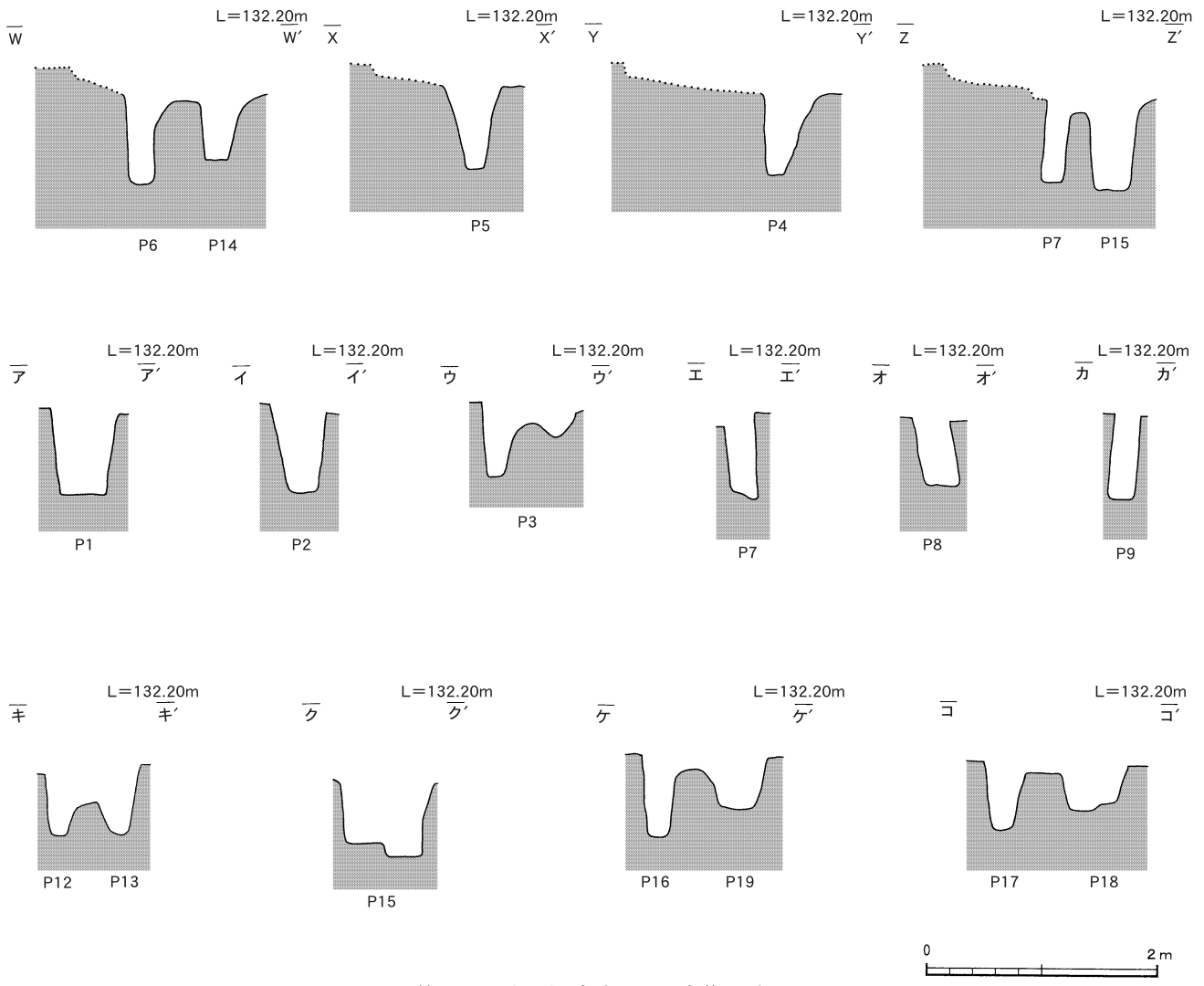
第40図 十三塚遺跡1号竪穴住居跡位置図



- ①茶褐色土 オレンジバミス混土
- ②茶褐色土 オレンジバミス混土硬化面
- ③黒褐色土 アカホヤ
- ④黒褐色土 アカホヤ硬化面



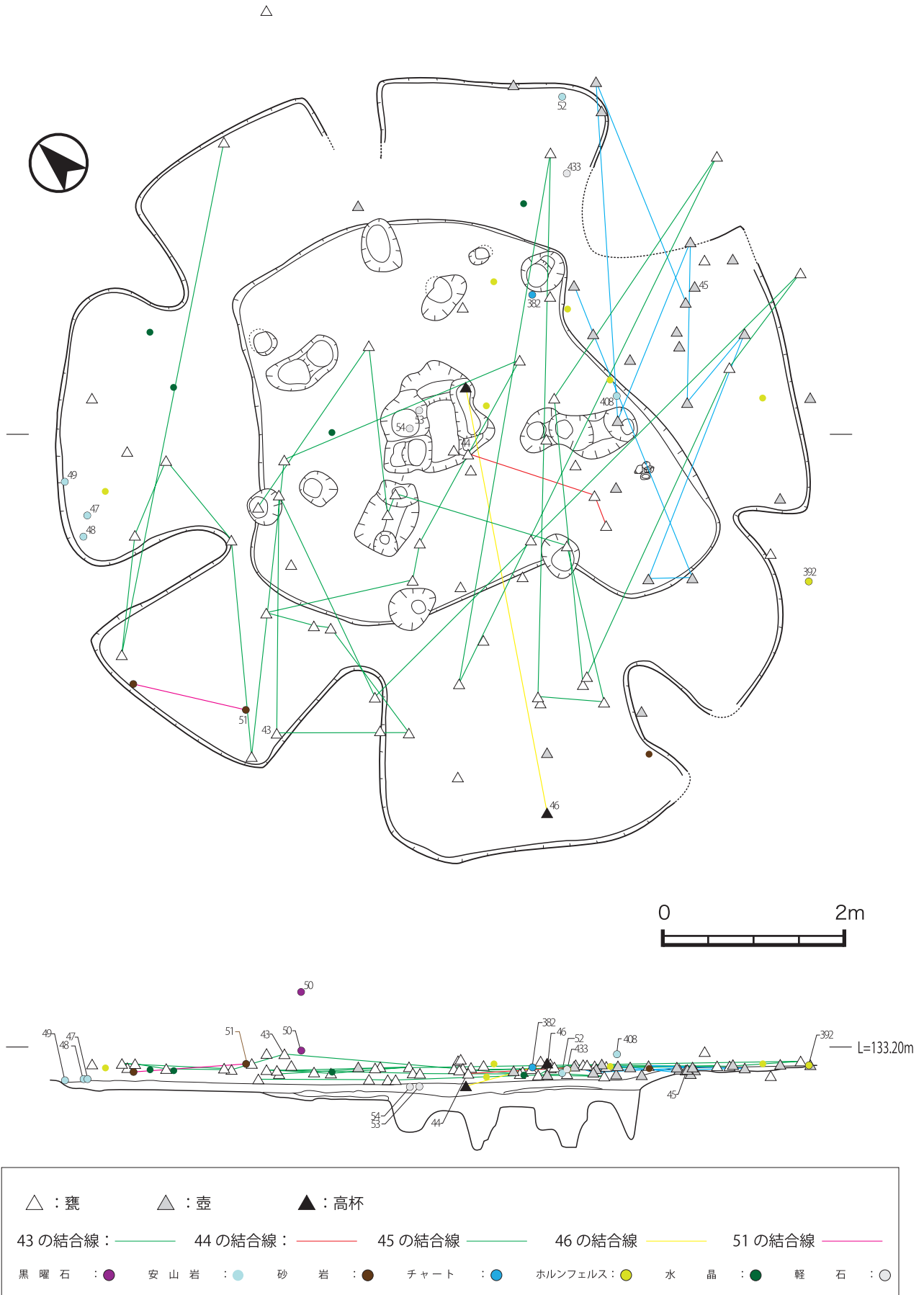
第41図 十三塚遺跡1号竪穴住居跡1



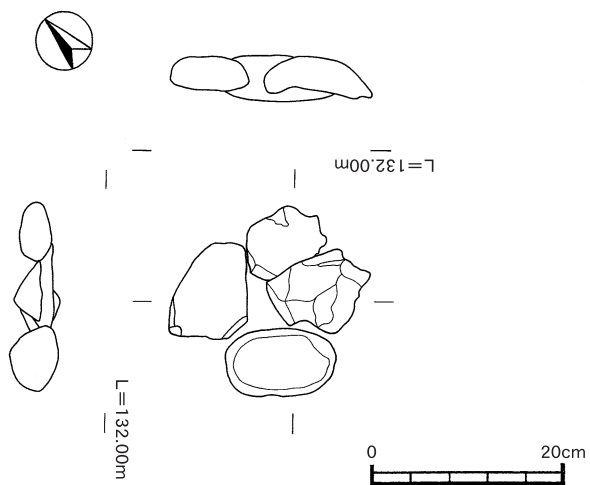
第42図 十三塚遺跡1号竪穴住居跡2

第10表 十三塚遺跡1号竪穴住居跡柱穴計測表

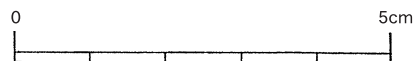
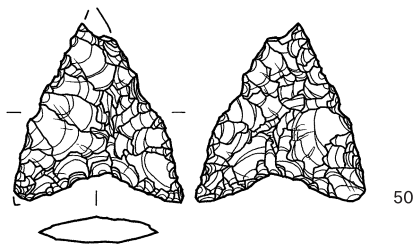
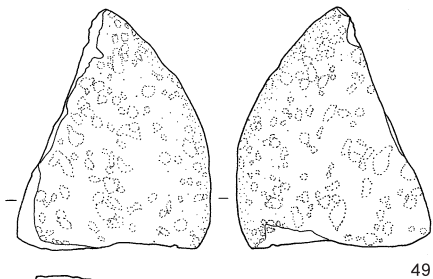
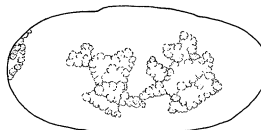
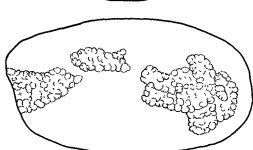
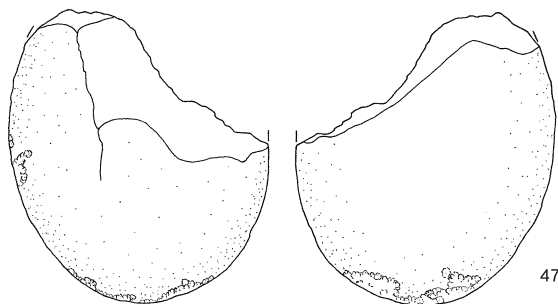
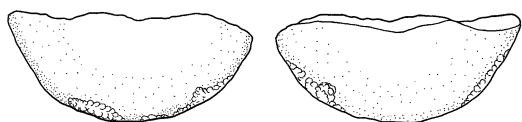
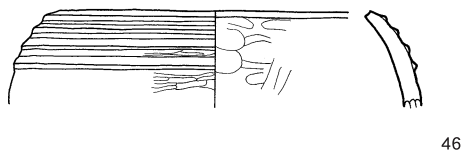
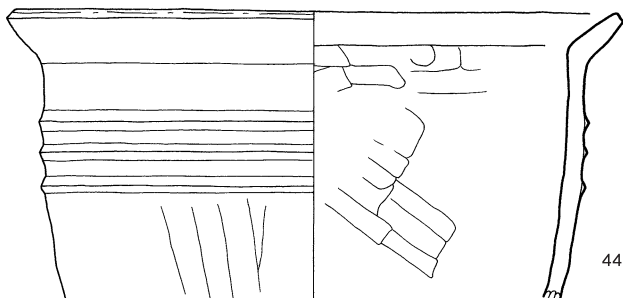
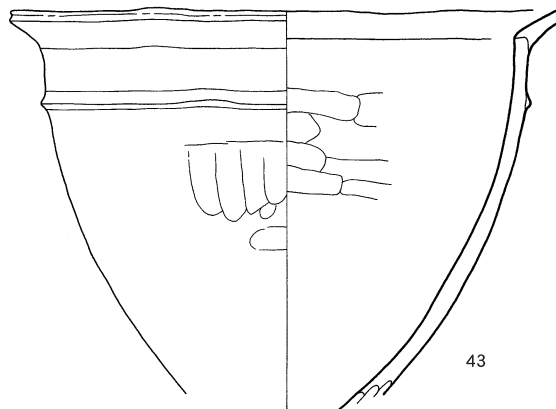
ピットNo.	短軸 (cm)	長軸 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	短軸 (cm)	長軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	40	56	72	P11	-	-	72
P 2	40	50	72	P12	-	-	54
P 3	-	-	64	P13	-	-	60
P 4	42	48	70	P14	18	42	52
P 5	44	56	72	P15	18	84	64
P 6	38	40	76	P16	-	-	70
P 7	24	24	72	P17	-	-	58
P 8	30	60	56	P18	-	-	38
P 9	18	22	72	P19	-	-	44
P10	-	-	54				
主な柱穴間の長さ		(cm)		主な柱穴間の長さ		(cm)	
P 1 ~ P 2		180		P 5 ~ P 6		204	
P 2 ~ P 3		195		P 6 ~ P 7		186	
P 3 ~ P 4		162		P 7 ~ P 1		168	
P 4 ~ P 5		168					



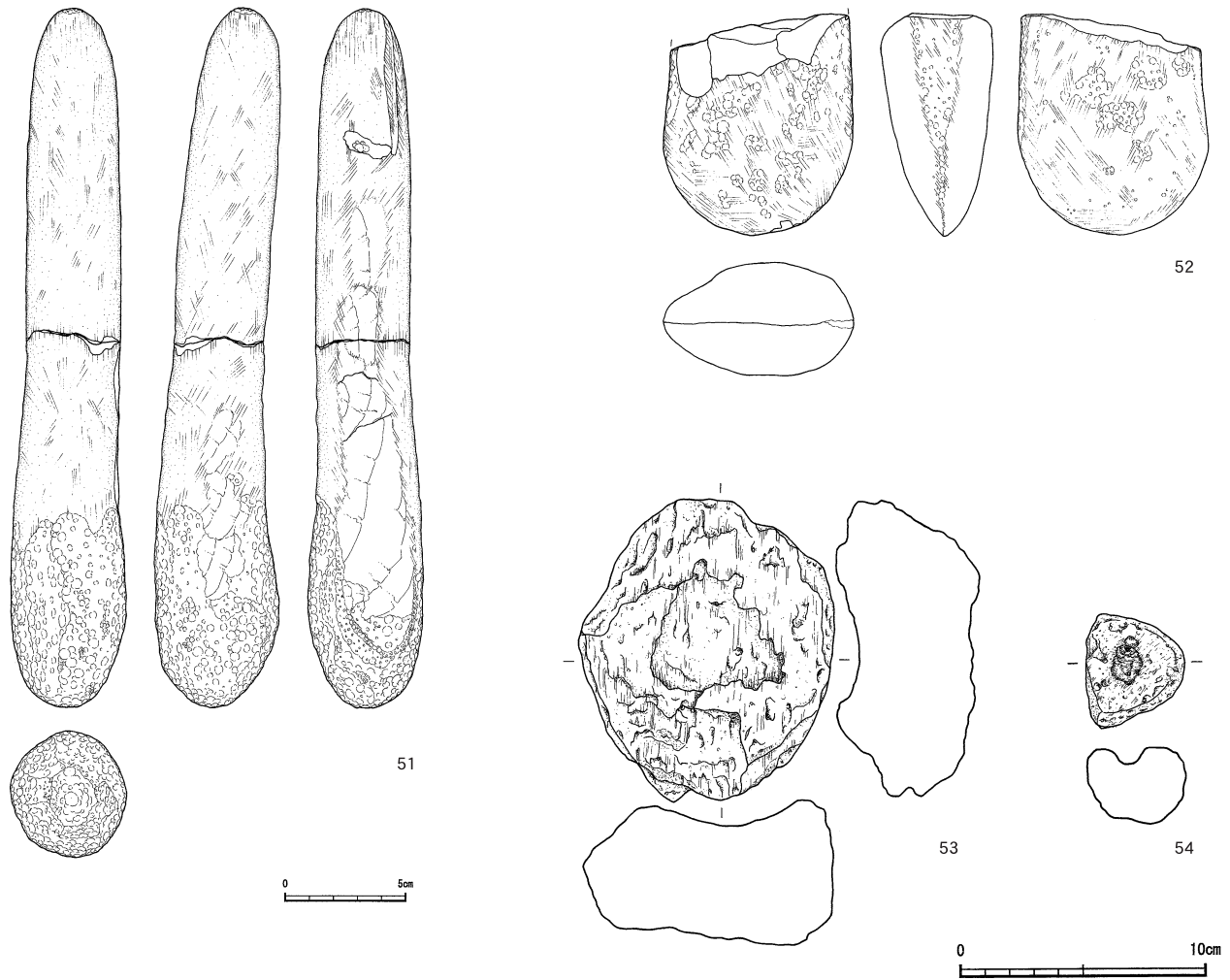
第43図 十三塚遺跡1号竪穴住居跡遺物出土状況図



第44図 十三塚遺跡1号竖穴住居跡住居内集積遺構



第45図 十三塚遺跡1号竖穴住居跡出土遺物1



第46図 十三塚遺跡1号竪穴住居跡出土遺物2

第11表 十三塚遺跡1号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考
			部位	法量 (cm)			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
				口径	底径	器高												
45	43	鉢	口縁～胴部	21.7	—	—	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○	○	○			良	
	44	甕	口縁～胴部	24.5	—	—	明褐	橙	ナデ	ナデ		○	○	○			良	
	45	壺	胴部～底部	—	10.9	—	にぶい褐	褐	ナデ	ナデ		○		○			良	
	46	高坏	口縁部	12.2	—	—	黒	黒	ミガキ	ナデ		○	○	○			良	

第12表 十三塚遺跡1号竪穴住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号
45	47	磨石・敲石	安山岩	11.6	10.3	5.0	820	3612
	48	磨石・敲石	安山岩	9.6	4.4	5.4	260.94	3614
	49	磨石・敲石	安山岩	9.5	7.7	5.4	425	3615
	50	打製石鏃	黒曜石	2.4	2.2	0.4	1.3	3073
46	51	棒状敲具	砂岩	28.9	4.8	5.2	830	1573・1574と接合
	52	磨製石斧	安山岩	9.2	7.9	4.7	410	3618
	53	軽石加工品	軽石	12.3	10.4	5.9	234.56	3606
	54	軽石加工品	軽石	4.0	4.7	3.2	15.32	3607

2号竪穴住居跡（第47～50図）

検出状況 I～13区にかけて検出された。検出面はⅡf層上面の黒褐色黄橙パミス混土であった。この層は、池田降下軽石が薄く堆積しているのだが、検出面はこの軽石が方形に堆積していなかったことから遺構と判断し、1号住居跡と同様にミニトレンチを設定して掘り下げていく方法を用いて調査を行った。

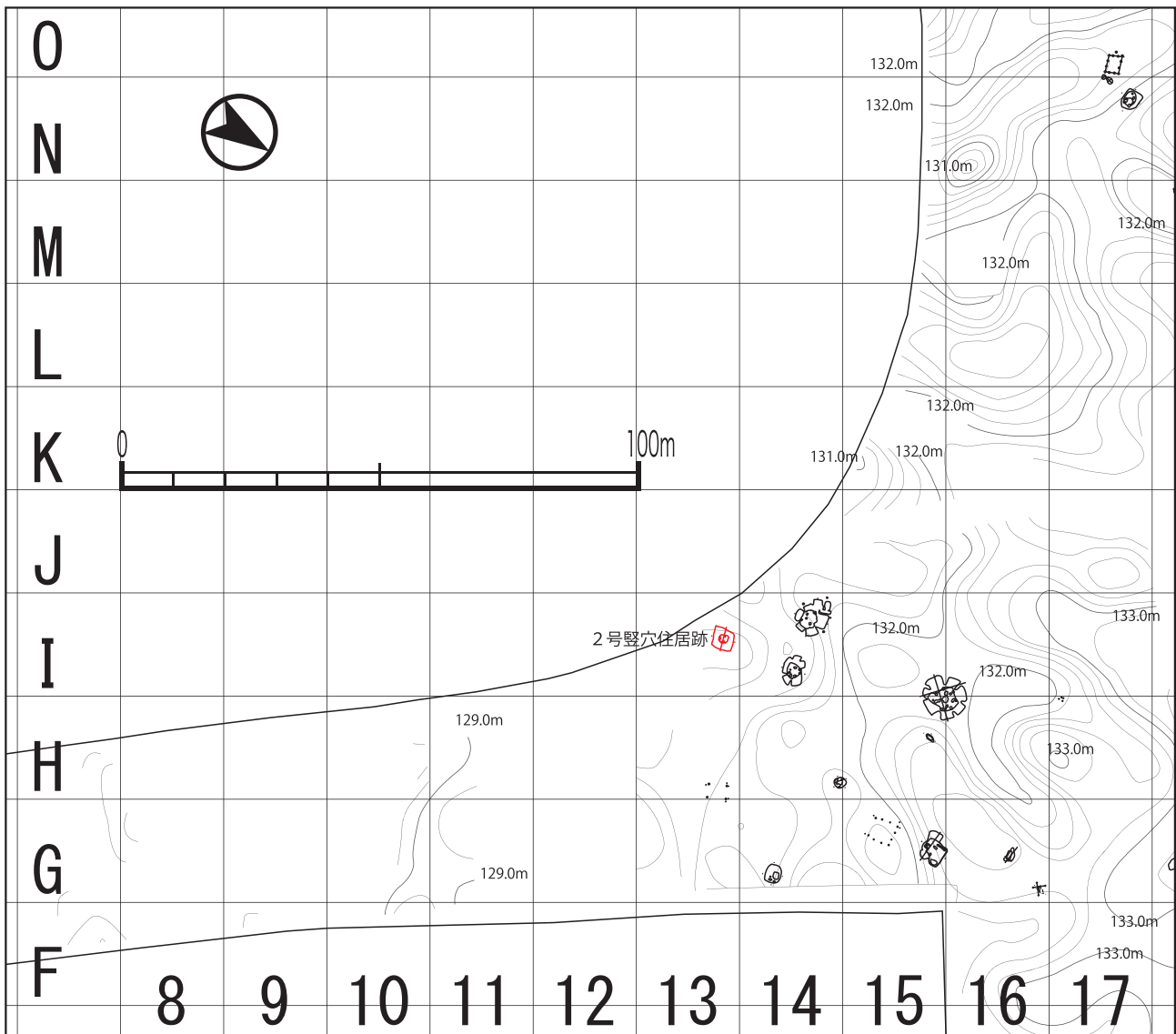
形状と規模 基本となる平面プランは、隅丸方形で、長軸は4.0m、短軸は3.96mを測り、正方形度がかなり高い。検出面からの深さは、浅い部分で約9～12cmであり、床面の中央部は一段深く掘り下げられて掘りコタツ状になる。床面からさらに約30cm深くなる。深い部分はⅢ層のアカホヤ火山灰層まで掘り抜かれていた。浅い部分に関しては、やはり検出面が低かったことによるものと考えられる。

この住居跡からは4基のピットが検出され、住居の中央部に2基、南側に2基配列されている。ピット間の距離は、P1→P2が約150cm、P3→P4が約20cmである。

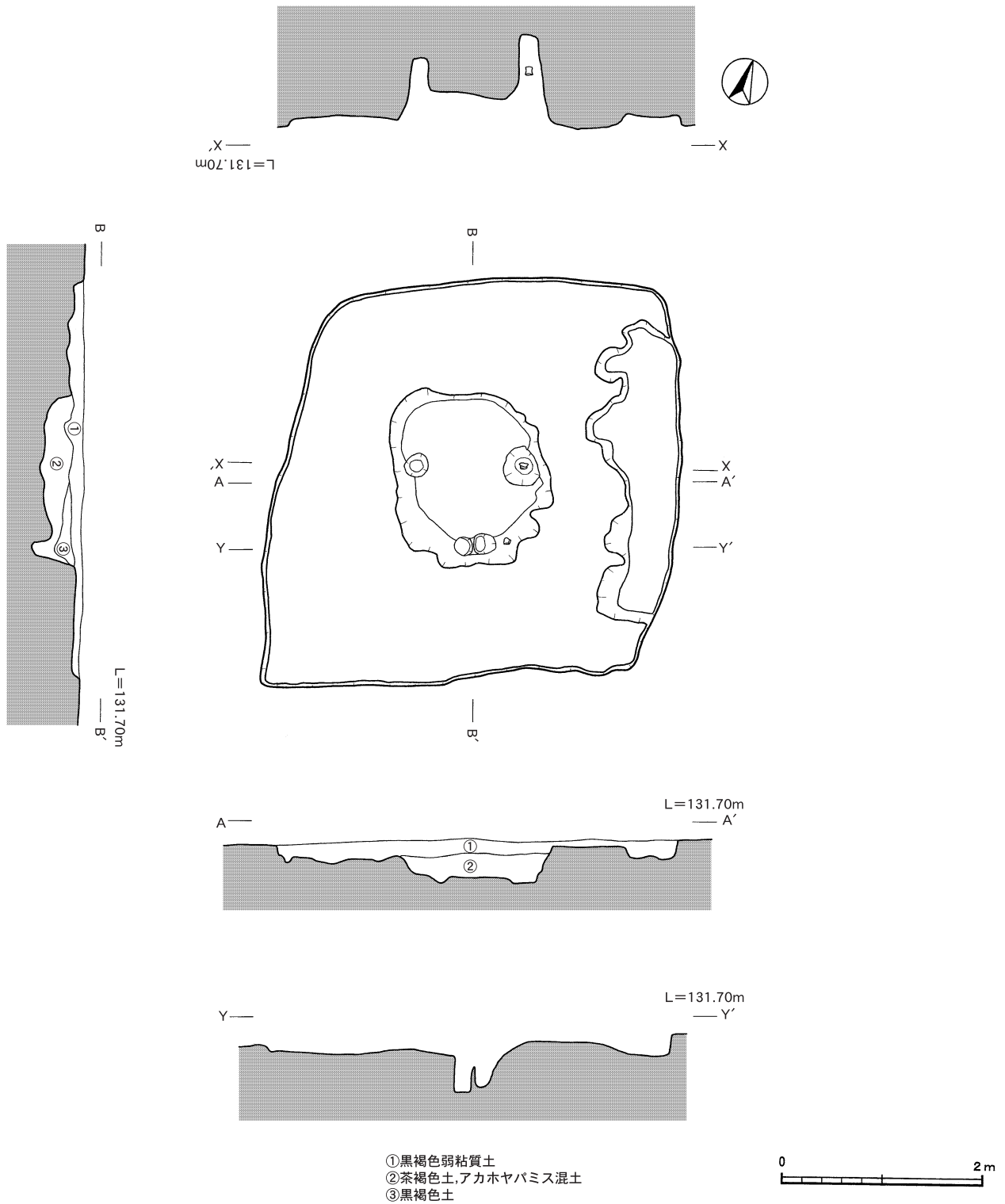
これらのピットの断面の形状をみると、下面部は底面になっている。それぞれのピットの検出面からの深さは、P1が約55cm、P2が約90cm、P3・P4が約30～35cmである。このようなことから、これらのピットは、この住居に伴う柱穴の可能性が高いと考える。

埋土 埋土は茶褐色土層を基本とし、オレンジ色のパミスをごく少量含む。また、床面と思われる中央部は、アカホヤパミスがブロック状に混ざっている。下部には黒橙褐色の土もみられた。

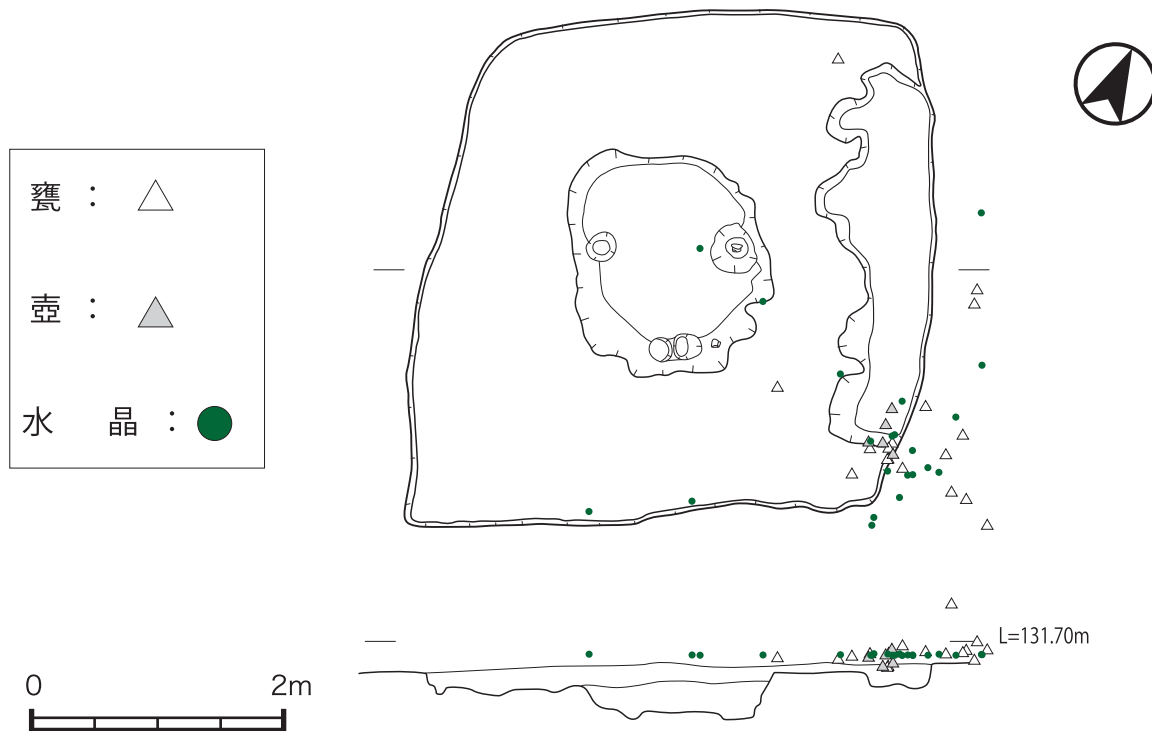
出土遺物（第50図：55・56） 竪穴住居跡から出土した遺物は44点であり、2点を図化した。55は甕形土器の底部である。P2より立った状態で出土した。平坦な平底を呈し、内・外面ともにナデ調整が行われている。また、56は頁岩を素材に用いた砥石である。これも直立状態で出土している。基部付近は四面ともに研磨を認め、非常に滑らかである。また、37点の水晶のチップも出土している。石材の種類は1類が2点、2類が32点、3類が3点である。



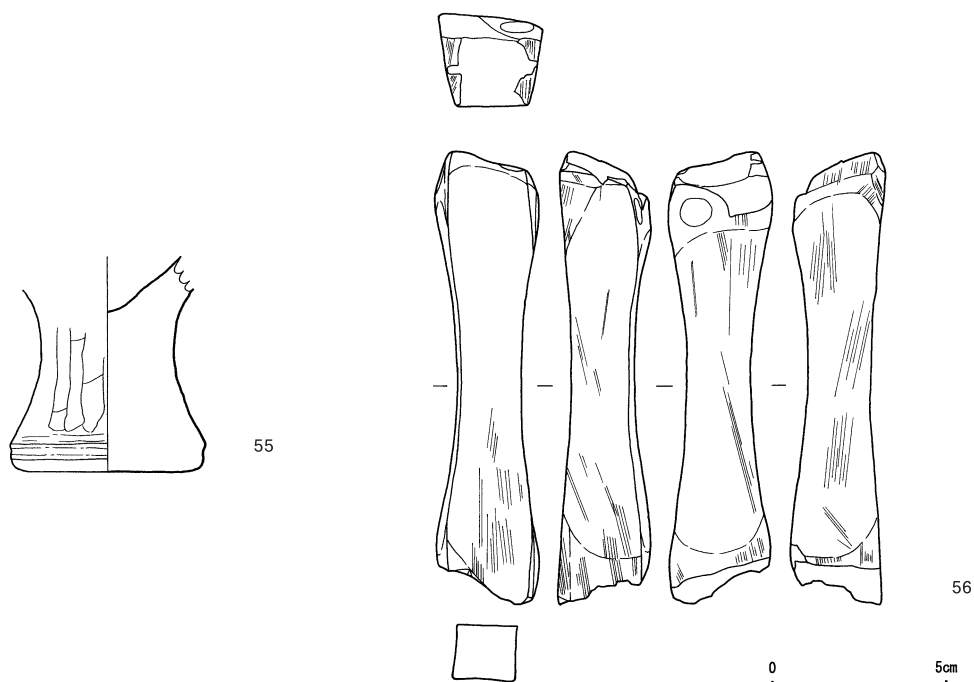
第47図 十三塚遺跡2号竪穴住居跡位置図



第48図 十三塚遺跡 2号竖穴住居跡



第49図 十三塚遺跡 2号竪穴住居跡遺物出土状況図



第50図 十三塚遺跡 2号竪穴住居跡出土遺物

第13表 十三塚遺跡 2号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部			色調		器面調整		胎土						焼成	備考	
			部位	法量 (cm)		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
				口径	底径													器高
50	55	甕	脚部	—	7.6	—	浅黄	黒褐	ナデ	ナデ	○	○		○			良	

第14表 十三塚遺跡 2号竪穴住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号
50	56	砥石	頁岩	13	2.9	2.7	116.71	2285

3号竪穴住居跡（第51～54図）

検出状況 I - 14区で検出された。検出面は2号と同じくII f層上面の黒褐色黄橙パミス混土であった。この層は、池田降下軽石が薄く堆積しているのだが、青紫色の硬質砂質層が直径約5mの範囲でリング状に検出された。本遺跡の埋土層にはなかったものである。精査をかけて、硬質砂質層が消えてきたところで張り出し部と思われるプランを検出し、遺構と判断し、遺構中央部からミニトレンチを設定して掘り下げていく方法を用いて調査を行い、住居跡と判断した。

形状と規模 基本となる平面プランは円形に張り出しを7箇所持つ、いわゆる花弁形である。長軸は7.2m、短軸は4.98mを測る。検出面からの深さは、浅い部分で、約20cm、中央部で約50cmであった。中央部の深い部分はIII層のアカホヤ火山灰層まで掘り抜かれていた。浅い部分に関しては、やはり検出面が低かったことによるものと考えられる。

この住居跡からは4基のピットが検出され、2号住居と同じく、住居の中央部に2基、南側に2基配列されている。ピット間の距離は、P1→P2が約240cm、P3→P4が約90cmである。これらのピットの断面の形状をみると、下面部は底面になっている。それぞれのピットの検出面からの深さは、P1・P2が約70cm、P3・P4が約50～55cmである。このようなことから、これらのピットは、この住居に伴う、柱穴の可能性が高いと考える。

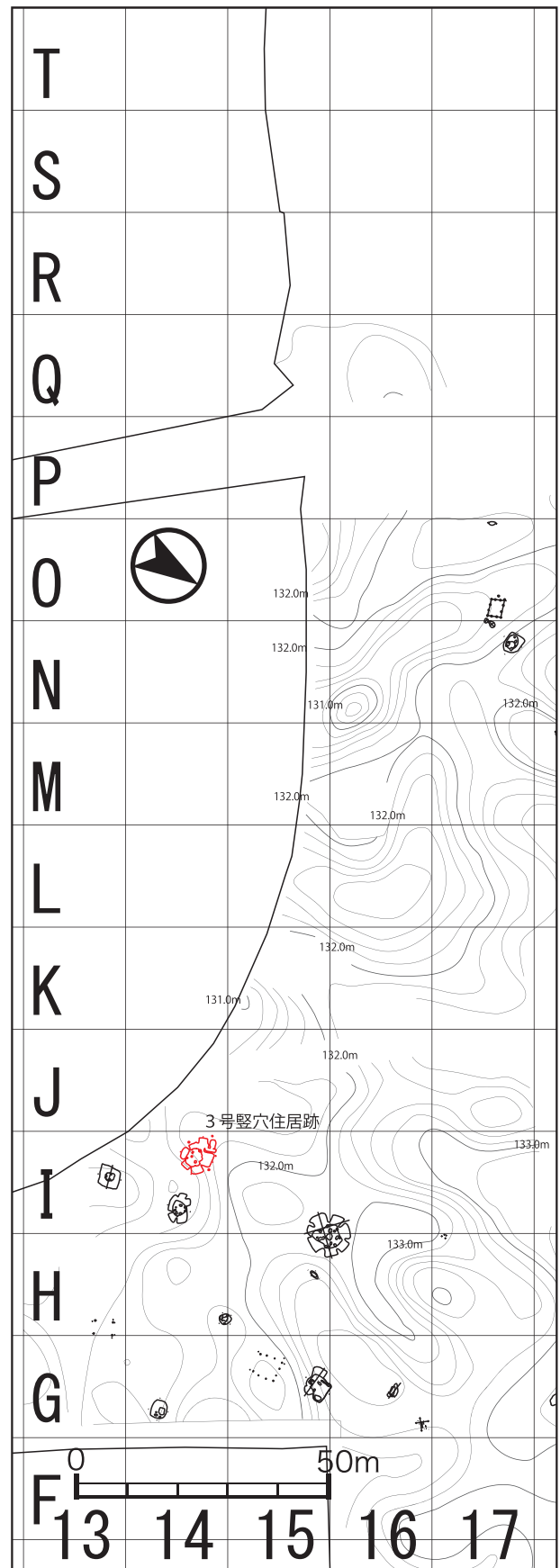
また、住居跡外側の北側、西側、南側にも4基のピットが検出されている。深さは10cm～20cmと浅い。埋土は住居内のピットと同じくII層黒色土と思われる柔らかい土であり、住居に伴うピットの可能性もあると考える。

また、この住居の西側に近接するように土坑が検出されている。途中をイモ穴で削平されており、住居の張り出し部ではないかとの検討も行ったが、土坑と住居までの間に明確な掘り込みは断定できず、土坑と判断した。

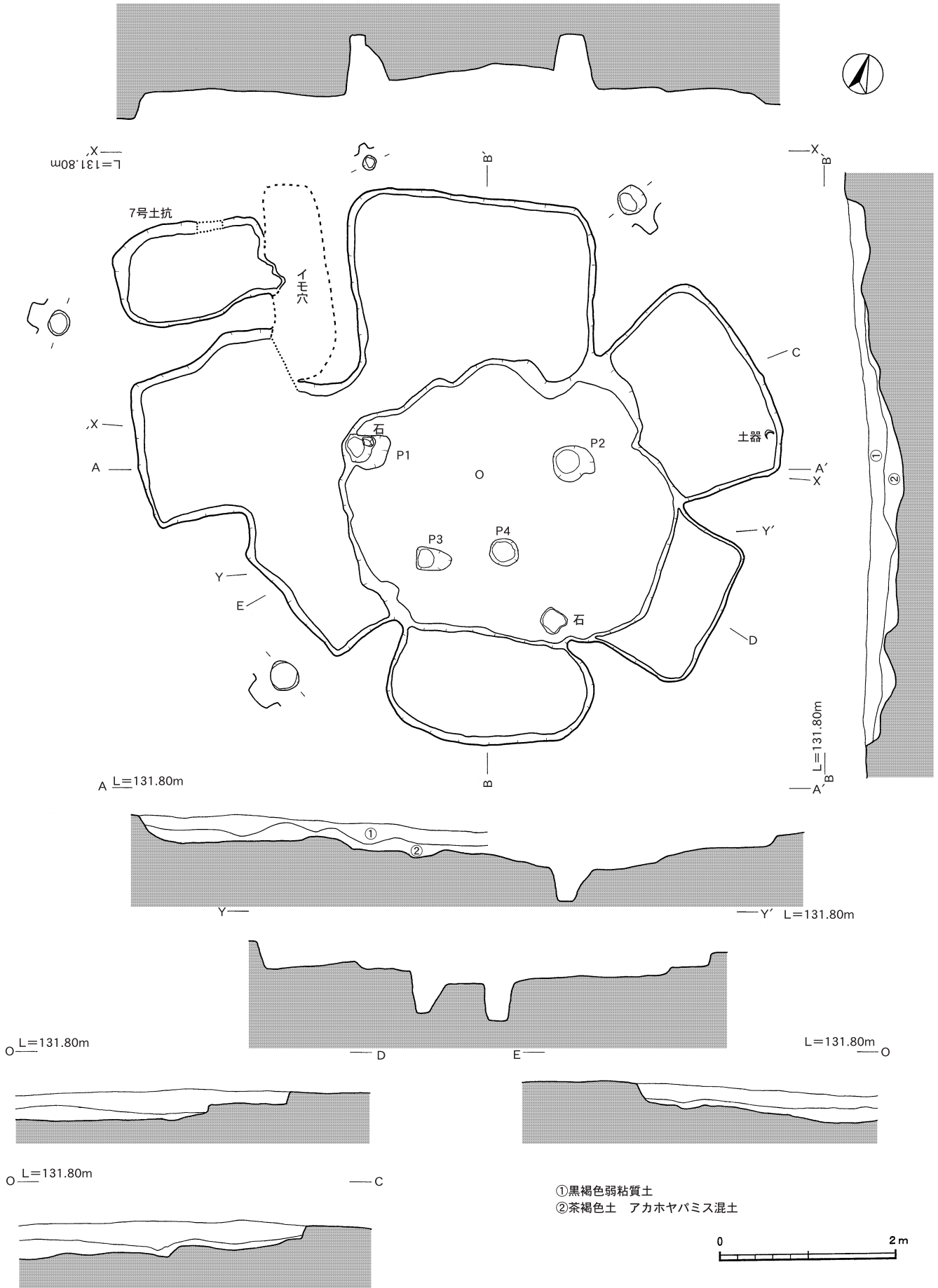
埋土 埋土は茶褐色土層を基本とし、オレンジ色のパミスをごく少量含む。また、床面と思われる中央部は、アカホヤパミスがブロック状に混ざっている。下部には黒橙褐色の土もみられた。

出土遺物（第54図：57～59） 竪穴住居跡から出土した遺物は20点であり、3点を図化した。

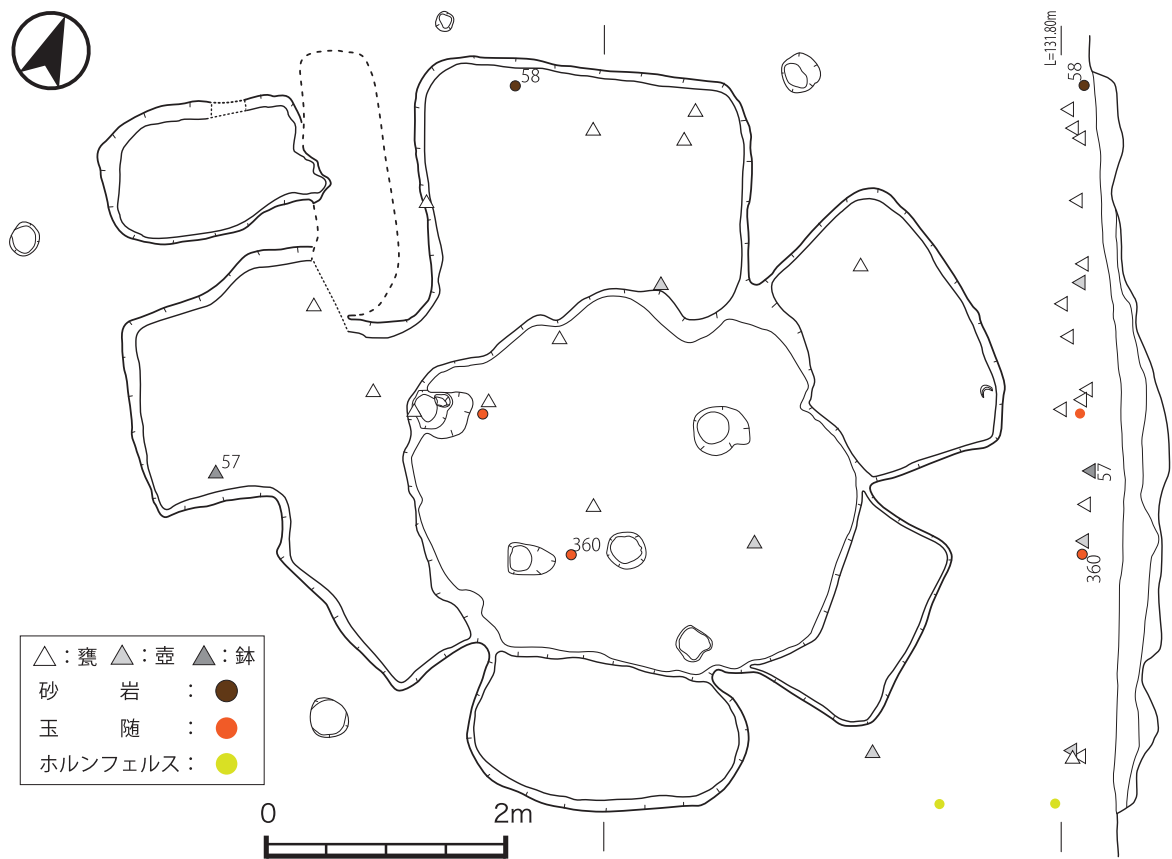
57は鉢形土器の完形品である。張り出し部際より出土した。底部は平底で外方へやや開きながら口縁部をつくる。口唇部は丸みを帯びている。58は砥石である。頁岩を素材に用い、部分的に研磨を認める。59は平坦面を持った大型の石器で平坦面は滑らかである。石皿あるいは台石的な使用等が考えられる石器である。



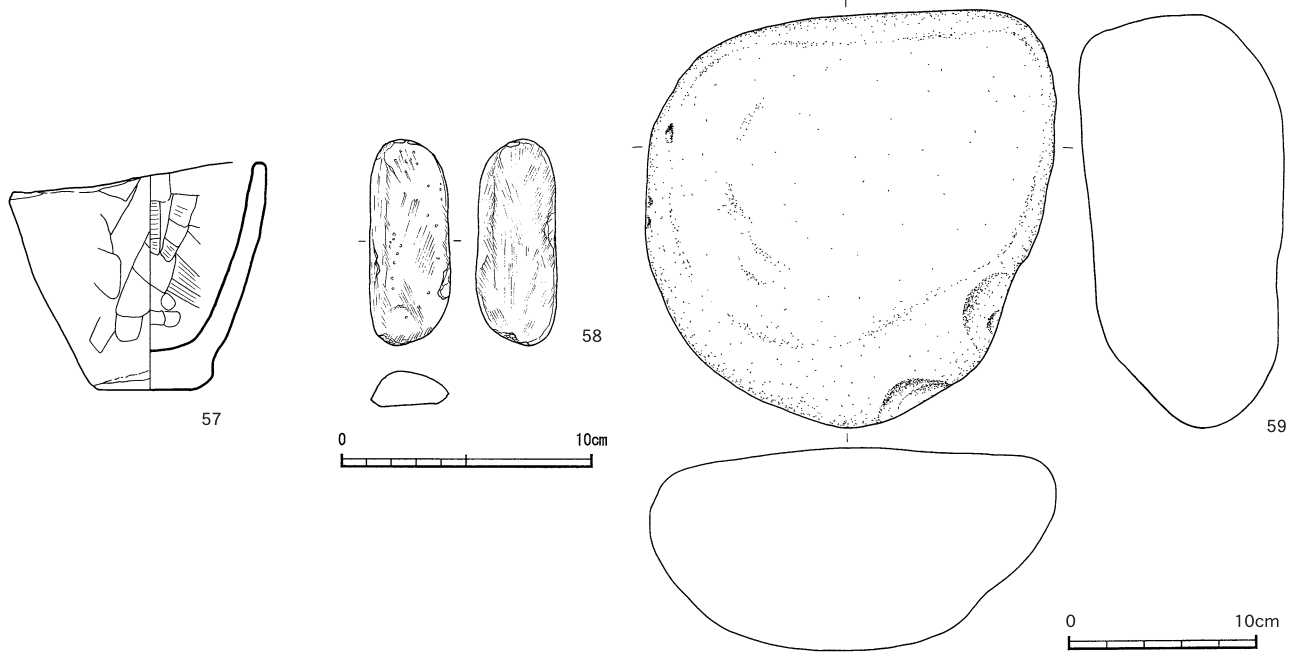
第51図 十三塚遺跡3号竪穴住居跡位置図



第52図 十三塚遺跡 3号竪穴住居跡



第53図 十三塚遺跡 3号竪穴住居跡遺物出土状況図



第54図 十三塚遺跡 3号竪穴住居跡出土遺物

第15表 十三塚遺跡 3号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	器部			色調		器面調整		胎土						焼成	備考	
			部位	法量 (cm)		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
				口径	底径													器高
54	57	鉢	完形	10.25	4.0	9.0	明黄褐	橙	ナデ	工具ナデ	○	○	○				良	スス附着

第16表 十三塚遺跡 3号竪穴住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
54	58	砥石	頁岩	8.2	3.3	1.5	63.98	2221
	59	台石	安山岩	23.2	19.8	11.2	7000	

4号竪穴住居跡（第55～58図）

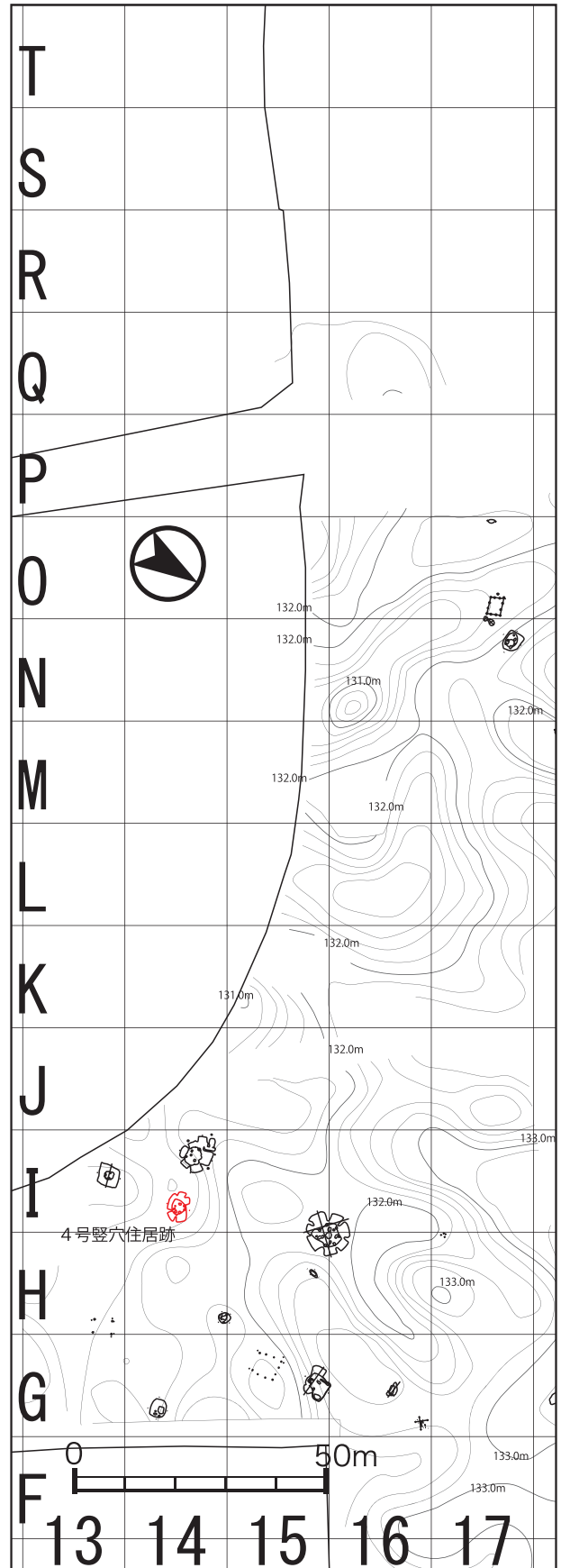
検出状況 I-14区、3号住居跡東側約5m程のところで検出された。検出面はII d層及びII f層上面の黒褐色黄澄パミス混土であった。南側は地層の横転部分があり、その横転部分の横から花卉形のようなプランを検出できた。北側においてはII d層部分では明確なプランが確認できず、II f層上面での検出となった。プランの形状から遺構と判断し、中央部分と思われる部分にミニトレンチを設定し、床面を検出し、壁を追いかける調査方法をとった。

形状と規模 基本となる平面プランは円形に張り出しを5～6箇所持つ、いわゆる花卉形である。5～6箇所という表現は北側部分の張り出し部を明確に確認できなかったためである。長軸は5.3m、短軸は3.4mを測る。検出面からの深さは、浅い部分で約10cm、深い部分で約24cmであった。浅い部分に関しては、検出面が低かったことによるものと考えられる。

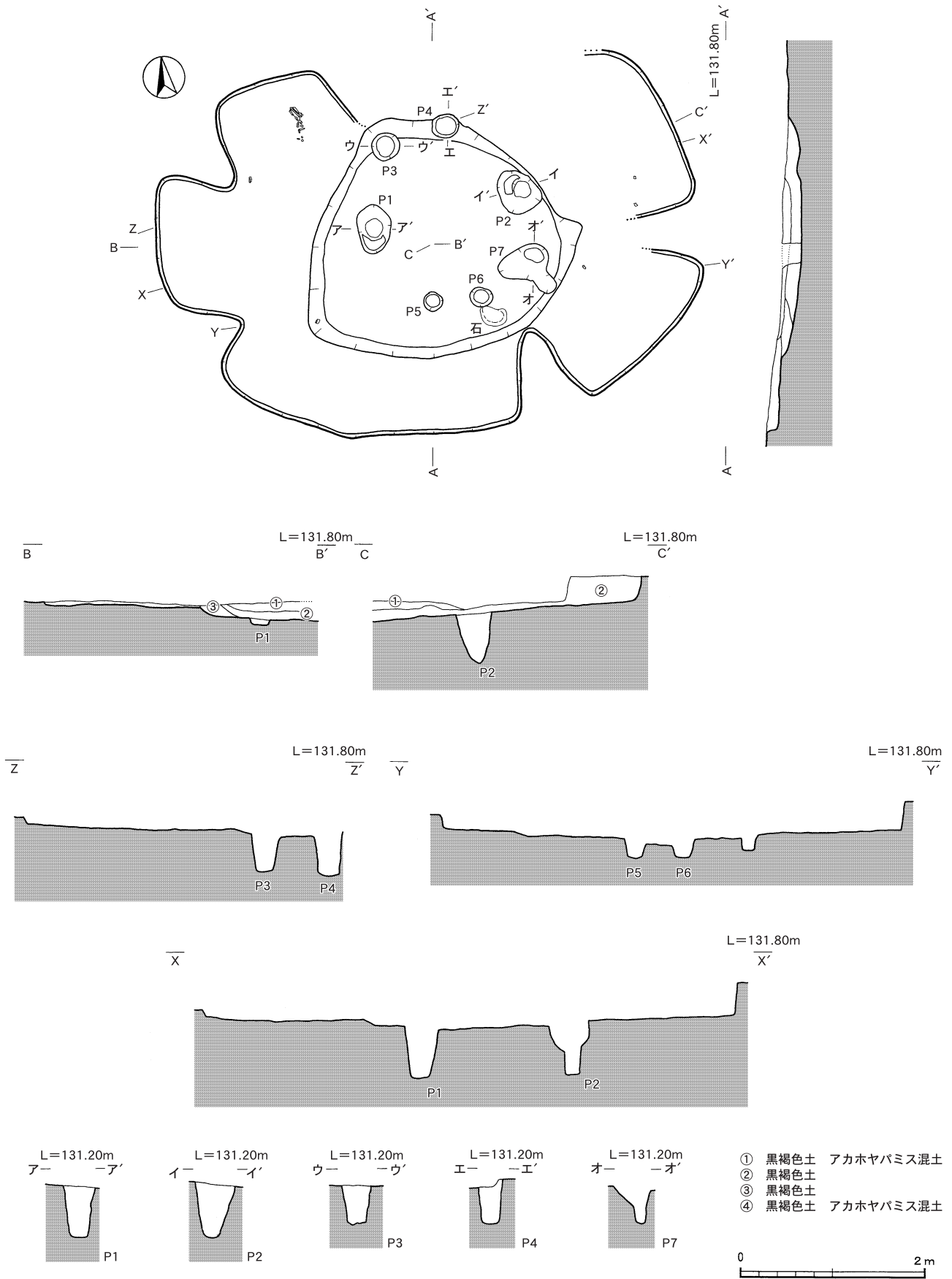
この住居跡からは7基のピットが検出され、住居の中央部に2基、北側及び南側にそれぞれ2基配列されている。P7に関しては、他のピットと違う掘り込みをしており、樹痕の可能性もある。ピット間の距離は、P1→P2が約160cm、P3→P4が約70cmである。P5→P6は約52cmであり、X→X'を軸にした垂直の距離はP3までが約82cm、P4までが約86cm、P5までが約94cm、P6までが約102cmであり、P1・P2を中心に対称的に配置されてるように見える。これらのピットの断面の形状をみると、下面部は底面になっている。それぞれのピットの検出面からの深さは、P1が約55cm、P2が約60cm、P3・P4が約40cm、P5・P6は約20cmである。このようなことから、これらのピットは、この住居に伴う柱穴の可能性が高いと考える。

埋土 埋土は黒褐色土層を基本とし、アカホヤのパミスをごく少量含む。また、床面と思われる中央部は、アカホヤパミスがブロック状に混ざっており、貼床を形成していると思われるが、そこまで明確ではない。下部には黒褐色の土もみられた。

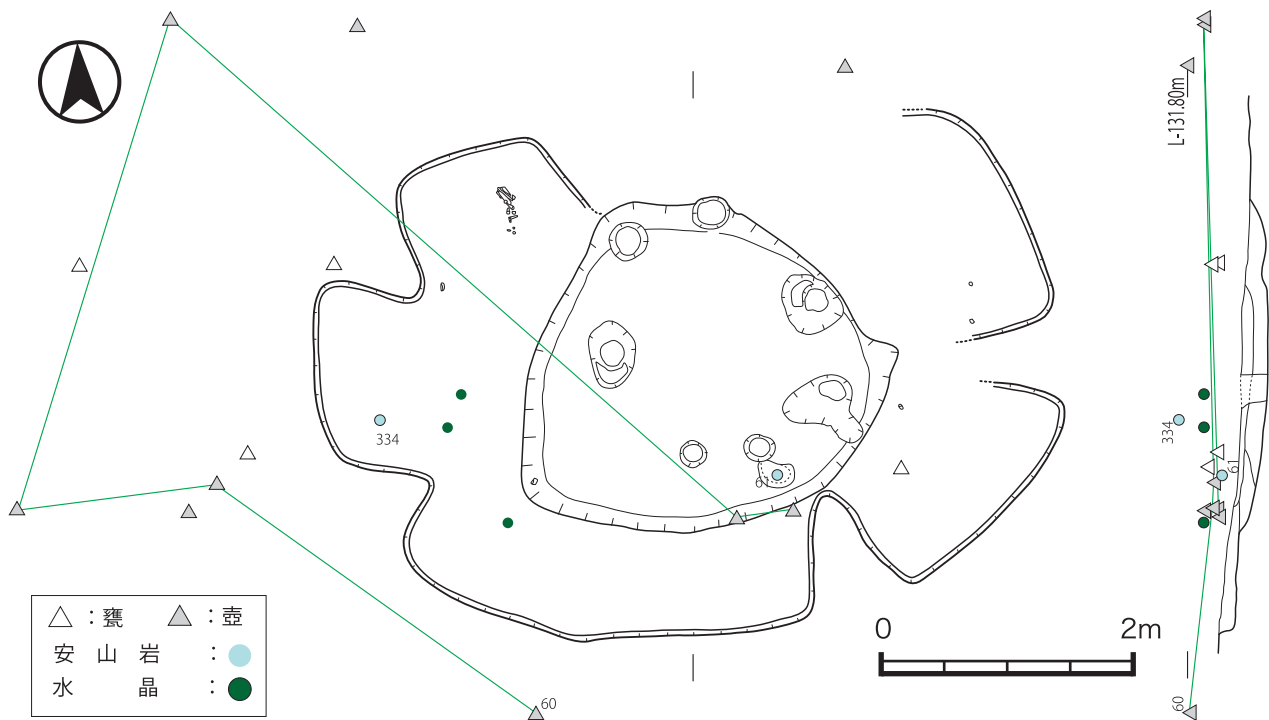
出土遺物（第58図：60・61） 竪穴住居跡から出土した遺物は19点であり、2点を図化した。60は壺の口縁部である。垂れ下がり気味に外反し、口縁部端面は凹む。また、61は石皿である。住居の南東側から出土している。図化はできなかったが鉄製品も出土した。錆化のため器種等は確認できなかった。また、張り出し部の北東側より炭化物も出土した。最終掘り込み面より上部5cm程で検出しているが、床着の可能性が高い。



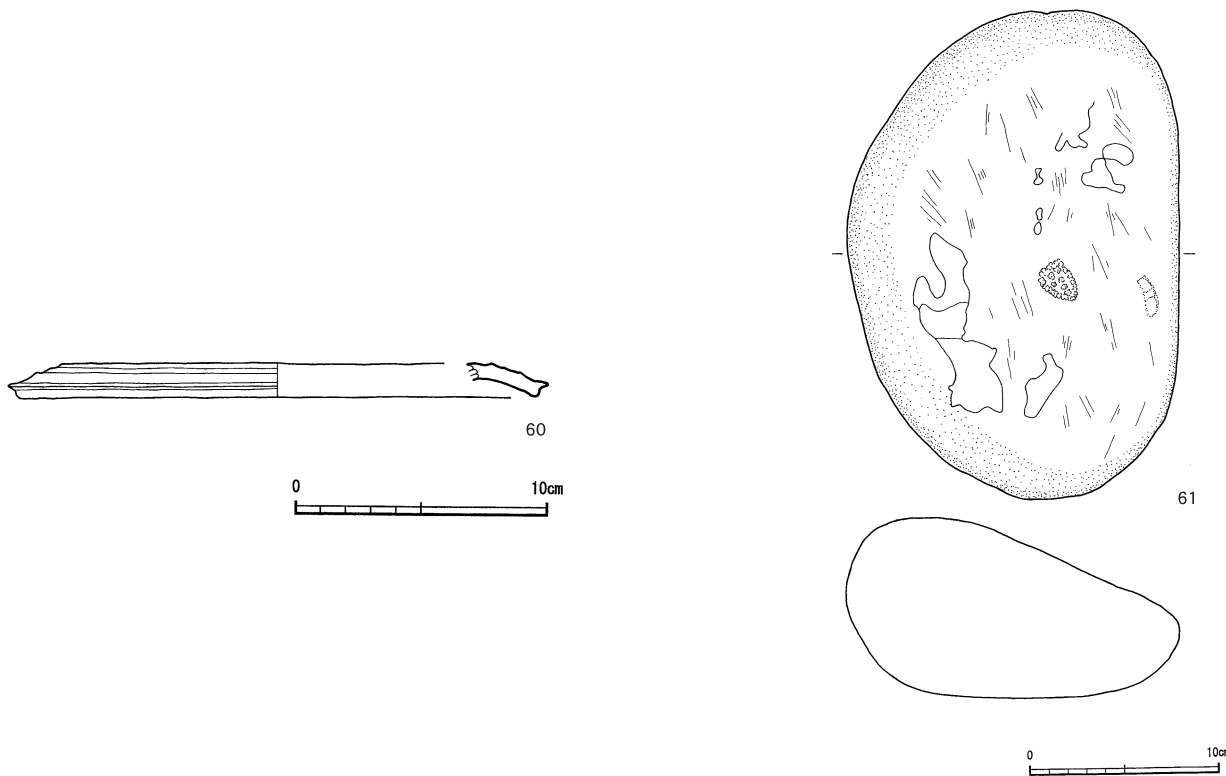
第55図 十三塚遺跡4号竪穴住居跡位置図



第56図 十三塚遺跡 4号竪穴住居跡



第57図 十三塚遺跡 4号竪穴住居跡遺物出土状況図



第58図 十三塚遺跡 4号竪穴住居跡出土遺物

第17表 十三塚遺跡 4号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部			色調		器面調整		胎土					焼成	備考		
			部位	法量 (cm)			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母			輝石	その他
				口径	底径	器高												
58	60	壺	口縁部	21.5	—	—	橙	橙	ナデ	ナデ	○			○		岩片	良	

第18表 十三塚遺跡 4号竪穴住居跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
58	61	石皿	安山岩	26	18	8.8	5000	

5号竪穴住居跡（第59～61図）

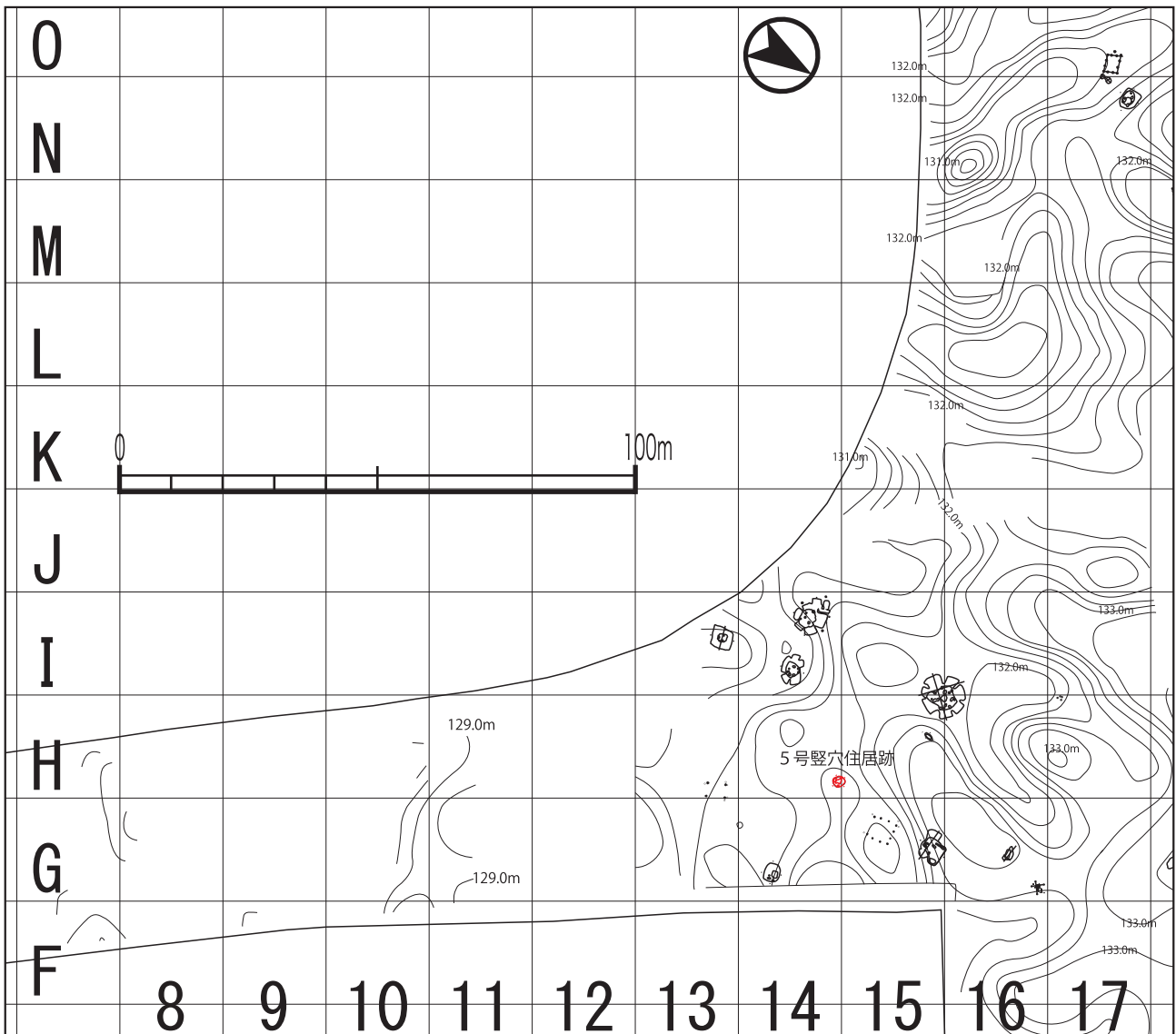
検出状況 H-14・15区、3号住居跡東側約5m程のところで検出された。検出面はⅡf層上面の黒褐色黄橙パミス混土であった。ゴボウのトレンチャーが縦横に走る状況で、Ⅱe層までは明確な土色の変化が確認できなかった。Ⅱf層上面まで掘り下げたところ、約2mの範囲にわたり池田降下軽石が確認できない部分があり、トレンチャーの部分除去したところ、掘り込みと思われる部分を検出した。この時点においてこれは遺構であると判断し、トレンチャーを全て除去し、プラン及び掘り込みを追いかける調査方法をとった。

形状と規模 基本となる平面プランは円形である。長軸は2.12m、短軸は1.88mを測る。検出面からの深さは、浅い部分で約10cm、深い部分で約20cmであった。全体的に浅いのはトレンチャーで削平を受けていたこと、検出面が低かったことによるものと考えられる。

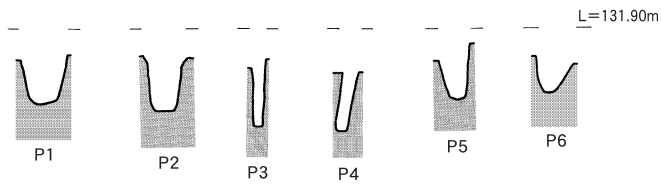
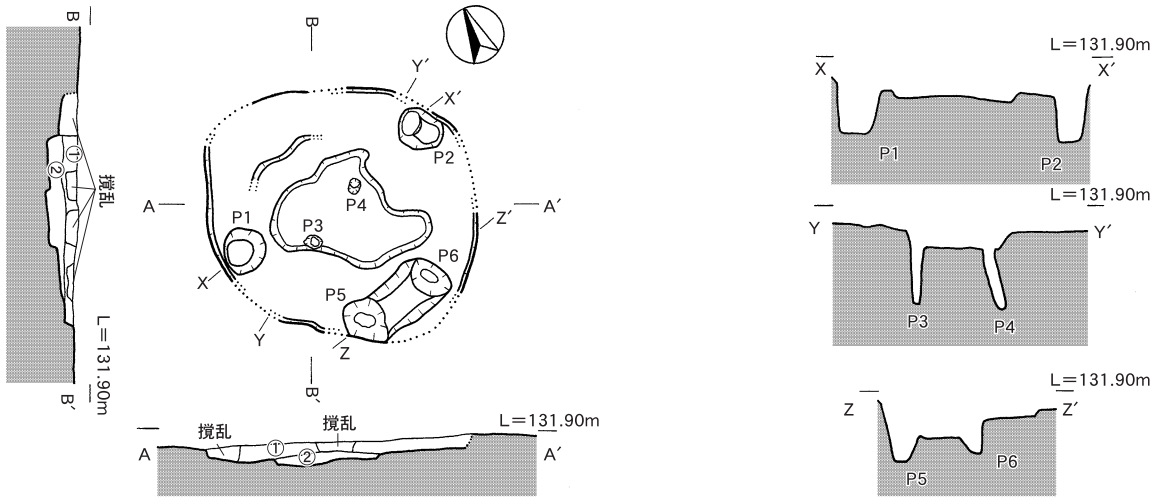
この住居跡からは6基のピットが検出され、住居の中央部壁側に2基、南側に2基、中央部に2基位置している。検出面からの深さはP1が約35cm、P2が約40cm、P3・P4が30cm、P5・P6は約55～60cmである。ピット間の距離は、P1→P2が約170cm、P3→P4が約60cmである。P5→P6は約55cmであり、これらのピットは、この住居に伴う、柱穴の可能性が高いと考える。

埋土 埋土は黒褐色土層を基本とし、アカホヤのパミスをごく少量含む。また、床面と思われる中央部は、4cm～6cmのアカホヤパミスがブロック状に混ざっており、貼床を形成していると思われるが、そこまで明確ではない。下部には黒橙褐色の土もみられた。ピット内の埋土はⅡ層の土と思われる。かなり柔らかい。

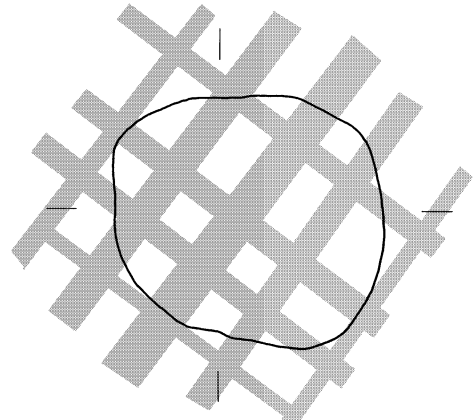
出土遺物 竪穴住居跡から出土した遺物は4点であった。



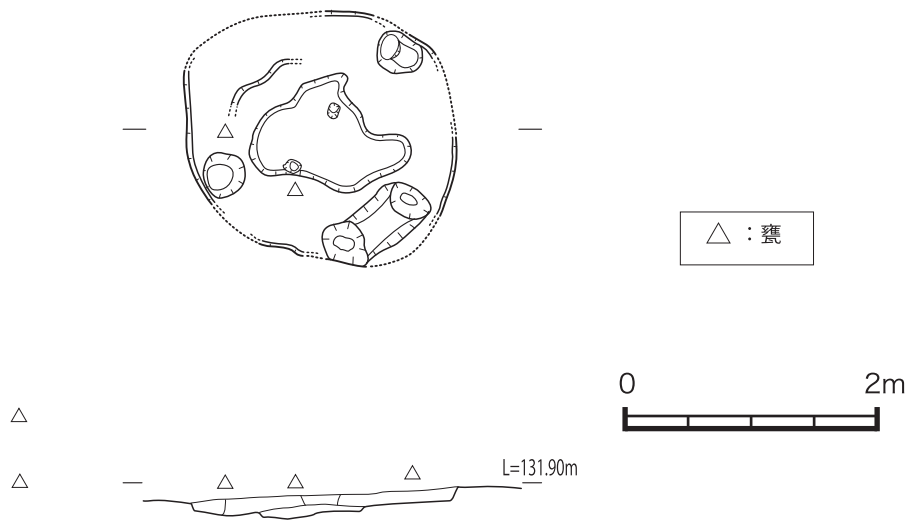
第59図 十三塚遺跡 5号竪穴住居跡位置図



第60図 十三塚遺跡 5号竪穴住居跡



※ 網フセ部はトレンチャー跡



第61図 十三塚遺跡 5号竪穴住居跡遺物出土状況図

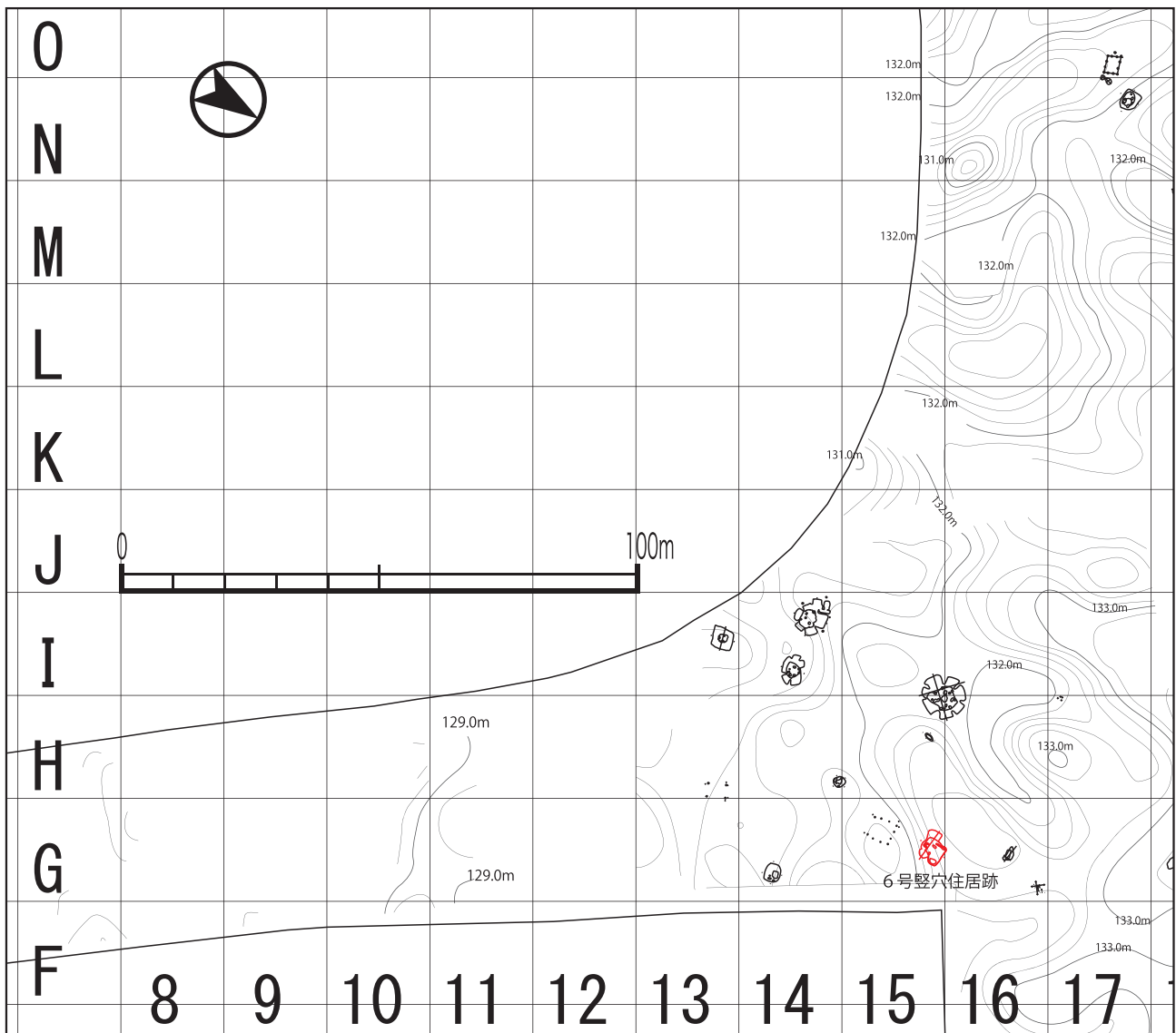
6号竪穴住居跡（第62～65図）

検出状況 G-15区，検出面はⅡd層の茶褐色黄橙パミス混土であった。ここも3号住居跡と同じく青紫色の硬質砂質層が直径約5mの範囲でリング状に検出された。この区もゴボウのトレンチャーが斜横に走っている状況であったが，硬質砂質層の際で土色の違う部分も若干確認できた。そこで，その近辺のトレンチャー部分を除去したところ，掘り込みと思われる部分をトレンチャーの断面で検出できたので，この時点で遺構であると判断し，中央部にベルトを残してプラン及び掘り込みを追いかける調査方法をとった。

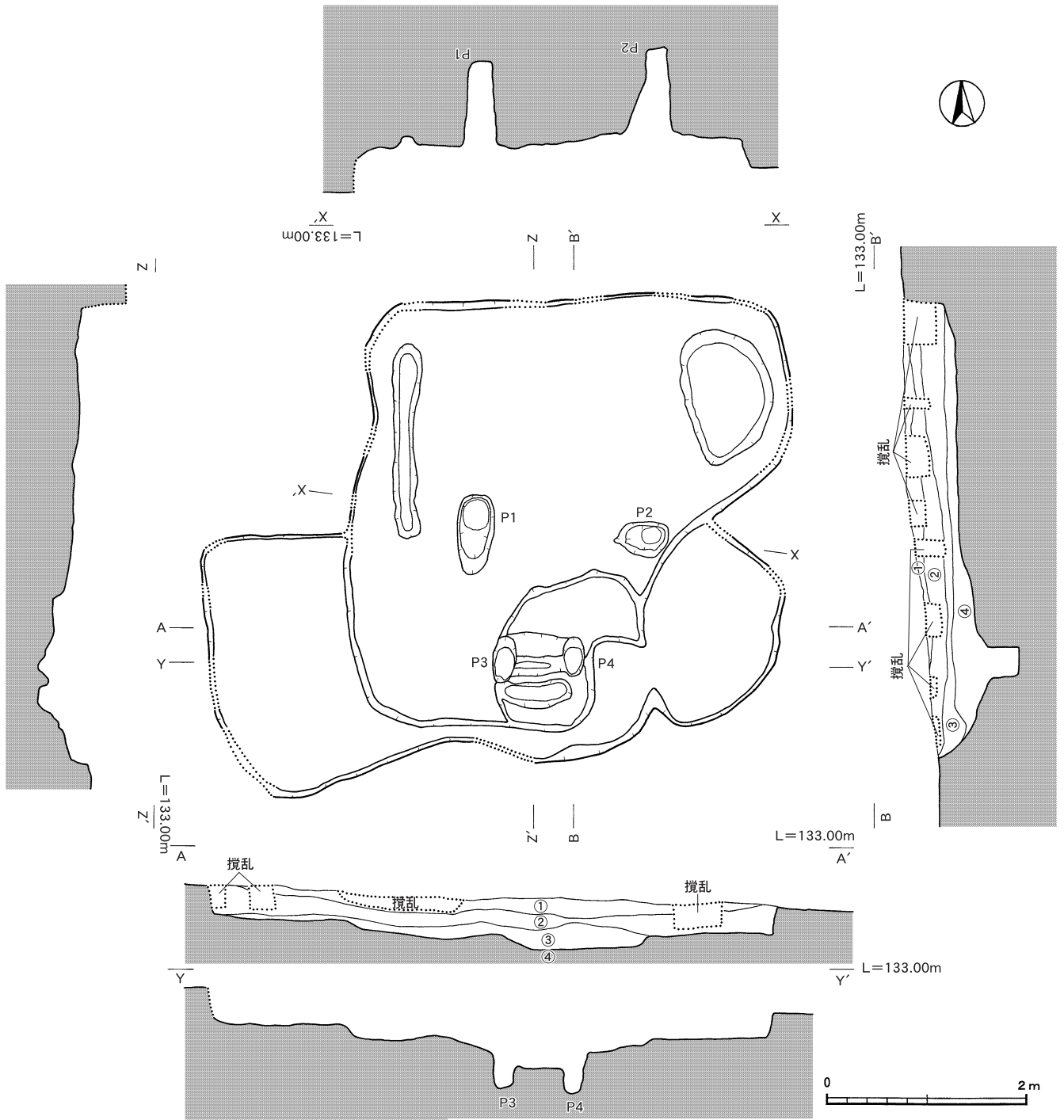
形状と規模 基本となる平面プランは隅丸方形を基調とし，張り出しをもつ。長軸は5.7m，短軸は4.6mを測る。検出面からの深さは，浅い部分で約30cm，深い部分で約50cmであった。この住居跡からは4基のピットが検出された。住居の中央部壁側に2基，南側に2基位置している。検出面からの深さはP1・P2→約85cm，P3及びP4→約40～45cmである。ピット間の距離は，P1→P

2が約180cm，P3→P4が約75cmである。これらのピットは，この住居に伴う柱穴の可能性が高いと考える。
埋土 埋土は先述の通り，上部には灰白色砂質硬質土が覆っており，中央部に多く堆積している。その下部は黒褐色土を基本とし，アカホヤのパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，4～6cmのアカホヤパミスがブロック状に混ざっており，貼床を形成していると思われるが，そこまで明確ではない。下部はアカホヤで，黒橙褐色の土もみられた。ピット内の埋土はⅡ層の土と思われる。かなり柔らかい。

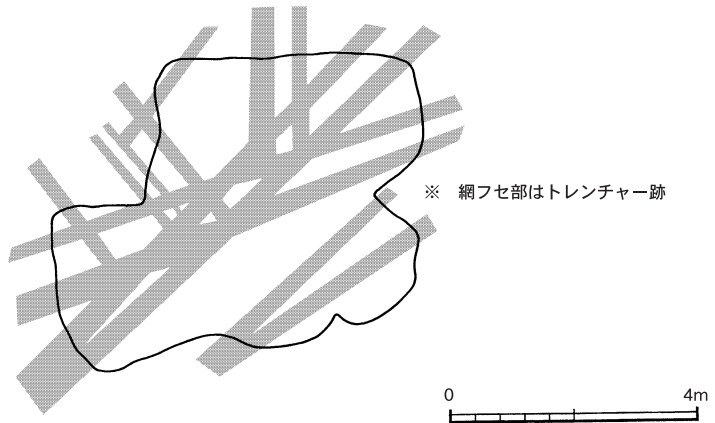
出土遺物（第65図：62・63） 竪穴住居跡から出土した遺物は13点で，うち2点を図化した。62は天草石と呼ばれる石を石器の素材とした砥石で，一部を欠損する。四面に研磨を認め，非常に滑らかである。63は頁岩を石器の素材とした砥石で，端部を欠損する。かなり扁平で，非常に滑らかである。図化はできなかったが，中央部と思われる床面付近で炭火木も確認されている。（図版20に掲載）



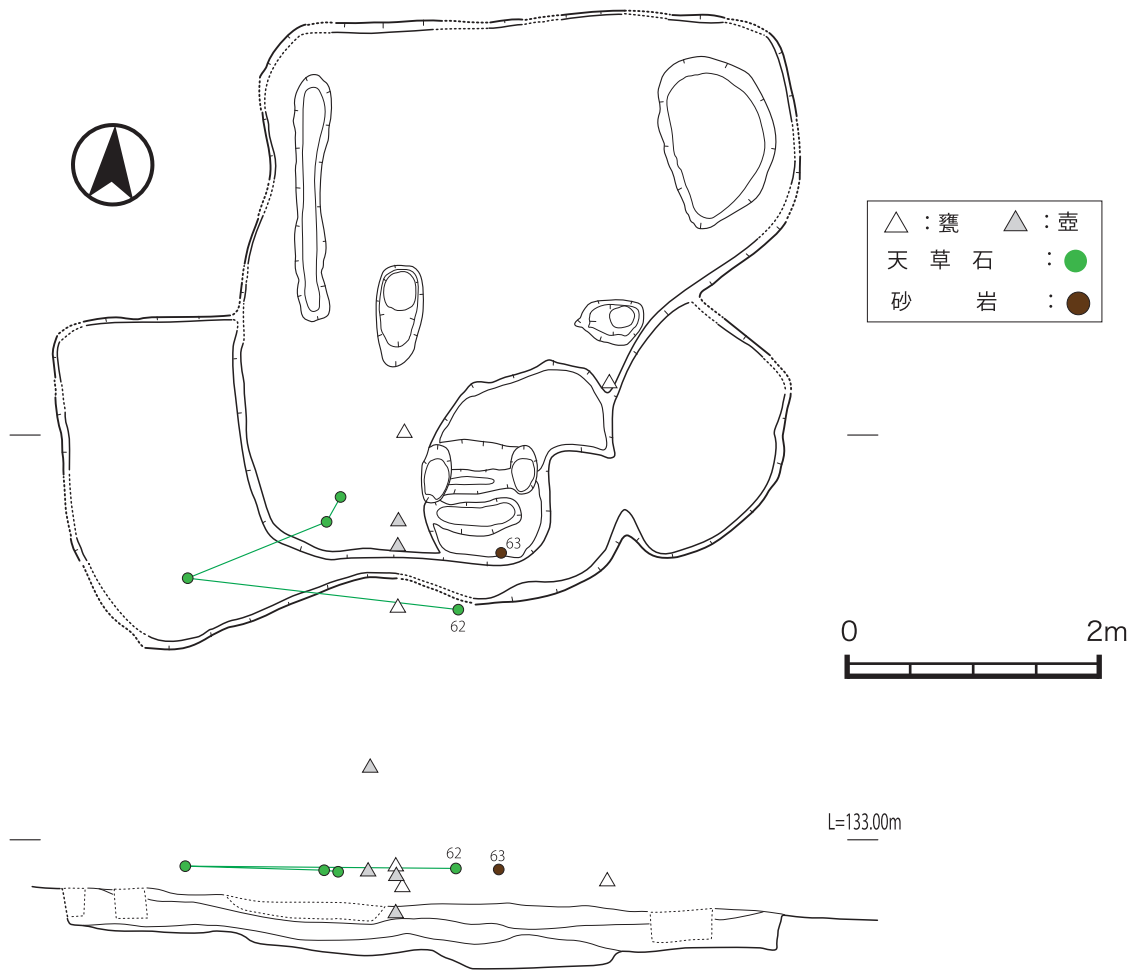
第62図 十三塚遺跡 6号竪穴住居跡位置図



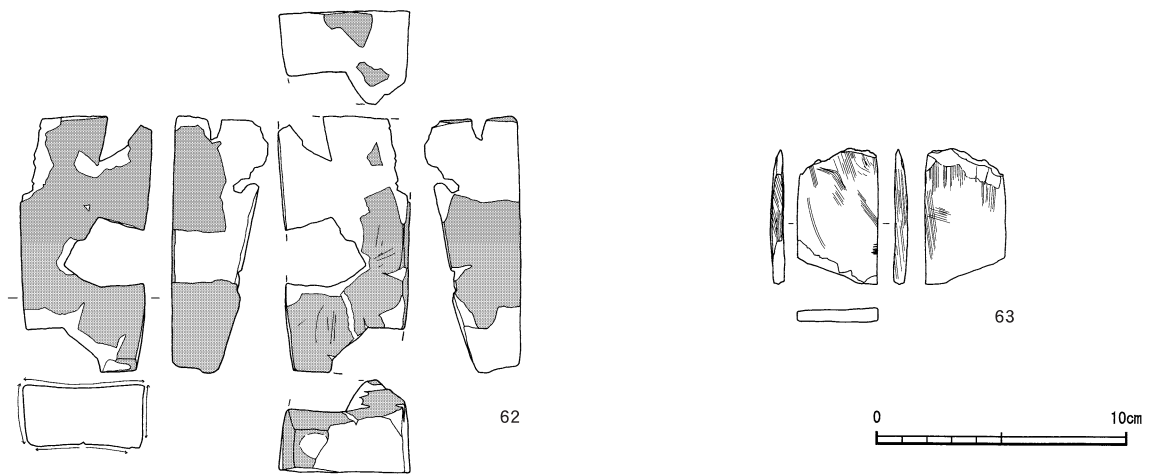
- ① 黒色土
- ② 灰白色硬質土 暗紫ゴラ
- ③ 茶褐色土 アカホヤブロック混土
- ④ アカホヤ



第63図 十三塚遺跡 6号竪穴住居跡



第64図 十三塚遺跡 6号竪穴住居跡遺物出土状況図



第65図 十三塚遺跡 6号竪穴住居跡出土遺物

第19表 十三塚遺跡 6号竪穴住居跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
65	62	砥石	天草石	10.3	5.25	3.9	151.72	5977・5978・5980・5982
	63	砥石	頁岩	5.4	3.25	0.55	12.61	5981

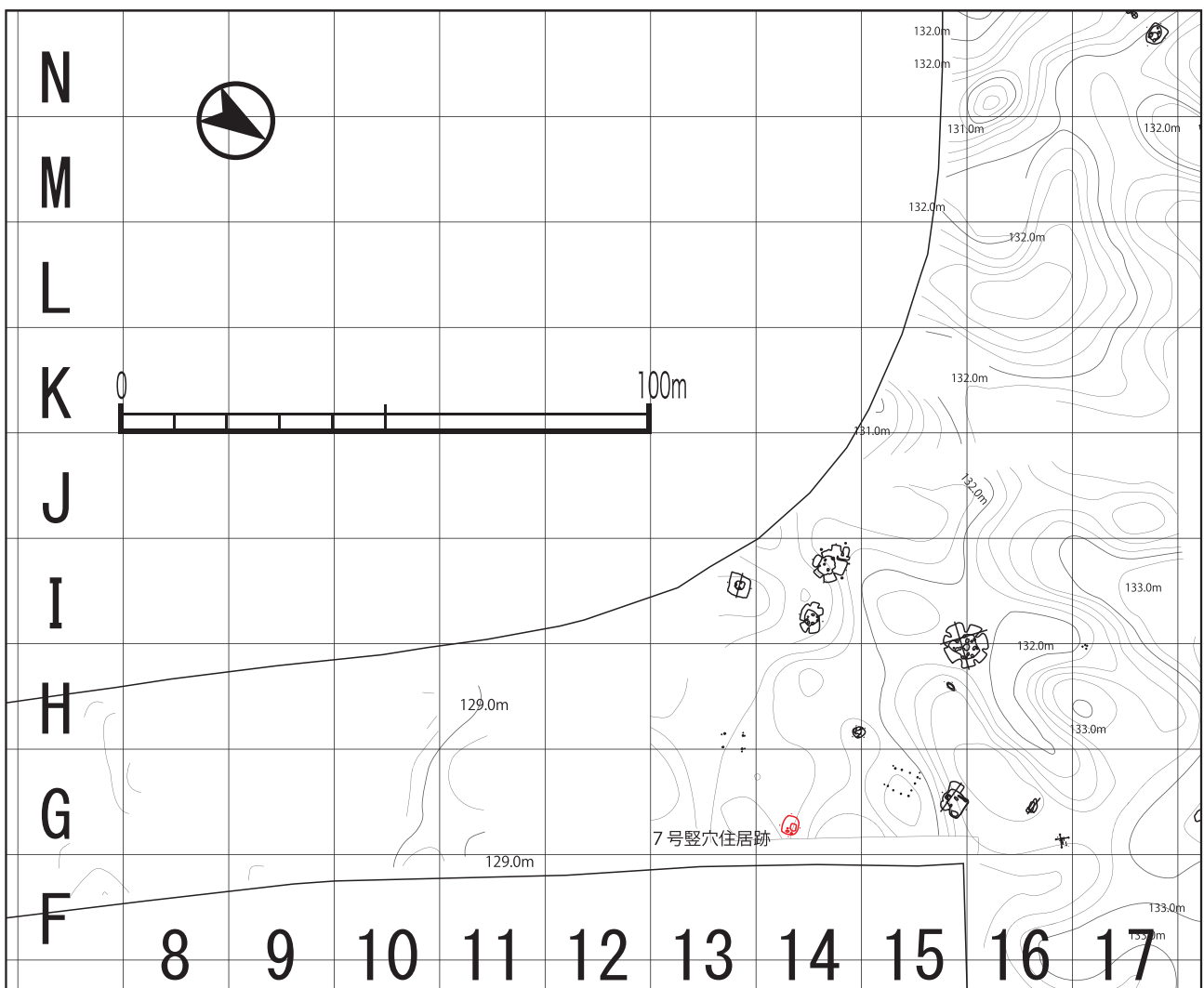
7号竪穴住居跡（第66～71図）

検出状況 G-14区，検出面はⅡd層の茶褐色黄橙パミス混土であった。ここも3号，6号竪穴住居跡と同じく青紫色の硬質砂質層が直径約2mの範囲でリング状に検出された。硬質砂質層の際で土色の違う部分を若干確認できた。一部にゴボウのトレンチャーがあり，その近辺のトレンチャー部分を除去したところ，掘り込みと思われる部分が検出できたので，遺構であると判断し，中央部と思われる部分にベルトを残してプラン及び掘り込みを追いかける調査方法をとった。

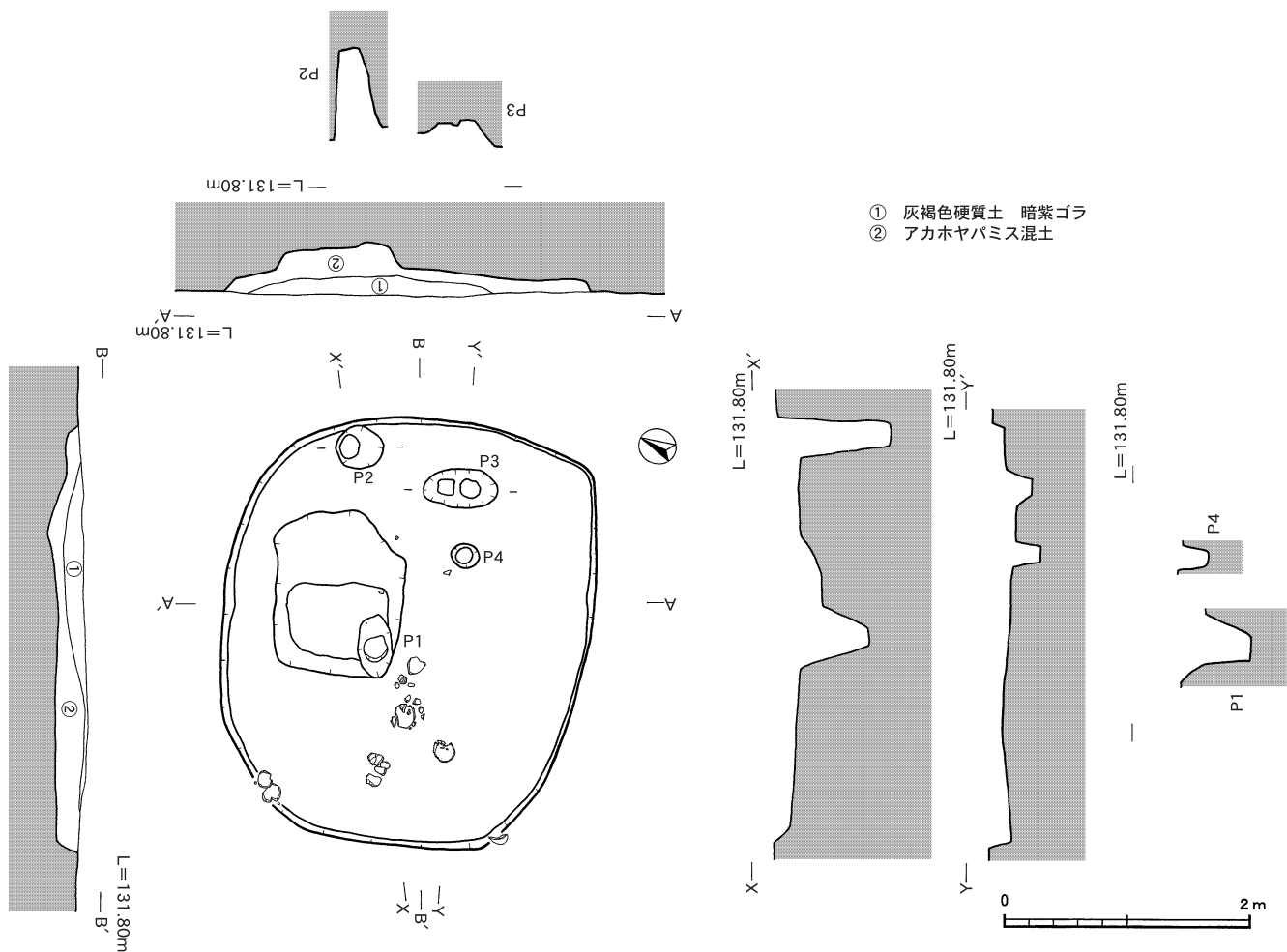
形状と規模 基本となる平面プランは隅丸方形を基調としている。長軸は3.58m，短軸は3.0mを測る。検出面からの深さは，浅い部分で約10cm，深い部分で約45cmであった。この住居跡からは4基のピットが検出された。住居の中央部東壁側に1基，ほぼ中央部に1基，南東側に2基位置している。検出面からの深さはP1・P2→約85cm，P3・P4→約40～45cmである。ピット間の距離は，P1→P2が約175cm，P3→P4が約65cmである。これらのピットは，この住居に伴う柱穴の可能性が高いと考える。

埋土 埋土は6号住居跡と同じく，上部には灰白色砂質硬質土が覆っており，中央部に多く堆積している。その下部は黒褐色土を基本とし，アカホヤのパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，4～6cmのアカホヤパミスがブロック状に混ざっており，貼床を形成していると思われるが，そこまで明確ではない。下部はアカホヤで，黒橙褐色の土もみられた。ピット内の埋土はⅡ層の土と思われる。かなり柔らかい。

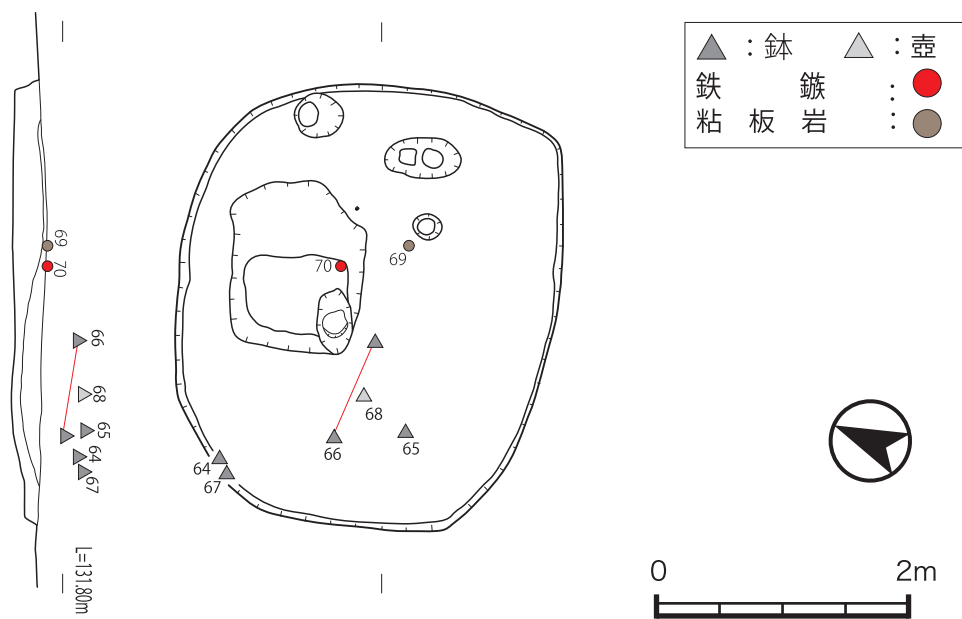
出土遺物（第70・71図：64～70） 竪穴住居跡から出土した遺物は82点で，7点を図化した。64と65，67は鉢の完形である。底部より外方へ開きながら立ち上がる器形で，口唇部は丸みを帯び，器壁は薄い。66は鉢の胴部である。おそらく球形に近い器体になると思われる。外面は緻密なミガキを施す。68は壺の肩部～胴部である。現存で肩部に五条の断面三角形貼付突帯を，胴部には一条の断面台形状突帯を廻らし，突帯端面は凹む。69は粘板岩を石器の素材とした磨製石鏃である。扁平で研磨を認め，端部は欠損している。70は鉄鏃である。先端部と端部は欠損している。矢柄装着痕が一部認められる。



第66図 十三塚遺跡7号竪穴住居跡位置図



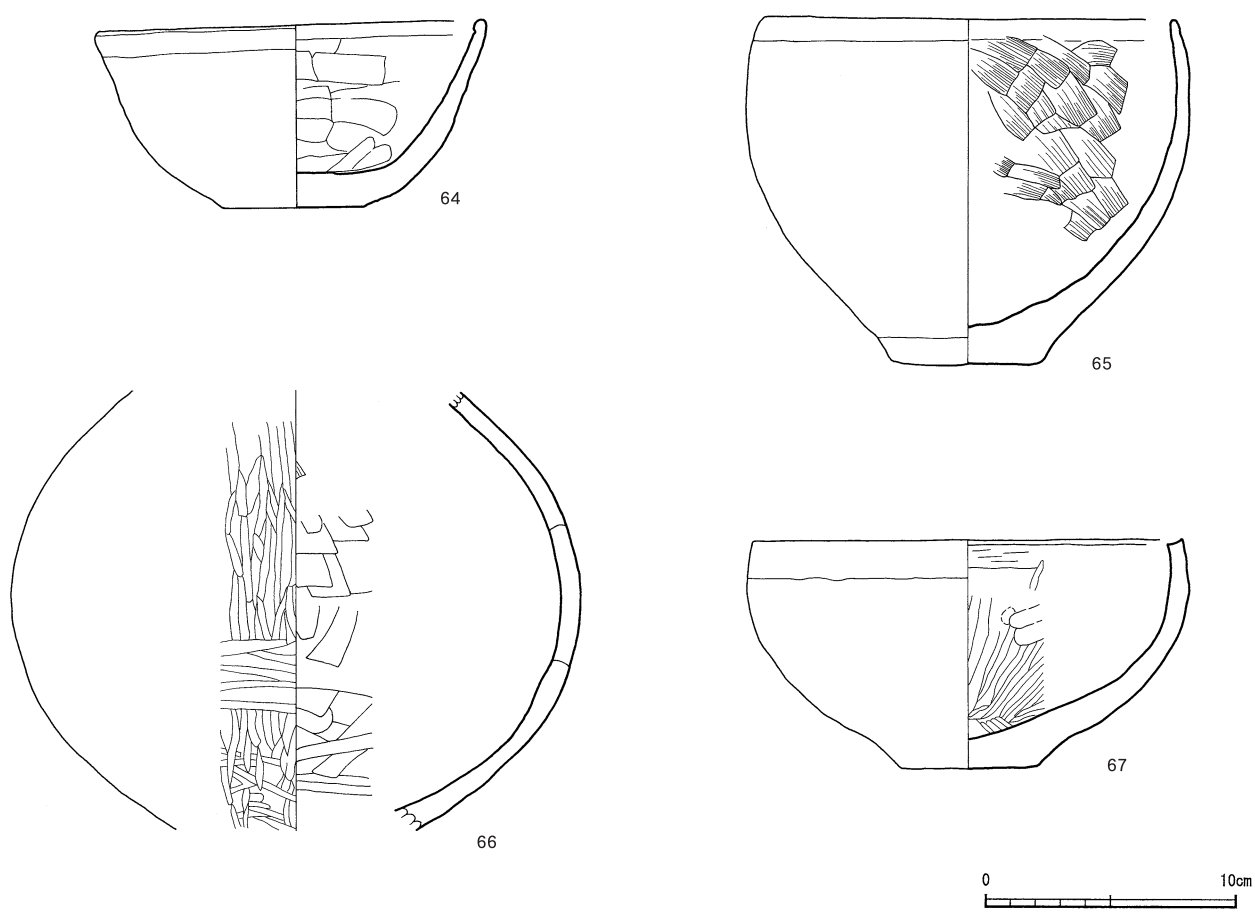
第67図 十三塚遺跡 7号竪穴住居跡



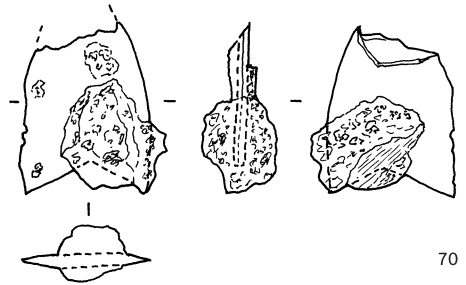
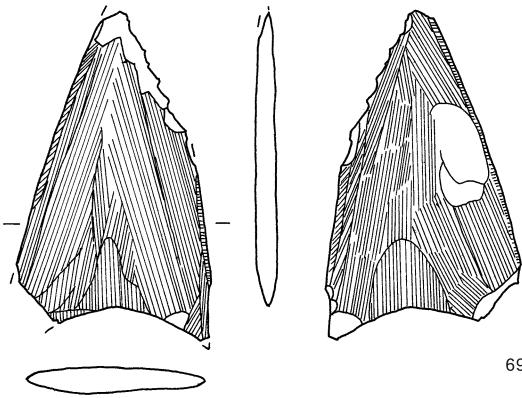
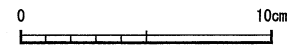
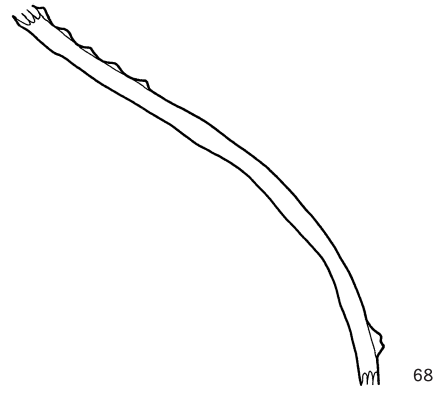
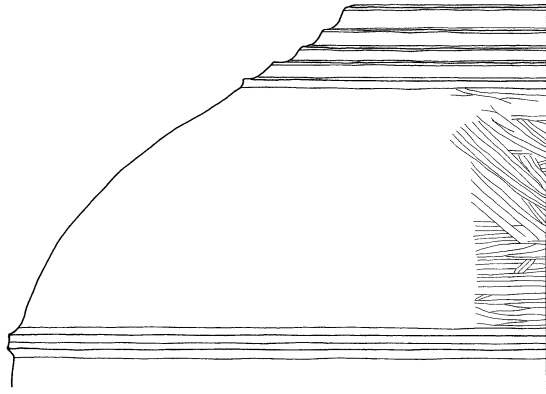
第68図 十三塚遺跡 7号竪穴住居跡遺物出土状況図



第69图 十三塚遺跡7号竖穴住居跡出土遺物状況图



第70图 十三塚遺跡7号竖穴住居跡出土遺物1



第71図 十三塚遺跡7号竪穴住居跡出土遺物2

第20表 十三塚遺跡7号竪穴住居跡土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考
			部位	法量 (cm)			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
				口径	底径	器高												
70	64	鉢	完形	15.6	5.6	7.5	橙	黒	ナデ	ナデ	○			○		岩片	良	スス付着
	65	鉢	完形	16.6	6.0	13.8	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	
	66	鉢	胴部	—	—	—	橙	橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	胴部最大径 22.7cm
	67	鉢	完形	17.2	5.4	9.0	橙	明褐	ナデ	ナデ	○	○		○			良	
71	68	壺	頸部~胴部				明赤褐	明赤褐	ミガキ	ナデ	○	○		○			良	スス付着

第21表 十三塚遺跡7号竪穴住居跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
71	69	磨製石鎌	粘板岩	4.35	2.6	0.3	3.47	

第22表 十三塚遺跡7号竪穴住居跡鉄製品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
71	70	鉄鎌	鉄	2.3	1.95	7.5	7.0	

8号竪穴住居跡（第72～75図）

検出状況 N-17区，検出面はⅡf層であった。ここは2号住居と同じく，池田降下軽石層が方形状に確認できなかったことから遺構と判断し，2号住居跡と同様にミニトレンチを設定して掘り下げていく方法を用いて調査を行った。また，この住居跡から西側へ約6mほどの所に掘立柱建物跡3号と土坑5・6号も検出されている。

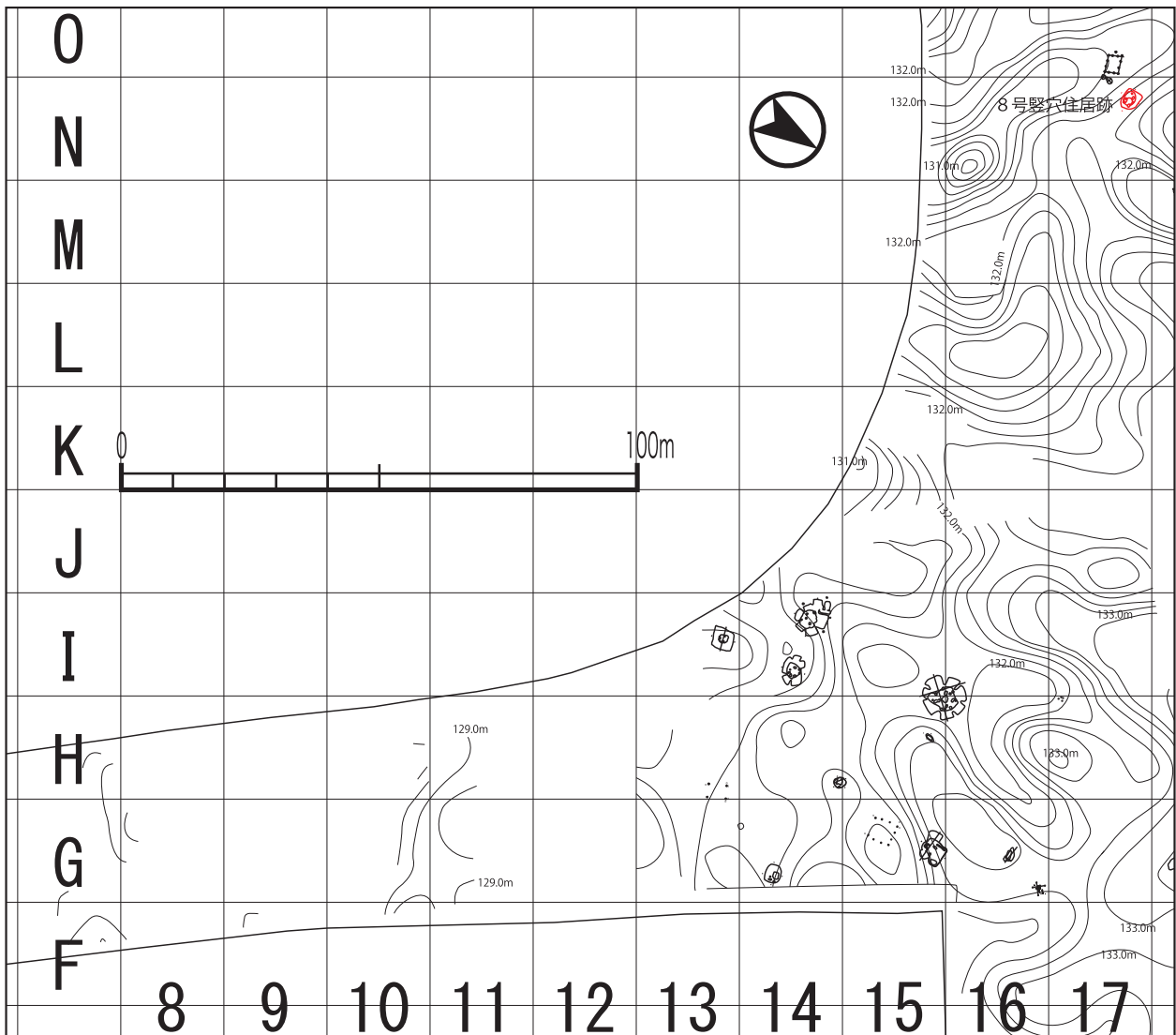
形状と規模 基本となる平面プランは，西側は隅丸方形状で，東側は若干円形状になっている。長軸は3.84m，短軸は3.2mを測り，正方形度はかなり高い。検出面からの深さは，浅い部分で約6～8cm，深い部分で約20cmであった。浅い部分に関しては，検出面が低かったことによるものと考えられる。

この住居跡からは4基のピットが検出され，住居の中央部に2基，ほぼ南側に2基配列されている。ピット間の距離は，P1→P2が約190cm，P3→P4が約70cmである。これらのピットの断面の形状をみると，下面部は底面になっている。それぞれのピットの検出面からの深さは，P1が約55cm，P2が約85cm，P3・P4が約

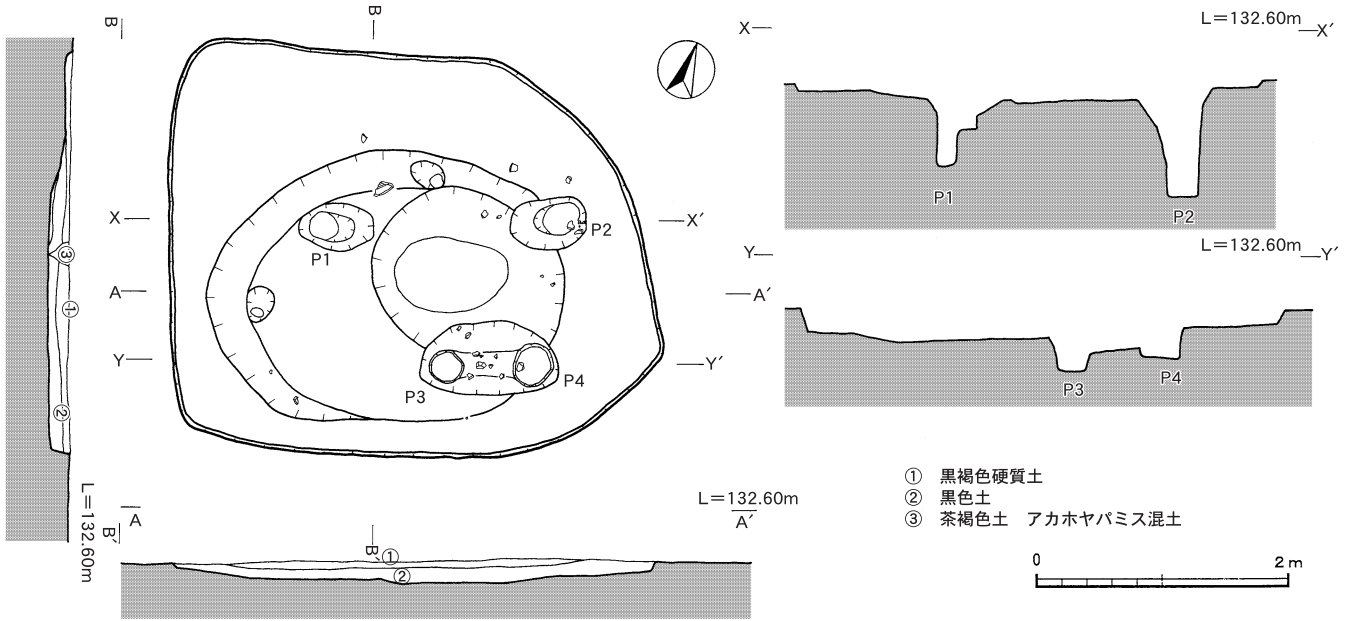
25～35cmである。このようなことから，これらのピットは，この住居に伴う，柱穴の可能性が高いと考える。

埋土 埋土はⅡ層と思われる茶褐色土層を基本とし，オレンジ色のパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，アカホヤパミスがブロック状に混ざっており，若干堅めであり，貼床を形成していたものであると思われる。下部には黒橙褐色の土もみられた。ピット内の埋土は同じくⅡ層の土と思われる。かなり柔らかい。

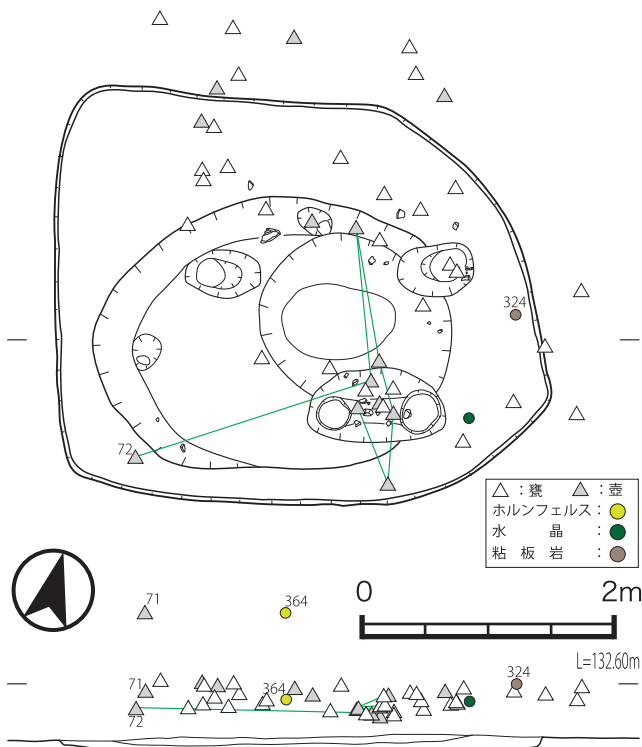
出土遺物（第75図：71・72） 竪穴住居跡から出土した遺物は51点であり，復元できた遺物は2個体あり，2点を図化した。P3・P4付近でやや集中して出土している。71は鉢形土器の口縁部である。口径は22.4cm，外面，内面ともに比較的丁寧なナデ調整を施している。色調，胎土観察より同一個体であると考えられる。両方ともほぼ床面と思われる地点から出土している。72は鉢形土器の胴部～底部である。底径は9.5cmである。他にも肉眼で確認できた炭化物も出土している。また，水晶の原石が1点出土している。6cm程の大きめの水晶で敲打痕等は確認できなかった。



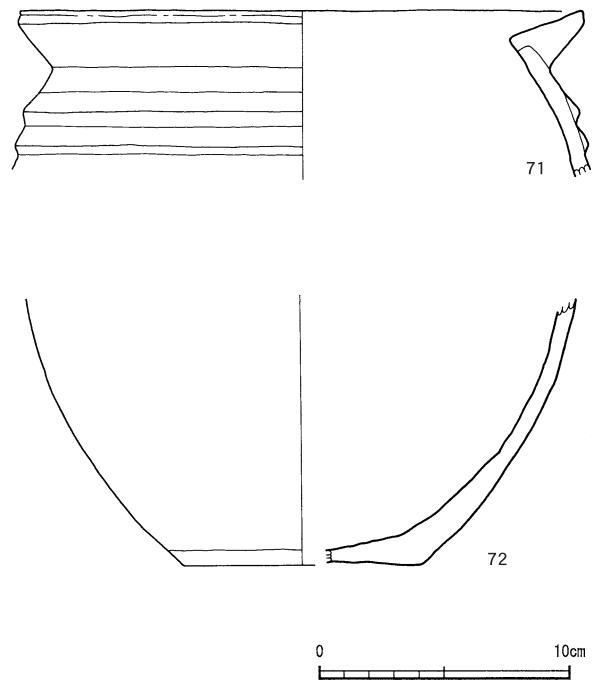
第72図 十三塚遺跡8号竪穴住居跡位置図



第73図 十三塚遺跡 8号竪穴住居跡



第74図 十三塚遺跡 8号竪穴住居跡遺物出土状況図



第75図 十三塚遺跡 8号竪穴住居跡出土遺物

第23表 十三塚遺跡 8号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	器部			色調		器面調整		胎土						焼成	備考	
			部位	法量 (cm)			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石			その他
				口径	底径	器高												
第75図	71	壺	口縁部	22.4	—	—	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	
	72	壺	胴部~底部	—	9.5	—	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	

イ 掘立柱建物跡（第76～78図）

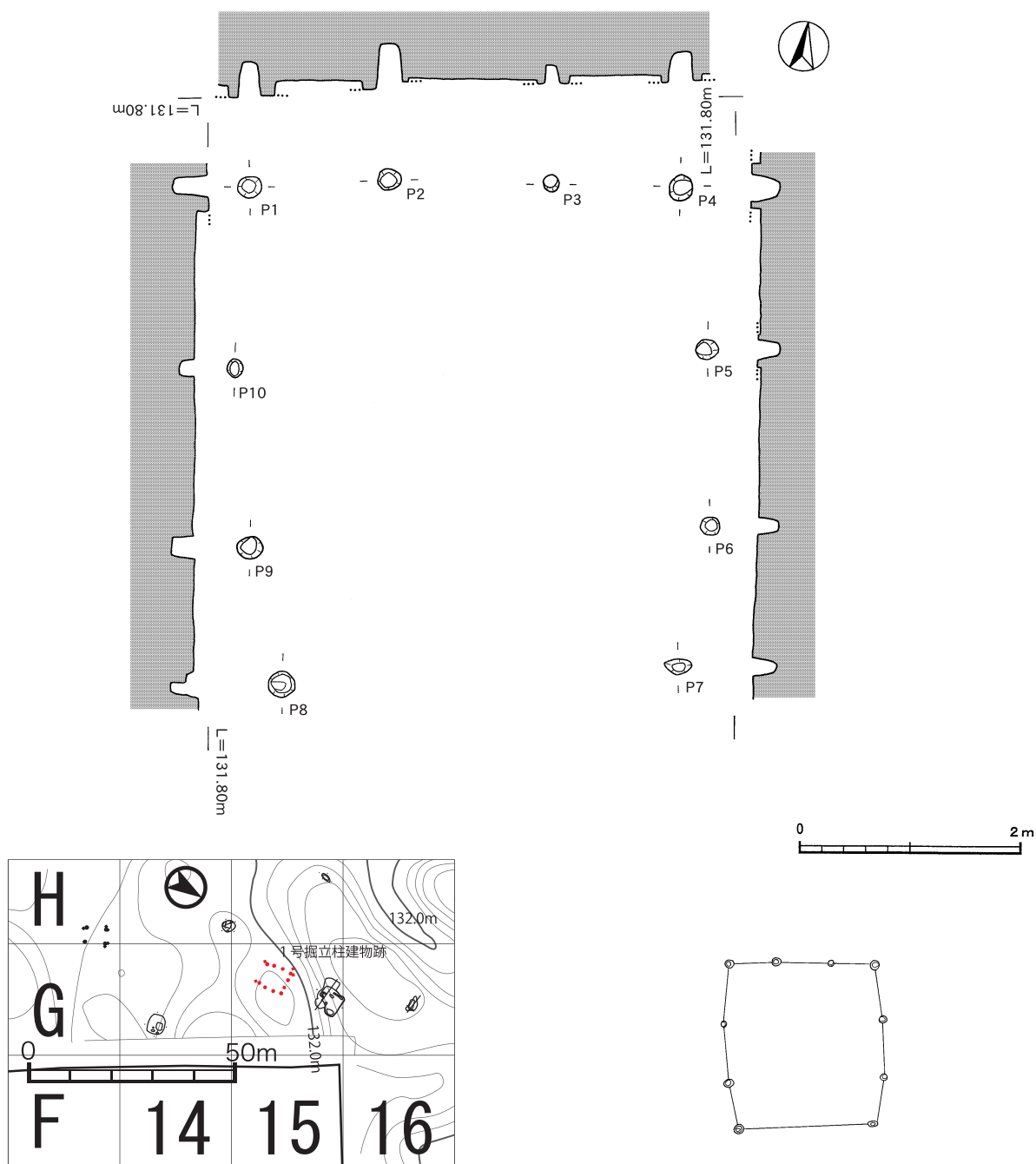
本遺跡からは掘立柱建物跡は3棟検出された。

1号掘立柱建物跡（第76図）

G-15区でⅡf層上面にて検出された。建物の規模は、3間×3間、10個のピットからなり、主軸は略南北方向である。桁行の平均は約4.5m、梁行の平均は約4.0mであり、柱間寸法の平均は桁行柱間が約1.5m、梁行柱間が約1.3mである。平面形はP7とP8がやや内側に入り込んでいるが、ほぼ長方形を呈しており、床面積はお

よそ18.0㎡である。周辺の土は堅く茶色っぽい黒褐色であり、池田降下軽石が含まれている。

ピットは、ほぼ円形を呈し、平均して径21.5×18.4cm、深さ24cmであり、ほぼ同規模であるが、P2が比較的深い。ピット中の埋土は黒褐色で柔らかく、アカホヤ層や白色石などの細粒も含まれる。P7とP8の間にピットがあるのではないかと検出を試みたが、確認できなかった。埋土中より出土遺物は確認できなかった。



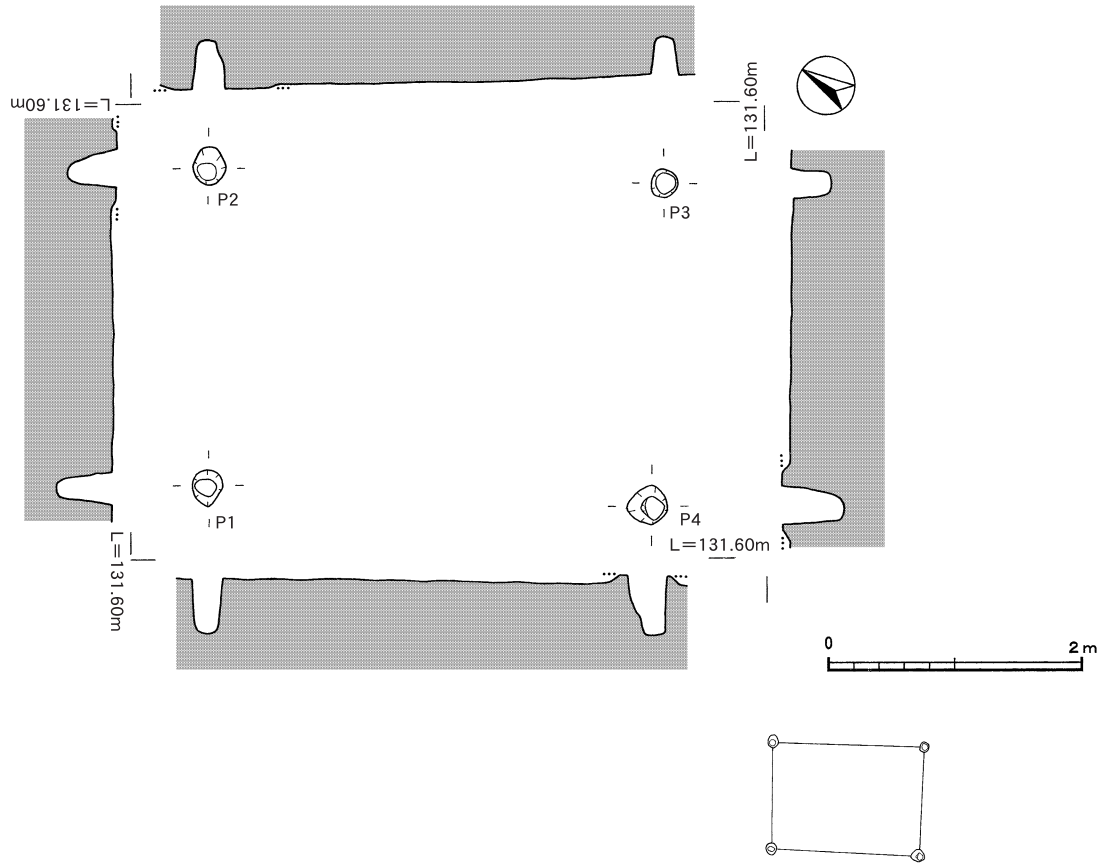
第76図 十三塚遺跡1号掘立柱建物跡

2号堀立柱建物跡（第77図）

H-13区，Ⅱf層上面で検出された。建物の規模は，1間×1間，4個のピットからなり，長軸方向は南北に近い形であり，桁行の平均は約3.6m，梁行の平均は約2.5mである。ほぼ長方形を呈しており，床面積はおよ

そ8.8㎡である。

ピットは平均して径28.5×25.8cm，深さ41cmのほぼ円形を呈している。ピット中の埋土は黒褐色で柔らかい。埋土中より出土遺物は確認されなかった。



第77図 十三塚遺跡2号堀立柱建物跡

第24表 十三塚遺跡1・2号堀立柱建物跡計測表

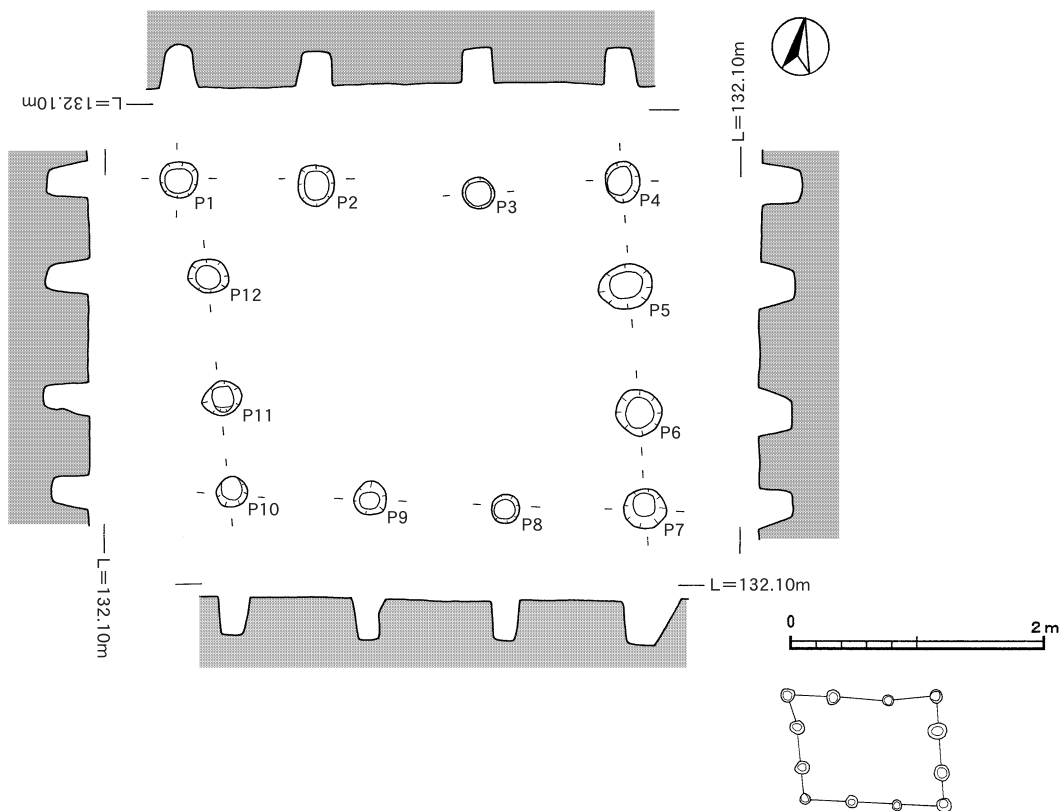
1号	主軸方向	南 北				ピットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
	桁 行 (m)	P 1 - P 8 4.54		P 4 - P 7 4.37					
	梁 行 (m)	P 1 - P 4 3.95	P 5 - P 10 4.29	P 6 - P 9 4.22	P 7 - P 8 3.67	P 1	22	19	33
	桁行柱間 (m)	P 1 - P 10 1.68	P 9 - P 10 1.63	P 8 - P 9 1.25	P 4 - P 5 1.52	P 2	22	19	42
		P 5 - P 6 1.60	P 6 - P 7 1.30			P 3	16	14	17
	梁行柱間 (m)	P 1 - P 2 1.28	P 2 - P 3 1.49	P 3 - P 4 1.18	P 5 - P 10 4.29	P 4	24	22	27
		P 6 - P 9 4.22	P 7 - P 8 3.67			P 5	21	18	21
	主軸方向	南 北				P 6	18	16	19
2号	桁 行 (m)	P 1 - P 4 3.50		P 2 - P 3 3.60		P 7	27	15	22
	梁 行 (m)	P 1 - P 2 2.52		P 3 - P 4 2.51		P 8	24	24	24
						P 9	24	21	22
	主軸方向	南 北				P 10	17	16	14
	桁 行 (m)	P 1 - P 4 3.50		P 2 - P 3 3.60		ピットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
	梁 行 (m)	P 1 - P 2 2.52		P 3 - P 4 2.51		P 1	28	24	44
						P 2	30	27	39
						P 3	24	21	31
						P 4	32	31	50

3号掘立柱建物跡（第78図）

0-17区で土坑5・6号の西側に隣接するように検出された。建物の規模は3間×3間、12個のピットからなり、主軸は略南北方向である。桁行の平均は約2.5m、梁行の平均は約3.4mで桁間寸法の平均は桁行柱間が約1.3m、梁行柱間が約1.6mである。

ピットは平均して径31.9×29cm、深さ31cmのほぼ円形

を呈しているが、長径25cmと小さめのP8から、長径約43cmとやや大きめのP5まであり、一定ではない。ピット中の埋土はやや砂質で、粒が細かい白色パミスが少し混ざっている。池田降下軽石もわずかに混ざっているが、流れ込んだものではないかと思われる。埋土中より出土遺物は確認されなかった。



第78図 十三塚遺跡 3号掘立柱建物跡

第25表 十三塚遺跡 3号掘立柱建物跡計測表

主軸方向	南 北				ピットNo	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
	P 1 - P10	P 2 - P 9	P 3 - P 8	P 4 - P 7				
桁 行 (m)	2.53	2.54	2.52	2.57	P 1	30	29	33
梁 行 (m)	P 1 - P 4	P 5 - P12	P 6 - P11	P 7 - P10	P 2	34	29	28
	3.52	3.33	3.31	3.29	P 3	26	26	28
桁行柱間 (m)	P 1 - P12	P11 - P12	P10 - P11	P 2 - P 9	P 4	33	28	30
	0.83	0.98	0.73	2.54	P 5	43	36	28
梁行柱間 (m)	P 3 - P 8	P 4 - P 5	P 5 - P 6	P 6 - P 7	P 6	39	38	27
	2.52	0.85	1.02	0.74	P 7	34	32	28
桁行柱間 (m)	P 1 - P 2	P 2 - P 3	P 3 - P 4	P 5 - P12	P 8	25	22	32
	1.10	1.28	1.15	3.33	P 9	28	27	33
梁行柱間 (m)	P 6 - P11	P 7 - P 8	P 8 - P 9	P 9 - P10	P10	26	25	30
	3.31	1.11	0.98	0.73	P11	33	28	36
					P12	32	28	34

ウ 土坑 (第79～86図)

土坑は7基検出された。全て単独で検出された。うち3基は住居跡と同様、ゴボウのトレンチャーの削平を受けている。

1号土坑 (第80図：73, 第81図)

H-15区のⅡe層で検出された。平面形は、長楕円形を呈している。長径×短径は195×85cmで、深さ33cmである。埋土は黒褐色の砂質土であり、底部には池田降下軽石が確認できた。遺物は土坑内で15点、土坑に近い部分で9点の弥生土器計24点が出土した。73は壺の口縁部である。内・外面ともミガキが施されており、雲母を多く含む。

2号土坑 (第81図)

G-16区のⅡe層で検出された。平面形は東西方向を長軸とした不定形なものであり、西側の方へ伸びている。長径×短径は300×145cmで深さ42cmである。埋土はアカホヤ混じりの黒褐色の密な砂質土(東側)や黒褐色粘質土である。検出層、埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。

3号土坑 (第82図)

G-18区のⅡf層(池田降下軽石層)で検出された。底はⅣ層上面まで掘り込まれている。平面形は円に近い方形を呈している。長径×短径は217×212cm、深さ66cmで比較的深い。黒色の埋土中に池田降下軽石が入っている。柱穴を探したが、それらしいものは見つからなかった。検出層、埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。埋土中から出土した遺物はなかった。

4号土坑 (第83図)

O-17区のⅡf層(池田降下軽石層)で検出された。平面形は楕円形を呈している。長径×短径は124×57cmで、深さ35cmである。埋土は黒色の堅い土で、床面は樹痕のため、でこぼこしている。検出層、埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。埋土中からの出土遺物はなかった。

5号土坑 (第83図)

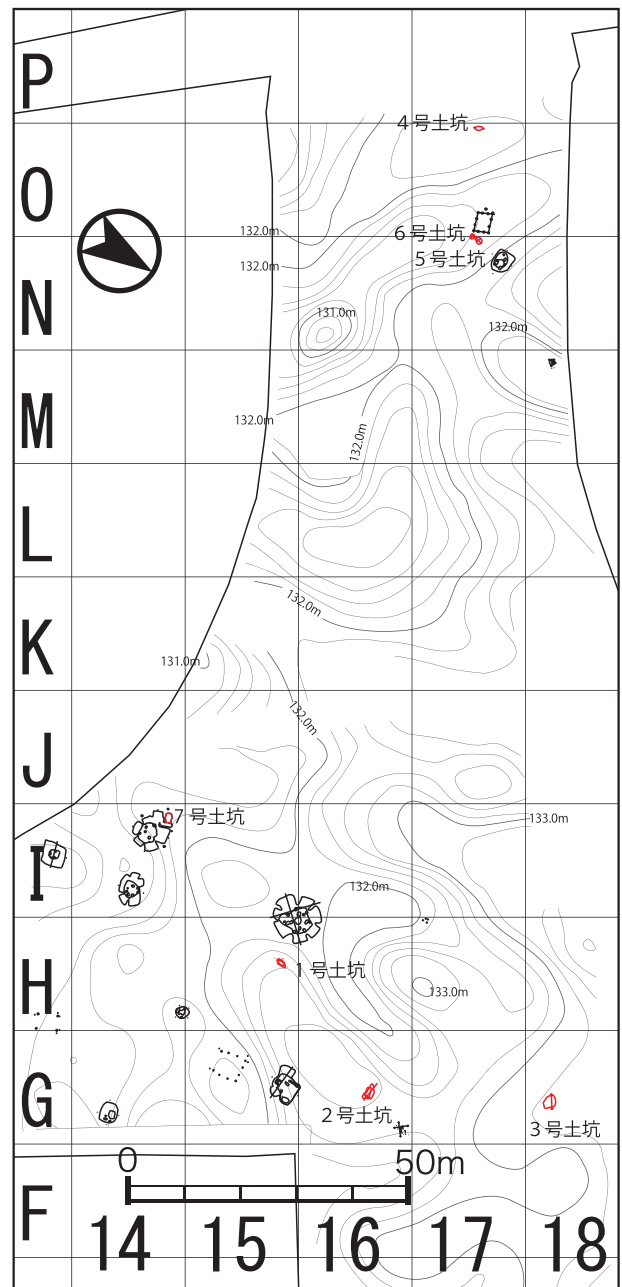
N-17区のⅡe層上面で検出された。6号土坑と隣接し、3号掘立柱建物跡と近接している。また、約3m北には、8号竪穴住居跡も検出されている。平面形は楕円形を呈している。長径×短径は153×90cm、深さは26cmで、床面は平坦である。埋土は上面が暗茶褐色土、床面は上面がⅡe層で黒褐色の砂質土であり、粒が細かい白色パミスが少し混ざっている。土坑内から弥生土器が16点出土した。

6号土坑 (第84・85図：74・75)

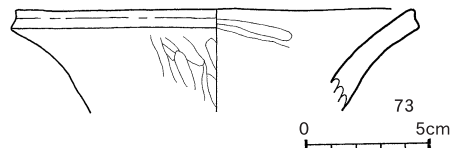
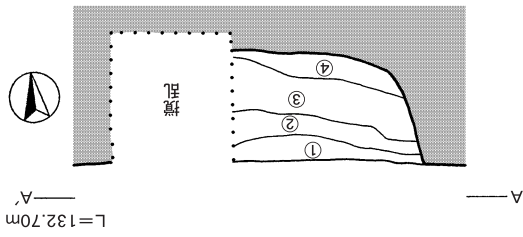
N・O-17区、Ⅱc層上面で検出された。5号土坑と隣接し、3号掘立柱建物跡と近接している。また、約3m北には、8号竪穴住居跡も検出されている。平面形はほぼ円形に近い形を呈している。長径×短径は88×76cmで、深さ29cmで、ほかの土坑より小さい。床面は平坦である。埋土は上面が暗茶褐色土、床面はⅡe層で、黒褐色の砂質土であり、粒が細かい白色パミスが少し混ざっている。土坑内から弥生土器が6点出土した。うち2点を図化した。74・75は外面は黒褐色系の色調でナデが施された壺形土器である。

7号土坑 (第86図)

I-14区のⅡf層(池田降下軽石層)上面で検出された。住居跡3号に隣接して検出された。住居と土坑の間に近世のイモ穴が切り合っており、住居の張り出しが、土坑なのか検討した結果、土坑と判断した。平面形は楕円形を呈している。長径×短径は167×114cmで、深さ21cmと、比較的浅い。埋土は上面が黒褐色の弱粘質土、底面はアカホヤ火山灰土混じりの茶褐色土である。検出層、埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。埋土中から出土した遺物はなかった。

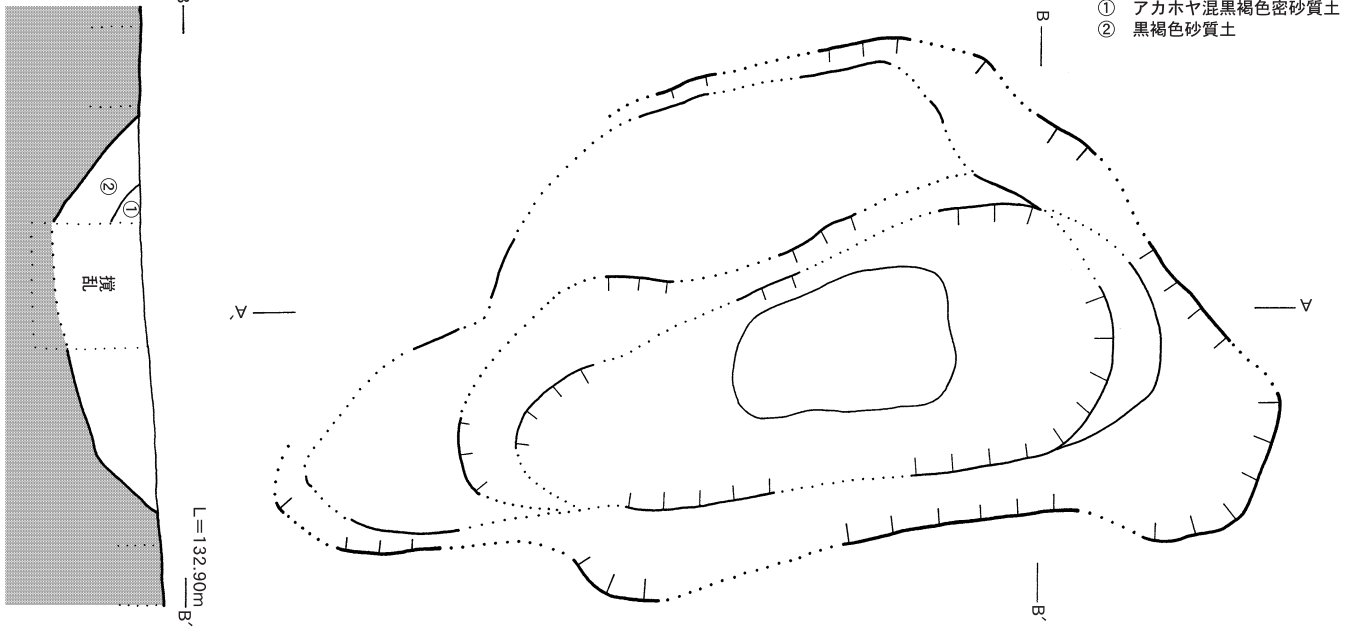
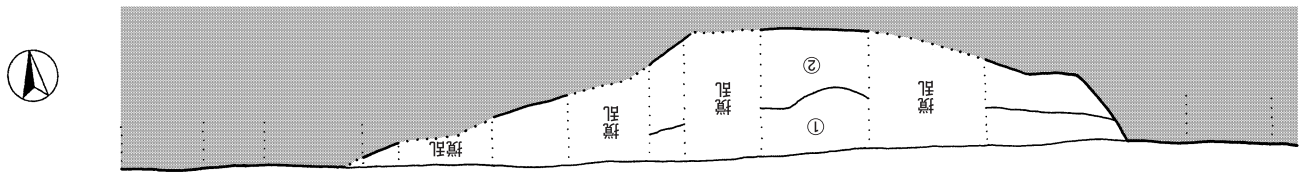
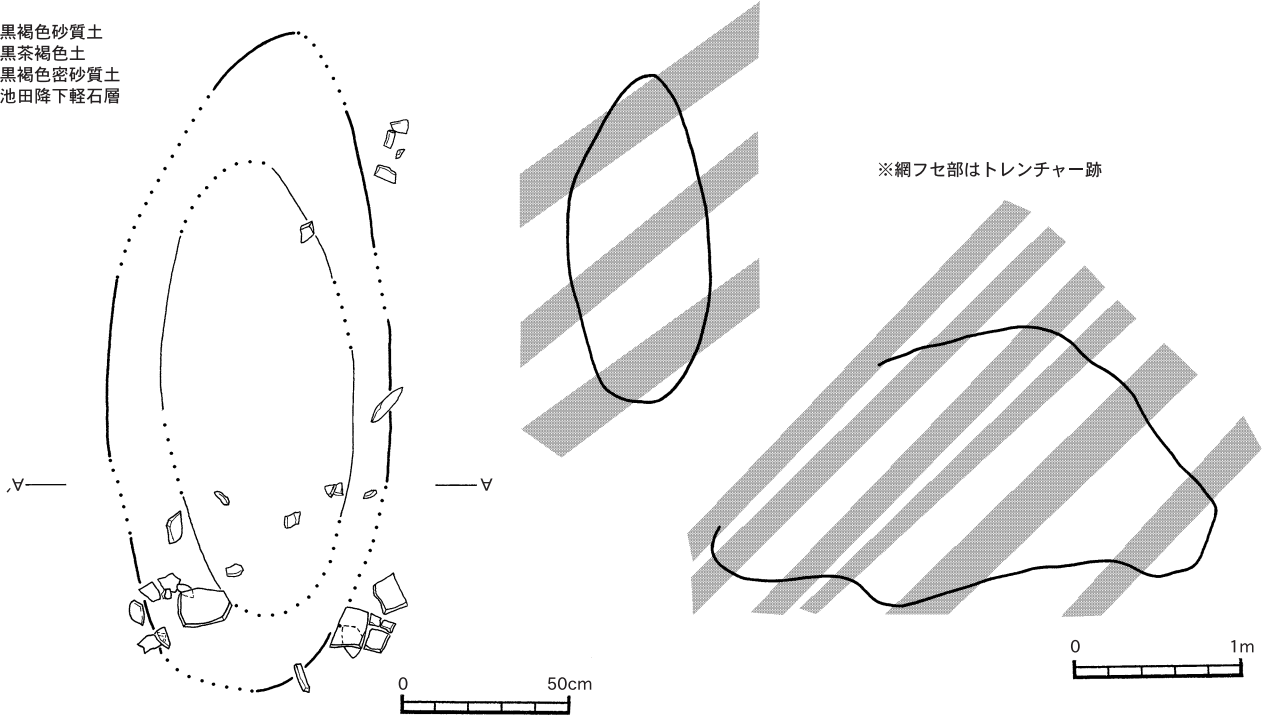


第79図 十三塚遺跡土坑位置図

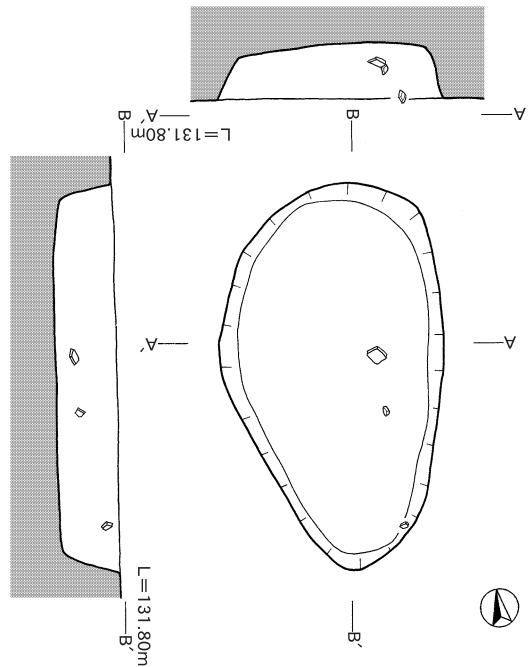
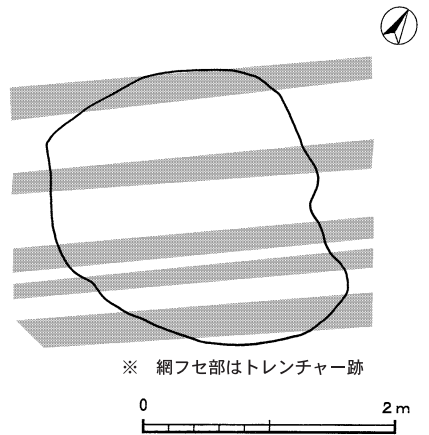
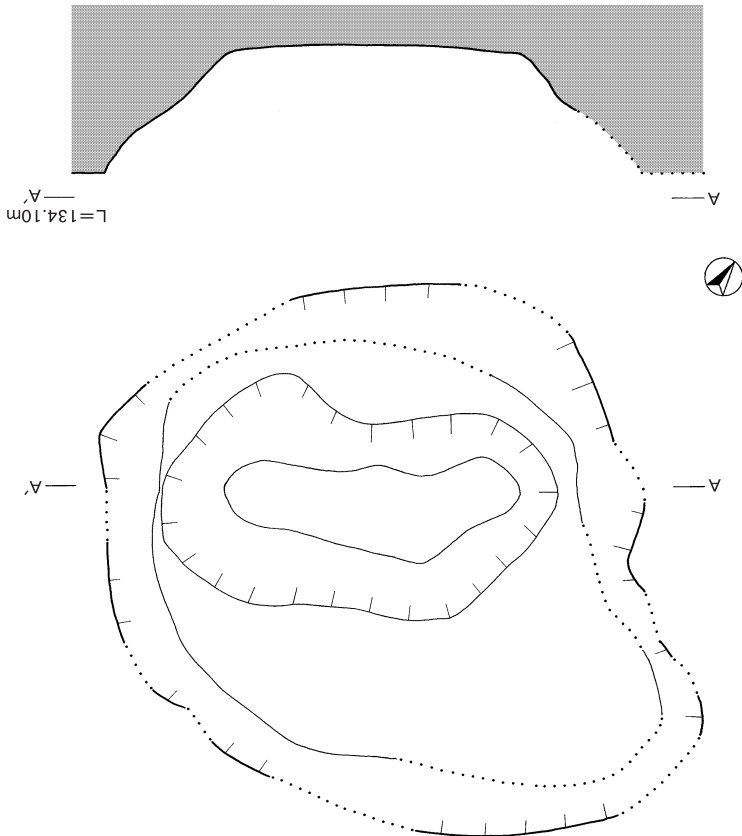


第80図 十三塚遺跡1号土坑出土遺物

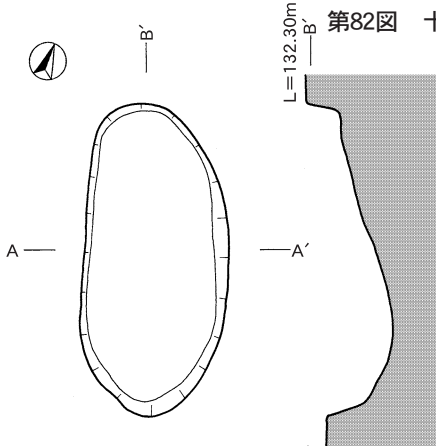
- ① 黒褐色砂質土
- ② 黒茶褐色土
- ③ 黒褐色密砂質土
- ④ 池田降下軽石層



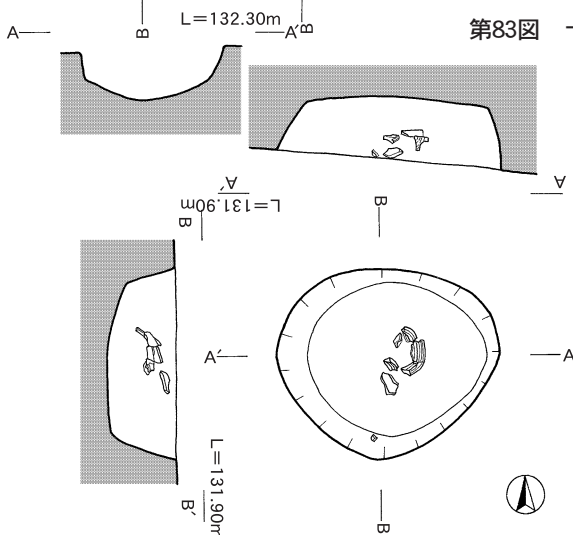
第81図 十三塚遺跡1・2号土坑



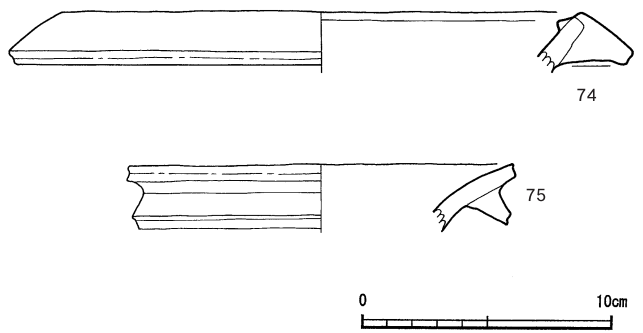
第82図 十三塚遺跡 3号土坑



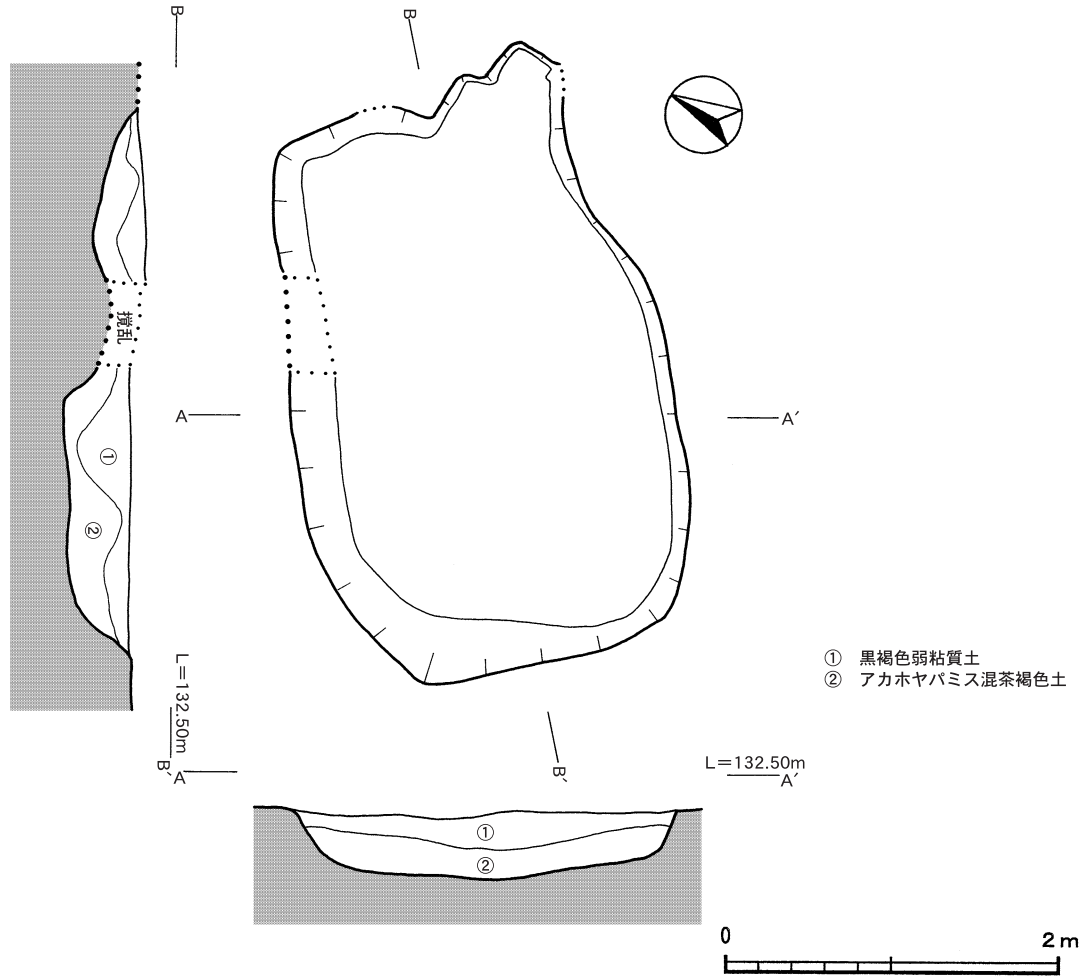
第83図 十三塚遺跡 4・5号土坑



第84図 十三塚遺跡 6号土坑



第85図 十三塚遺跡 6号土坑出土遺物



第86図 十三塚遺跡7号土坑

第26表 十三塚遺跡土坑内出土遺物観察表

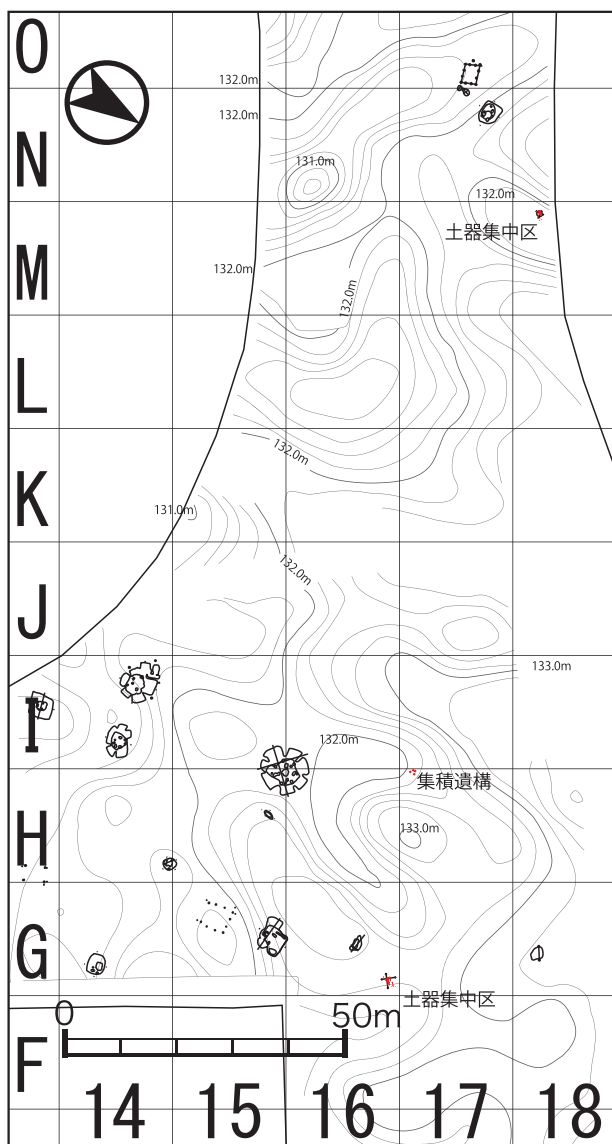
挿図	掲載番号	出土区	層	器種	部位	口縁部径 (cm)	色調		器面調整		胎土					焼成	備考	
							内面	外面	内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石			その他
80	73	H-15	I	壺	口縁	15.6	にぶい橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	土坑1号
85	74	N-17	II b	壺	口縁	24.4	黒褐	褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	土坑6号
	75	N-17	II b	壺	口縁	15.4	暗褐	褐	ナデ	ミガキ		○		○		岩片	良	土坑6号

第27表 十三塚遺跡土坑一覧表

土坑番号	検出区	形状	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	H-15	楕円形	195	85	33	
2	G-16	不定形	300	145	42	
3	G-18	不定形	217	212	66	
4	O-17	楕円形	124	57	35	
5	N-17	楕円形	153	90	26	竪穴住居跡8号, 土坑6号に隣接
6	N・O-17	楕円形	88	76	29	竪穴住居跡8号, 土坑5号に隣接
7	I-14	円形	167	114	21	竪穴住居跡3号に隣接

エ 集積遺構（第87・88図）

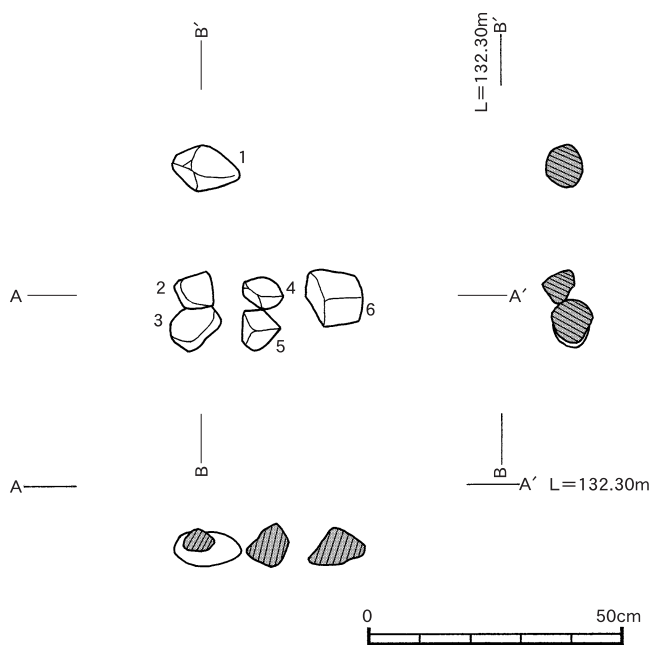
H-17区、II b層で検出された。拳大の石が長軸82cm、短軸75cmの中に、6個並列状に置かれたような状況で検出した。石材は安山岩、砂岩、凝灰岩等である。磨面、打痕等は確認できなかった。しかし、視覚的には意図的に置かれたものであると判断し、遺構と断定したが、遺構の性格は明確でなく、結論づけることはできない。今後の類例を待ちたい。



第87図 十三塚遺跡集積遺構・土器集中区位置図

オ 土器集中区（第89・90図：G-16区、第91・92図：M-18区）

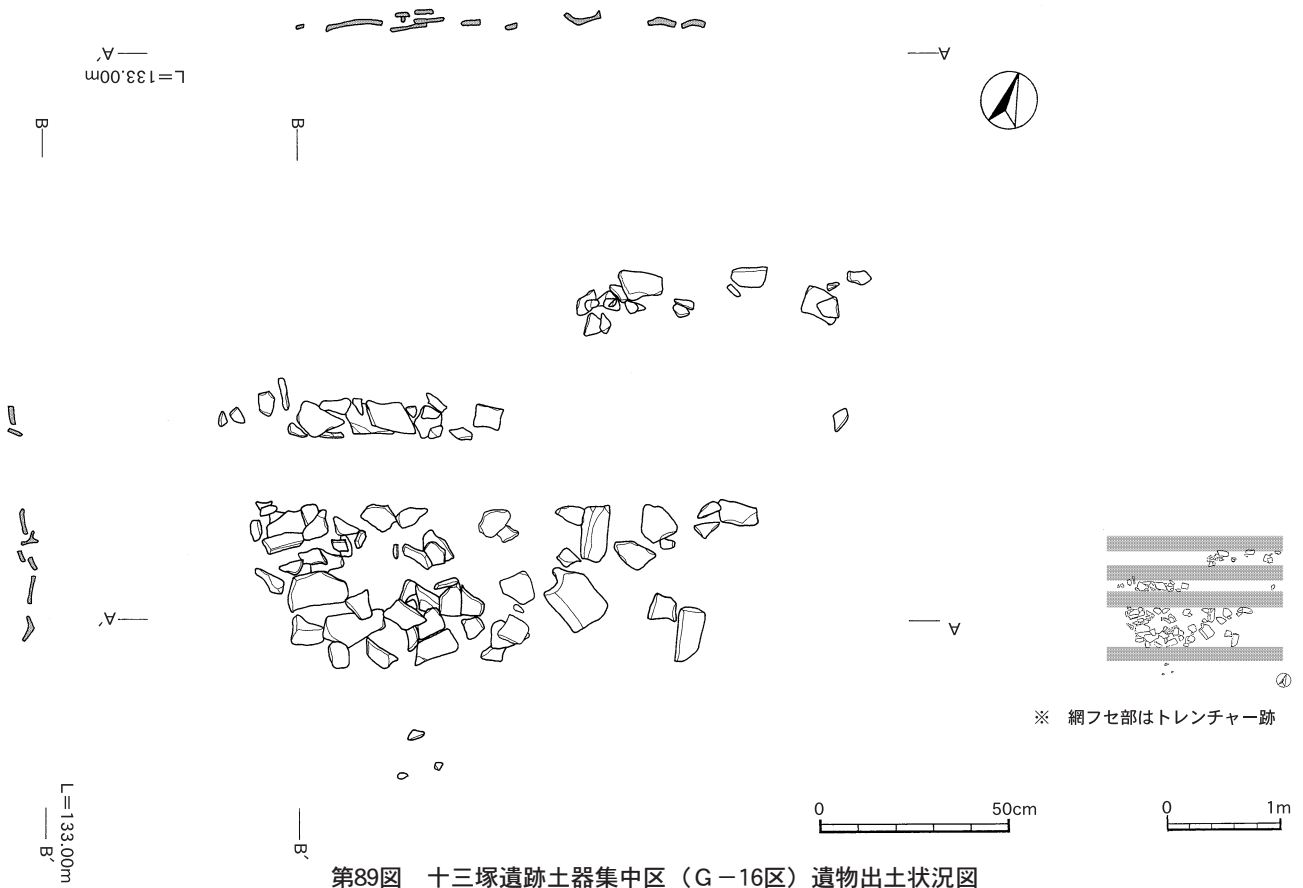
G-16区は、大甕の土器集中区である。II b層で出土した。ほぼ半分をトレンチャーによる掘削を受けている。M-18区は、壺の土器集中区が確認された。ここもII b層で出土している。どちらの土器集中区も掘り込み等、遺構の検出は確認できなかったが、甕、壺どちらも大型の土器であり、人為的に置かれたか、廃棄されたものではないかと考える。



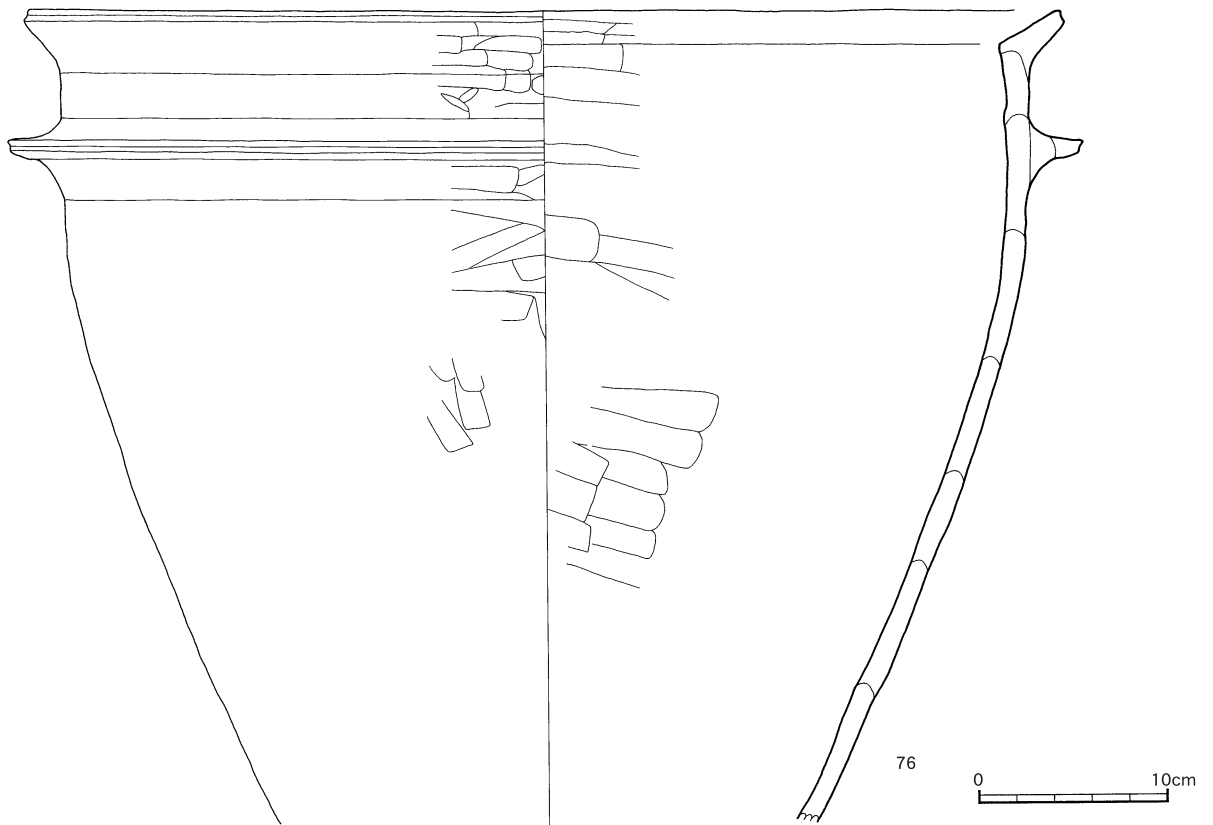
第88図 十三塚遺跡集積遺構

第28表 十三塚遺跡集積遺構石観察表

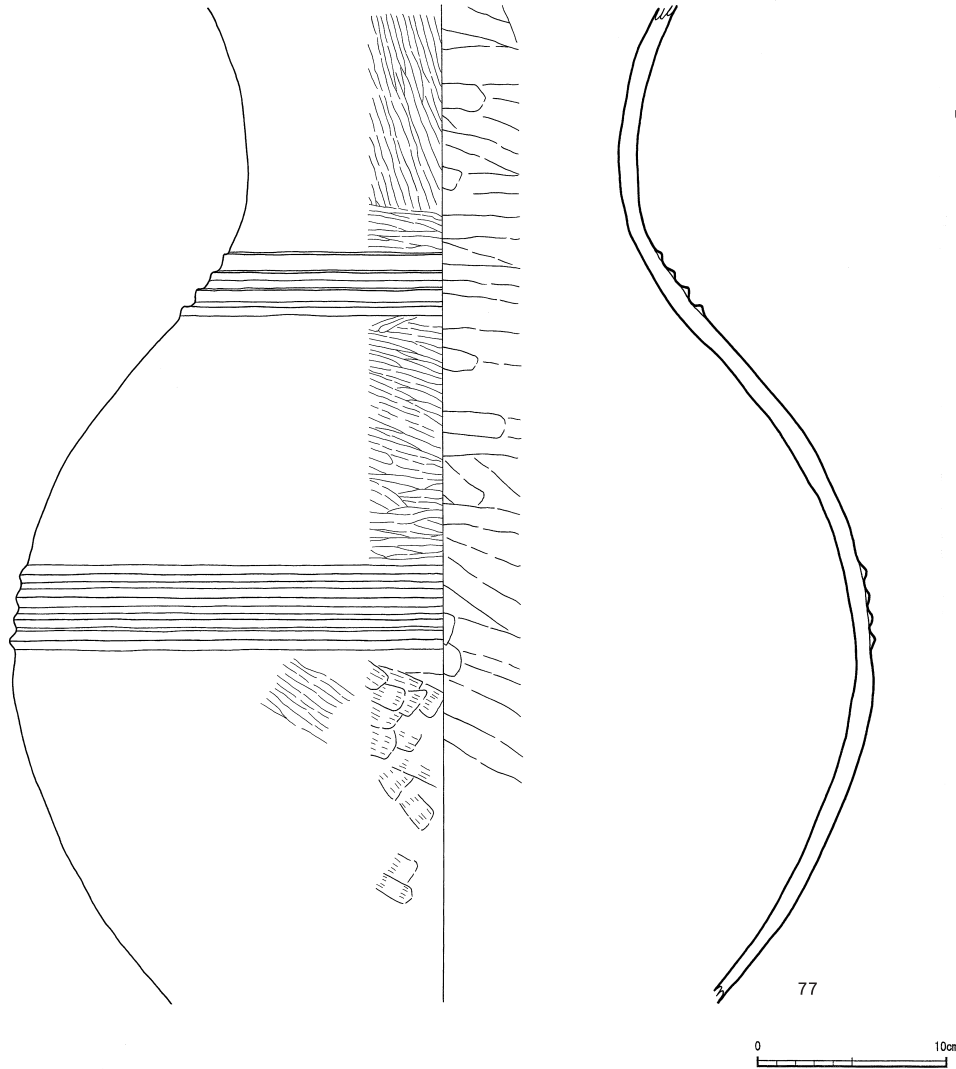
石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
安山岩	12.5	8.0	7.2	675	1
砂 岩	8.0	7.7	4.7	420	2
凝灰岩	10.1	7.8	6.7	850	3
安山岩	7.0	6.2	5.5	365	4
安山岩	7.4	7.0	6.0	390	5
安山岩	11.4	11.1	7.2	871	6



第89図 十三塚遺跡土器集中区 (G-16区) 遺物出土状況図



第90図 十三塚遺跡土器集中区 (G-16区) 土器



第92図 十三塚遺跡土器集中区 (M-18区) 土器



第91図 十三塚遺跡土器集中区 (M-18区) 遺物出土状況図

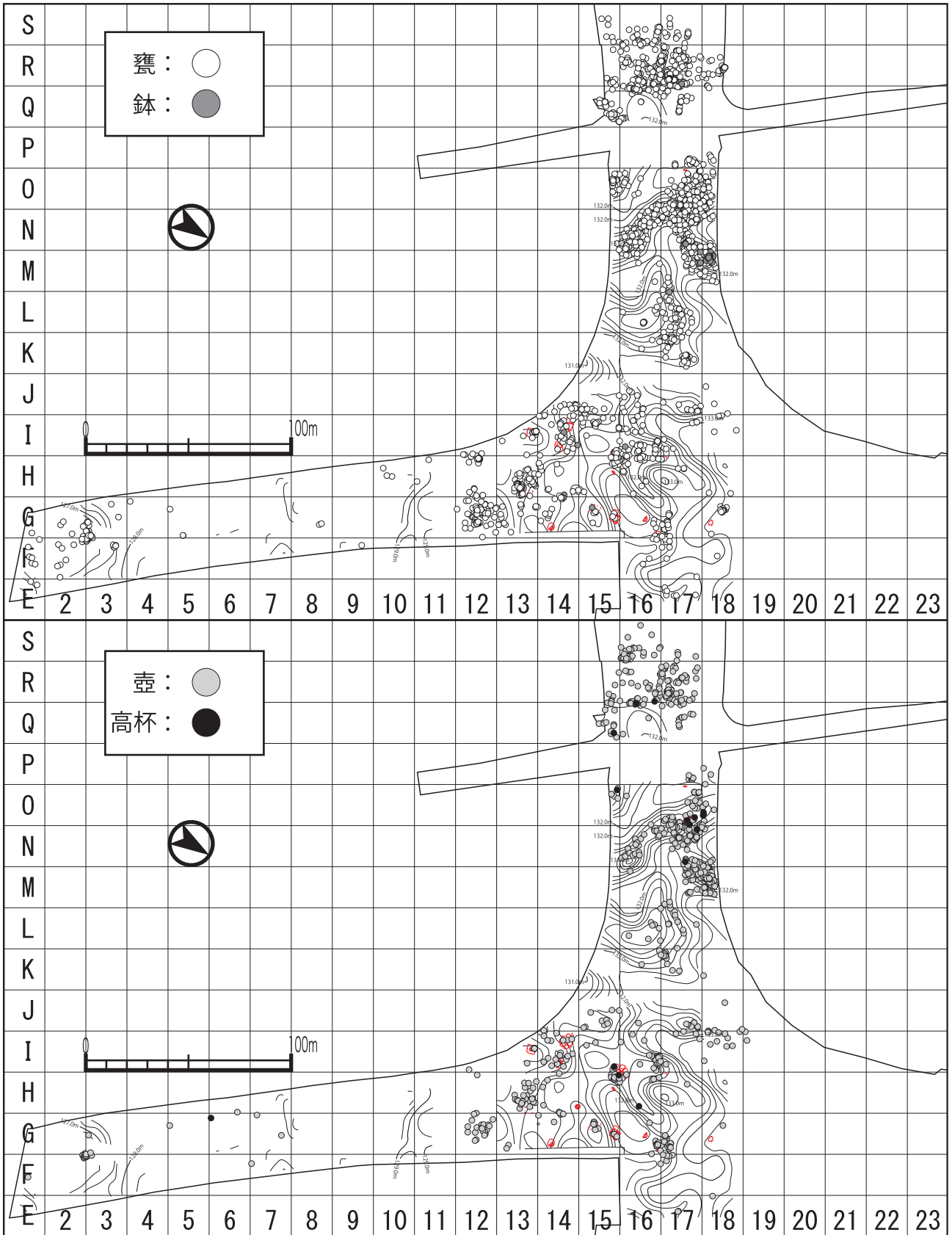
第29表 十三塚遺跡土器集中区 土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	取上番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土					焼成	備考		
						部位	法量 (cm)			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石			その他	
							口径	底径	胴部最大径													器高
90	76	G-16	II-b	—	大甕	口縁部~胴部	50.0	—	—	—	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		○		岩片	良	外方へ大きく立ち上がりながら内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部外側直下には略台形状貼付突帯を廻らす。突帯端面は凹む。
92	77	M-18	II-b	10839-1他	壺	頸部~胴部	—	—	45.2	—	赤褐	明赤褐	ミガキ	丁寧なナデ		○		○		岩片	良	肩部は張らず、頸部でしまり、外反して口縁部に至る器形と思われる。頸部及び胴部にはそれぞれ四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。

(2) 遺物 (第93図)

弥生時代の遺物としては、中期を中心として、土器 (甕・壺・鉢など)、土製品 (土製勾玉・円盤状土製品)、

石器 (磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・磨石・凹石・敲石・砥石など)、鉄器 (鉄鏃・詳細不明品) が出土した。



第93図 十三塚遺跡弥生時代土器分類別出土状況図

弥生時代前期末～中期初頭の土器

ア 土器 (第94・95図 78～111)

78～111は弥生時代前期末から中期初頭の特徴を持つ土器である。78～96は直口するか、やや内湾気味の口縁部に突帯がつき、刻目がつけられるものである。78～84は口縁部に2条の刻目のある突帯が張付けられている。80は胴部にも2条の刻目突帯が貼り付けられている。

85～90は口縁部に1条の刻目突帯が貼り付けられている。85は突帯が他よりも長い。88は胴部に1条の突帯が残る。90は口唇部内側に刻目がある。

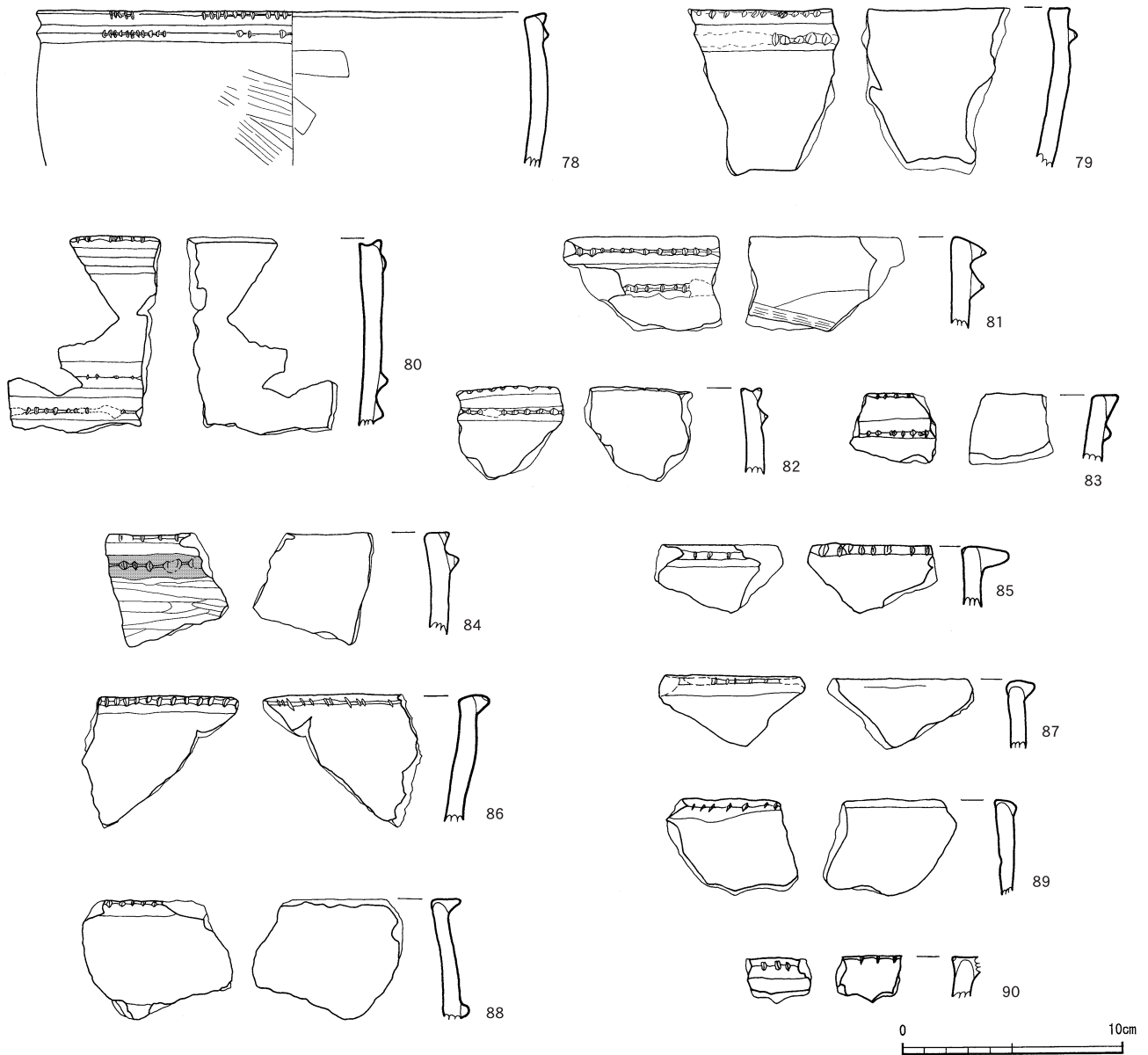
91～96は口縁部に刻目のない1条の突帯が貼り付けられている。93も口縁部に1条の突帯が貼り付けられているが、突帯の先端が削れており、刻目の有無は不明である。

97～102は胴部片で2条の刻目突帯が貼り付けられている。103・104は胴部に1条の刻目突帯が貼り付けられている。

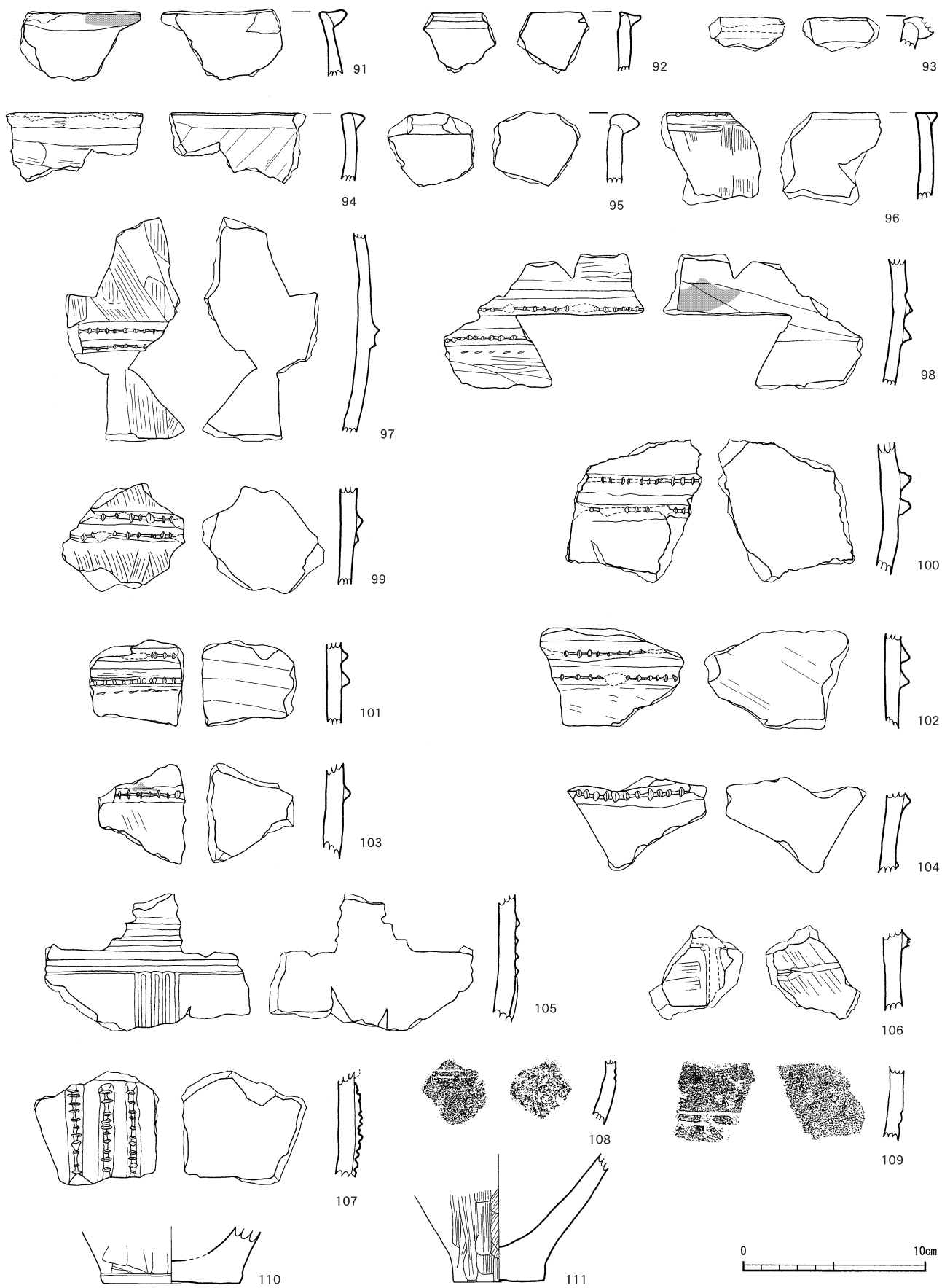
105は横位・縦位とも3条の突帯が貼り付けられている。106は横位・縦位とも1条の突帯が残るが、先端は削られている。107も胴部片で縦位の刻目突帯が3条貼り付けられており、その上には残存していないが、横位に突帯が貼り付けられていた痕跡が残っている。

108・109は壺の胴部片で外面に横位に2条の沈線が施されている。

110は壺の底部片で底部径は6.8cmである。111は壺の底部片で底部径は5.0cmである。厚めの底部から胴部は外に開く。器面調整は外面はハケメが、内面はナデが行われている。



第94図 十三塚遺跡弥生時代前期末～中期初頭の土器 1



第95図 十三塚遺跡弥生時代前期末～中期初頭の土器 2

第30表 十三塚遺跡弥生時代前期～中期初頭土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	法 量				色 調		器面調整		胎土						焼成	取上番号	備考
						口縁部径 (cm)	底径 (cm)	胴部最大径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
94	78	H-18	II b	甕	口縁	23.0	-	-	-	にぶい 橙	橙	ハケメ	ナデ		○	○	○			良	5726他	外面にスス 附着
	79	G-10	II a	甕	口縁	-	-	-	-	灰黄褐	にぶい 黄橙	ナデ	ナデ	○	○		○		良	11467		
	80	J-17	II	甕	口縁	-	-	-	-	にぶい 黄橙	にぶい 橙	ナデ	ナデ	○	○			岩片	良	1435		
	81	L-16	II b	甕	口縁	-	-	-	-	にぶい 黄橙	にぶい 褐	ミガキ ナデ	ナデ	○	○	○			良	3191		
	82	I-16	II	甕	口縁	-	-	-	-	褐	灰	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	1682		
	83	O-17	II b	甕	口縁	-	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○			岩片	良	9524		
	84	L-16	II	甕	口縁	-	-	-	-	にぶい 橙	にぶい 橙	ミガキ ナデ	ナデ	○	○			岩片	良	3485	外面にスス 附着	
	85	H-16	II c	甕	口縁	-	-	-	-	褐	にぶい 黄褐	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	2074		
	86	G-3	II d	甕	口縁	-	-	-	-	橙	にぶい 黄橙	ミガキ	ミガキ	○	○	○			良	12495他		
	87	G-5	II d	甕	口縁	-	-	-	-	にぶい 黄橙	橙	ナデ ハケメ	ナデ	○	○		○		良	12940		
	88	H-16	II	甕	口縁	-	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○			岩片	良	1544		
	89	F-2	II c	甕	口縁	-	-	-	-	橙	にぶい 橙	ミガキ	ミガキ	○	○			岩片	良	12304		
90	L-16	II	甕	口縁	-	-	-	-	橙	にぶい 橙	ミガキ	ミガキ	○	○	○			良	3486			
95	91	J-16	II c	甕	口縁	-	-	-	-	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	ミガキ ナデ	ナデ	○	○			岩片	良	1759	外面にスス 附着	
	92	K-17	II b	甕	口縁	-	-	-	-	にぶい 橙	にぶい 橙	ナデ	ナデ	○	○	○			良	11310		
	93	G-18	II b	甕	口縁	-	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○	○			良	5712		
	94	F-16	I・II	甕	口縁	-	-	-	-	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	ナデ	ナデ	○	○			岩片	良	5423		
	95	G-18	II b	甕	口縁	-	-	-	-	橙	にぶい 赤褐	ナデ	ナデ	○	○			岩片	良	5711		
	96	G-5	II d	甕	口縁	-	-	-	-	橙	橙	ハケメ	ナデ	○	○		○		良	12902		
	97	M-17	II b	甕	胴部	-	-	-	-	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	ハケメ	ナデ	○	○			岩片	良	10293		
	98	G-3	II d	甕	胴部	-	-	-	-	にぶい 橙	にぶい 橙	ナデ	ナデ	○	○	○			良	12511	外面にスス 附着	
	99	M-17	II b	甕	胴部	-	-	-	-	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	ハケメ ナデ	ナデ	○	○	○			良	10818		
	100	H-17	II b	甕	胴部	-	-	-	-	にぶい 黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○	○			良	6279		
	101	G-2	II c	甕	胴部	-	-	-	-	橙	橙	ミガキ ナデ	ナデ	○	○			岩片	良	11960		
	102	G-2	II d	甕	胴部	-	-	-	-	橙	橙	ミガキ ナデ	ナデ	○	○	○			良	11976		
	103	N-17	II c	甕	胴部	-	-	-	-	にぶい 橙	橙	ミガキ	ナデ	○	○	○			良	7633	外面にスス 附着	
	104	I-14	II c	甕	胴部	-	-	-	-	にぶい 橙	橙	ナデ	ナデ	○	○	○			良	1892		
	105	F-16	II	甕	胴部	-	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ		○		○	岩片	良	5437他		
	106	J-15	II a	甕	胴部	-	-	-	-	にぶい 黄橙	明黄褐	ミガキ	ミガキ	○		○		岩片	良	1816		
	107	J-15	II c	甕	胴部	-	-	-	-	にぶい 黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○	○			良	1774		
	108	G-3	I	甕	胴部	-	-	-	-	橙	にぶい 黄褐	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	-		
	109	G-18	II b	甕	胴部	-	-	-	-	にぶい 赤褐	にぶい 黄橙	ナデ	ナデ	○	○			岩片	良	5677		
	110	G-7	II d	壺	底部	-	7.5	-	3.0	にぶい 橙	橙	ハケメ	ナデ	○	○			岩片	良	11691		
	111	B-17	II b	壺	脚部	-	4.8	-	6.9	にぶい 赤褐	にぶい 褐	ハケメ	ナデ		○		○	岩片	良	13212		

弥生時代中期後葉の土器（第96～110図：112～288）

大甕（第96・97図：112～117）

112～117は大甕の口縁部から胴部にかけての破片である。いずれも口縁部は「く」の字状に折れ、胴部に口唇部同様先端が断面「M」字状の突帯が貼り付けられる。112・114・117は突帯がやや長い。口縁部の復元径は114と117が36.4cmと38.0cmと小さく、112と113は57.0cmと51.6cmと大きい。112の口縁端部には穿孔されたと考えられる孔がある。114は胎土・色調が他の土器と異なり、他の遺跡からの搬入品・粘土の採取地の違いといった可能性が考えられる。外面は火熱のためか剥落が激しい。

甕（第97～103図：118～193）

118～166は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部径は20～35cm程度が多い。118～141は胴部に突帯が貼り付けられないタイプである。120・121は口唇部の調整が雑で同一個体の可能性も考えられる。125も口唇部の調整が雑で、先端の断面は「M」字状にならないものである。124は口縁部から胴部下半まで残り、胴部上半から下半へは張り出すことなく、すばまっている。126は内外面とも調整が丁寧である。127は内外面とも器面調整はミガキが行われている。138～141は胴部上半が張り出している。

142・143は胴部に突帯が1条貼り付けられるタイプである。突帯の断面は三角形を呈する。144は残っている突帯は1条だが、その下に突帯がつく可能性もある。

145～163は出土している甕の中で最も多い胴部に突帯を3条貼り付けるタイプである。器面調整は多くが外面は口縁部から突帯の下まで、内面は口縁部がヨコナデを行い、その下に斜めのナデが行われるものが多い。198は胴部は内外面ともハケメである。

164～166は胴部に4条の突帯が貼り付けられるタイプである。164・165は胴部は張り出さないが、166は胴部が外に大きく張り出す。

167～193は甕の底部片である。多くは充実脚台で、底部径は6～8cmが多い。充実脚台の多くは胴部から底部の境、もしくはそのやや下部にくびれ部があり、くびれ部から下端へ広がっていく。底部下端は断面「M」字状に面取りされている。180は他のものに比べ脚台が小さく、179・184・185はくびれ部があまり顕著ではない。

186・187は全体の形態は不明だが中空の脚台の破片の可能性も考えられる。189・190・192は上げ底状になっている。188は底外面が削れ、上げ底か平底かは不明である。191は中空の脚台で胴部の境の部分である。

壺（第104～110図：194～283）

194～231は壺の口縁部・口縁部から胴部にかけての破片である。194～216は「へ」の字状に垂れ下がる単一の口縁部をもつものである。口唇部は断面「M」字状に凹んでいる。194～199、201・203・205・207は口縁部内面

に断面三角形の突帯が1条貼り付けられている。194は口縁部から胴部にかけての破片で、頸部から胴部にかけての外面には突帯はつかず、ミガキが行われている。

195は直線的で長い頸部で、外面の頸部と肩部の境に1条の突帯が残っている。198は口縁部外面に鋸歯状の沈線が刻まれている。施文具は貝殻の先端が使用された可能性が考えられる。200・202・204・206・208～217は口縁部内面に突帯がつかないものである。216は一部しか残存せず、内面に突帯がつくかは不明である。外面には鋸歯状の沈線が刻まれている。

218～230は二又状口縁の口縁部片である。口唇部とその下につく突帯の先端は断面「M」字状に凹んでいる。218・219は口縁部内面に断面三角形の突帯が1条貼り付けられている。224などは外面にスガが付着している。

231は口縁部片で短い口縁部から胴部へは「く」の字状に折れる。口唇部は「M」字状に凹んでいる。頸部外面には突帯がつく。

232は壺の胴部片である。最も張り出す部分に断面「M」字状の突帯が貼り付けられている。広口口縁壺と考えられる。

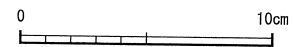
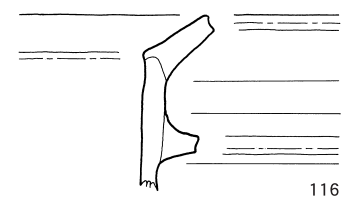
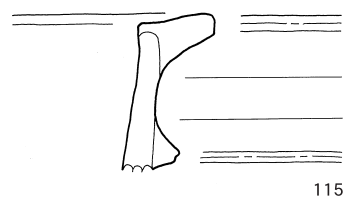
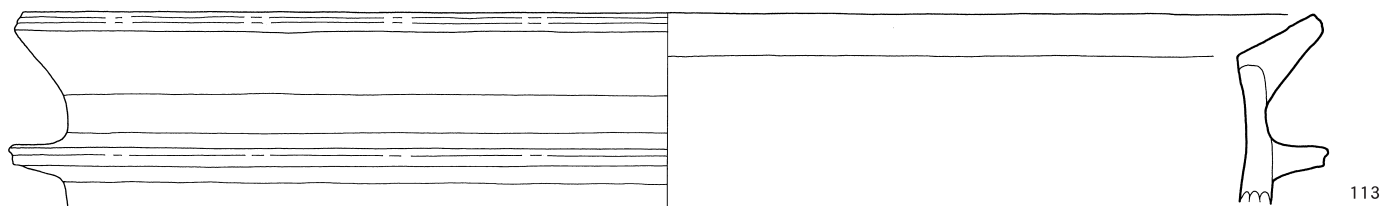
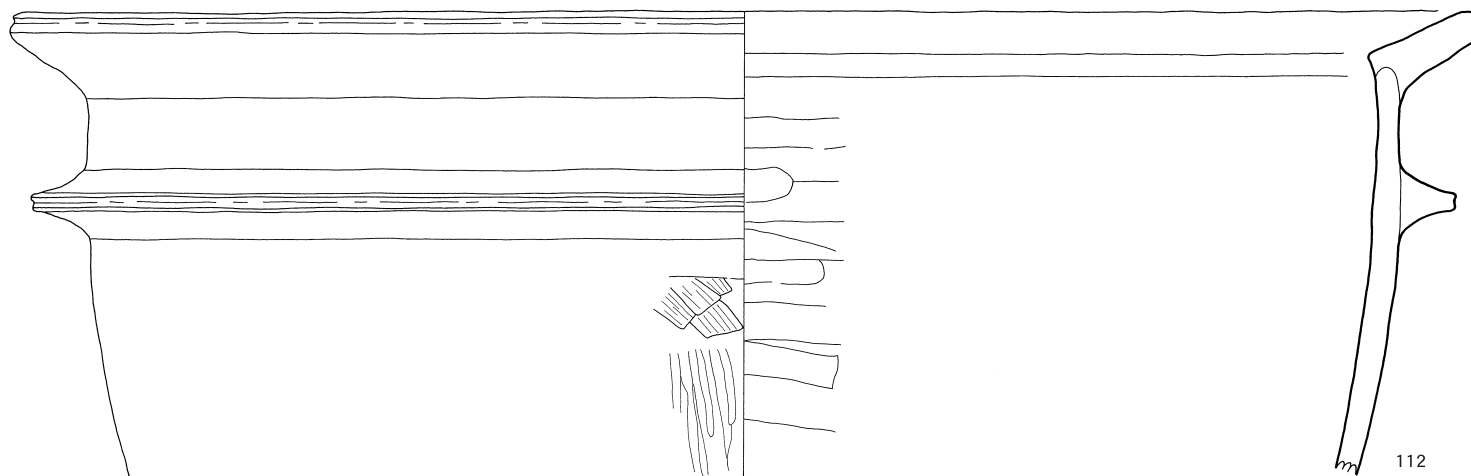
233～254は壺の頸部から胴部にかけての破片である。頸部から胴部にかけて外面には断面三角形の突帯が貼り付けられるものが多い。233は頸部と肩部の境に突帯が1条残り、頸部はあまり丸みをもたずに立ち上がる。

235～246は頸部から肩部にかけて突帯が3～6条貼り付けられている。247は肩部に突帯が3条残り、胴部上半に断面「M」字状の突帯がつく。249・251は肩部と胴部最大径となる部分に突帯が貼り付けられている。252は胴部片で他のものに比べ強く曲がっている。外面に突帯は貼り付けられていない。254は胴部最大径となる部分に断面「M」字状の突帯が貼り付けられている。

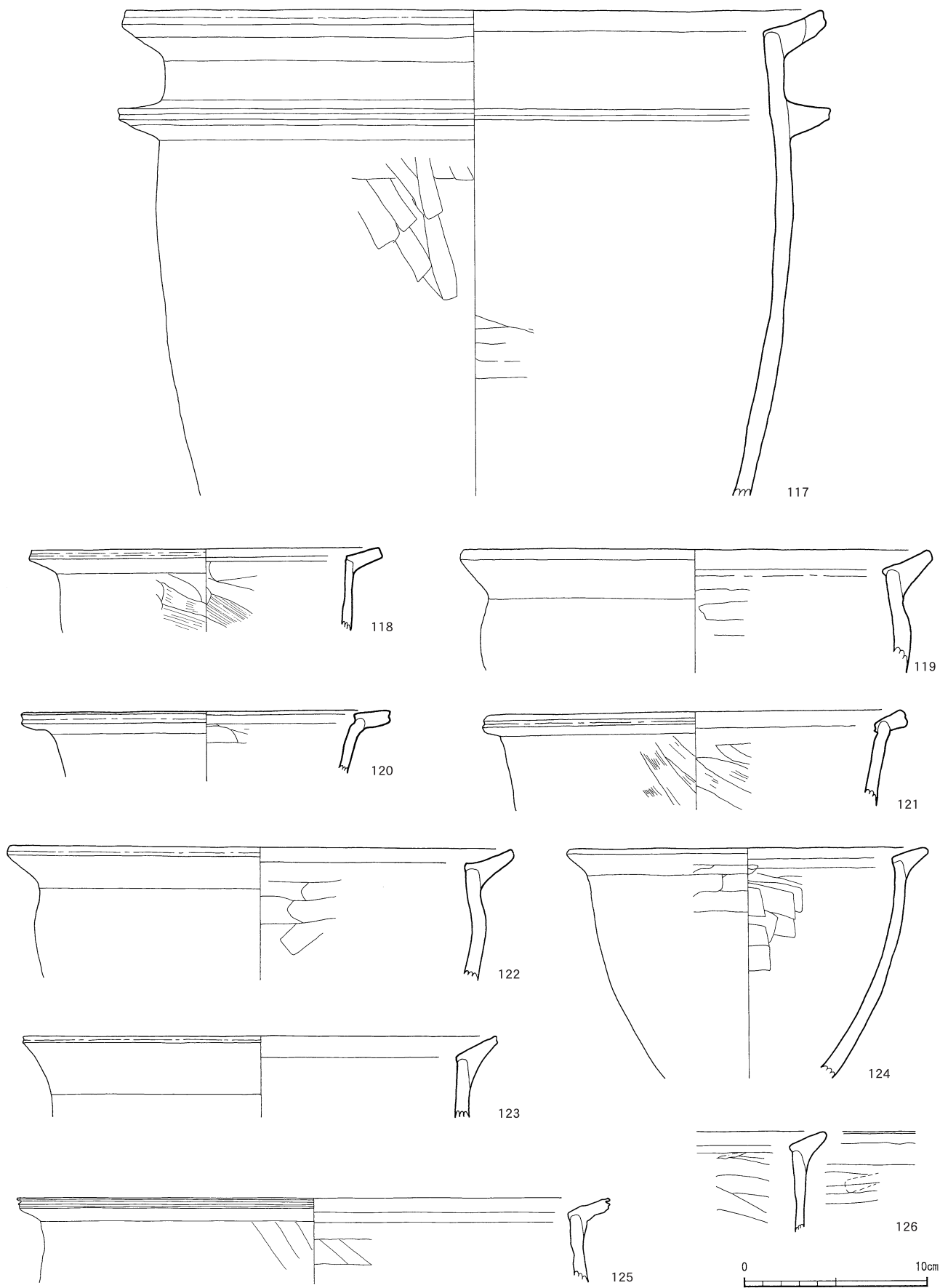
255～283は壺の底部片である。平底で多くは胴部が丸みを帯びて外に大きく開くものが多いが、255は他のものに比べ外に開く角度が小さく、直線的に立ち上がっている。270は火熱のためか器面が赤変している。281は外底面までミガキが行われている。283は他のものに比べ全体的に小さい。

鉢（第110図：284～288）

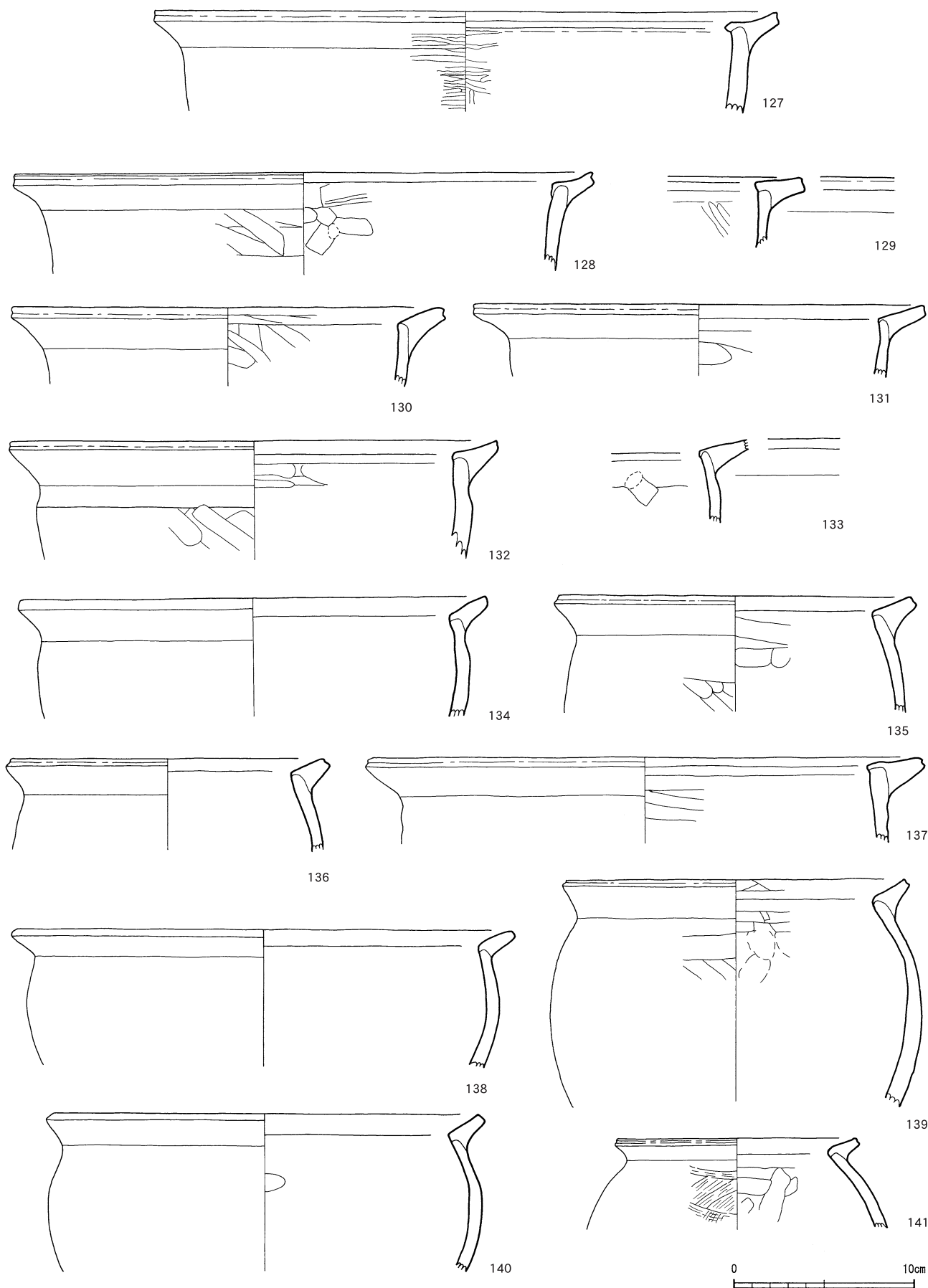
284・285は完形の鉢である。ともに底部は平底で口縁部は甕の口縁部と同じ形態である。284は胴部に断面「M」字状の突帯がつき、胎土は114と同様の特徴を持ち、搬入品・粘土の採取地の違いが考えられる。285は胴部に突帯は付かない。外面はミガキが、内面はナデが行われている。286～288は鉢の口縁部片である。286・287は口唇部が断面「M」字状に凹んでおり、口縁部外面には「M」字状突帯が貼り付けられている。288は口唇部は凹まず、口縁部外面に突帯はつかない。口縁部はやや内湾気味である。



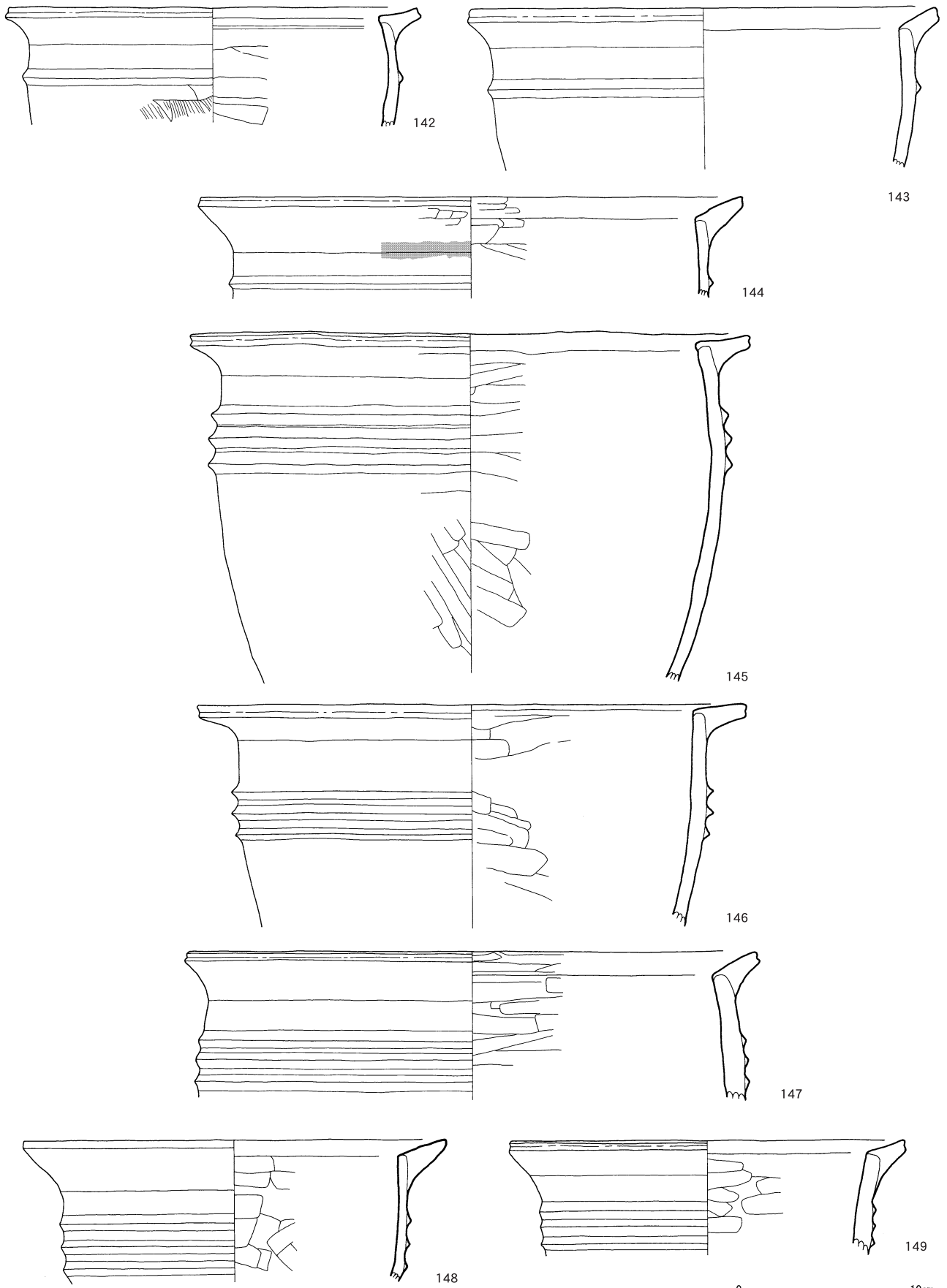
第96図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 1



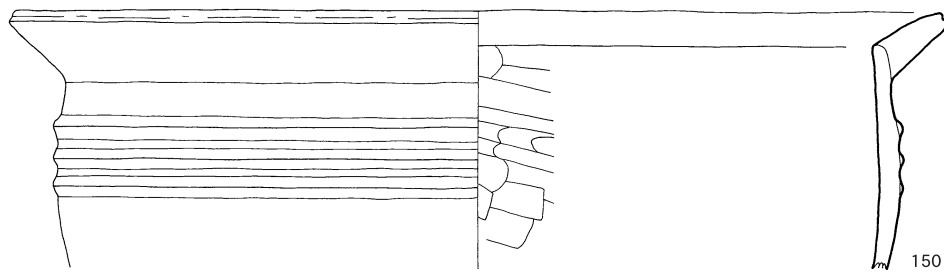
第97図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 2



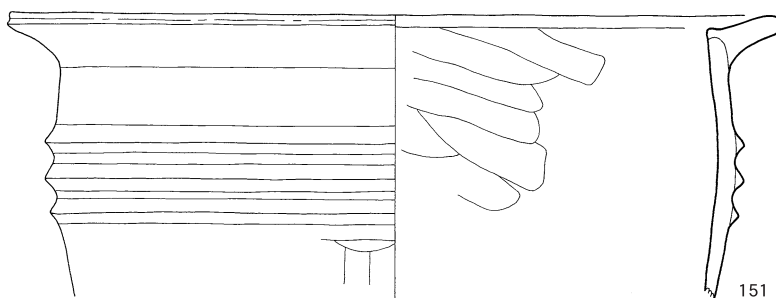
第98図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 3



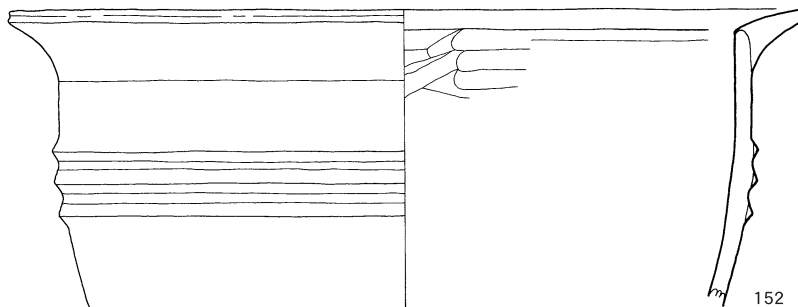
第99図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 4



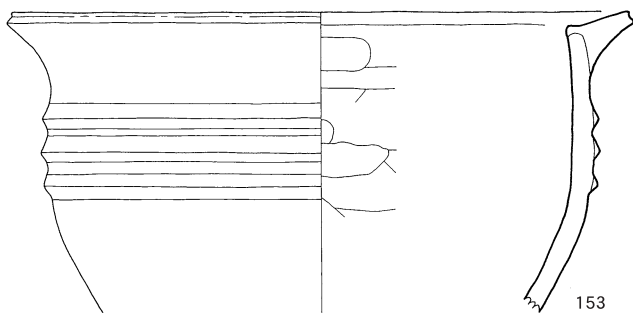
150



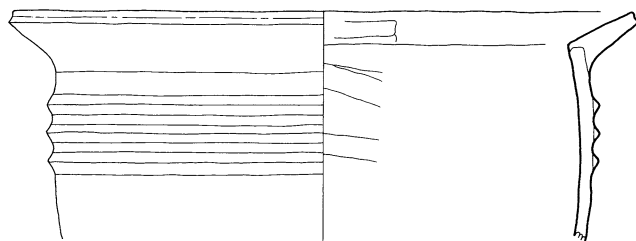
151



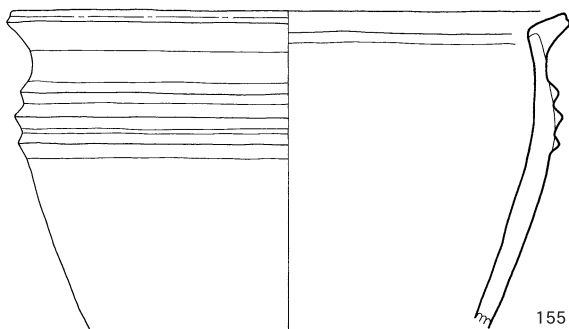
152



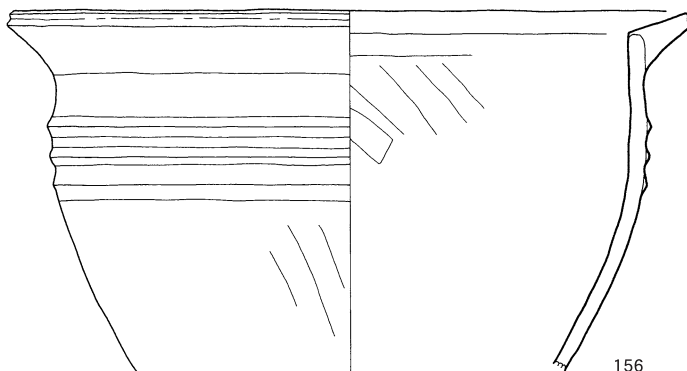
153



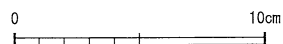
154



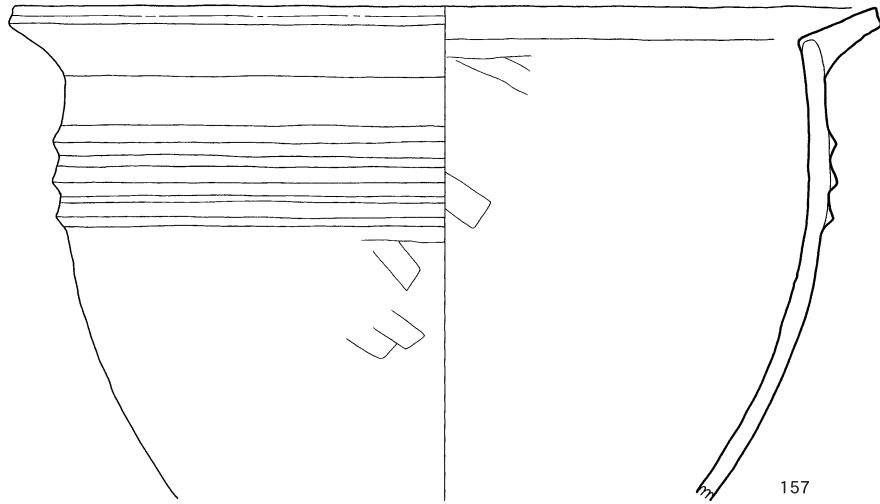
155



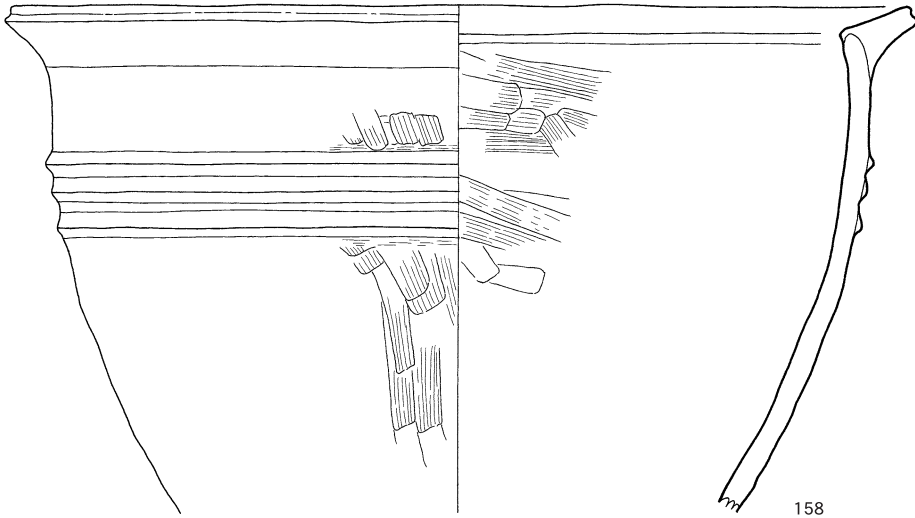
156



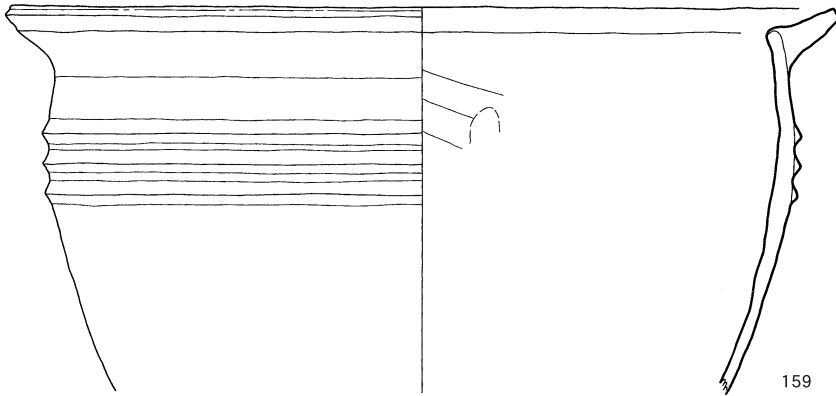
第100図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 5



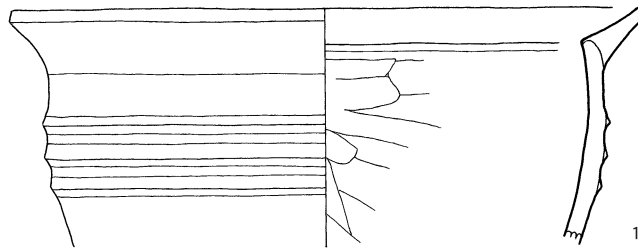
157



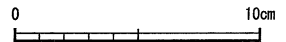
158



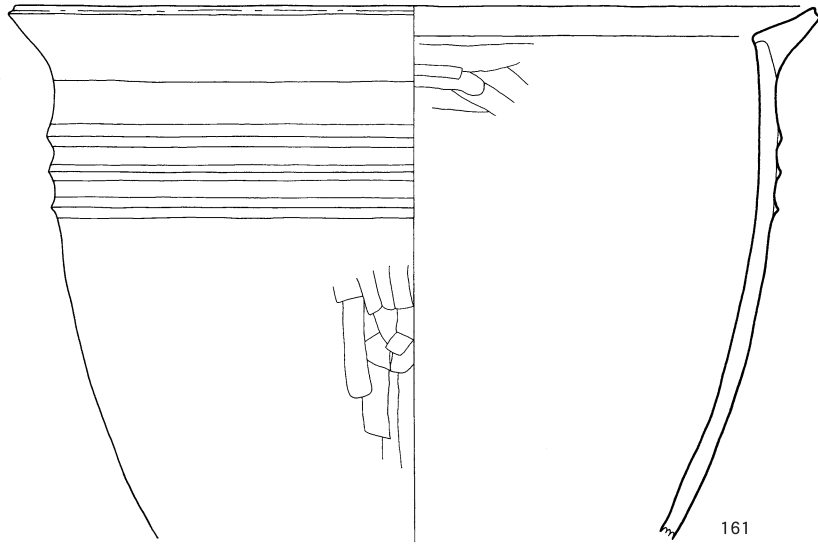
159



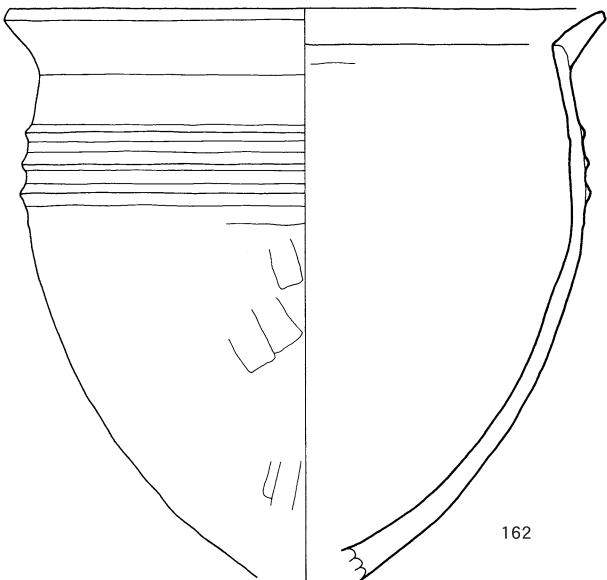
160



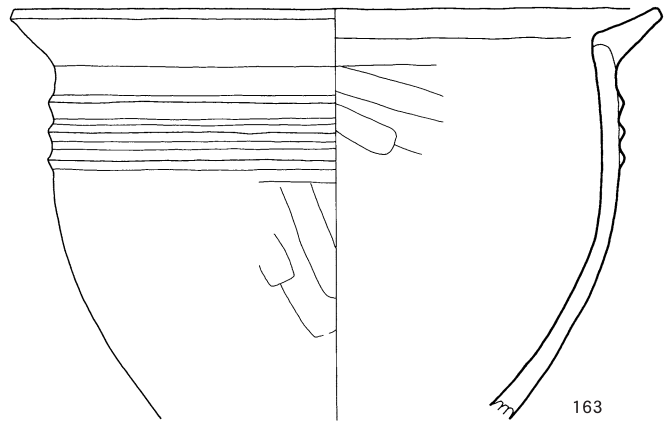
第101図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 6



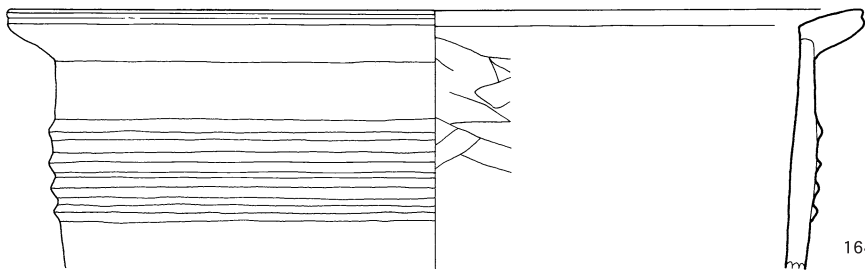
161



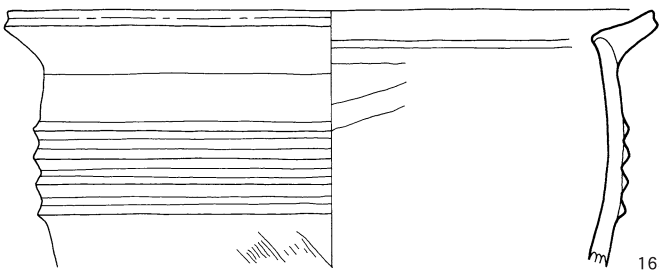
162



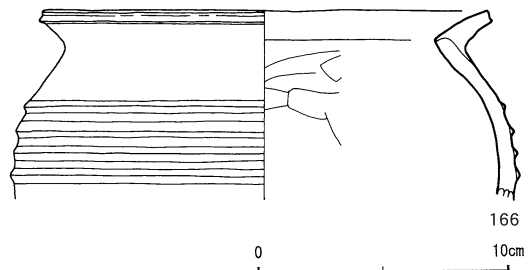
163



164



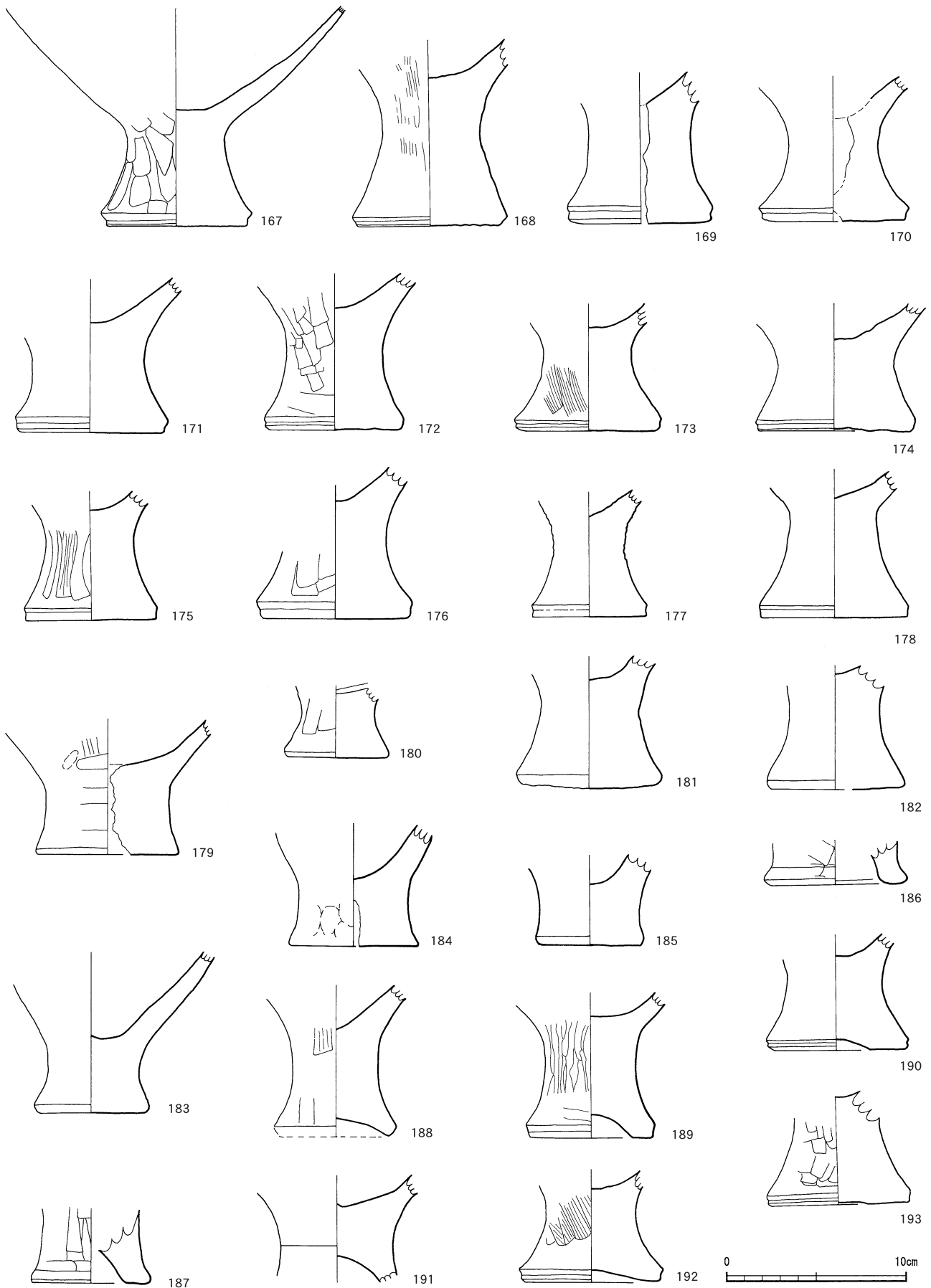
165



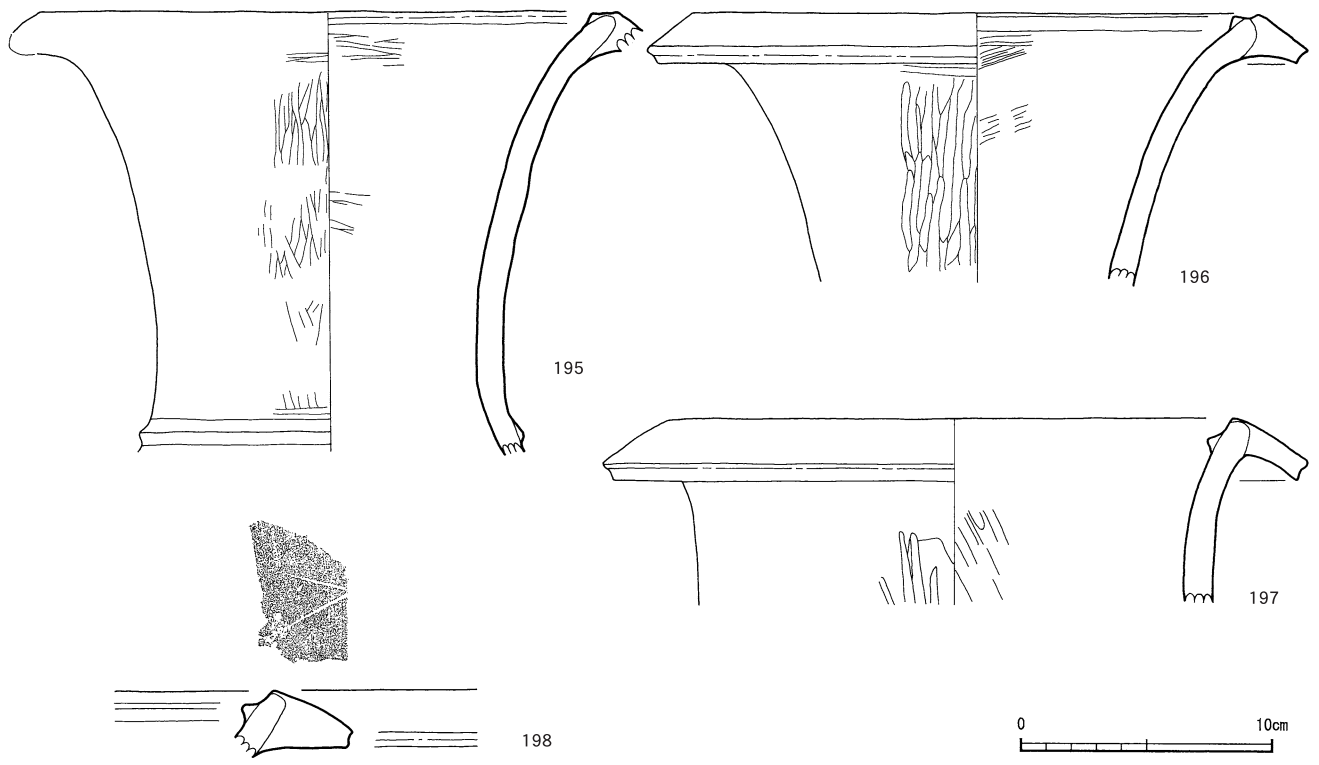
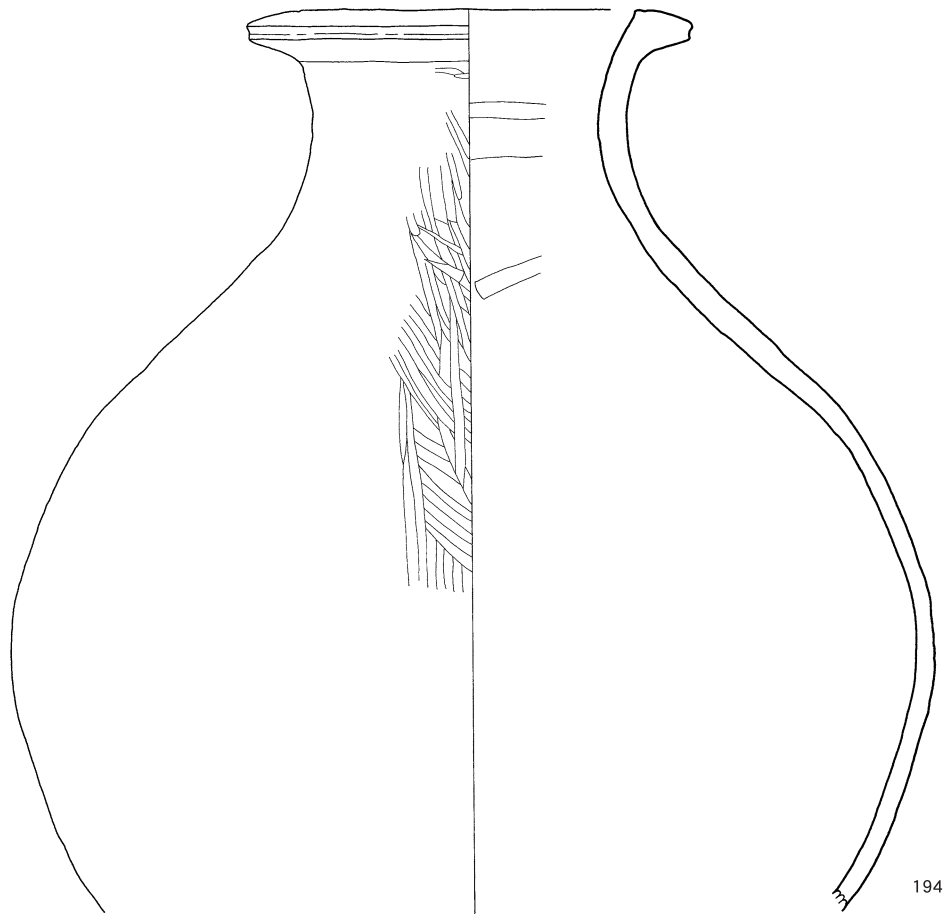
166



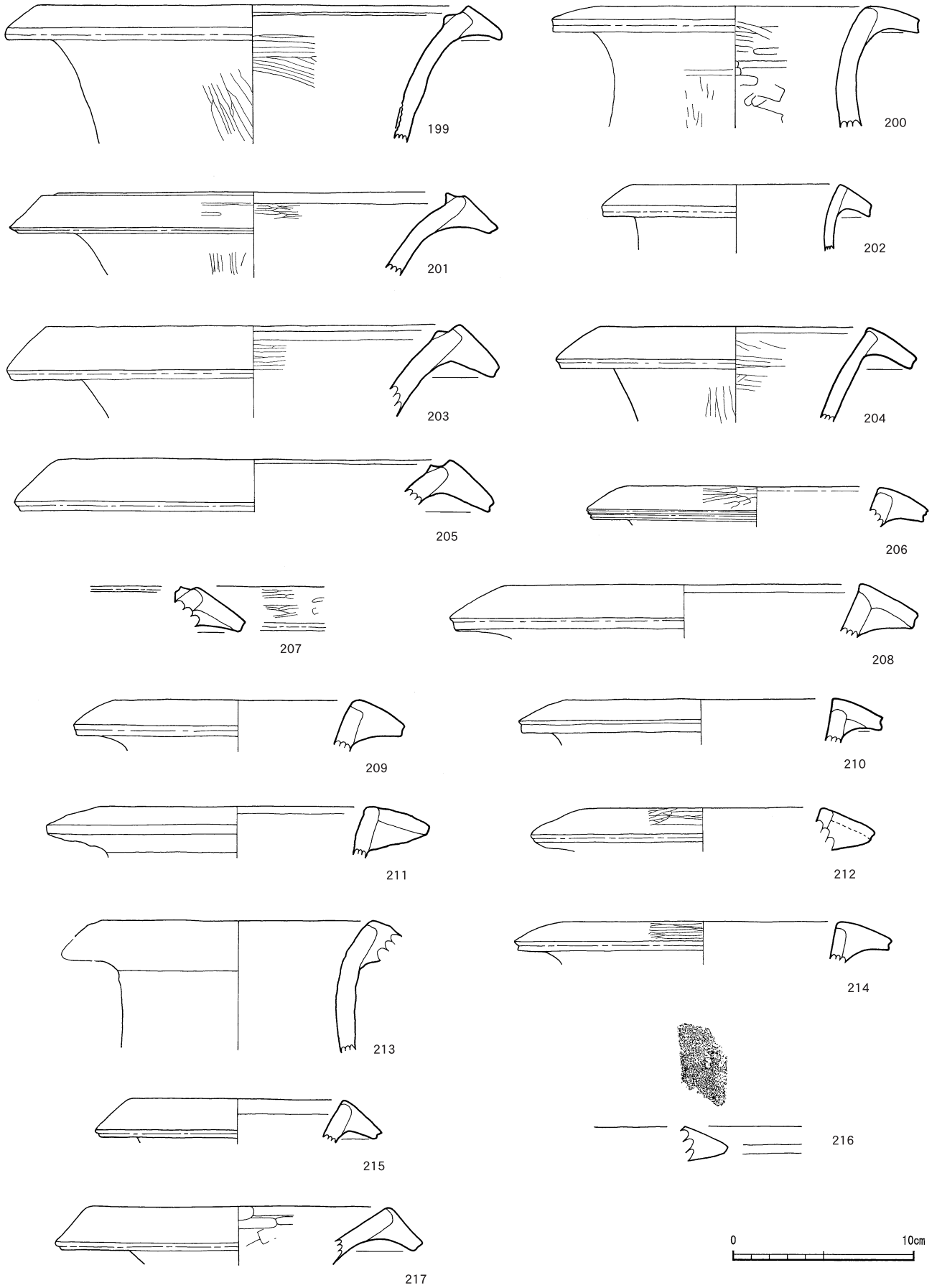
第102図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 7



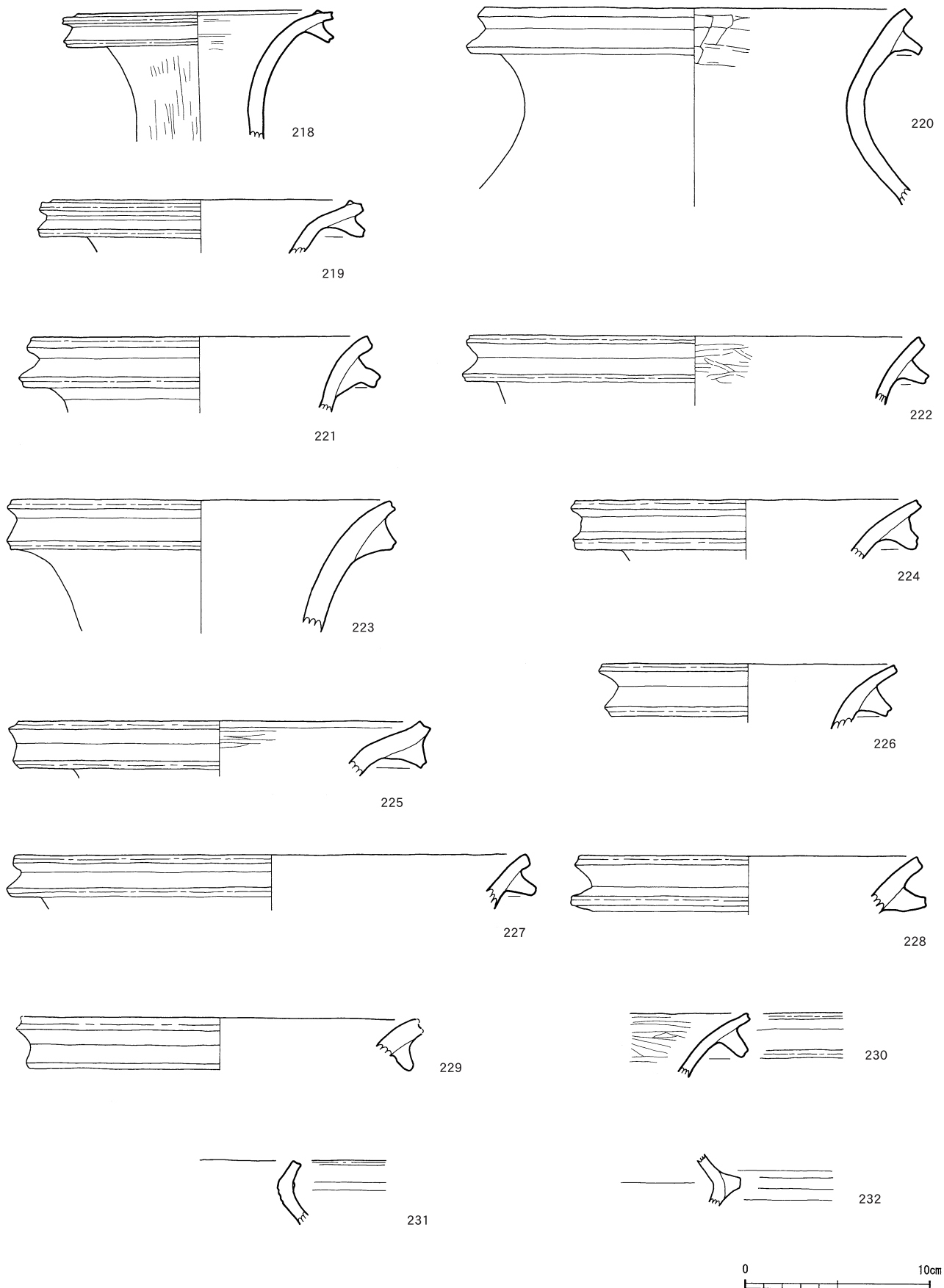
第103圖 十三塚遺跡弥生時代中期土器 8



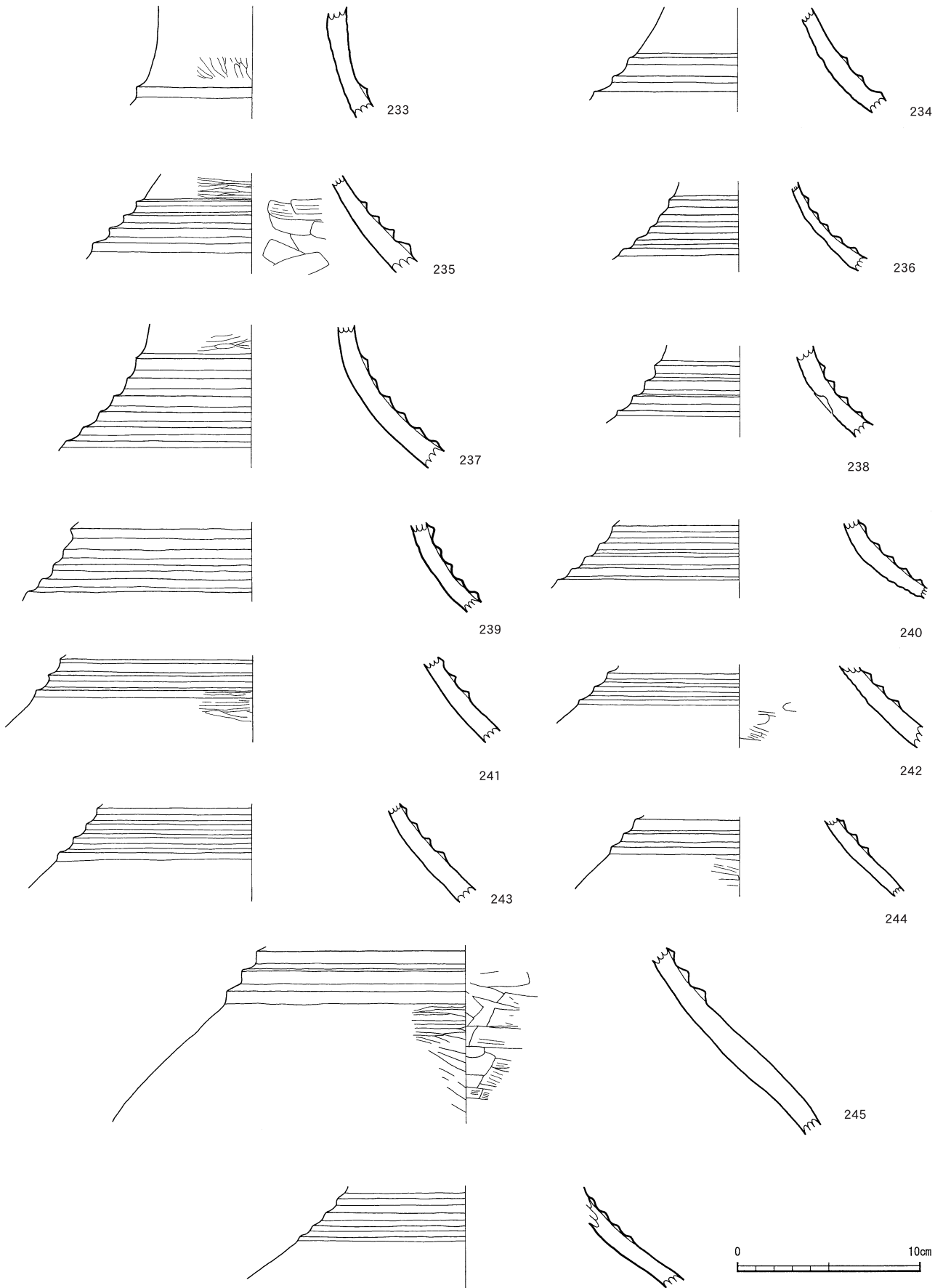
第104図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 9



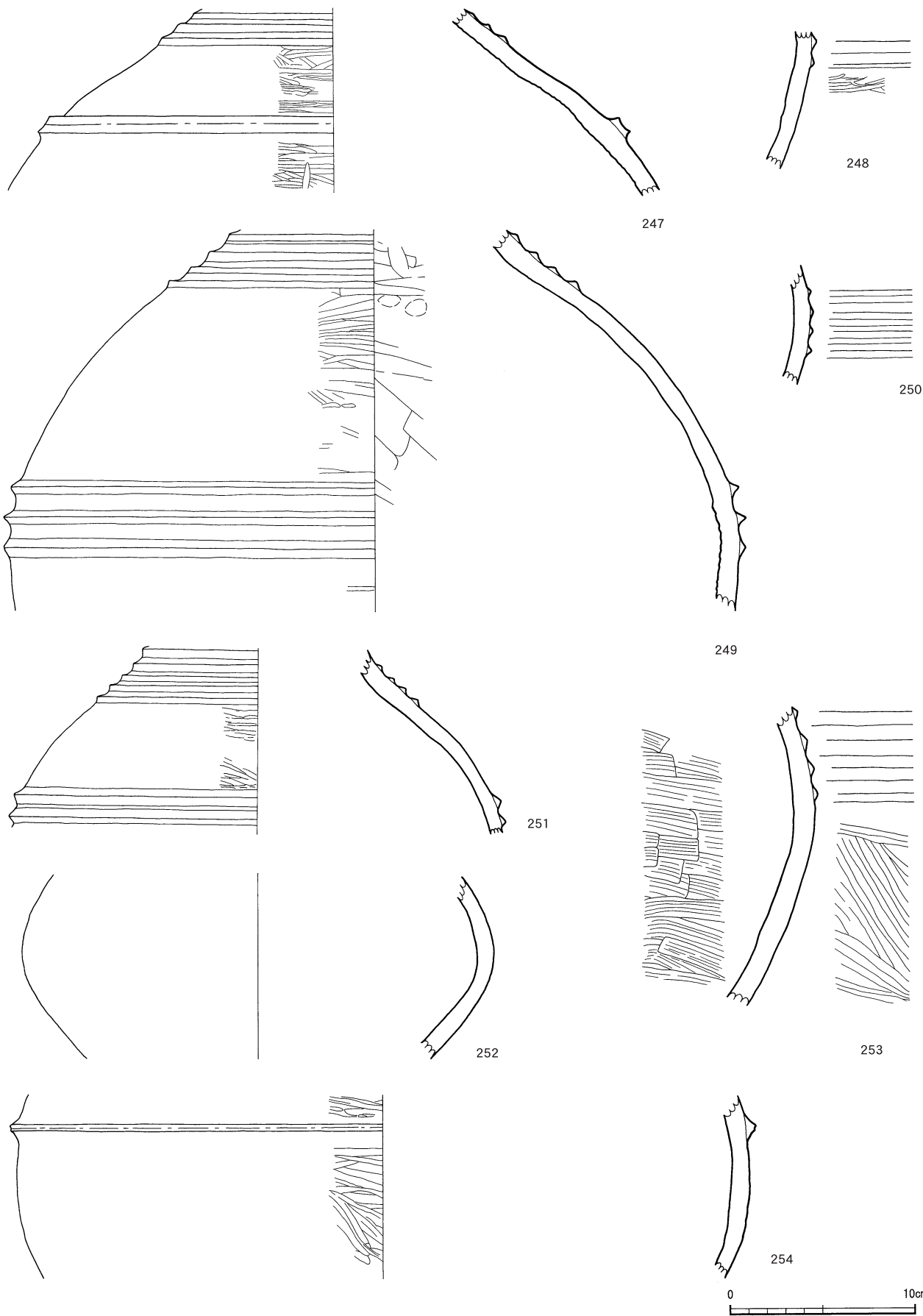
第105圖 十三塚遺跡弥生時代中期土器10



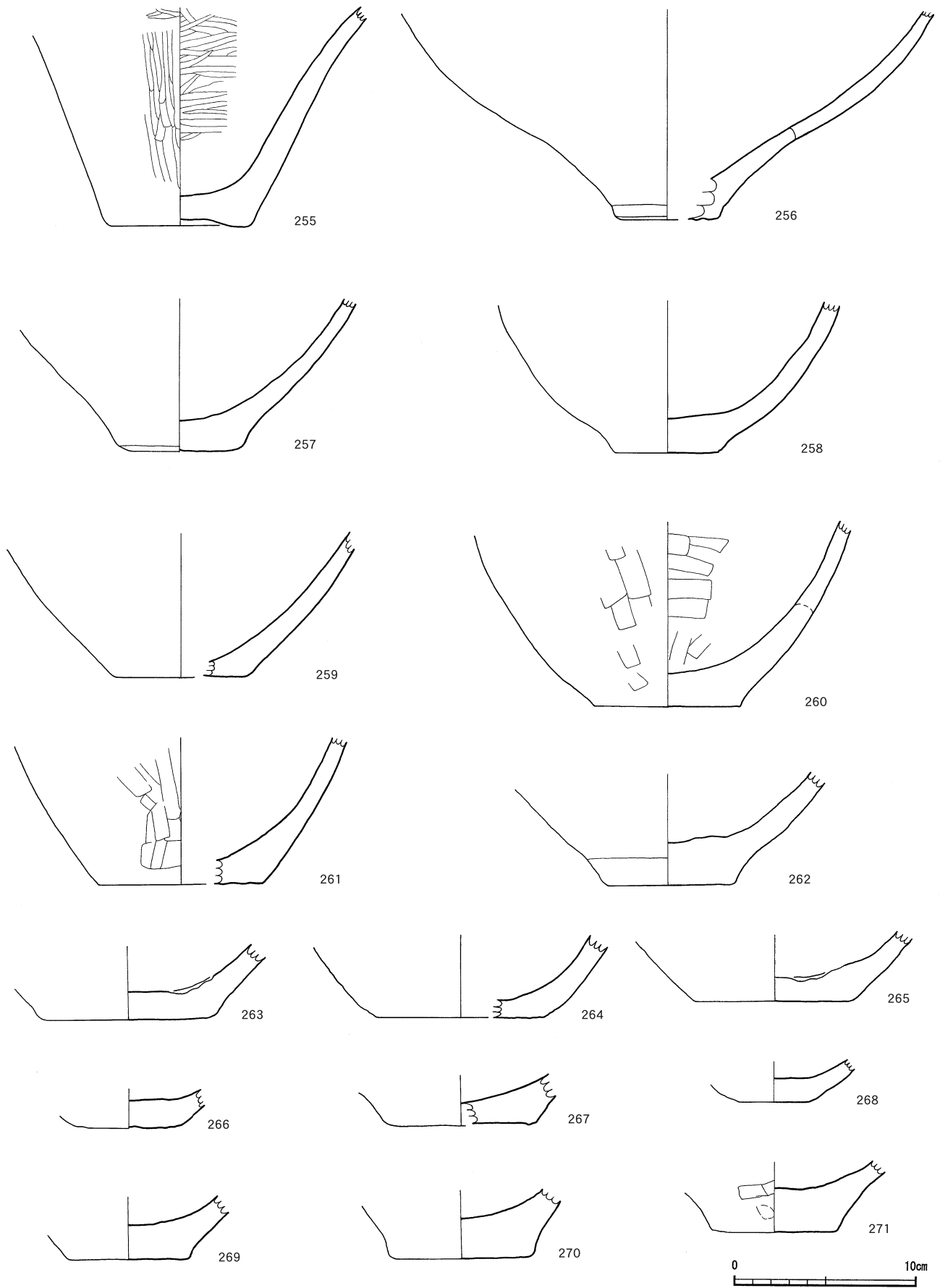
第106図 十三塚遺跡弥生時代中期土器11



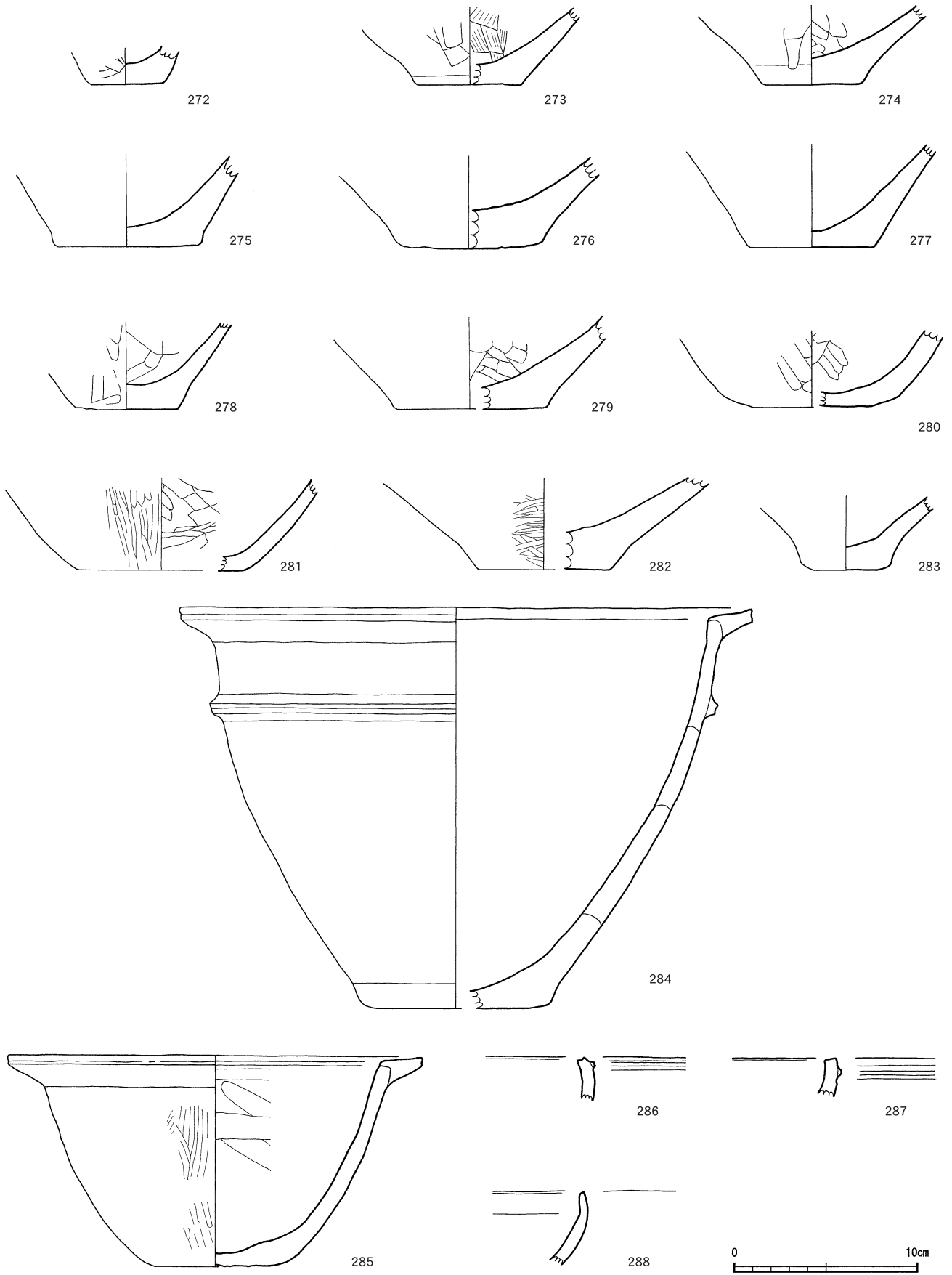
第107圖 十三塚遺跡弥生時代中期土器12 246



第108図 十三塚遺跡弥生時代中期土器13



第109図 十三塚遺跡弥生時代中期土器14



第110圖 十三塚遺跡弥生時代中期土器15

第31表 十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表1

挿 図 番 号	掲 載 番 号	出土区	層	器 種	部 位	法 量				色 調		器面調整		胎土					焼成	取上番号	備考
						口 縁 部 径 (cm)	底 径 (cm)	胴 部 最 大 径 (cm)	器 高 (cm)	外 面	内 面	外 面	内 面	石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	輝 石			
96	112	N-17	II b	甕	口縁～胴部	57.0	-	-	-	明赤褐	橙	ナデ工具 ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	10216他	外面にスス付着
	113	-	-	甕	口縁～胴部	51.6	-	-	-	橙	にぶい 黄橙	ナデ	ナデ	○	○	○			良	-	
	114	J-15	II c	甕	口縁～胴部	36.4	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	1769他	
	115	K・L- 15-16	表採	甕	口縁～胴部	-	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	-	
	116	L-17	II b	甕	口縁～胴部	-	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	11238	
97	117	R-17	II b	甕	口縁～胴部	38.0	-	-	-	橙	黒褐	ヨコナデ ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	13355他	
	118	H-14	表採	甕	口縁	19.0	-	-	-	にぶい 橙	にぶい 橙	ナデ ハケメ	ナデ	○		○		岩片	良	-	
	119	G-13	表採	甕	口縁	25.4	-	-	-	にぶい 橙	黒	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	一括	
	120	H-14	表採	甕	口縁	20.2	-	-	-	にぶい 橙	明褐	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	-	
	121	J-16	II	甕	口縁	23.2	-	-	-	明褐	にぶい 褐	ハケメ	ナデ	○		○		岩片	良	1239他	外面にスス付着
	122	G-14	-	甕	口縁	27.4	-	-	-	にぶい 黄橙	黒	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	一括	
	123	G-18	II b	甕	口縁	26.8	-	-	-	明赤褐	にぶい 橙	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	5641他	
	124	F-3	II b	甕	口縁～胴部	19.4	-	-	-	にぶい 橙	橙	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	12490	
	125	G-12	II c	甕	口縁	32.4	-	-	-	明赤褐	橙	ヨコナデ ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	2712他	外面にスス付着
	126	F-3	II d	甕	口縁	-	-	-	-	黒	明赤褐	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	12490	
98	127	G-3	II c	甕	口縁	34.4	-	-	-	橙	橙	ミガキ	ナデ	○		○		岩片	良	12164他	
	128	G-12	II c	甕	口縁	32.0	-	-	-	褐	橙	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	2651他	
	129	N-17	II b	甕	口縁	-	-	-	-	にぶい 橙	にぶい 橙	ヨコナデ	ミガキ	○		○		岩片	良	7311他	
	130	G-13	表土	甕	口縁	24.0	-	-	-	橙	橙	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	-	
	131	N-16	II b	甕	口縁	24.8	-	-	-	黒褐	明赤褐	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	6522	外面にスス付着
	132	G-14	-	甕	口縁	27.0	-	-	-	にぶい 橙	黒	ナデ	ナデ	○	○	○			良	一括	
	133	R-16	II b	甕	口縁	-	-	-	-	橙	橙	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	14810	外面にスス付着
	134	C-13	II b	甕	口縁	25.8	-	-	-	橙	暗黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○	○			良	12677	
	135	M-14	II d	甕	口縁	19.4	-	-	-	橙	褐	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	5222	
	136	H-14	II d	甕	口縁	17.2	-	-	-	にぶい 橙	にぶい 橙	ヨコナデ	ヨコ ナデ	○		○		岩片	良	5225	
	137	N-17	II b	甕	口縁	30.0	-	-	-	赤褐	明赤褐	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	6790他	外面にスス付着
	138	G-18	II b	甕	口縁～胴部	27.4	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○	○		岩片	良	12696他	
	139	H-14	II d	甕	口縁～胴部	18.8	-	-	-	橙	黒褐	ナデ	ナデ 指頭 圧痕	○		○		岩片	良	5225他	外面にスス付着
	140	G-13	II b	甕	口縁～胴部	24.4	-	-	-	橙	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○	○			良	12562	
141	R-16	II b	甕	口縁～胴部	13.6	-	-	-	にぶい 橙	にぶい 赤褐	ハケメ	ナデ	○	○	○			良	14760		
99	142	R-17	II b	甕	口縁～突帯	-	-	-	-	にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	ナデ ハケメ	ナデ	○		○		岩片	良	13690	
	143	J-17	II	甕	口縁～突帯	25.6	-	-	-	橙	にぶい 黄橙	ミガキ ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	1435	
	144	H-14	II d	甕	口縁	29.4	-	-	-	橙	明赤褐	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	5225	外面にスス付着
	145	F-12	II b	甕	口縁～胴部	30.0	-	-	-	橙	橙	ヨコナデ ナデ	ナデ	○	○	○			良	2497他	外面にスス付着
	146	F-12 H-13	II b	甕	口縁～胴部	29.8	-	-	-	にぶい 褐	にぶい 褐	ナデ	ナデ	○		○			良	2431他	外面にスス付着
	147	H-15	II b	甕	口縁～突帯	30.8	-	-	-	にぶい 橙	にぶい 褐	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	-	土坑外
	148	H-14	II b	甕	口縁～突帯	23.0	-	-	-	明赤褐	明褐	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	5226他	外面にスス付着
	149	H-14	表採	甕	口縁～突帯	21.4	-	-	-	にぶい 褐	にぶい 橙	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	-	
100	150	G-15	表採	甕	口縁～突帯	36.4	-	-	-	橙	にぶい 橙	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	-	
	151	Q-17	II b	甕	口縁～胴部	30.4	-	-	-	橙	橙	ヨコナデ	ナデ	○		○		岩片	良	13218	外面にスス付着
	152	Q・R -16	II b	甕	口縁～胴部	31.4	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○	○			良	14674他	外面にスス付着
	153	G-17	II b	甕	口縁～胴部	24.2	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○		○		岩片	良	6090	外面にスス付着
	154	H-13	II b	甕	口縁～胴部	24.5	-	-	-	橙	橙	ヨコナデ	ナデ	○	○	○			良	12646他	外面にスス付着
	155	G- 13-14	表採	甕	口縁～胴部	22.0	-	-	-	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○	○			良	-	外面にスス付着
	156	R-17	II b	甕	口縁～胴部	26.5	-	-	-	暗赤褐	橙	ヨコナデ ナデ	ナデ	○	○	○		岩片	良	13547他	外面にスス付着
101	157	Q-16	II b	甕	口縁～胴部	34.0	-	-	-	明赤褐	橙	ヨコナデ ナデ	ナデ	○	○	○			良	14434他	外面にスス付着
	158	R-17	II b	甕	口縁～胴部	35.0	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ヨコナデ ハケメ	ナデ ハケメ	○	○	○			良	13346他	
	159	M-18	II b	甕	口縁～胴部	32.4	-	-	-	橙	橙	ヨコナデ ナデ	ナデ	○	○	○		岩片	良	7832他	外面にスス付着
	160	M-18	II b	甕	口縁～突帯	24.8	-	-	-	褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○		○			良	8241他	外面にスス付着

第32表 十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表2

挿 図 番 号	掲 載 番 号	出土区	層	器 種	部 位	法 量				色 調		器面調整		胎土					焼成	取上番号	備考	
						口縁部径 (cm)	底径 (cm)	胴部最大径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石				その他
102	161	J-17	II	甕	口縁～胴部	31.8	-	-	-	橙	明褐	ヨコナデ ナデ	ナデ	○	○		○		良	1411他		
	162	H-14	II d	甕	口縁～胴部	23.4	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ		○	○	○		良	5225	外面にスス付着	
	163	H-13・14	II b	甕	口縁～胴部	25.2	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ヨコナデ ナデ	ナデ	○	○		○		良	12613他	外面にスス付着	
	164	H-12	II b	甕	口縁～胴部	34.0	-	-	-	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	11650他	外面にスス付着
	165	M-18	II b	甕	口縁～胴部	25.4	-	-	-	橙	にぶい 赤褐	ヨコナデ	ナデ		○	○	○		良	7877他	外面にスス付着	
	166	H-13	II b	甕	口縁～突帯	17.6	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	12644他	
103	167	I-16	II	甕	底部	-	8.4	-	-	にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	ナデ	-		○		○		岩片	良	1641	
	168	O-17	II b	甕	底部	-	8.0	-	-	橙	橙	工具ナデ	-		○		○		岩片	良	7217	
	169	K・L-15・16	I	甕	底部	-	7.9	-	-	灰黄褐	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	-	
	170	K・L-15・16	I	甕	底部	-	8.0	-	-	にぶい 黄褐	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	-	
	171	R-17	I	甕	底部	-	8.2	-	-	橙	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	-	
	172	H-17	II a	甕	底部	-	7.2	-	-	明赤褐	明赤褐	工具ナデ	-		○		○		岩片	良	7725他	
	173	P-17	II b	甕	底部	-	8.1	-	-	橙	明赤褐	ハケメ	ナデ		○		○		岩片	良	7271	
	174	Q-15	II b	甕	底部	-	8.6	-	-	褐	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	13997	
	175	N-17	II b	甕	底部	-	7.0	-	-	橙	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	7782	
	176	N-17	II b	甕	底部	-	8.2	-	-	橙	にぶい 黄褐	工具ナデ	-		○		○		岩片	良	8178	外面にスス付着
	177	R-17	II b	甕	底部	-	6.4	-	-	にぶい 黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	14084	
	178	H-16	II b	甕	底部	-	8.0	-	-	橙	にぶい 黄褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5852	
	179	H-13	II b	甕	底部	-	7.8	-	-	にぶい 黄褐	黒褐	丁寧なナデ	ナデ		○		○		岩片	良	12566	
	180	M-17	II b	甕	底部	-	5.3	-	-	明赤褐	-	ナデ	-		○		○		岩片	良	8340	
	181	G-2	II c	甕	底部	-	8.1	-	-	橙	にぶい 黄褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	11983	
	182	H-11	II b	甕	底部	-	7.2	-	-	橙	にぶい 黄褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	11491	
	183	G-14	II b	甕	底部	-	6.2	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5197	
	184	N-18	II b	甕	底部	-	7.0	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	10652	
	185	H-13	II b	甕	底部	-	5.4	-	-	にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5048	
	186	Q-16	II b	甕	底部	-	7.8	-	-	にぶい 黄褐	褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	14448	
	187	R-16	-	甕	底部	-	-	-	-	にぶい 黄褐	明赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	14693	
188	R-16	II b	甕	底部	-	6.0	-	-	橙	橙	工具ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	15238		
189	I-15	II	甕	底部	-	7.2	-	-	橙	明褐	工具ナデ	工具 ナデ		○		○		岩片	良	5006他		
190	M-18	II b	甕	底部	-	7.4	-	-	橙	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	7814		
191	G-17	II b	甕	底部	-	-	-	-	にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6011		
192	M-17	II b	甕	底部	-	7.4	-	-	橙	黒	ハケメ ナデ	-		○		○		岩片	良	8321		
193	O-17	II b	甕	底部	-	7.6	-	-	橙	黒	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	9209		
104	194	G-15	II b	壺	口縁～胴部	17.4	-	-	-	にぶい 赤褐	にぶい 赤褐	ミガキ ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5287他	
	195	F-17	II	壺	口縁～頸部	23.0	-	-	-	黒褐	暗赤褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	5483他	
	196	G-17	II b	壺	口縁～頸部	22.4	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	6003他	
	197	O-17	II b	壺	口縁～頸部	22.0	-	-	-	橙	にぶい 黄褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	7518	
198	Q-17	II b	壺	口縁	-	-	-	-	黒褐	赤褐	ミガキ ヨコナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	13236		
105	199	G-13・14	表採	壺	口縁～頸部	23.8	-	-	-	明褐	褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	一括	
	200	G-13・14	表採	壺	口縁～頸部	20.2	-	-	-	橙	明赤褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	-	
	201	G・F-17	I	壺	口縁	23.4	-	-	-	黒褐	黒褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	-	

第33表 十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表 3

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	法 量				色 調		器面調整		胎土					焼成	取上番号	備考
						口縁部径 (cm)	底径 (cm)	胴部最大径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石			
105	202	J-15	IIc	壺	口縁	11.4	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	1816		
	203	F-17	II	壺	口縁	22.6	-	-	-	にぶい橙	にぶい橙	ミガキナデ	ナデ	○	○		岩片	良	5477他		
	204	Q-17	IIb	壺	口縁	14.6	-	-	-	橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ	○	○		岩片	良	10065他		
	205	G-17	IIb	壺	口縁	21.6	-	-	-	にぶい褐	橙	ミガキナデ	ナデ	○	○		岩片	良	6018		
	206	O-17	IIb	壺	口縁	14.0	-	-	-	赤褐	明赤褐	ミガキナデ	ナデ	○	○		岩片	良	9901		
	207	-	表採	壺	口縁	-	-	-	-	明褐	明褐	ミガキ	-	○	○		岩片	良	-		
	208	N-17	IIb	壺	口縁	19.6	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○		岩片	良	6695		
	209	L-16	IIb	壺	口縁	13.0	-	-	-	にぶい褐	橙	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○		岩片	良	3644		
	210	P-17	IIb	壺	口縁	14.6	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ミガキナデ	ナデ	○	○		岩片	良	7270		
	211	19T	II	壺	口縁	14.6	-	-	-	橙	橙	剥落	剥落	○	○		岩片	良	500		
	212	O-18	IIb	壺	口縁	13.2	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ミガキ	ミガキ	○	○		岩片	良	8846		
	213	I-15	IIc	壺	口縁～頸部	14.6	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	2131		
	214	O-15	IIb	壺	口縁	15.0	-	-	-	褐	橙	ミガキナデ	ナデ	○	○		岩片	良	6641		
	215	R-16	IIb	壺	口縁	11.4	-	-	-	明赤褐	橙	ヨコナデ	ナデ	○	○		岩片	良	14241他		
	216	G-6	表採	壺	口縁	-	-	-	-	橙	橙	ヨコナデ	-	○	○			良	-		
	217	N-16	IIb	壺	口縁	16.6	-	-	-	褐	暗褐	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○		岩片	良	6743		
	106	218	G-17	IIb	壺	口縁～頸部	13.2	-	-	-	明褐	明褐	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	6016	
219		G-17	IIb	壺	口縁	16.0	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	6007		
220		J-15他	IIc	壺	口縁～頸部	22.6	-	-	-	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ハケメ	○	○		岩片	良	1761他		
221		F-16	I	壺	口縁	18.2	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	-		
222		I-16	表採	壺	口縁	23.4	-	-	-	橙	にぶい褐	ナデ	ミガキ	○	○		岩片	良	-		
223		H-15	表採	壺	口縁～頸部	20.4	-	-	-	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	-		
224		28T	表採	壺	口縁	19.0	-	-	-	橙	明褐	ミガキ	ミガキ	○	○		岩片	良	-	外面にスス付着	
225		M-17	IIb	壺	口縁	22.8	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	10952		
226		H-14	表採	壺	口縁	14.0	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	-		
227		J-17	II	壺	口縁	27.6	-	-	-	にぶい橙	橙	ナデ	ミガキ	○	○		岩片	良	1452		
228		R-17	IIb	壺	口縁	18.2	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	13752		
107	229	O-17	IIb	壺	口縁	20.6	-	-	-	赤褐	赤褐	ナデ	ミガキ	○	○		岩片	良	7495		
	230	J-17	II	壺	口縁	-	-	-	-	橙	にぶい褐	ナデ	ミガキ	○	○		岩片	良	1435		
	231	E-17	表採	甕	口縁	-	-	-	-	にぶい褐	褐	ナデ	ナデ	○	○			良	-		
	232	N-17	IIb	甕	胴部	-	-	-	-	褐	褐	ナデ	ナデ	○	○		岩片	良	9391	外面にスス付着	
	233	G-13・14	表採	壺	肩部	-	-	-	-	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ミガキ	ナデ	○	○		岩片	良	-		
	234	S-17	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	明黄褐	明黄褐	剥落	剥落	○	○		岩片	良	14285		
	235	I-16	II	壺	肩部	-	-	-	-	橙	にぶい橙	ミガキ	ナデ	○	○		岩片	良	1492他		
	236	R-17	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	明褐	橙	ヨコナデ	ナデ	○	○		岩片	良	15254		
	237	R-17	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ミガキ	ナデ	○	○		岩片	良	14156他		
	238	S-17	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	橙	橙	摩滅	摩滅	○	○		岩片	良	14166		
107	239	R-17	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	赤褐	赤褐	ミガキ	ミガキ	○	○		岩片	良	14139		
	240	I-17	表採	壺	肩部	-	-	-	-	にぶい橙	にぶい褐	ミガキ	ナデ	○	○		岩片	良	-		
	241	N-17	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	明赤褐	黒褐	ミガキ	ナデ	○	○		岩片	良	7098		
	242	R-17	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	明赤褐	橙	ミガキ	ナデ	○	○		岩片	良	14309		
	243	N-17	表採	壺	肩部	-	-	-	-	にぶい赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○			良	-		
	244	Q-16	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	橙	にぶい橙	ミガキ	ナデ	○	○		岩片	良	14419他		
	245	M-18	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	にぶい赤褐	黒褐	ミガキ	ナデ	○	○		岩片	良	1913他		
	246	G-17	IIb	壺	肩部	-	-	-	-	橙	橙	摩滅	ナデ	○	○		岩片	良	6049他		